

奇譚クラブ

1955年 10月号

(第九卷 第六号 通刊第八十一号)



奇譚クラブ

昭和三十年十月号

10

定価二百円
(送料十六円)



各票の※印欄は、払込人において記載して下さい。

払込通知票											
※	口座番号	大阪 50042									
※	加入者名	大阪市阿倍野区晴明通1丁85 天 星 社									
※	金額	億	千	百	十	万	千	百	十	円	
※	住所氏名										
備考	受日										
	付附										
	局印										

(郵政省)

文字は正確、明りように、数字はアラビア数字を使ってお書き下さい。



記載事項を訂正した場合は、その箇所に証明して下さい。

払込票											
※	口座番号	大阪 50042									
※	加入者名	大阪市阿倍野区晴明通1丁85 天 星 社									
※	金額	億	千	百	十	万	千	百	十	円	
※	住所氏名										
料	払込特	円	円								
金											
備考	受日										
	付附										
	局印										

局番
号印

(郵政省)

※住所氏名は楷書で明瞭に御書き下さい、此欄は天里社宛の通信にお使い下さい。

通 信 欄			
書 名	冊数	金 額	
本 誌 (増刊 年 号 月 日)			
合 計 金 額		円	
住 所			
貴 名			
通 信 文			

御 送 金 の 葉

- 一、天里社へ御送金になるときは、是非この用紙を御利用下さい。
送金料は一切無料で確実に到着いたします。
- 二、表面の※印欄に金額と住所氏名を御記入の上、払込金を添えて
郵便局の窓口へお出しになればいいのです。
- 三、右の通信欄へ書ききれない時は、別に通信を下さつても結構で
す。その時振替払込の受領証を同封下さればすぐ御注文の品を
お送りいたします。
- 四、雑誌のお申込は継続随読の場合でも、必ず何年何月号よりと御
記入願います。
- 五、この用紙の御入用の方は、御申込次やお送りします。

美しいドアー

(四馬孝画)

何気なく開けた一つのドアー、あゝ、なんという美しいドアーだろう。そこにはうら若い美女がはりつけられているのです。私は息をつめて、じっと見守りました。



二頭立馬車

美しい女性が金力と腕力を支配している有様を描いて
みました。

さて、マゾヒストの皆さん、皆さんでしたら、どちらを御希望ですか。

畔 亭 数 久・画



水中の女



都築峰子・画

黒のシユミーズ

絹
帯

川辺砂登子嬢

伊吹真佐子嬢



どういうポーズをとるの？

萩千恵子嬢



ポリウム

加賀利江子嬢



ながし目

うつぶせ

須川 令子嬢

加賀利 江子嬢



朝日を浴びて

須川令子嬢





着物

旅の縛られ女優

画・文 藤 木 仙 治

女体緊縛は着衣のまゝがよいが、ヌードがよいかということは、過去の奇クに於ても、それぞれのフアンの側から問題にされた。絶対ヌードがよいと主張される方も、いや着衣のほうがよい、或いは腰巻、パンティがよい等と、意見や希望が交されたようだが、こればかりはどちらに軍配をあげてよいかわからない。また軍配などあげるべきでない。千差万別、おのおのその人によって趣が違ふ。違ふからこそ、緊縛の風情も極めれば極める程深いし、広がりもある。

ヌードはヌードで云うを待たず勿論よきものである。然し、私などヌードもよいが、又着衣にも心を惹かれる。洋服は洋服での味があるし、和服は和服で、忘れられようとする日本の古い美への郷愁の趣があつて又よい。私が昨年の十月号に書いた「たのしきかな時代劇」について、ことに和服の緊縛を喜ば

れる方々からお賞めを頂いたのは誠にうれしい。心強い限りである。奇クのフオートには和服の縛りがあまりないようだが、きつとヌードのフアンの方が多いであろう。

和服の縛りに心を惹かれるフアンが、手っ取り早く見られるのが、時代劇映画であり、時代物の演劇である。ヌードの縛りというのは比較的リアルに感じられるが、私は着物を着た女が縛られるのを見ると、非常にロマンティックな美しさを感じる。歌舞伎の「浦里」や「金閣寺の雪姫」などを連想するからだろうか。幻想的な絵画的な、様式化された美しさに酔うのだ。

然し、映画でも芝居でも、私達をたんのうさせてくれるものにぶつかるとはめったにない。いつも中途半端な、いいかげんな物ばかりである。これは私ばかりでなく、きつとフアンの方々も同じ思いであろう。自分の妻や

愛人に着物を着せて縛るのもよいが、それは全く断片的な感興で、私が興味を持つのはストリーイがちゃんと組立ててあるロマンティックな女体緊縛なのである。

私はそうした映画、演劇を求めて随分あちこち歩いた。然し、意に満たぬものばかりで期待と失意とが交互に現れるのが常道であつた。その中で私の望みが、或る程度かなえられた日々が過去にあつた。その事を書いてみようと思う。

五年ばかり前、私は勤めていた会社をクビになった。クビになつても特殊な技術を身につけているので、普通のサラリーマンのように就職のためにあわてるというような事はしなかった。かえって固苦しい会社勤めから解放されて嬉しい位なものであつた。それに退職金をもらった。私はこの退職金で、又、旅に出ようと思った。私は東京生れの東京育ち



なので地方に非常なあこがれを持つ。おまけに放浪性があるときているので、旅行するこ
とがまことに好きである。といっても余裕あ
る金を持つての物見遊山ではないので、気分

のよい旅館で、うまい物を食い酒を飲むとい
うような真似は出来ない。出来るだけ安い商
人宿のような旅館を泊り歩く。かえってその
ほうが旅情に浸ることができる。自由があ
り、スリルもある。私は南は九州、
北は北海道まで旅した。目的とい
うものがないので、常に気まま、
足の向くままである。

それはさておき、私は旅に出て
も名所見物などはあまりやらない
が、旅芝居は実によく見る。友人
にこの事を話したらゲテ趣味だと
云われた。然し、都会の大舞台に
は見られない面白さがある。勿論
純演劇的なものからみたら、ひど
いものが多いが、中々達者にやる
一座もないではない。雨もりする
田舎の芝居小屋の、すり切れた畳
のサジキの上で、安酒を飲みこが
ら暗い照明の舞台に見入っている
のも、ちよつとオツである。もし
て私は女が縛られる場面への期待
に胸をはずませるのである。又、
こうした旅廻りの一座は、よく女
が縛られ、責められる芝居をやる
のだ。うそ寒い客席で舞台を見て
いるうちに、自分の期待通りにス
トリーイが運び、期待通りの場面

が展開した時はなかなか楽しい。

さて私は、わずかばかりの退職金をふとこ
ろにすると早速旅に出る。東北本線に乗って
思い切つて青森まで直行した。そしてこの旅
で私は、市川梅次郎一座という旅芝居を知る
のである。

この一座は私の望む芝居を或る程度演じて
くれた。やはり時代劇専門で、それも剣劇を
主にして時には新派悲劇もやる。座長の市川
梅次郎という顔の長いのっぺりした男が、鞍
馬天狗をやったり、銭形平次をやる。勿論、
大仏次郎氏や野村胡堂氏に許可を得て脚本料
を払っているわけではないだろう。ピラには、
堂々と長谷川伸作「臉の母」なんて書いてあ
る。おそらく座長自身が脚色してしまうのだ
ろう。簡略されたお粗末な「臉の母」であっ
た。

この一座に中村絹子という娘役の女優が居
て、これが始終縛られ責められる役である。
私は、この娘をひと眼みて好きになつてしま
った。細おもてで鼻がすつと高く、長いまつ
毛、唇も小さく可愛い。いわゆる時代風の
美人で、身体つきも今の娘のように腰ばかり
大きくない。小柄ながら均勢のとれたよい腰
つきをしている。新派の女形のような雰囲気
があつて、卑しげな他の役者達に較べると、
ちよつとした「ハキダメに鶴」。

演技はといえ、なかなか達者で、せりふ

廻しもしっかりしているが、やはり田舎廻り式の古くさい誇張が入り、おまけに地方訛が残っているのでスツキリしない。然し乍ら、やくざの悪親分や、悪侍にさらわれて意に従わぬからといって、お定まりの責めせっかんに、ここが見せ場とばかり大げさに身を悶え苦しがる所は、その誇張演技が堂に入っている。すこぶるよろしい。

私は、初めてこの一座の責め場を見た時、「ウム、なかなかいける」と、思わずつぶやいたものだ。そして中村絹子に心を惹かれたというわけ。

こういう旅芝居というのは、全番組が必ず一日替りで、中に続きものがあり、いい所になると幕になっておあとは明晩、とくる。田舎の客は純朴で「ああ、あのきれいな娘が母親に苛められ縛られて可哀想だ。助かるかしら」などと、又翌晩も見にくる。助かるのは判っているのだが、そこが人情で、役者のほうもそこは心得たもの、化粧衣裳をつけたまままで落外へ出てきて「さてこの続きは如何相なりますや、お誘い合わせて又、明晩おいで下さいますよう。楽屋一同七重の膝を八重に折って心からお願ひ申上げます」と、首を振りながら、媚びた卑しい眼つきで口上を述べる。水素爆弾が日本から遠くない海でハレツして放射能の雨が降ってくるという世の中に、この浮き世離れした世界は嘘のようだ

が、事実である。何回選挙しても保守党が勝つわけである。十人足らずのこうした田舎廻りの芝居が決して減ることなく、農村漁村の人々の慰安に一役買っているのだ。

ところで私はその可憐な娘役中村絹子と是非口がききたいと思った。若さゆえの好奇心がムラムラ胸に湧いた。旅館の番頭に相談してみると、そんなことはわけない、という。少し包んで楽屋へ届けばすぐ客席へあいさつに来ますよ、と簡単に云う。少しして幾ら位だい？と訊くと、まアあんな旅廻りの芸人なんですから、まアこの位……と番頭は右手の指を立てて教えてくれた。

早速その晩小屋へ出掛けて行き、頃合を計って座布団売りの婆さんに金包みを持たせ、楽屋へやった。やゝ胸をときめかせながら待つうち幕間になって絹子が現れた。

「只今はどうもありがとうございますございました。」

と、白粉をざっと落したまゝであいさつをする。楽屋着に羽織をひっかけた姿が妙に色っぽく、安香料が絹子の身体から匂って不思議な雰囲気である。前のサジキに坐っている客がうしろを向いて私と絹子をジロジロ見るので顔が赤くなった。

「いやどうも、なに忙がしい所を……」





などと訳のわからないことをしやべりながら私は柄になくアガっている自分に気づき、こんなだらしない事じやいけないと心を落着け、

中で鏡に向って化粧を落している役者たちの声が聞えてくる。
「絹子のやつ、うめえカモをつかまえやがったな」

「君はなかなか綺麗だね、こんな田舎廻りさせて置くの全く惜しいよ」

と、お世辞を云うと、

「あーら、お上手ばかり云って……」

と、しなをつくって恥かしがる風情もまるきり演技とは見えず、まだウブな心根も失ってはいないと、私はみた。

「今夜、芝居が終わったら、ぼくの泊っている旅館へあそびに来ないか、御馳走してあげるよ」

と、早速誘いをかけると、小首を傾け、

「さア……」

と、考える風だったが、

「いいわ、よろしくおねがいします」

と、あっさり承諾した。私は案外話が早く運んだのでいさゝか拍子ぬけしたが、うれしかった。

芝居が終わってから楽屋口へ廻って絹子を待つて居ると、薄暗い楽屋の中で鏡に向って化粧を落している役者たちの声が聞えてくる。

「絹子のやつ、うめえカモをつかまえやがったな」

「相手の若僧は、この町の者じや無さそうだが、どこの者だい」

「おれも負けずに小金もちの田舎後家でもひっかけるか」

などとしやべっている。私はイヤな気持ちになったが、此処迄来て逃げ出すのも、意気地の無い話だと思い、ガマンして待っている。私などの若僧の、素寒貧でも「うめえカモ」に見えるのかと、そんな貧しく卑しい旅役者達に哀れを覚えたりしているうちに絹子が出てきた。

「お待ち遠さま」

素顔の絹子はやはり現代の娘でパーマネントをかけている。夜の田舎町を絹子と肩を並べて歩いていると、ロマンティックな気分になり、たのしくなる。東京を遠く離れて、こんな縁もゆかりもない田舎で、知らぬ女と手を握っている自分を（やはりアブノーマルかな）と思ったりしたが、「アブノーマルとはロマンティズムの過剰なり」という言葉がヒョイと口に出て、われながらうまい文句だと一人でエツに入る。

旅館へ着いてまだ風呂前の絹子に入浴させ、近所の料理屋から酒と小料理を運ばせる。白い指で器用に酌をするのを見ながら、私は段々いい気持ちになっていく。酒をすゝめると絹子は悪びれず受けて飲みぶりもよい。然しすぐ顔に出て赤くなった。眼のまわりがほん

のり赤いのが色っぽい。

旅の一座のつらい話、たのしい話をしやべらせる。私達の想像もつかない旅ぐらしの話だが、演技とは違って淡々と語る絹子の言葉の端に、こうした社会に生きる人々の、人情の機微に触れた哀歓がある。私は酔ったせいもあって、そんな浮草ぐらしの可憐な絹子がいとしくてたまらなくなり、

「ねエ絹ちゃん、きみ、今夜ここへ泊って行けよ、いいだろう？」

と、手を握る。

「あら……」

と、絹子はうつむいて、

「最初から、そのおつもりだったのね……」

私は笑ったまゝ返事をしない。絹子は身をくねらせて、

「でも、あたし、おにいさん好きになったから、泊っていてもいいわ」

私は「しめた」と思ったが口には出さず、

「然し、一応は親方に断わらなければいけないだろう？」

と、云うと、

「いいのよ、それは、いいの……」

「よそで泊るのは毎度のことだから、親方もチャンと知っているのかな」

「まア、意地悪……」

遅ればせながら年令を訊くとハタチだと云う。口のきゝ方、身のこなし、矢張り二十を

二つ三つ越していそうだった。流石に若い娘らしく、着物を脱ぐと小肥りに肥って弾力のある身体である。

ねながら、

「おにいさんの商売はなに？」

と、訊く。私はまじめに答える気にならず

「無職渡世さ」

「あら、バクチ打ち？」

「ま、そんなところだ」

「うそばかり。バクチ打ちってタイプじゃないわ」

「へええ、タイプだなんて英語知っているのか」

「バカにしないでよ。……教えてくれないのね、いいわ、ドサまわりの女優なんか、まじめに相手に出来な

いっていろいろのね」

「まア怒るな。ぼくは冗談や単なる浮気でなく、本気で君を好きになつたから、こうして呼んだんだ」

「あたしのどういう所が好きになつたの？」

「今どき珍らしい日本調の美人だからさ」

「どうもありがとう……それから？」

「それから……君が舞台で縛られる姿が、め

っぽう気に入ったからさ」



「あたしの縛られた姿が？……」

「ああ……」

「なんだかヘンね……でもいいわ……うれし



やがて私達は黙った。
翌朝、私は絹子に小遣を請求された。いわばそれは、オール・ナイト料だった。

青森県T市、N町A町……、私は絹子の一座の後を追って歩いた。照明も貧弱な、舞台

装置もあり合わせの粗末な舞台で、美しい姿態をくねらせて責めに耐える絹子を眺めた。いわゆる「責め芝居」でないのが私にはよかったです。始めから終りまで「責め」の続く芝居なら、私は二度か三度で飽きてしまうだろう。私は「責め芝居」の不自然なストリーイをあまり好まなかった。

市川梅次郎一座の「責め場」は時間にしてわずか五分かそこら。短かいからこそ、私にはかえって強い印象を与えるようであった。その短かい責め場に、絹子は、おそらく私にみせようとするのだろう、ありったけの熱演で、悲鳴をあげたり、悶えたりするのである。私はそんな誇張に過ぎた絹子の演技を、或る時は苦笑しながら見つめるのであった。

もともと目的のない旅行であったし、たいして金のかかる道楽ではなかったから、好奇心のおもむくままに、私は市川梅次郎一座を

追って歩いたのである。一座の者は私をどこかの金持のドラ息子だと思っているらしかった。私が絹子に逢いに楽屋へ通ると、
「おい、又、絹子のイロが来たぜ」

などと、ひそひそ声でしゃべっているのが耳に入る。私はそんな「イロ」などという古めかしい言葉に、大時代なアナクロニズムを感じてその雰囲気酔った。私

私が執拗に絹子を追うのを、絹子は私の愛情の強さだと思ったのだろうか。やがて、彼女の態度に金銭ぬきのものが現れはじめた。後になって考えてみれば、それは誰でも客に対する絹子のテクニクだったのかも知れなかったけれど……。最初いい気持でヤニさがっていた私も、これはいけない、と思いだした。好きとは云え、やはりこれは旅だけのことである。いつまでも引掛りになったらたまらない。そこまでの熱情はない。男のエゴイズム……。

私が絹子と一緒にいる時、私の脳裡には舞台で縛られ責められる美しい彼女の幻影がある。幻影と現実の肉体とが、私の頭に重なり合ってもつれ、私はそれに陶醉する。

私は、私の手で絹子を縛ったことはなかった。私は浪漫的な物語の中で美女が縛られるのを見るのは楽しい。けれど自分の手で縛るということはあまりやらない。自分で縄を持つと女体緊縛のロマンティズムがこわれる

ような気がするからだ。縛る男は通俗的で典型的な悪漢のほうが楽しい。やくざ者、悪旗本、悪侍、雲助、生臭坊主等々……。

結局、私は舞台の上の絹子を愛しているのであつた。然し乍ら、その頃になって見せはじめた絹子の情熱は、私のそんな夢や趣味を越えていた。私は、すれっからしであばずれのようではあるけれど、純な無智な絹子の心情が、可憐でならなかつた。ここらあたりが別れ時……私はそう思った、

「もうじき、ぼくは東京へ帰らなければならぬ……」

と、或る日、私は絹子に云つた。Kという海岸町の、薄暗いそば屋の店先で向い合つていた。潮くさい風が、たてつけの悪い戸の隙間から吹いていた。

絹子は黙つて私の顔をみた。私も、つらい気持で眼を伏せていた。

「せっかく、お馴染になつたんだから、もう少し一緒に旅をしたいと思うけれど、何しろ金が無くなつてね……お金が無くては、君を呼ぶことだつて出来ないし……」

それは本当であつた。はじめから僅かな金での旅行である。絹子と知り合つてから、出費も増えていた。もう道楽のできない、ふところ工合である。

「……たのしかったよ、短かい間だったけれど……」

「あたしも……。あなたとは商売気離れてつき合つちやつた……」

絹子は、あつさりした笑い声で云つた。若い私は、絹子が悲しいのをガマンして笑顔をみせているのだと、うぬぼれた。

「又、気が向いたら逢いにくるよ……」

と、私は慰めるように云う。

「いいのよ、もう……。今度もし逢う時があつたら、きつとほかの人とつき合つて居るでしょうから……」

「あんまり、無茶な稼ぎはしないほうがいいぜ」

「あたしは最初は稼ぐ気だけど、いつもしんみになつてしまうから駄目なの」

「出来ることなら、堅気になつて、早くまじめな結婚することだよ」

誰でもが云いそうな平凡な言葉であるけれど、私はまじめな気持で云うのであつた。

私が上野行の列車に腰を下した時、絹子は窓に立つて見送つてくれた。

アミに入つた蜜柑を買つて、窓から渡してくれた。「ありがとう」と手を握ると、やわらかく握り返す。発車する間を、小声で流行歌など唄いながら、よく晴れた津軽の空を見上げたりした……。

もう五年も前の話だから、私も青くさい感傷主義を多分に持ち合わせていた。然し、そ

んな愚にもつかない想い出が、未だに私の心にやるせなく残っているというのはどうしたわけであろう。

あの一座の者が云つていたように、絹子にとって私は、ただの「カモ」だったに違いない。あまり上等の「カモ」では無かつたが。あんな無茶な旅は、今となつては容易にできない。なつかしく思い返すだけである。

私は絹子の舞台姿を、どうしてカメラに収めて置かなかつたかと後悔している。それは実に美しい縛られ姿であつた。衣裳でも、カツラでも、安物の、決してよい品では無かつたのに、絹子が着ると不思議によく映えた。

近頃私は下手な絵を描くようになって、いたずら半分縛り絵を描くが、矢張りヌードより着衣が多く、現代よりも時代物が多い。そして縛られる女の顔は、どうしても絹子に似るようだ。

描きながら私は、あの田舎のわびしい芝居小屋の舞台で、悪侍のためにさらわれ、荒れ寺の中に連れこまれて責められている絹子の姿。又、悪い親分のために縛られ、意に従わぬからと転され叩かれて痛々しい絹子の姿。よよとばかり泣き伏し、身も世もあらぬ風情で悶えている絹子の姿を想い出すのだ。

その、哀れにも美しいセンチメンタルなサディズムの面影は、私の胸の中に、埋れ火のようにまだ残っている。

(おわり)

きものシリーズ

從軍日記

『迎^{イン}春^{チュ}花^{ホア}』

白 金 紅 次

昭和十三年〇月〇日 晴

名譽ノ召集令状遂ニ来タツテ町内ヲ出ズ。
誠ニ感無量、即チ断チ難キ煩惱ヲ妻縫エル赤
褌ニ托シテ祖国ヲ去ル、哀レトモ云ウベシ。

カーキ色の軍服に真新しい軍靴をはき、一
かどの兵隊姿で駅頭の雑踏にもまれていると
女房の敏江がやって来た。

『大丈夫なの？ うゝん、あとは心配なさ
らないで、ね、だけど本当に死んじや駄目よ、
これね、おかしいけど持って来たわ、この雑
褌の中じや見付かるか知ら』『何んだい？
今になって』『いゝの、弾除けのお守りよ、
あとでこっそり見て頂戴』とゴソ／＼して、

かさ張った、しかも御丁寧に細紐で縦横十字
に括わえた一物を無理に押込んだ時に集合整
列の呼笛が鳴った。

『じゃ、お元気でね、きつと帰ってよ』

どれが身内で、どれが会社の連中か見境い
のつかないうちに車が走り出し、どよめいた
万歳の歡乎の音が小さく後の方に消え去る頃
やっと、とう／＼兵隊さんになってしまった
んだなあと我に返えると——無生に何んとも
云えない寂しさが心の底からこみ上げて来
た。昭和十三年の春もようやく暮れようと云
う頃であった。

まさかとは思っていたが、いくら軍需会社
のその又下請工場の係長でも、時に及べば矢

張り必要となると見え、例の赤い召集の令状
が配達されると『横町の桶屋の次郎さんでも
酒屋の総領たけしさんでも、この町内から征
ったんだから諦めらるわ、どうせ戦さつてす
ぐ済むんでしょ、サア元氣を出して』とあと
幾日の出発を前にして敏江は急に若々しく、
薄化粧に、世帯を持った頃の押し掛け嫁入り
衣裳を着飾って、と云っても、ほんに普断着



に毛の生えたきものに過ぎなかったが、流石に齡を想わせる紫矢絢の銘仙に、あなたが好きなだから買ったと云う羽二重綸子の長襦袢を着込んで

『ね、泣いたらこうでしょ、口を塞がれたらこんなにまで』と人眼をはばかりる借家一間での縛り遊戯の数々は狂わしいまで敏江に対するいとしさを増したが『御免なさい、あんまり切なくなつて、つい』と解かれた縄を片付ようともせず、真一文字に膝を崩し大幅に乱れた裾前もかまわず、どうせあなた以外には用のないもの、と曾つての話題、充分御洗濯御調整の上、平らに御容赦恐惶謹言といわく付の御存知緋縮緬のお腰の上にボタ／＼と涙を落したあの可憐な恋女房の姿が――日が暮れて真暗になった車窓に走馬燈のように点滅する。誠に天地無情、一切の未練を断ち切つての応召哀愁篇の一駒とも云うべきだった。

別れの辛らさは兎も角として、さし当って一足飛びにめざす戦地とやら云う未知の世界に持つて行かれない理由の一つには、いわゆる軍事機密なる文句が多かつたせいもあるがお蔭で盛大な歓乎の声にも拘らず住み慣れた内地の一角をウロチヨロする時間が多く、未練のようだ頭の何処かにほの／＼とした希望

が残っていた。だから身心共に深刻に揺られて行く軍用列車にせよ、暗い一夜が明けると必らず車窓から沿線の軒下や民家の物干場にへんぼんと翻っている日本特有の女の赤い腰巻が眺められ、むやみやたらに受けるお茶の接待を少々我慢するならば、ホームに派手な長襦袢姿もなまめかしくサービスをする、きらびやかな和服婦人団体がそれこそ、次から次へと充分拝見出来たから



『ひよつとすると船へ乗る途端にもうお前等
は用はない。廻れ右ノ』となれば占めたもの
ならなけやそれこそ当分大變御厄介になった
あの赤い諸々の布切れには全く縁がなくなる

が』なんて考えているうちにもう大分経った
駅頭で敏江が渡した品物にふと気がついた。
幸いまだ馴染み深い？兵隊同志でないだけに
そつと雑糞から取り出して開いてみると、
『危い場所に行く時には必らずあたしのこれ
を締めて行って下さいね』と書いた紙切れを
添え紐付の処に成田不動のお守をぶるさげた
少々色の退せた三尺物赤ふんどしが出て来た
その色にしかと見覚えがある筈である『新し
いメリンス物でも買ったらどう？』『だって
……、あなたの処に初めて来た頃から、大切
に藏っておいたの』と云う由緒ある古物だけ
に、こゝにいみじくも女房の下着改造の一片
をうや／＼しく奉戴して勇躍出征の門途に斯
くはついた次第である。

○月○日 曇

生レテ初メテ味フソ／＼戦地トハ凡ソ色
氣ト絶縁スル処ナリ。サレド半歳ニシテ我が
志、戦友島川某ヲ得テ魂トミニ動揺スルヲ覺
エタリ。

さて、十把一からげの兵隊共を乗せた輸送
船は彼の地に無事着きました。そして、何ん
せ上陸してからと云うものは右を向いても左
を向いても老若男女を問わず一律に紺、紺、

紺色の青々した国だから忽ちのうちに退屈し
て了った。

たまの休日、外出した処で『先生、てんは
でなあ……』位のお愛想で誠に以て色気のな
いことおびたらしい。

その内、戦場にも暑い夏がやって来た。異
境の空の下、星一つない真暗い晩に星一つの
応召兵共が『消燈だつせ、寝まほか、女子も
居らずによく寝られますかいな』

『何云ってやがるんだッこちとらはなあ、膝
っ小僧を枕にしたってぐっすり寝られ……寝
られないんだぞ』と判ったような判らない御
同様誠にお寒い掛合いで三十、四十に届く老
トル応召兵は嘆いたものである。しかし、こ
うした会話を分析して見ると御多聞に洩れず
二つの流れがあるらしい、一つは人種の如何
を度外視してのその物ずばり組と今一つは色
氣だ、色氣、これなくして俺等生粋の日本人
は生きられようか（まさかそうでもあるまい
が）支那服の裾が割れよと二の腕があらわに
出ようと出まいと馬の耳に念仏だ。『第一臍
から下がのっぺら棒たあびつくりさせやがる
じやネエか、そこへ行くとぐんと襟元を抜い
て今晚は、と衣ずれの裾もなまめかしく引い
て一杯如何？なんて来りや堪らネエ、おーい

早よう戦争終らんかなあ？』と大声で何々大
笑した男がある。これが本篇の片棒をかつぐ
悪戦友、序でに紹介すると京で生れて東京で
育ち正業は呉服反物屋の若主人公たる島川二
等兵、そして彼とのそも／＼のなれ染めはこ
うであった。

『おい、成田の不動様よ（私の仇名）今頃は
夕めしを終つてよ、一風呂済んで浴衣がけ、
うちわ片手に今晚はどこの、明日の晩はどこ
のと、方々の縁日をひやかす頃だろうなあ、
帰えり際に彼女曰くだ。アラ金魚鉢の水がこ
ぼれちやったわ、なんてちよいと濡れた裾を
つまんだ拍子にチラツと桃色のお腰が、畜
生！ おいッ、日本の土地を離れて、もう何
月になるんだい？そろ／＼頭の芯からボンヤ
リして来たぞ』『くよく／＼するなよってん
だ。あと一寸の辛抱で目出度く凱旋さ、これ
はどうだ綺麗じやないか、祇園だろう？こ
んな／＼のをお守りするんだよ。五反田の小
便姐ちゃんの伊達巻じや、色の真黒い敵さんの
弾丸が反対にやって来るぞ』

『女の伊達巻で作った金きらきんの袋が堪ら
ネエと云ってるんだ。いけネエ、ふんどしが
しめって来やがらあ、露頭あらたかだぞ』と
先ず胸きんを開いたのが、秋も終ろうとする

頃、そしていつか冬將軍が訪れて『お正月は何して遊ぶか？ 爆竹鳴らして老酒を飲んで、王さん、待って、頂戴ね、とは情けネエ序でに戦争も片付いて、早く来い来い内地の春よ、うぐいす鳴かせた四畳の床で、三味の音色にへアラ、お寢覚めネ、なんて本当に畜生！ 云われて見たい』が、どっこいどうにもならない。

その内何んと二度目の春が遠慮なくやって来た、そして余計なことだが目出度く一等兵に昇級した。途端に運が開けて来たから妙である。第一番目に咲いた花は先ずこんな粹筋の花であった。

〇月〇日 晴時々曇

己レガ意図スルソノ何タルヲ問フ
ズ異レル民族ハ宜シク敬遠スルヲ可
トス。即チ陰忍自重絶エテ久シキ同邦ノ美妓
忽然ト来朝スルノ報ニ接シ欣喜雀躍以テ足ノ
踏ム処ヲ知ラズ、紅裙ノ裾ニ迎春ノ香リヲ求
メテ車上百花爛漫タリ、他日ヲ約シテ輸送ノ
大任ヲ果ス。

『御苦労／＼、実はお前達を呼んだのは外で



もないが久しぶりに今度内地から軍慰問の連中が来ることに今本部から連絡があった。が知っての通り隊は次期作戦準備で幹部はそれ

処じやないんだ、で幸い病院帰隊早々の富田軍曹の身体が空いてるからその指揮を受けて〇〇迄迎えに行つて呉れんか、いゝな、命令は一泊二日にしとく』てな工合で、考えて見るとどうして島川と私が隊長に氣に入られたか判らないが大方ひょうきんな風で案外糞真面目に奉公したのが眼に留つた為であらう。兎も角、丸一年ぶりに殺ばつ極まる戦地において麗しの君々？を——島川に云わせるとど

うせ小便芸者にきまっとるそうだが——身近に世話するの光榮に浴したのである。

『馬鹿云えッ、来る早々裸なんぞになるものか、花面巷の姑娘だって、不動が触ったら顔をしかめていたじやないが、それを娘ッ、両手を後ろに廻してくゝられて御覽って貴様が姑娘の手を握ったら益々妙な顔をしていたぜ駄目だよ、風俗習慣が違ふんだ、だからさ、動機は察するがどだい相手が野暮なんだ、クリークの眼鏡橋の上じや人眼が多いから土堤を下った猫柳のそばであの娘の両手首を捻じ上げたら、ずんでん胴の腰から下が小田原提灯見たいに伸びたり縮んだりして見られたもんじやネエ』

『だからさ、日本風に赤い布買って来て腰に巻き付けるッて云ったろう』『じや、やって見ろよ、気分の出た処で俺が可愛がっちゃうから……アハッハッ』と一泊の兵站宿舎で事女にかけては甘い辛らいは勿論、以て生れた放蕩癖に活眼いづかな眠つては申訳ないと島川は一席ぶつた。扱て夜が明けると勇躍島川と私はもう足が地につかぬ位に興奮して埠頭にかけてつける。もう仕度準備万端用意は完了したと見えて、いるく、何んと綺麗な和服姿が三々五々……『おい、島っ、来てよかつたじやないか』

『これから先が大変なんだよ』

『では簡単に皆さんにお話致します。上陸早々誠に不自由でしようが、これから〇〇迄はこの貨車に乗って頂きます。但し只今の処、治安状態は余り良くありません。従つて万一を慮つて、女の方はあの無蓋車の方に、男子と一部女の方は馬糧の積んである有蓋車に願います。なお余談ですが用便は途中停車中を利用し命令によつてやって頂きます。それから御覽の通り内地式のホームがありませんから注意下さい』と流石は場慣れした富田軍曹である。賈祿があつて到底我々かけ出し兵隊共に出来る仕業ではないと感心していると『早く願います』の合図と共にバラ／＼と四散して命ぜられた貨車のそばに集つて来た。『アラ姐さん、届く？ だって隣分高いわ』『これ？ よじ昇るの？ どうしよう、恐いわ』

などと瞬時にして姦しくなれば待つてましたとばかり、妙な茶目ツ気なるものがむらむらと亢進するのは勘弁して貰おう。『サア皆さん、大丈夫、そこは足場が悪いからこつちへいらつしやい。おい、不動ッ、貴様は脚立になるんだッ、サアその手で此処んどこ、

しっかり持つて、足を、そう／＼そこへ、あツとそれじや袂が、ひっかゝるワ』

『草履を先に放り上げて足袋はだしになつて下さい。いゝですか、擱つて下さい。』と羽織のまゝ巾広ろの帯の後ろの処を抱いて上に持ち上げる、午夢剣が邪魔にはなるが急ぐから何が何でも一人宛若い女の身体を貨車の上に積みねばならぬ。平常なら兎も角、戦地であると云う觀念も手伝つたものか『じやお願ひしてよ』と鉄の側板を股ぐ片方の太腿があとに残つてもろに着物の裾が割れ花模様の長襦袢からそのまた下の真赤な蹴出しから滑べ／＼した真白なふくら脛もあらわにこうも真近かに眺めては——『コラッ、感心ばかりしてないで手伝えよ』と役得が過ぎて眼の毒となるわいと許りに上から島川の奴が怒鳴る。私はこの時の情景をもう十五六年も経つた今日、まるで再生された天然色映画でも見る如く印象深く脳裡に刻みつけており、のんきな反芻動物のように噛み出しては独り懷しがっている一人であるが——、

続いてやゝ姐さん株（あとで福丸と名乗つた女）の小股の切れ上った堅肥りの下半身を縦縞の裾も高々に端折つて錦紗とき色地に破れ業平の柄模様の長襦袢姿、そのいともなま

めかしい恰好のまゝ思い切つての大股に、

『そら、掴つて、こら、しよつと』の掛声で例の如く島川の華奢な手が介添えたから堪らない。重心の平衡を失つて華美な花びらが押潰されたように側板と背中合せに、足場を失つた両足が、これまた空に躍つて宙ぶらりん、途端にパツと、これだから着物は困るんだ。大らかに裾前が開らいて、下から見上げると、まるで馥郁たる女の香りが、ふんだんに嗅がれようと云うポーズ、と、まあこんな事ばかり丹念に描写して行くと際限がないから惜しい処だが、割愛し又の機会に譲ることにして、扱て七人の中、洋装二人のお婆ちゃんとは論外として五人が揃いも揃つて和服、序でに名前を御披露すると友奴、みどり、小夜子に千鳥、そして福丸と云う面々、

『御免なさいねエ、兵隊さあーん、捲くれた処ばかり御覧に入れて。でも兵隊さんで宜かつたわ、旦那だったら大変よ』は余計な文句だ。

扱て衣ずまいを直し三味線だの踊り所作事一切の小道具類の入った荷物の上にシートを敷きつめて思い／＼に坐つた大和撫子の姿は流石にホツとした形である。

『乗車終り！ いや御苦労さんでした、皆さ

んどちらからですか、ハアそうですか、久しぶりですよ、自分等もう一年経つんですから。全然内地の人見ませんから懐しいです。

きものはえゝですな、大いに楽しかったですよ、そうです、こゝから六時間距離です、すぐですが天氣がどうなるか』とこう云う段取りになるとそらさず、しかも益々親切になる島川だ。だから仮りにもお天氣が不幸にして的中し一天俄かにかき曇り春雷にしては少々きつ過ぎる篠つく豪雨ともなれば――、『サア皆さん、どいたノ、シートだシートだ、支那の雨ばかりは待ったなしだから、張つて下さい、あッ駄目だ、片方からもぐつて先きの人は真ん中を持ち上げて、よしその調子！』そして雨脚がさつと遠退いた処で『いや驚いた。斯う云う調子ですよ、濡れましたか、かまいませんとも、勇敢に脱いで干して下さいよ』まさか壇之浦の平家の残党でもあるまいし赤や桃色の紐付の旗が翻つちや後に続く各隊の率領の兵隊さんに申訳なからう。処が雲晴れて小春日和の陽が出ると折々吹き付ける機関車の煤煙に心持ち揺れる鬚のほつれを掻き上げる粋な袖口から友禪の一端がこぼれて『アラ真黒い豚なの、随分沢山いるわ』だの『あゝ綺麗ね、赤のマンマと云う花か知ら

？』など喋りあう優美さ、斯うした雰囲気には包まれてしばしの間、一服吸っているうちに沙婆での思出の数々が忽然心の底から湧いて来た。

島川の右の眼尻が下つたのかその証拠である。元來この相棒の島川と云う男は、寝物語りに聴くとそも／＼産声を挙げた処が女に囲れた京は何んとか町で、小学校の折同級の女の子の帯を解いた廉で廊下に立たされ、続いてラブレターの仲介をやって商業学校を中途退学させられた事から発奮し、時たま反物仕入れに京に還るや茶屋の姐さんと共に南座に繰り込み『ようく見るんだよ、おかん婆の眼が光り出しただろう』と雪責めに喘ぐ浦里の艶姿を執拗に相手方に説明し終るや帰途見ん事姐さんの伊達巻を解かせ、しごきで柔肌を締め付けて堪能したと云う辣腕？ だから、この軍用輸送列車が全コースの半分を通過した頃『さっき一寸停つたでしよう、惜しいことしたわ』『もう駅つて無いんでしょ？』だの『雨もう一っぺん降らないか知ら』だの質問は富田軍曹の訓示の最後を飾る生理現象を意味するものだが計画が緻密で機を見るに敏なる相棒島川は『おい不動！ 東方遙拝やっちまおう、いゝな、じゃその鉄かぶとを脱

げよ、二つありやいゝだろう、えゝと皆さん
シートの片隅に急造の便器を造りましたから
揺れないうちにお静かにやって下さい。自分
等はあっちへ行つてますから」と片隅を指差
して神妙に前の貨車に乗り移る——扱てどん
な恰好をしてどうして用を足したもののやら、
もう宜かろうと戻ると

『兵隊さん、困るわ、これからよ、向う向い
て頂戴ッ』『大丈夫ですよ、大いにやって下
さい、この分じや列車は降りませんから、か
まいませんとも、何あーに、勇敢に。』『じ
や一寸御免なさいね』有名な古川柳に緋縮緬
女は風邪をひかぬもの、とあるが、三角に立
てかけたシートの中に半分裾を捲くり上げ、
くるりと廻つてしやがむ、妙音は風に吹き流
れて何処やら、『いゝですか、皆さん済みま
したか、じや片付けますよ』この前代未聞の
軽便尿瓶を取り出した彼は、一つを私に渡し
て『いゝ三つと車外に放撒する。その何%
かの芳水のしぶきを浴びた島川の献身的なサ
ービスに五人の中の一人が惚れ込んで第二の
花を咲かせたことは後篇に述べることにして
無事一行十名異状なく目的地に護送して任務
を終つたのである。』

昭和十四年〇月〇日 曇

敏江縫エル赤禪効ヲ奏シテ、遂ニ内地凱旋
ノ命ニ接ス男子功ナキヲ恥ズベシト雖モ〇川
路ニ於テ美女ト遭遇シ為ニ魂ヲ九重ノ宙外ニ
飛シテ痴戯ニ徹ス、悪友ノ為セル業ナリ。

扱てそうこうするうちに、また二年目の暑
い夏が巡つて来た。もっともそれからまた秋
が来て正月が来ると一体いつ戦争つて終るん
だいと少々駄々をこねていたら新々気鋭の補
充兵と交替しろつと云う訳で目出度く二人揃
つて内地に帰還することになったんだが、そ
の戦地最後の晩秋と云う或る日、図らずも例
の慰問団の五人中の福丸姐御とバツタリ遭遇
したから驚いた。

『あら、お久し振りね、あの時の兵隊さんで
しょ？ 懐しいわ、どうしてこちらへ？ そ
うですか、それはお目出度う御座います。あ
たし、今仍てますの、うゝん、一寸した処
で、お判りでしょ、少し稼ごうかと思つて、
ホホホ……御乗船まであと一週間？ じやお
出になりませんか？ みどり？ えゝ小夜ちや
ん、千鳥はとくに内地に帰りましたの、友
奴さん？ あの人満洲行っちゃったわ、で、
今みどりの代りに若い妓が一人いますのよ、
御冗談ばかり……本当、あの時は大変お世話

様になりました。あのアンペラ小屋のお芝居
つて踊りばかりでしたけど、そうなのよ、今
だに判らないの、だって連獅子の前にやる腰
元がお腰巻がないんですもの、びっくりしち
つて慌てたわ、そうでしょ、裾ばかり気にな
つてレコードに合せられないのよ、ホホホッ
……あんな事つて初めてだったわ、でもよく
考えて見るとまだ帯揚げだの、かんざしだの
草履だの大分盗まれていたことがあとで判つ
たんですけど、どうせ兵隊さんでしょ、罪な
いわ、だからあたし姐御振つてそう云っちゃ
つたんですよ、へ元々皇軍慰問じやないの、
素裸になつて日本へ帰つたつて嬉しいじやな
いか、あたしなんぞ兵隊さんが呉れて云つ
たらハンケチの五タース位は置いて行くわよ
つて、あらこんな処で飛んだお喋りして、じ
や是非どうぞね、お待ちして』

私は武運目出度くと祈つて敏江が呉れた例
の赤ふんどしが漸く原形を保っている布切れ
を洗濯しながら、これから以後は島川に譲る
ことにした。そして客観的に彼の行状記を無
干渉主義にと但し実況と情報提供して貰う
ことにして協定を結んだのである。

『おい、相当なもんだよ、ほら、俺があんな女
は役者の素質があるつて云つたらう、正にそ

の通りなんだよ、凄いの凄くないのって——
 もっとも俺も少しは酔ってたな
 『実は自分等が温^{あつ}ためたんだと云ったらびっ
 くりしやしなかったかい？ 三八銃の銃口に
 白足袋のコハゼをはさんで見たり、妙な品物

が忽ちお守りになったりしてさ、恥をかくの
 は平気だが貴様が適当にかっぱらったあの……
 ……『よせよ、実はあいつと腰帯一本持って
 謝りに行ったんだ、すると、どうせ日本人同
 志でしよう云うんだ。随分寂しかったでし



よ、早くお嫁さん貰いなさいって逆戦法さ、
 貴様見たいに赤ふんどしの女房持ちと違つて
 風来坊だから、長い間相済みませんでした
 て、どうせあと僅かで乗船するんだ、有金全
 部はたいてチン鴨やったのはいゝが、一寸堪
 能したよ』

『じゃ、俺れは万事介添役をやるから案内し
 るよ』と最後の外出を許された或る日、私は
 一切の御奉公を終えて身も心も軽く、あと僅
 かで迎える足かけ三年目の戦地の正月を前に
 して図らずも咲いた迎春花の美人を交えて訣
 別の宴を張ったのである。

『お二人共お茶目さんね、想い出すわ、鉄兜
 の便器だなんて、重営倉よ、でも大陸って面
 白くなかったでしよ、そう、女気なしで？
 そうね、あれから、軍司令部だの何んとか部
 隊だのと、でも愛国行進曲と祇園小唄が済ん
 で帰える仕度していたら、今から宴会をやる
 からお前等も手伝えって、その内将校さん達
 が酔っぱらっちゃって、悪ふざけは慣れてる
 けど、嫌やあーね、すぐ帯なんかに手を掛け
 たりして』

『兵隊も将校もありませんよ、大陸は、呉越
 同舟です。取り分けこの島川と云う男は色気
 狂いですから用心しないと危いですよ』

『大丈夫、今度はあたしの方から女軍に載せて上げるわよ、美か代に護衛役をいゝ付けてホホホ……』

『僕は、かゝあ持ちだから専ら觀賞する側に廻ろう』

『おい変な事云うなよ、女房のいる内地帰還で頭ん中ボツとなつてやがる、酔った勢いで云うんじゃないが、福丸姐ちゃんよ、一ッペン位は、この成田の馬鹿野郎の前で括くられて見ないか、二年前の貨車の上であの女――君の事だぜ、あれをふん縛ったらさぞ溜飲が下がるだろうなんて抜かしたのはこい奴だぜ、なあ、そうだろう？』

余程、京は南座の舞台が宜つた見える。もつとも、これはあとで俺があゝ仕掛けたからこそ徹夜で最後の迎春花を泣かせたんじやないかと恩に着せたが

『そんなに御所望なら、でもこれつきり逢えないかも知れないから、え？浦里時次郎って知らないわ、そんなゝの、あゝあれ？ そうね、さあ？ あたし北国生れでしょ、平氣よじや芝居ってどうせ出来っこないんだから、色々説明してね、これでいゝんですの』と窓からもう陽ざしが短くなつて内地航路の汽船の吐く煙にくすぶつてゐる埠頭が遙かに見え

る部屋の隅で福丸は長襦袢一枚になった。

細いようだが、その時の柄模様はピンク地に紅小紋桜の花びらを全面に撒らまいたもので、着地は覚えてないが島川がこれにしろと云つて巻かせた伊達巻を胸がくびれるように縛めて静かに柔やかな両腕を後ろに廻した。外地だからと云う氣心もあつたろう、絶えて接触出来なかつた飢餓感からだゝ女と云う姿を眼の前に置物のように飾ればそれでも満了した当時の心境は今以て判らないけれども『どうだい？ これで凡てが満足出来ただろう。いゝもんだ。俺達は金と財産を以てハツタリなんぞ出来る身分じやないんだ、笑うなよ、そうだろう』

『ですから、あたし達、兵隊さんが好きなのよ。淋しい時にはどんなことでもして上げたかつたわ、お別れにこのまんま、さのさ節の踊りでもやって見ましか』

小料理屋と云つても練瓦造りの家を改造して内地風に畳だけは入つてはいるが殺風景な窓、洋室をそのまゝ大急で直しただけにくすぶつて到底四畳半式にはほど遠い一間に福丸は半ば涙を浮かべ乍ら踊つたのである。あと僅かで懐しい祖国へ帰えられる、話に聴くと国民精神総動員とやらでモンベと称する野暮な

服装に変わりつゝあるそうなの、『おいッ、奮発して、ぐつと背中を返つて見な、まだく、脚が開く位が何んだッ、そうだッ、福丸よ、不自由だろうが、そのまんま、弁慶が安宅の関で踏張つたような恰好して見ろッ、ウム、いゝぞ、まるで捕虜が検閲を受けてる恰好だッ、日本女兵は軍服がないのかい？ えゝ不動様よッ？』

ぐんと酒の廻つた島川は、大声に袴下の紐を緩め乍ら怒鳴つた。福丸は手の自由を失つて仰向けに倒れる途端に大げさに尻持ちをついて派手な長襦袢の裾を乱し紅蓮の蹴出しの色も鮮かに転つたのである。

○月○日 雨

暫テドラ鳴ル、往左来ル左ノ人馬森トシテ船岸壁ヲ離ル、一人ノ佳人雨中和傘ニ身ヲ托シテ手ヲ振ルヲ見ル憶々、何日再見！ 大陸ヨ戦場ヨ、サヨウナラ……。

『おい、戦友ノ この形見の品物は宇品の港に沈めようじやないか』

告白

悪^{あく}

癖^{へき}

(二)

榎 本 利 子

杉 原 虹 児・画

逆 療 法

「ふん、苦しいのかい。勘弁して欲しいとでも云うのかい。馬鹿野郎っ、これ位の事でよくもあたしに大きな顔をして、僕はマゾヒストです、だなんて云えたわね。マゾ馬ならマゾ馬らしく、もっと走ったらどうだい。この意気地なしっ」

云うより早く、妾は四つん這いになった夫の背中から素早く飛びおり、其の足で彼の汗ばんだ額の辺りを力一杯蹴りつけてやりました。

「あっ」と、叫んで、夫がそのまゝ顔を抑えて横倒しに引っくり返るのを、すかさず飛びかゝって、先刻から手綱代りに噛ましていた赤い扱帯でぎり／＼と固く後手に縛り上げ、

その端は後の柱の根元に繋いでしまいました。「ふふ、いゝ態ね、犬さん。でもいゝ気持ちでしょう。お前の大好きな利子女王様のおみ足だよ。ほら、よく見るんだよ。今朝からサンダルだけの素足で、お買物などに随分歩き廻って来ているからこんなに汚れているわ」妾は背の低いお座敷机の上にどっかと腰を下して脚を上げ、自分の汚れた足裏をぐいと彼の鼻先に二纏ばかりの間をおいて突き出してやりました。夫はそれに唇を合わそうと、自由のきかない哀れな体を持ち出して来るのですが、それより僅かに早く、妾の足はすつと逃げる様に引込みます。すると夫は尚も首をのびして舐めようと焦りますが、扱帯で繋がれているので、それ以上は届かないのです。「ふふふふ、口惜しいかい。お馬鹿の間拔

けさん」妾は、さんざん夫をじらし、虐め乍ら限らない嘲笑と侮蔑の言葉を浴びせかけてやるのです。世に逆療法と云う言葉が御座居ます。そうです。あの日以来、妾は涙をのんで夫の頬に平手打を喰わせ、心に詫びながら彼を足蹴にしました。又、目をつぶって自分の汚した下着の洗濯を命じ、お風呂でよく洗った上にも美しく洗った体や足ではありませんが、それを彼に舐める事も強要しました。これは、総べて、夫がノーマルな夫婦生活に目覚めるよう、彼の恥かしい病気が一日も早く治って呉れる様、唯々、彼の悪癖を直し二人の幸福な結婚生活を築きたいばかりだったのです。そして彼が一刻も早く被虐に飽和し、その馬鹿

々々しさに気付いて「おい、利子、もう俺は嫌だ、もう馬鹿な真似など止そう」と云ってくれる日の来るのを唯一の楽しみとして――。

しかし、実際に始めてみた妾は、常に夫が希望し喜んでいる様な生優しい、嗜虐方法だけでは到底その効果は、得られない事に気付きました。そうして、彼が被虐の美酒に酔い被虐の快感にうつつを吐かしているよりもはるかに肉体的精神的苦痛の方が大きいようにと、もっともつと徹底した烈しい責苦を夫に対して加え始めたのは、もう五月も末に近い頃からでした。

先ず夜に於ける夫の就寝は、今までのようにベッドを用いる事を許さず、妾の寝ているベッドの下に寝る様命じました。そして常に彼の枕辺には、白い清潔に掃除のよく行き届いた便器を用意させ、夜中、妾は尿意を催しても便所へは行かず、いつでも足で彼を蹴り起しては、そこで用を足しました。勿論それに対する準備も、済んだ後の始末も皆、夫の手によって世話をさせるのです。しかも少しでも粗相をしたり、気に入らぬ事があると夜中と云えども容赦せず引つ叩いてやりました。或る時も、起きるのが一寸遅かったと云うのを理由に、嫌と云う程足蹴にしてやっただ上、妾のお小水の入ったその便器を一晚中抱かせてやったこともありました。

朝は四時に起き、朝食の仕度から洗濯、掃除と朝の家事一切をやるのも、彼の重要な仕事のひとつでした。朝食の準備が出来上ると、彼はベッドの下に両手をついて寝ている妾に朝の挨拶に来ます。妾はゆっくりと起き上り彼に着替を手伝わせ乍ら、少しでも気に入らぬ事があると容赦せず、烈しい平手打を呉れてやりました、それが済むと直ぐトイレを用意させます。こ

れも夜中に使用しているあの便器を美しく掃除させたもので、縁側の仕度部屋に準備させ夜と同じように、妾は彼の手によってゆっくりと朝の用を済ませます。洗面に続いて朝食を摂るのですが、この朝食も、うんと意地悪く、御飯は柔かくしても固くても彼の頬には妾の平手打が鳴るのです、勿論お汁やその他のものも同様で、そのくせ



彼には味覚をする事を許していません。妾が済むと、彼は妾の余し物をそっと台所の隅で摂るのです。朝食に限らず、彼の食事は総べて妾の残飯です。やがて衰れた朝食を済ませ会社に出勤する為、玄関へ下り立った彼の眼前に妾は自分の足を突出してやります。夫はそれが出勤時の妾に対する挨拶である妾の足裏に接吻をして出掛けるのです。そして、戻

つて来れば、又、同じような奉仕生活をさせるのです。

鬱陶しい梅雨空が続く頃になって、妾の凝装サジズムは愈々その烈しさを加えてゆきました。各種の参考書を読み、以前から夫が買っていた求めては、妾に隠れて読んだと云う雑誌のバックナンバーを彼の書斎の押入から悉く持ち出させて、熟読し研究したのも此の頃の事でした。

しかし、その梅雨も明け、七月の蟬が鳴いても、彼には一向に妾が期待していた様な変化も兆候も現われて来ないばかりか、かえって最近では、以前にも増して血色は良くなり生き生きとした楽しい幸福な生活に溢れるばかりの喜びに満ちていたのでした。

その頃、妾は、ふと気付いて、もうお払箱に近い一番要らなくなった古いパンティを取り出し、それをずっと洗濯せずに穿き通しました。丁度夏の事とて、ものゝ三日と穿いていると、自分乍らも氣持が悪くなる程汗臭くそして不潔に汚れて来ましたが、更に妾は思いついて五日目頃からは入浴もせず、氣持の悪いのをじつと我慢して、思う存分にそのパンティを自分の体で汚してみたのです。やがて七月も半ばを過ぎると、さすがに自分でも嫌な汚れと汗の悪臭が激んで、鼻をつくような気がして、もうこれ以上の辛抱は自分が出来なくなりました。甘酸っぱさを通り越した

強烈な匂いに、妾は自分乍ら吐氣の催しそうな思いでしたが、それよりも、これから自分が行おうとしている残酷な思いつきに、或いは若しかしてこれで夫の悪癖が——と云う淡い希望にも似た甘い期待と、又一方では残忍行為そのものに対する新しい不思議な興味に、妾の胸は妖しくも躍るのでした。

「早くおしよ、馬鹿！ その持ち方は何んだい」

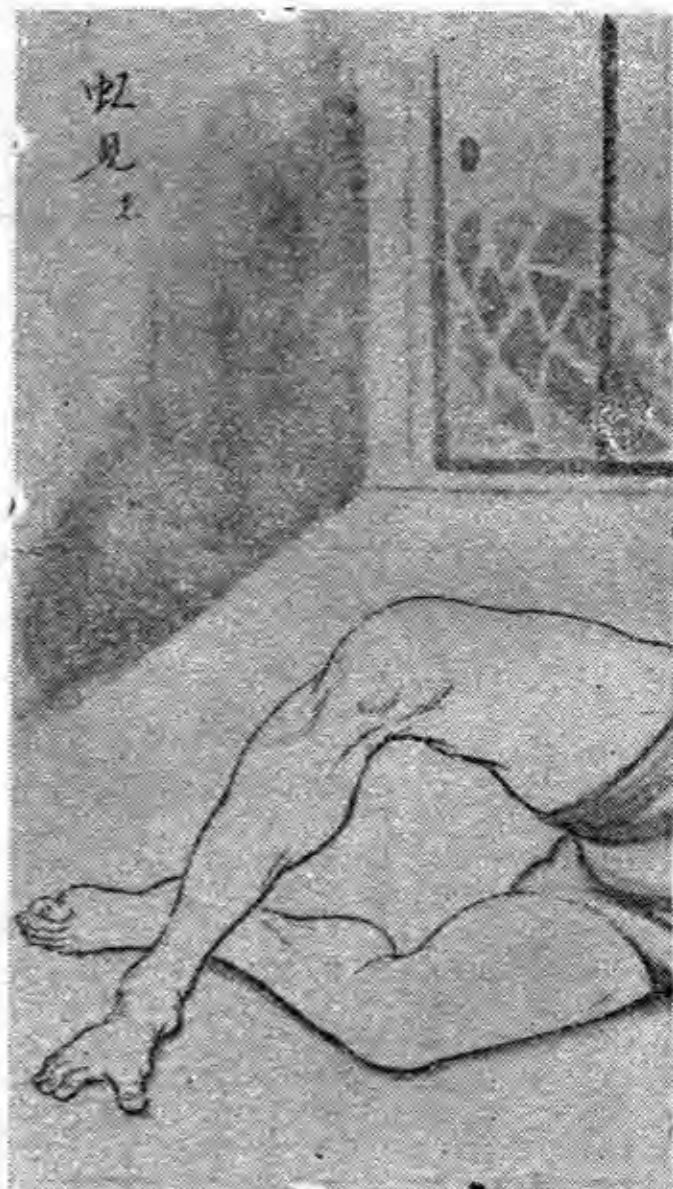
又々彼の頬に平手打がとんで、夫が持っているパンティから足を抜いた妾は、

「いゝかい、これからあたしの云う通りにおし、そして妾の聞くことにだけ正直に答えるんだよ」と云い乍ら側の籐椅子に腰を下しました。

「お前が持っているその汚いパンティは誰のなのさ」

「はい、僕の大好きな利子様のものです」

床の上に正座をした夫が両手で妾のパンティを捧げ持って答えます。



「汚いと思う？」

「いゝえ、汚いとは思いません」

彼は噛みつくように云うのです。

「そう、汚くないの。でも臭いから氣持が悪いでしよう」

「いゝえ、そんな事はありません」

「本当だね、嘘をつくとは承知しないよ」

妾は残忍な笑みを浮かべて凄んでやると、

「本当ですよ、本当の事なんですよ」と、あわてゝ言葉を強めました。

「そう、じゃアお前のその言葉が嘘でないか試してやるから。お前、そのパンティを裏返しにおし」

夫がけろんな顔で裏返したパンティは自分でもびっくりする位、汚れていました。



「お前はこれが汚くないって云ったわね。なら、その真中の所をお前のその口でくわえてごらん」

彼の頬が紅潮し、妾も亦妖しい期待にかられて、じっと彼の顔を見守りました。

最も汚れのひどい部分が、すっぽりと彼の

口に喰わえこまれて見えなくなってしまうのを眺めて、妾の心は又々新しい惨忍な興味にひかれて行くのでした。

「其処の所を舌と歯でよく噛むようにして味わってごらん」

「ふふ、美味しいの？ 甘い？ それと

も辛いのか？ その口の中の唾をぐっと飲みこんでごらん」

虐め乍ら妾はかえって自分の方が気持が悪くなってしまう、べっと彼の顔に唾を吐きかけやりました、そうして最後には、彼にそのパンティを全部口の中へ詰めこんでしまうよう命じました。普通のズロースなどでは大き過ぎてとてもそんな事は出来ませんが、薄いパンティなら無理をすれば入りきらない事はありません。

「その上から自分で、この妾の汗拭き用タオルで猿ぐつわをおし」彼は自分の大きくふくらんだ口の上に、そのタオルを縦二つに折って巻きつけ、両端は頭の後で固く縛りました。

「出来たら、そこへ四ツン這いにおなり」

妾はその命じておいて、素早くワンピースを脱いでシユミーズ一枚になると、そのまゝどっかと彼の背中に跨りました。

「さあ、妾を乗せてお風呂場へお行き、あたしはこれからお風呂へ入るだから。上手にお歩きよ、落したりなんかしたら承知しないから」

部屋を出て廊下を曲り、浴室へ行く途中で、妾は足を上げて彼の頭の上に乘せたり、小突いてやったりして、さまざまな辱かしめを加えてやりました。

「ふゝゝゝ、貴方と云う人も本当に可愛想な男ね、妾にこんな事をされていて口惜しくないの。どう、貴方ももういゝ加減で、やせ我慢をはずかにカブトを脱いだらどう？ 今なら、妾もこんな生活はきれいに忘れて上げよ、亭主関白も大目に見て上げてもらいゝわ、それとも永久にこんな奴隷のような生活を続けて行きたいの？」

妾は湯槽の縁に腰を下して、猿ぐつわをはめられたまゝで、妾の足にせつせと白いシヤポンをたてゝいる夫を見下し乍ら、胸を抑えて彼の様子を見守りました。

「そう、やっぱりお前は妾にこんな目に合わされていたいね。馬鹿野郎、生れ損い。大の男がよ、おまけに一家の主人であり乍ら女のしかも自分の妻が、穿き古した汚いパンティを事もあろうに口の中へ押し込まれて、そしてその妻がお風呂に入るのに足まで洗わせられている。ふゝ男も、もうこうなつて了つてはおしまいね」

だが此の時、一週間ぶりに快い湯に身を沈め乍ら、ふと妾は今までに且つて経験のしなかった、自分でも不思議に思うくらいの湯上りにサイダーを飲むにも似た妖しい衝動が

カッとし身に異様に燃え上つて来るのを感じて、あわてゝ浴室を飛び出したのでした。

幸福な生活

厳密な健康診断に検便までした結果、妾の体には病氣は愚か、蛔虫一匹、卵一つの無い事を確かめると、妾は愈々最後とも云うべき夫をして奴隷以下の畜生の虐待を遇してやることに肚を決めました。そしてこれだけやってみて尚、依然、夫のアブ性が治まらず、嫌な行為にうづゝを吐かしているようだったらその時こそ、本当に彼とは離婚をしようと秘かに悲しい決意を固めたのでした。

たまたま八月に入つて間もない、或る朝の事、日課としてきめられていた彼は妾の朝食のパンを焼いていました。と、その時、彼が焼き損なつたらしい一切れのパンを素早く自分の口に放り込んだのを、妾は見逃がしませんでした。それから、約二十分ばかり後、

「お待ちっ」

いつもように、妾の朝食の残りを台所に下げて行こうとした夫を、妾は鋭い声で呼び止めました。

「はいっ」

驚いて振り返る彼に、

「朝食は喰べなくていゝわよ」

妾は冷たく云い渡しました。

「今すぐに片付けなくてもいゝから、そこへ

お坐りっ」

彼が、再び食卓の上に、一度下げようとした朝食を置いて、側の椅子に小さく坐るのを待つて、

「お前は、妾が知らないとも思っているのどうしてあんな嫌らしいことをするのさ」

「えっ？」

夫は如何にも何の事だか納得がいかないと云つた風を殊更に装い乍ら、意外だと云わんばかりのとぼけた顔を妾にして見せました。「おとぼけでないよつ。奴隷のくせに、どうして盗み喰いなんかするの？」

すると夫は、それこそ驚いたと云うように大袈裟に体を震わせ乍ら、

「僕は盗み喰いなんかしません、絶対にしません」

ピシヤリッ

とたんに彼の頬で妾の右手が大きく、朝の静かな部屋に木魂しました。

「嘘をおつき」

「いゝえ、本当です。絶対にしません」

ピシヤリッ、ピシヤリッ

必死になつて白を切ろうとする夫の頬を、妾は続けさまに平手打にしました。

「未だ、白っぽくなるの！」

「本当に喰べません」

夫は、妾の殴る手をぐり抜け乍ら未だ云い続けます。

「おだまりつ、畜生っ、これでもか」

妾は本当に腹が立ったような気になり、いきなり履いていた皮スリッパを脱ぐと、それで彼の頬を力任せに打ち据えてやりました。

ピシッ、ピシッ、烈しい音と共に、みる／＼彼の頬が赤い紅をさし、大きくはれ上って行きました。

「これでも未だ妾に嘘をつくの？」

「本当に僕は……」

「うるさいっ、だまらないかっ」

云うが早いか、今度はいきなり足払いにかけて彼を床の上に投げ倒してやりました。

「畜生っ、こうして上げる」

足を上げて、夫の顔を、頭をと何度も／＼、蹴飛ばし、踏みつけ、にじり廻してやりました。又、男の人などがよくするように、彼の胸倉を掴んで引きずり起しては、力一杯拳を固めて殴り倒してやったのです。

「始めから正直に白状して謝っておれば、こんな痛い目に合わされなくて済んでいたのだよ」

さすがに疲れを覚えて、妾はベッドに坐りこんでしまうと、足元の床に両手をついて詫びる夫を見下し乍ら、額に流れる汗を拭いたのです。

「そう——。そんなにお腹が空くの。じやアお腹が一杯になるようにいゝものを食べさせて上げようか」

妾は、自分でも残忍な女のような気持ちになりました。

「そのパンをこちらへ持っておいで」云いつけて、妾は自分の坐っているベッドの下の便器を指差しました。

「この中へ入れるんだよ、早くおし」彼がおど／＼しながら、狐色に美しく焼い



た残りのパンを三切れ、便器の蓋をとって、その底に一枚ずつ並べるようにして入れました。そして、それが済むと妾は無言のまゝ、思い切ってその便器に跨り、ズロースをひき下していたのでした。

「さあお上り、遠慮なく食べていゝのよ」

椅子に戻った妾は、そこに全く呆然としたように立ち尽くしている夫に努めて静かな声で呼びかけました。

「へえー」

すると夫は思わず妙な声を出したかと思うとくずれるようにその場に座りこんで了ったのです。

「許して呉れ、これだけは許しておくれ。僕は外の事ならどんな事でもする。だが、これだけは嫌だ。堪忍しておくれ、お願いだ。許して呉れ」

余程、嫌なのか、彼は泣かんばかりに妾に許しを乞うのです。

「駄目よ、お前は妾の何だい？。奴隷じやないか、昔から本当の奴隷の食事は、皆これなんだよ。早くお喰べっ」

「本当に僕が悪かった。お前が、僕の病気をなんとかして治してやろうと、一生懸命に骨を折って来てくれた事は、僕には良く判っていたんだ。有難うよ、もう真面目になるから許しておくれ。な利子、真面目になろう。そしてノーマルな人間の生活に戻ろう」

あゝ、遂にあの日から妾の片刻も忘れず、乞い、そして希っていた、夫の、このノーマルに目ざめる嬉しい言葉が、今日、今聞くことが出来たのでした。あゝ、長い努力、長い間の苦しい辛抱、この喜び、この幸せ、あゝだが、だが、あゝ、これはどうしたと云うのでしようか。涙の出る程嬉しい筈である妾の心、彼にとびついて、今までの乱暴も決して自分の心ではなく、皆、貴方の病気を治して幸福な二人になりたいばかりだったのと、詫びそして喜びたい妾であつた筈なのに、それが意外にも、何だか物足りなく、心に大きい空洞さえ感じ、反って彼の嫌がることを、この汚いパンも無理にも喰べさせて彼の苦しむ哀れな姿を見て楽しんでやりたい。もっとく／＼彼を虐めてやりたい。あゝ、これは一体どうしたと云うのでしようか。そして、同時に妾は且って考えた事もなかったこの悪魔にも似た恐ろしい欲望が、今自分の体内にはつきりと存在し、しかも、今まで自分が夫の悪癖を治したい、そしてその方法のみに彼を虐めていたのではなく、いつかそこに自分の快樂さえ見つけ求めていたことを知って呆然としたのでした。その上、妾の心に何時しか芽生えていたこの嗜虐の欲望は、彼のノーマルを誓う正常な人間の姿を見て、尚一層、赤々と燃え上り、我と我が身を焼いている妾なのでした。

「うるさいつ、奴隷のくせに主人に抗らうつもり、早く喰べないか」

言いながら、妾はいつしか傍の皮バンドを握りしめていました。

「喰べないのね、いゝわ。喰べないのなら喰べないで、どうしても喰べられるようにして上げるから。シャツをおとり、裸になるんだよ」

妾は立ち上りました。ビシッ ビシッ 烈しいバンドの鞭が宙に躍って彼のむき出しになった背中にくいこみます。

「ヒイー」

悲鳴が、赤い条痕が益々妾の嗜虐性をかりたて、妾は無茶苦茶に鞭を振ったのでした。

「手で掴んで喰べるんだよ」

遂に彼は、鞭の痛さに耐え兼ねてか、或は歓喜にふるえつゝか、痛むらしい体をにじり寄せ、女のように白い指で、ぐっしりと水気を吸って大きくふくれたパンをつまみ上げました。

「お前は永久に幸せな妾の奴隷だよ」

星の流れる静かな夏の夜の事でした。

ミイラとりがミイラの諺は、こんな妾の為に作られた言葉かも知れません。

——終——

随分読みにくいでしょうけどどうかよろしく御判断下さいませ。尚、これは実話で御座居ます事を重ねて申し上げておきます。

ボクの責め方

(窓際晒し責めの巻)

宝塚 二 三 夫

四 馬 孝・画

ボクの事務所——これはボクの事業単位の営業所で、殊更、大阪のビジネスセンター北浜にある一銀行の附属シンブルビルを借っているもので——二階。応接間、事務室、経理室、タイプ、交換室、会議室、トイレット、控え室、その奥で表窓際のボクのプライベートルーム。その扉外に一本の長廊下も会議室前からは廊下仕切り扉を境にアスタイル張りで、インドア一の感ありて好き。

室内は愛用のマホガニー暗紅色両袖大テーブルの斜前、ニス仕上の所謂観念柱(ワザと造作したものでないが、建築補強上の偶然を利用)につながる娘達は全部、と云う事は事の大小を不問、一応ボクの責め方の対象とな

る女でなければ勤まらないわけで、完全嫌悪性のものは殆んどない世の中である。中には娘の方から心臓振りを発揮して、入社したお多福とか筋張りヒス型とか、ガニ股つとめズレ娘とか、一層仏頂面をゆがめて、

「ワタシ、何にもないのに捻られたり、掴まれたりするの初めてヨ！」とか、「馬鹿にしてるワ！」等々と、向うはやめてやる。こちらには幸いと云う、双方めでたい女もある事はあるが、娘に不自由せぬボクには問題外。

社員としての待遇は世間態もあるので、一応十台で七八千円、廿代で八九千円、タイプに交換は一万円前後と云う常識内での好条件にしてあるが、いずれにしてもレディメイド

の玄人女相手は一人ならいざ知らず、ボクにはナンセンスである。

現在人員は、とボクの性格上あやふやな夢の様な話は気が向かんでハッキリと書く。このハッキリも後章に行く程一層ハッキリ書くが、余り生々しいことは良心が許さぬので一応諒とされよ。

君子のその後は？ タイプの立子のこととも既に発表済(浮気篇)。その他いずれを見ても責められ上手な娘ばかり、中でも雑務の章子は仲々のチャッカリ娘で、上手に逃げて責めを他人に廻す娘で、頭腦的に必要なので置いてある娘だ。又自分が責められない限り冷静に処置して行くので、よく必要な事があり

他の責場にもノータッチでいる事の出来る娘で一人は要るもの。同じ湯上和子は全く平凡不味な娘であるが、孤独児であり気の良いのと、ボクのいさゝか好む会計の昭子とS関係にあるので、会社の下女中と云うところ。



事務のます子、八重野、綾子、雪子は揃って姉妹二組の四人美人、それが各人めいめい顔型、性格、ことごとく全然違っていてそして美人、所謂I企業 of 四美人と云う評判のもの。例えば姉綾子は細型小柄、歌磨式美人で

多淫性。妹雪子は中肉中背やゝ肥え型で心臓の強い内にある純情型。又こちらの姉ます子は背高く顔なんかホソ型なのに、腰から下、脛なんか曲線美と締りはあれど将に太くてボク好み。妹の八重野は中背肥り型で美人としてナンバー・ワン、勝気で（その実、内心弱いくせに）多情性会計の昭子、これは白い肌理細かいプリッと盛り上る肉付、大きいパツチリしたリスのような目と小さい口、丸くとも高い鼻、年頃娘としては完全な美しさを持ち、そして上品な姿体、チョイ見には丸ボチャであるが静かにじつと見ると美人であるが、問題はその脚首であり、真白くウブ毛さえも薄桃色程にスベスベしているが、世俗で云うなれば美人コンクールには不向な太さの、それがボク好みに膝とか足首がキュッと締っているのので一層太く見えるのか、本人は辱かしい辱かしいと云っている。然し食味を楽しむボクには絶品の一つである。

いくらよい脛でも白さと云い、スネ毛の有無と云い、足首くるぶしの筋肉の締りが十分で、腓脛の膝の裏の脛エクボのくぼみが美しく、踵も円いだけでは駄目で、色と云い、皮

肉が皺のあるのや、ひどいになると踵のうしろに靴のバンドずれの傷のあるのに至っては全く土人足でお断り。へしつぶれ型又然り踵の丸味も裏の土ふまずのどこ迄丸く珠玉のようであり、艶々した光沢さえ薄桃色に水々しいものは一かぶりしたいもの。太型でこの昭子ナンバー・ワン。

細型(世俗に云う脚線美)でナンバー・ワ

ンは昭子。あとはそれぞれ一長一短あるものばかりで列挙する用はない。それでもボクにしては太型の昭、細型の照、を双壁として貴重に思っている。さて次、交換手の相子、タイプの和子、立子共、一応前説済。

八月十四日(金)最大の台風近しとのニュースの入った曇天朝八時、高校野球第二日目テレビ受像のためとか何とかで早出を命じた君子アルバイター、プライベートの窓際へ廻転椅子を持出して待つこと暫し、窓の下ペープレメントを早出の女事務員達がボツボツと東へ西へと歩いているのを、いろいろの夏姿千差万別の

内にも美味そうなのは歩いてないかナアーと、貪婪な視線の餌食の如く眺めていると、静かなドアーキーの音と共に、白小鹿パンビの様な君子が入って来る。

「おくれてすみません」

八時十五分、時計とボクを見比べてジッと直立したまゝ、

「そこへ行つてよろしい？」

水色の横縞、袖なしのブラウス、エバプリーツの紺色のスカートで細い腰の線を浮かした所、同じ休暇アルバイトでも今年の冬の時とは一段と大人らしくなった君子の落付はらった姿は、可愛い、うちにも色氣のにくらしさを感じつゝ、

「何分おくれた？」

「十五分です」



「立つとれ、今、縄打ってやるから」
「ハイ」

ボクは袖抽出しから細引を持ち出すと立つて彼女のそばへ——。高手小手、首縄はいつもの通りグイと一締め上げて、何の声も反応もなし。責め始めて半年もするとこの調子だから、女と云うものはだらしのないのと、男に浮気されるわけである。勿論、唯手首の縛りだけでは何も云う事はない今であろう。窓際に引立てゝ来て、椅子にかけたボクの膝の上に抱き上げる。胸の下からは見えないが、丁度腰かけて胸の上からは窓の外、十米幅員街路が目の下に見えるバルコニーと云うべき窓際。

ブラウスの上から縄目をずらして、手さぐりで胸の小さい双円丘を掴み出し、視線を下の街路を続々と歩く出勤途上の娘達を餌食として目を輝やかす。

「こんな晒し責めはどうだ？」
「知らない！」と一言。

踵を接するような出勤姿の内、時たま一人二人は上を見上げる者があるが、よもやこゝでとは思わぬのか、さりげない姿でスースーと通り過ぎて行く。窓の向い側のM銀行の高窓の下、パンクホールには三つ四つ蛍光灯がついているだけで、向い側の窓の人に晒すわけにはゆかぬのがもっけの場所であり、又物足らぬもの。

君子、この静寂と云うか軽快な緊縛にいさゝか身をもんでも、頑張って冷静さを繕ってグッと胸を張って虚勢を示し、
「社長さんのスゴイ観識眼になった人、どれ？」
と一緒になって下を見る。

「ウン？」と両手の動き以外、顔も動かさぬボクをジレッタそうにくねくねと小さくゆすると、ボクの顎の下にある背中首玉から吊り縛られの手の指が開いたり閉じたりするのだけは、やはり悩ましくボクの視線の一端に見える。それでもゾロゾロとしきり歩行者の増える一方の中に、偶然に上を向いてガラス越しながらチラリとこちらを見る女を見ると、瞬間、ピクッ！と電気のかゝったように首を引込める君子。

そしてスイスイと通り過ぎて行く女、そして又暫し無言のうちに体を小さくくねらす君子の体を、静かにめでつつ目は街路へ。このあたり高い二階からではホントに手に取るようには見えぬがガラス越しとは云えやはり夏中休暇のアルバイトらしい半制服の小娘と、近頃はやりのバケツバックにワラジサンダルと云う年頃事務員の二人連れの娘の内、一人年輩の方が、これは偶然とはいえ上を見て歩きつゝ、ピタリとボクの窓を見ると一瞬、瞳を据えて何っ？ とぼかしに凝視する気配。さすがボクもハッとしたが、半陶酔街道にあ

る君子もハッとしたものゝ、隠れ遅れた思い入れで、

「チキシヨウ！」と歯ぎりを噛む表情。

「見たな、人の折檻場を！」と背中の中指を握りしめる。その女としてみれば、素肌ならいざ知らず着衣の上からの細い縛り目よりも男の膝の上に乗っかっている情態に気を引かれたのか、そばにいる小娘の肘をクイと小突いて、ニツと笑って通る。そばの小娘、何、々、々と上向いてキヨロキヨロするだけで、こちらに焦点をよう向けない内にドンドン過ぎて行く。壁の時計は八時四十分。益々七夕祭の様な色彩で出勤人波はシャッの一の男も十分混って増す一方。郊外の葉か、いずれの周辺の長屋から湧き出すのか、はみ出すのか知らず。外観だけは将にフアッション・シヨウである。殆んどこの一角、何万人の動きであろうが、仲々よきもの姿見当らず、勿論、個々に手に取って見れば、アバタもエクボになろうが——。

「どうだ、こゝでこんなにされている子があ

るの知ってるだろうか？」
と、胸へ廻した片手を縄尻持ちかえて、ピンと頭の上へ吊り上げて見せる。君子は落付き振っているつもりらしいが、上ずった声調になつて、

「社長さん、もっと美しい人に浮気しようと思つて見てらっしゃるのですよう！ くやし

「いッ！ チキシヨウ！」

背中中の縄目の手の指でボクの胸のところを小突き、捻りに来る。彼女の殺し文句もここまで進化して来たのである。

「ヒガメ、ヒガメ、そんなに浮気されるのが嫌だったら、もっと素直にサービスせんか」「これ以上したら、もう基本的人権が全滅だワ、イーダ！」

「あんまり生意気云々と——あれだよ、いゝ気になって膝の上に乗ったまゝで……、降りて立っとれ！」

膝から降ろすと、銀座ヒール（スポーツヒールの丸味ある）の浅い赤靴の爪先を揃えさして窓を背にしてボクの前に立たして置く。

「動いたら、引っぱたくよ！」

「そればかりは……、動きません、ハイ」

背中中の十指をキュッと握りしめ直立不動で立つのは、まだまだ可憐さがある。ボクにしてみれば、半分街路の動き、半分君子の責め縛り姿。そして君子としては、窓を背にしているのに晒し顔の苦悩を助かると思っているらしいが、立っているの今度腰から上を窓際にして高手小手、首縄の縄目姿が晒し出されている感覚が直接身に沁みぬらしい。それがボクの一種の責め目的である。

ボクの目は飢えたる犬の如く君子の縄目と下の街路の七夕行進？ を見比べて腰はかけてはいるが、気はイライラするばかり、ボク

としては誰かに見せたいこの縄目、見られたらハッとボク自身が辱かしさに震えるのと知りつつも、ところがこの日はアッと下を通った秘書和子までが、柔軟性な体と首を振りつゝやってくる姿を見ながら上をも見ないと云うわけで、和子の紺のズボンがとても印象的である。

夏物ギヤバと云っても、この暑さに紺ズボンとは——当然ボクの指示である。所謂、脛素足の日焼防止法である。ズカ娘やOSガールは色物でよく年中ズボンを履いている。美智子、みさ子も然りであるが、この二人は殊更に頂く程の脚でもないの我不関。

この和子はそういうわけにはゆかぬ。ボクの食味の完全品であるから。そのくせ変だ、何だか変で嫌だ目立ちもするらしいと、こちらの二人が思っている程世間で問題にしていぬのは、この所内でさえ

「暑いのに松本さんなんで？……」

「エッ、慢性ジンマシンで……」

と云う位で平然たるのに、やはり気のひがみであろう。そのくせボクの次の命令は、そのズボン履の安全性を逆利用して、最初はボクの室内から始まって、今ではこの通勤中までズロースをはかさない事になっている。

或る日、工場の若い社員が連絡に来た時、その点を話したが、

「バカにしないで」と叱ってあげたら、「勘

忍々々、あんまりお尻がハッキリしているの……」とあやまって帰ったと、息せき切つてボクに甘えて来た事もあり、二人で顔を見合わして、成程、当然の若い男の観識眼と感心すると共に、以後注意。

「さわったら一遍にバレるわ、冬ならネ、わからんけど、はいたらいかん？」

「ダメだっ！ 以後注意」

「ハイ」

このハイも和子特有の咽喉の奥からふくらみのある、力強く、そしてウンと低音でハキ出す情慾調。

さて、和子御入来と共に勿論、君子開放の九時は近く、ゾクゾクと云う程のものでもないが、揃い初めて責めオンリーとはゆかぬ暫く……。

十時過ぎともなつて一応全員ビジネスオンリーになった頃からは、君江のいる食堂へ朝のコーヒーと云うわけであるが、こゝですこし前、鈴子に対するこの場所での君子と同じ方法の晒し責めのことを少し述べる。鈴子との場合冬であった。さて、叶わぬ恋とは知りつゝも、時代めくが、どうやら皆を出し抜いてボクへの求愛度を高め出した事を、ボクもうっすら知った頃を利用して、

「一度、朝早く来い」と云った時の話。

冬と云ってもお水取りも済んだ頃、ガス・ストーブが未だ室内を温め切れない七時過、



冬の八時迄のこゝは全く寒々しい。このシーンは前述の君子と同じであるが、その時の鈴子は来ると同時にオーバーは当然ぬがし、茶色の地味な上衣、エンジの毛糸の下着もぬがし、上半身はシユミーズの白一色の半裸体とし、純毛のチェックの凄く多色大柄のフレアスカートだけは残して、あとは又当然、靴、沓下もぬがしての跣足という恰好で、高手小

手、首縄と、一先ず観念柱の前に立たして晒らす。

「鈴子、責めの準備完了、と云うんでしよう？」

開口一番、ボクを骨抜きにする殺し文句。

将に鈴子の生命である。更に毎度の事で心得もので、はだしの爪先を両足ピッタリと引き寄せて、自分でも「見て頂戴」とばかりに下

を見る。シユミーズの上からとは云え、丸出しの肩先から二の腕へかけて、ポチャポチャの赤肌には物凄く麻縄が食い込んでいる。

胸の隆起も一つ一つ別の恰好でくびれて縄目からハミ出している。口では大きく云って、やはり女性本能の羞恥で、俯向き加減の顔から上目使いで窓際にオーバーのまゝかけて、ガストロブに手をあてゝいるボクを覗き見る。鈴子の瞳は既にキラキラと何かを求めるように輝いている。

「何かぬぐものを忘れていないか？」

全身をなめ廻すようなボクの視線から目をうつむけてしまふ。

「何が準備完了だ！」

こゝへおいで！」

と膝を前に出す、声なくうなずくと、叱られたと云う思い入れよろしく、小さきさみに肩先をゆすつて縄目の上半身に反動を取りながら、ペタペタとはだしが氷

のフロアーに吸付くようにしてボクの前に立つ。足許をモジモジさして落付かぬ鈴子。見事に締め込んだ背中逆十字文、手首の縄、引吊る首縄、瓢箪の如し。すぐスカートの下からボクの手には白いズロースと黒い起毛メリヤスのズロースが白黒よろしく。手早く丸めてオーバーの大ポケットに二つに分けて。「ウン、これで一寸は裸にされた感じが出たか？ エッ？」とだめ押しすると、声なく「ウン」と頭を下げると首縄がピンと張る。「イタイ」とも云わぬ女だ。そのまゝなぶつて欲しそうな体つきだが、そうは行かぬがボクの責め方。

彼女をそのまゝ膝に乗せたまゝ椅子を廻転さして窓の方へ。そして君子の話と同じである。君子は前かがみで背を丸くして十指を背の上で跳らしているのに、この鈴子はグンと胸を張り頭をボクの顔の横にすりつけて延び上り、目を細くして流し目で窓の下の街路を見ると、唯一人東へ歩くオーバー前かがみの早出の娘らしいものに云うが如く、「見て頂戴、鈴子こんな目にあわされているの……」

ボクの心臓には原爆的な文弥節であり、恐るべき殺し文句は続く、

「ウン（可愛いことを云う奴だ）」
自由であるはだしの爪先を突張ったらしくグツとのび上って、縛られた背中中の十指を握

りしめて拇指を反らしている。

「もつとくわしく云わんか！」

「云う、いくらでも云う」

責め文弥節の決定版である。「誰か見てエ

鈴子こんなにされているのを」

「こんなに、と云ったってわからないじやないか？」と水を差すと

「スカートとシュミーズだけの裸にされて、縛られているのよ、ネ」

丁度窓の下を通る小娘事務員がハーフコートで小さくなつて歩いて行くのを眺めつゝ、悩ましい目付で細目にして、

「ネ、こんなにムゴク縛られてるの」と、縄目の手をまるで赤ちやんでも背負っている顔でも見る様に、肩から首をねじって自分でも見たいようにする。勿論、こちらを向く程聞える近さでもなく、トボトボと寒そうに通り返して行く。

「あたし、はだしよ、チョット」と捨台詞の様に云う。その言葉を受けて、

「太い足も縛って見えるように、机の上に立たしてやろうか？」

「もう、鈴子をどうなりとして」

こゝまで来る百凡女も同じ台詞である。この頃から肌合も、いずこも温まって来て、手

首から先の十指が赤黒く紫じんで来る。さてそれから窓際で机の上に立たしては、もし街路から見られた場合、余りにも不自然なので

小型の円卓を一つ窓際に持つて来て、その上に乗せて立たす。と両素足の拇指をゴムバンドでクルクルと巻きつけてしめ上げる。

「ア、イッ、御主人いたいわ」

実際いたらしいが、片手でスカート捲つて片手でふくら脛をビシヤリと叩くと、

「文句を云わずに晒し者になれ」

「ハイ、けれどこの高さではこの寒いのに、はだしにされて、指もくゝられてるの見えないワ」

「バカ云え、そこまで晒したら、恥かくのはこちらだ」

「それごらんない、それ、それ、云ってるしりからチョット見て頂戴、鈴子、御主人のためにこんなにされてるのヨ、ソーレ、こんなにひどい縛られ方」

窓際に背を向け、体をねじって窓の下を斜めに見下す。ボクもハッとしてクッション椅子から思わず首を伸す。街路にはなる程一人の女事務員らしいのが上向きながら歩いている。然し、その表情は読めずとも一向に動じた様子もないので、恐らく気が付かないのであろう。ボクは彼女を見て、

「今に腰抜かして泣くから、あわてるナ」

鈴子は一寸クサル恰好。その頃からボツボツ出勤姿も増えて来る。円卓上で責め姿の置物のように前かがみ、両手を肩に背負ったように立つ上半身はシュミーズ一枚、下はスカ

ート一つに、縛り縄目を手、足、胸、首に搦ませた鈴子。窓を斜め前、縄目の手を斜めにボクに見せ、所謂、街路とボクを半々に見てボクをうしろにして立つ鈴子の晒し責めのひととき。踵までへしつぶしているようなモリモリ肉付、そして必要以上に太いふくら脛とも云えるが、全然食味第一のような赤味肌の跣足の脚を目の前にしたボクは、相当の自省心が必要とした責めである。スカートを残した御蔭でもあろう。

「見て、サア見て、鈴子、半分裸にされて晒し者になつてゐるの、それ、こんなに縛られてなぶられるの、はだしの足も縛られてちみたいのよ、サ、見てーエ」
これは、いさゝかヒステリ気味を出して来た。

「サ、見て、鈴子こんなにされてゐるの……」
ガラスに体をくっつけるように窓にもたれる。冷え込むガラスも情慾の熱でわからぬようである。実際、年頃の娘の一人が偶然かこの窓を見上げる。ハッとガウンコートから白い手を出す。大きく見開いた瞳が手に取るように受けとれる足付、将に立止らんとするかのように。ヒステリックになつた鈴子は、それに気がついたか、つかぬか。

「いくらでも見て、いくら責められてもあんた達に關係ないのよ」
と、ヒステリも本調子になりかけて来た。

実際、ボクの方がドキッ！として立ち上る。その姿もその娘さんには映じたのか、ハッと目をそらすと、平氣そうに歩き出したものゝ又振り返って見上げるのは、やはり完全に見て知った証拠。

恐らく驚異で胸をとろかせている事であろう。擱えて来てその時の印象を聞きたいものだと思いつつも、二度振り返って視界から去って行くが、その娘の、すぐあとに続く娘がやはり何か？ と見上げる。ハッとする瞬間、視線の不一致はえらいもので、判然とわからぬ、不思議だという恰好でスイスイと通り過ぎる。「見て、見てーエ」と狂わしげに叫び続ける鈴子。

出勤ラッシュの踵を接する人通りに半分男性の混つて来たのと、つい今の危険を感じたボクは、跣足の指の縛しめをほだいて両手を差出すボクを見た鈴子、待つてましたとばかりに倒れるように膝のところへ坐り込むと、「社長さん」とかすれる声で見上げる瞳からバラバラッと泪が溢れ落ちる可憐さ。

さて、この晒し責めの内、事務所の窓際では、この他に前述の君子、特に秘書の和子なんかになると大抵の事はボクの云う通りになつて、縄のかかった手首を窓ガラス一杯に引付けて立ち、ボクが窓の下と和子のその受虐殉情態を見比べているサジストとしての喜悅表情を悩ましく見惚れて、蚊のなくような声

で口だけは大きく開けて、「アンタ」と喘えぎ呼ぶところ等はすでに純情一路のものである。
(未完)

【告知板】 ○本誌四月号抵触に際して、寄稿家並に全国の読者の方々からお見舞やら激励の御便りを多数頂き厚く御礼申し上げます。混雑のため一々お礼状を出しませんでしたので誌上をもつて御礼の御挨拶をしておきます。故悪しからず御諒承下さい。本誌復刊に關しては努めて御連絡を差し上げましたが、何分多数のこととて通信洩れの方々も少からずありましたことを謹んでお詫び致します。本誌休刊中は奇譚クラブ通信第一号第二号第三号を以て連絡誌としましたが本誌の復刊を機に発行を一時中止いたします。

○本誌の復刊を機に新に愛読者になられた方々も数多くあると思ひますが、奇譚クラブ五月特大号以前のバックナンバーは別頁記載の通り在庫しておりますので、何卒お申込み下さるようお願いいたします。

○本誌を「局当」にてお受取りになられたい方は最寄りの受取郵便局を御指定下されば、局当置にてお送りいたします。到着後十日以内にてお受けとり下されば結構です。

フエティシズム通信



女性の下着について

水上流太郎

フエティシズム通信

(1)

僕は古くからの腰巻の大ファンですが、奇クにも腰巻のみならず、ズロース、ブルーマー、ブラジャー、コルセット、靴下、靴、パンティ、バターフライ、等々婦人の肌に触れる下着に対する愛好蒐集等に、興味を持つ人々の多く存在するのを知って、意を強くしました。そう云った手記や告白が、しばしば奇ク誌上を賑わすようになったのも、同好の一人として頗る興味を持って眺めております。また編集部の御好意で随分種々の腰巻を経た貴写真を発表され、僕の腰巻写真のスクラッ

プ帖を肥して下さったのには全く感謝の外はありません。そういつたファンの中にも、近頃の若い人は腰巻よりズロースに多大の興味を持たれるのも無理はありません。確かに、洋装の流行は近代人の感覚を大いに変化させつつありますし、外国のフエティシズムフォーを眺めても、その感を深く致します。(外国にも男の下着愛好者の何と多いことでしょう)僕は、またまた婦人用衣類の蒐集を始めましたが、先日、ある古着屋で、薄いナイロンのブラジャーとナイロンのサテンからなるコルセットを入手しました。誠に美事なもので、それが日本のものでなく、外国製なのを聞き、成程、このコルセットで胴をびたりと締めて紐で締めると実に素晴らしい、丁度腰巻の紐で胴を締める以上にびたりするのに驚きました。外国婦人がこれでは細胴豊臀になるのも無理はありませんと思いました。その日から、街で立派な洋装をした婦人を見ると、この婦人は一体どんな肌着を付けているかが、興味を中心にな

りました。出来得れば、その場で上衣をはぎ取ってでも眺めて見たいと思いましたが、そんな事は出来る訳のものでもありません。そこで奇クのフォート版で、一葉はニールックの服を着た婦人、もう一葉はそのニールックを脱いで肌着だけになったのと対照的に出して貰えたらと思っています。これはなるべく全身的なものである方がいゝと思います。肌着は出来るだけ豪華なもの―無論靴下も、ハイヒールも履いたものゝ方がいゝと思います。ニールックの時は、表情にも態度にも嬌慢なのが面白いと思いますが、流石に肌着だけになった時は、多分に羞恥をふくんだ表情で、やゝうつむき加減に肌着のつけを軽く指先でなぞっていると云った風なのが、魅力があつていゝと思います。出来るなら、毎月貴誌のモデル嬢の顔見せと云う意味で、実演して戴きたいのですが(外国のものでも結構です)きつと面白いものが出来ると思います。以上一人で勝手な熱をあげましたが、最近の寸感を申しのべました。

スタイル「昭和二十九年十二月号」
「下着特集」一読興味深かった。

フエティシズム通信

(2)

僕の経験から云うと、フエティシズムな人間に、その愛好する品物を与えない事は、健全な人間に食事を与えないと同様に罪惡だと

思っている。僕は女の肉体にそれぞれの催情帯があるのと同様に、男性にはサジズム、マゾヒズム、フェティシズム等々の精神的催情感覚があるのだと思っている。早い話が男が男を愛し、女が女を愛するの、感覚的にそれが、その本人の性的催情感であるからだ。その起因は即ち社会の文化的複雑性から生じているのも疑われない。実に遊廓の如きも、社会の必要上から生じたものである。社会の経済上必然的所産であらう。だが近代の経済状況はもっと緊迫化した。フェティシズムの現象も、そうした環境から普遍してゆくであらう。フェティシストに彼の好む物品を与えよ。これは一種の本能懐柔手段としても、犯罪防止の上から云っても、当然な現象として社会が認めるべき処まで来ているのだと思える。妻があり、恋人があれば兎も角、独身の孤独なフェティシストには、結婚まで恋人が出来るまで、フェティッシュな物品を、与えよ——僕は男として、女の物品を愛好するのは奇としない。その背景には、強烈な異性思慕の念があるからである。女性の肌についている物品が、男の美意識をそよめるのは全くやむを得ない現象だ——と考えている。問題はその美意識を獲得させる事にある（盗む）という不自然さを解消する事である。——即ち、そうした物品を作成し安価に提供する組織である。——奇巧の一月に提供の記事が出来ていて嬉しく思った。資本主義国家内のモラルとして、そ

れを禁止するより提供する事である。人間の満足は、食と性につきる限り、そうした物品の提供者は、この世から犯罪を減少させる事になる。それを法律で禁じたって何にもならない。僕はそれを痛感する一人である。故に問題は、それに応じる提供者の有無である。近代の法律は、一方で遊廓の存立を認容し、一方では、淫画猥文の販売を禁止しているのである。——僕は、これを愚だとも何時も思っている。僕など近頃古着屋で気に入った衣類が在ると、躊躇なく買う事になっている。何にも恥しい事がない。（むしろ盗む方がもっと恥しい事だと知ったからだ）そしてその買った品物を身につけている。それが果して誰の品物か知らないが、その婦人と一心同体になったようである。——それで頗る気分がいい、そこから明日の生活の原動力が生れる気がする。しかしこれはフェティシズムは、僕の性感体であると言うだけでそれが目的ではない、と常に心に銘記しているからである。註（経済的に普遍して行くと言ったのは、社会的に経済的な理由で、思うように結婚も出来ず、遊



廓にも行けぬ人間の増加を意味する）

フェティシズム通信 (3)

どうもフェチは、婦人の肌着にしても、一度婦人の肌にふれた品物に、決定的愛着を持つようである。この事実はすべてのフェチに共通するらしい。物品フェチの「匂いへの憧憬」「接触への憧憬」が潜在する事実は見逃せない。故に、新品より旧品に心酔する傾向は確にある。他人が見て汚いと思う品物ほどフェチの関心をそよめる。僕など、腰巻の色彩模様について、派手なものが好きであったし生地については、本絹、人絹、縮緬、木綿、モス、麻と戦前蒐集したものが、すべて戦争で灰燼に期してしまつたのは何としても残念である。新品の腰巻蒐集は容易だが、古物となると一寸古着屋へ出ないものだから、蒐集は困難で、最後には物干場から盗むと云う手段を用いるのだが、これとても、洗濯品だから、女の肌にふれた物だろうが、あの濃厚な臭気はない。だから盗む程の価値の無いものだ。外国の手巾フェチはわざ

と云う手段を用いるのだが、これとても、洗濯品だから、女の肌にふれた物だろうが、あの濃厚な臭気はない。だから盗む程の価値の無いものだ。外国の手巾フェチはわざ

わざと通行中の夫人の肌へ手巾を押つけて、逃げてから香いだというが、こんな愚はしなくても女郎屋へ行って、相手に新品を買うだけの金を与えて、これは君との記念として貰って行くと云えば、十中八九手に入るし、肌にあふれたもので満足されるなら、古着市を丹念に探すか、知人のくず屋に頼んでおけば必らず手に入る。(一寸高く買ってやれば必らず持つてくる) そんな事が恥しいのなら止め給え、君にはフェチに対する情熱が無いと云う外はない、それから百貨店の「蚤の市」には、素晴らしい外国婦人のコルセット、優美なシチュウのシュミーズ、また古風な豪華な衣裳が手に入る。(値段は高価だが) 若し君に情熱が在れば、これくらいの努力はすべきでしょう。兎角、盗む事はよくないからやめにして、一にも熱心、二にも熱心であることが万事を解決する道である。僕は、昨年の夏、アメリカ中古市で優美な桃色サテンのイブニングドレスと紐付の婦人用運動パンツを手に入れた。(値段も安かった) 以上、これが最も安全で確実な古物の入手手段だが、尚いゝ方



法があれば諸賢の御智恵を拝借したい。最後に僕のフェティシズムの愚詩を一つ二つ、
「それは古ければ古いほどよかった。ところどころ破れたりすり切れていたり、色があせたりシミの痕のついたものほどよかった。僕はそれから濃艶な幻妖な大気の怪臭を香ぐ、大女郎の大腰巻に包まれて、暖をとりつゝ鼻毛よまれし」崇物狂というものは、それを床の間に飾り、神の如く崇拜する様になる迄は本物ではないといえよう。

フェティシズム通信

(4)

こゝでは、僕のその後の腰巻に対する幻想(イメージ)を書いて見たいと思います。僕の腰巻に対する愛着尊崇は、これ迄の告白とこの通信でも、もうお解りの事だろうと思います。僕の腰巻嗜好は匂いから来たもので、女性の肉体への節片フェティシズムは、余りなく、足にも臀部にもさして魅力はなく女性の乳房はむしろ嫌悪の対象で、僅に青白く匂う襟筋に妖しい魅惑を覚えます。それより、べつとりと汗に濡れた臭気のしみた腰巻は、僕の最も

好む物品です。昨年の夏、僕はあるストリップ小屋の楽屋を、すき見する機会に恵まれましたが、ずらりと紐にかゝった(さながら虫ぼしのように)夥しい腰巻や長襦袢の色とりどりの風景に、我を忘れて恍惚となりました。そしてその板の割目から、鼻をつくムンムと薫る芳烈な若い女性の脂粉の香り、僕はしばらく我を忘れて、酔ったような気持で覗いていました。そこへ舞台から戻って来たストリップパーが、急いでバタフライを脱いで、次の舞台衣裳に更衣するのが眺められました。やがて彼女は変ったバタフライをつけて出て行きました。あとには、さっきのバタフライが紐にかけられていましたが、きつと汗でグッシヨリ濡れていて、いゝ匂いを放っているだろうと思い、香いでみたいとさえ思いました。舞台と違ったこの風景はずっと舞台より面白かったのは、それが秘密なそれも楽屋というところだったからかも知れません。それから僕はまた昨年中は、ある婦人ばかりの集いや催物の会場へ出て行つては、群集的な婦人がかもし出す臭気を香いだり、百貨店の中階段のソファにへたり込んで、上から降りて来る和装夫人や娘さんの裾前が開いて、チラリホラリとこぼれる色彩を眺めたり、大レビューのファイナーレの時に、夥しい裸娘達の艶めかしい匂いの波を、かぶりつきで香いだりして暮しました。そして夕方になると

懸賞入選作品

才四席

『奈落の慾情』

第二回

沢井和雄

四馬孝・画

一月前の沈鬱なただ沈鬱だけのほつきが瞬間長尾の網膜をかすめ通る。寒々とした寂莫が風のように迫って来る。あれから、劇場の裏へモグリ込んで、あの黒い魔物の様な頭の空廻りから、やっと逃れられたではないか、人はどう思ふか知れないが、己自身にとつては、こゝは安住の場所だ。ゆかりの臣下として、ひたすらゆかりの命令を忠実に尽すことが、己の新しい生きがいになっている。支えを失ったら——あゝ。あとは落伍と発狂が待っているだけだ。

急に嗚咽がこみ上げてくる。長尾は幼な児のように泣きじやくりながら、土にまみれた両手で抱え込んだ頭を、ゆかりの足さきに一層近づけて平伏しつゝけた。

「くやしいのかい。泣きつ面をして見つともない。そんなにしてもお前はここに居なきや食って行けないのかい」

「はい。こゝに置いて……置いてさえもらえれば……私は。」

「こんな目に遇ってもそれでもかい。」

「どんな目に遇ったって、私は……あなたに。」

恋の告白をする時のように、あとは口籠って了う。あなたは私のいのちなのだ。魂のより所なのだ。どんな残忍にだって堪えることが出来るけれど、あなたから離れて行けと云うのは、それは余りにも残酷だ。——のどの奥まで出て来るのだが、涙は溢れつゝけてとても言葉になつて来ない。

「だらしない奴。見るのもいやになつちやう。」

そのまゝゆかりが行つて了いそうになつたので、長尾は殆ど夢中で、ゆかりの足くびを握えた。うめくように声が上づつて了う。

「待って……待って下さい。」

泥と涙とゆかりの痰で、もみくしやになつた長尾の顔は、まるで人間ばなれしていて、見るからに不潔にゆかりの目に映つた。そし

てその男の手が、自分の足くびに這い寄ったのに気づいてゆかりは「汚いっ」

と身ぶるいをしながら払い除けた。長尾はその足を、空を掴むように追いかけた。

男のあまりの不甲斐なさに、ゆかりはぼかんと口を開けて見ていたが、何か怒ることが馬鹿らしくなったという風に声を静めた。

「じゃお前。ほんとうにどんなにされても、この小屋の飯が食いた
いってんだね。」

「は……はい。」

「呆れたもんだ。」

と云いかけてゆかりはちよつと黙った。この途方もない男に、どうしてやったものかと思ひ迷っているようだった。

が、尚もうるい声で哀れを乞うている男の顔を見ると、余りの無抵抗さに、ふたたび腹立たしさが湧いて来て、

「許して……下さい……」

私は。」

といくたび目かの長尾の声をきくと、それは没然と怒りにのし上った。った。

「意気地なし野郎。女に怒鳴られ、唾を吐きかけられ、蹴っ飛ばされても口惜しくないのかい。えゝ、そうかい。お前みたいなのは男って云うよりオスって呼んでやりたいよ。」



足先に力を籠めて、うずくまった長尾の肩をぎゅうぎゅうと押しつけた末、ゆかりは、

「さあ、もう一遍口をお開け。」

と長尾の顎を靴の先で持ち上げて、一度では腹の虫が収まらないとばかり、何度も頬をすぼめ口一ぱいに唾をためた拳句、又も力一杯に、あーんと開けた長尾の口に吐き込んだ。

「さ、それを飲んで、あたしの文句をお腹なかにおしまい。」

とゆかりは長尾の顔を見おろすと、一瞬残忍なスマイルを例の浅い笑くぼに刻んだ。まるで悪魔か神様のように美しいと長尾は感激している。

「おいしい唾の混ったお小言、有難く味って忘れないようにお腹に蔵って置きます。こんど又トチったら、もっと酷い目に遇わせて頂きとうございます。」と云って、もう一度土下座おし。

とゆかりが曇みかけた。粘ついたゆかりの唾を、口の中で何遍も練り直し、惜しそくに少しずつ飲み終えて長尾は、夢うつゝにゆかりの言葉を繰り返した。

「よし。こんどだけは許して上げる。」

板敷にひれ伏した長尾の髪を、急に面白くなって弄んでいるゆかりの足の拇指の爪が、終演になってたった一つ残ったフットの灯りを受けて、さくら貝のように濡れて光っていた。

「我慢しな、サム、奴はな先生のこれだから逆らっちゃ損だ。奴だけならいいが、先生には大森一家がついてるし、下手なことをするとそれこそ半殺しだ。」

道具方のAの頼珍漢な慰めが、女主人の唾で慣らされた飼犬のような快い幻想を、壊しかけてゆくのが、長尾に腹立ちしく響いた。

週が代ると、新しい芝居が上演された、芸のない裸だけでは、数館の商売に太刀打ち出来ないの、支配人に筋立てを複雑にしてエログロをふんだんに盛った。

題も「淫虐夫人」

舞台はフランス風の貴族の邸内で、淫蕩な女主人公エレヌは、ふとしたことから自分の馬丁のジャンに浮気をしかける。日頃から慕っていたこの若者はエレヌを忘れられなくなり、一度だけと止められたのも聞かず、必死の思いで、エレヌに云いよるようになる。自分の馬丁などは退屈しのぎにしか思っていないエレヌは、もともとどう云う気もないし、返って逆上したジャンの口から事が洩れるのを恐れ、無実の罪に陥れて腹臣の男たちに拷問させるジャンはエレヌを慕い叫び続けるが遂に悶死してしまい、発覚を恐れてエレヌは熾火に男を捨てさせて焼いて了う。

これが前段で、踊りはプロログの酒宴の場、男を殺した後と二回挿入し、勿論エレヌになるゆかりが中心となる。その間に責められる男の場面を観客に堪能させ、鞭で打たれ、足蹴にされ、顔を焼かれる嘗ての情夫の悲痛な叫び声を着に、妖しくほくそ笑みながらグラスを交す女の魅力をクロースアップさせる。そんなところが前段の見せ場になっていた。

後段の筋は型の如く復讐になる。

エレヌの侍女のアンは竈掃除の時、始末し忘れたジャンの指骨を発見する。かゝり合いを恐れて、それを蔵するが、とうとう恋人のジャックに打明けて了う。ジャックがジャンの弟で、激しい復讐心を起し、女が始めは止めても遂に納得させ、いよいよ復讐にのり込むと云う簡単なつなぎを、比較的詰らない所なので、割りどん前

で済ませて了う。

アンは、邸内の男たちの目をくぐり、ジャックをエレベーターの寝室へ忍び込ませる。アンが着更えを手伝っている後からジャックが躍りかゝって、忽ち裸のエレベーターを縛って猿轡をかけて、ジャンにエレベーターがした様にジャックは、暖炉の炎で顔を焼いて了う。そして裸の女を頭の方から炎の中へ少しづつ落して行く。こゝではゆかりの、のた打ち苦しむ芝居が見せ場で、クライマックスはエレベーターに扮したゆかりが、暖炉に逆立ちのまゝ、下半身をくねくね動かして赤い炎に肌を輝かせて、興を増す趣向であった。

話は更にグロを添える。極度の刺激に、ジャックは突然発狂して恋人のアンをも殺したくなって、うめき声を上げながら、アンを又裸にしてすう。必死に逃げ迷いながらアンは偶然傍にあったナイフで男の胸を抉って了う。

漸く騒ぎを聞いてかけつけた人々に、アンは忽ち捕えられる。

フィナーレに筋を象徴したつもりか、踊子たちに悪魔のいでたちをさせて、舞台一面に狂喜乱舞させる。

以上の様な筋であるが、単純な裸に漸く飽きた観客に、あんな外刺戟的に映ったものと見えて、評判がよかった。殊に、マントル・ピース仕立ての奥舞台で、ライトを受けた逆立ち女の腰からの動きが珍らしい手法だったので受けがよかった。

この演じ物では、長尾は又奈落にもぐり込んだ。暖炉の裏が奈落になつていたので、炎の調節と、エレベーターが落ちて来るくだりではゆかりに怪我をさせないように支える役であった、舞台の上から奈落に顔を突込んだ後、板がこいた奈落の壁に手すりがついていてゆかりはこれにつかまゝ、腰から足をゆすって見せ、ゆかり

の腹を抱えるようにして、長尾が次第に奈落の中へ入れてやる。客席からは、のた打ちながら、焼け死んで行くように見え、丁度その時、長尾が足でボタンを押すと、暖炉の炎が勢いづいて来るという仕組になつていて甚だ効果的であった。

幕まではゆかりもそこで待期しなくてはならないし、今度は嚴重な仕掛けがあるので、板がこいたため、長尾も前ほどは汚れずにいられた。

奈落で待つてゐる間、退屈なせい、ゆかりは、やれ支えが悪い下し方が乱暴だのと、口喧しく云つた。フィナーレの踊りが済むと長尾は、腰をかゞめてゆかりを肩にのせてやる。ゆかりは長尾を台に肩や頭を踏み越えて舞台に戻る。

以上が長尾の仕事なのだが、それが全部ゆかりの氣に入る通りにやれないと、なかなか大変であつた。それが一度は、ゆかりを逆さまのまゝ奈落に宙返りさせてしまったことがあつた。

その日は例によつて、手すりにつかまゝゆかりが、観客の興を一層煽ろうとして、ひどく足をばたばたさせたため

「サム、押えて。」

と叫ぶ間もやらで、重みに堪えかねた長尾が足をすべらせたのでゆかりはそのまゝ転げ落ちてしまった。手すりを軸に暖炉から奈落へもんどり打った恰好になり、長尾の顔の真上にゆかりの脚が落ちて来た。

ゆかりの重い腰をまともに鼻柱に受けて、長尾はがあつと頭の芯にこみ上げるような痛みをかんじた。

やつとこのことで起き上つたゆかりには幸い怪我はなかったが、内腿から尻にかけて長尾の鼻血をしたたかに浴びてゐるのに氣がつく

と、忽ちかつとして

「汚れちやったじやないか、サム。次の出まで奇麗にしている閑ないよ。どうしてくれるんだい。」

と云いながら、長尾の胸倉をつかんだまゝ自分の膝頭の下へ引据えた。

長尾は顔じゆうに血が流れ、慌てゝ両手で押えたために手も汚れたまゝであつたが、ゆかりについたそれを見ると、ハッとして思わず拭き取ろうとして手をかけた。「バカッ。お前のその手何だい。もつと汚れちやうじやないか。ダメダメ。シヤツでこすったら化粧が落ちてしまう。仕様がなね紙も何もないのかい。」

と、ゆかりもちよつと途方にくれた風だったが、

「そう、お前。どうせお前の血だよ。嘗めておしまい。」

とさもよい事に気づいたと云うように早口に命令した。

長尾は、はつとゆかりを見上げた。何か極秘の君命を受けた忠臣のような感動に震えていた。

「何してんだい。早くやるんだよ。」

とじれったそうに促されて長尾は、自分の顔や手が触らないよう



に気を配りながら、ゆかりの内腿の血に舌を当てた。

ちり紙さえあれば用は足りるのに、それがないため

に自分の舌が使われる。今迄の屈辱の度が更に一層広まった気がす

る。そして屈辱の底から歓喜が湧き立って来るようにほろ苦い血の味に生唾が後から後から湧いて来る。たった今しがたまでの自分の鼻血さえ、ひとときでもゆかりの肌に宿ってしまったら、それはもう玉のしずくのように尊いものであった。とろける様な幸福感に目をつぶったまま長尾は殆どバタフライのあたりまで、静かに嘗め上げていった。

「よし、こつち。」

とゆかりはくるりとふり向いた。そして美しくマニキュアを散らした指先で、はじける様な尻を軽くひらき、長尾の口が近づくと、
「サム、顔が汚れてるから、お尻にさわっちゃダメだよ。べろだけで、嘗めるんだよ。」

と注意深く念を押している。長尾はつけ根にきしむような痛みをかんずるほど、長く舌をのばす。

「ぬるぬるして気持ち悪い。いたらありやしない。サム。あとよく吹いて乾かしてよ。」

そう云うゆかりの口ぶりは、機嫌が直ったらしく見え、長尾はほっとした。出て行けとは多分云い出さないだろう。ゆたかなきめの細かいゆかりの尻が、くすぐったそうに時々ピクピクする。それを長尾は支配者のほく笑みのように見て、しだいに息が荒くなってゆく。

「もういゝよ。ほかは汚れてないかしらねえ。」

ゆかりが云ったので、長尾はごく自然に、両脚の間に首を入れて丹念に見廻した。

「くたびれちゃった。」

とつぶやきながらゆかりは腰を落した。長尾の頸と肩の間に、ぼ

つてりと尻を乗せると

「おゝ、痛っ。まだ何だかひりひりするよ。」

と高々と組んだ足くびをもんだ。長尾の唇元にすんなりとした線を画いて、しなやかなふくらはぎが横たわっている。眩しそうに目を落しながら長尾は、

「どうか内緒にして下さい。私を追ッ出さないで下さい。」

と四ッソ這のまゝ頼んだ。

「解ったよ。もうお前の愚図にはあたしも諦めてるからね。追い出しやしないよ。」

「有難うございます。」

「だけどいいかい。サム。追ッ出す代りに、お前をうんとこき使うよ。いゝね、こゝじやお前はあたしの道具なんだよ。いつでも自由に使えて何にでも間に合う便利な道具になるんだよ。お前は。」

「はい。」

「それだけは、はっきり覚えてお置き」

「はい。」

こうして奈落の底で、事実腰掛けになりながら長尾は、ゆかりの奴隷の、いや、もっと隔てのある、単なる道具としての誓をたてさせられた。

徒弟、主従、奴隷、飼犬、そして道具と、ゆかりの気まぐれの間隙に、長尾は底へ底へと沈んでゆく。そして道具としての価値さえも、全くゆかりの意識しないうちに、ゆかりの一部で——ゆかりにとっては最も低い地位にしかない部分、すなわち、足のうらや股や尻など——更に低められて行く。いつのまにかゆかり自身は、サムにとって、遠い神の世界に住んでいる。いつの日かゆかり自身が

サムの支配者であった時は、ゆかりの尻と長尾の顔は少くも対等であったろう。今はもうゆかりには、ゆかりの尻がサムの顔で汚れることはわかって、サムの顔が自分の尻で汚れることなどは、考えも及ばない。だから、ゆかり自身に代って、ゆかりの尻が、長尾の新しい支配者なのだ。そしてこれから先、ゆかりの尻さえも、更に支配者以上に遠まわってゆくだろう。ゆかりの肉体のどんな一むれたりと、長尾の舌がそぞろ恋うことさえ許されぬほど、貴く尊いものになって了うだろう。そしてその時は、ゆかりの排泄物が、長尾の支配者にとって代るだろう。

雨もよいの日、長尾はゆかりのために毛布を中へ藏いこんで置いた。もともと奈落は地べたへ続くところなので、板がこいぐらいでは、容赦なく吹きつける隙間風に、胴は毛布で防げても、手足の底冷えは刺されるばかりだった。

「何て、冷えるんだらう。」

ふるえ声を出しながら、両手に息をかけているゆかりに、長尾は黙って仰向けになり、下シャツをぐいとたくし上げた。

ゆかりも何も云わずに、長尾の腹の上に腰をおろした。そして両足を伸ばすと、長尾の唇の先に合わせ、上から毛布を長尾の頭ごとすっぽりくるんで了った。

まっくらな毛布の中に、ほの白く肉腿の裏がわが浮び、うっとり半ばつぶった長尾の目には、白い山肌のように、ゆかりの太ももがついて見える。風のつめたさどこへやら。夢のような甘い香りが漲っている。ほとんどそのまゝ昇天してしまいたいような幸福を、熱い吐息にまぜて長尾はゆかりの土ふまずや踵にかけ続けた。

「じゃ、こっち」

長尾のはかない想念をよそに、ゆかりは立ち上って向きを変えたゆかりには、長尾の熱い息がたゞ温度だけをつたえるのだ。静まり切った狭い奈落は、あいびきに手頃なところ。もしも恋人同志なら男のちぎり捨てるようなため息の中に、云い知れぬ慕情を拾わずにはいられまい。はげしい息づかいに狙われる身をかんとってしまいうだろう。ゆかりには、温度だけ、ただ物理的な温度だけを伝える男の息でしかなかった。足のぬくもりが、腰よりも良くなったから向きを変える気になったまでのこと。



ゆかりの尻が頼ばねに重い。殆ど見えるものがない。眼球の圧迫はさすがに堪えられないので、後頭部を出来るだけのぞける様にする。

「ミミイは大根だねえ。あれじゃぶち壊したよ。ほんとに、こんなならだらした芝居、切っちゃえはいんだよ。」

とつぶやいている。

「あーあ、あったかくなったら思い出しちゃった。まだギヤアシチ追っかけ廻してる。早く勢揃いになりやいゝのにさ。まだ五分もあるんだからいやんなっちゃう。」

長尾の鼻の上に、じれたようなゆかりの腰のゆさぶりが、つたわって来た。腹の皮が、

ゆかりの足のうらの小さきみな動きで、ピタピタと音を立てた。

「困っちゃったねえ。早く終んないかしらねえ。」

ふっとついたゆかりのため息を、敏感に聞きとると、ゆかりの思っていることが何か長尾の胸にハッとひらめいた気がした。瞬間、待ちに待った願いが叶えられる時のような、慄くような期待が、渦の底から湧きかえって来るようだった。全身の血は、とどろくようにたぎり立って来た。

何かのエスブリが、ゆかりの肌を通じたかのように、

「そうそう、サムはあたしの道具だっけ。馬鹿ね。あたしや。もっと早く気がつけばよかった。」

ゆかりの声がそんな音をたてゝいる。神の御声を聞いた時のよう

な、狂的な感激を伴って、長尾の耳にひびいている。

「……………」

ゆかりは何もいわないまま、長尾の頭に手をかけた。

「ふゝゝゝゝ。サムったら。気がきくこと。」



満足そうにゆかりが笑った。長尾は新しい命令を待ちきれないようにこめかみをふるわせて待った。

一秒、二秒、いや一瞬、二瞬、いやもっと刹那々々を数えたてられるような小さきな時間を、心臓のひびきにかんじながら、長尾は待っていた。

ゆかりの水の味、屈辱の底の味。誰も知らない発狂の谷間に、こんこんと流れる泉の味。一度味ったが最後、命も魂も、捧げつくしてしまいたくなるうま酒の酔いであつた。

そのあと長尾は、殆ど毎日のようにゆかりの水分を吸い取りつづけた。楽屋ではまさか云えないし、手洗場は裏までつゝかけを履いて行かねばならないので、ちよつとでも、そんな氣になると、ゆかりは奈落で長尾を使う様になつた。舞台からは煖炉をのぞく芝居がもうなかつたので悠々に行えた。

楽が近づいた頃、いつもの様に飲ませ終えてゆかりが云った。

「サム、お前、そんなもの飲まされても平氣なのは、なまいきにあたしに惚れてるのかい？」

「いゝえ。あたしやたゞこうやってられればいゝんですよ。」

「じゃ、あたしが居なくなつたら。」

「淋しいですね。」

長尾はちよつと言葉を切った。死んでしまふか、別の神様をさがすより仕方がないと思つた。

「サム、今日はもう少しお前を昇格させてあげる。」

「はあ。」

「あたしの命令だよ。嫌と云わないね。」

「はい。」

「云つたら殺していゝね。」

「はい。」

「じゃ頼むけど、事務所で今晚誰もいないから売り上げ持つて逃げとくれ。あたしンとこに夜中こつそりやつといで。そう。あとでバタン中に地図挟んで来てやるから。」

「はい。」

「あたしと山さんと出来ちまつて、墮すのに要るんだよ。お前さえ高飛びしちまえば済むのさ。その代り、お前をあたしンとこに置いてやるよ。今迄みたいに使つてやるよ。」

「はい。」

「逃げたらお前警察につかまるよ。あたしンとこなら分りやしないから居られるんだ。お前、逃げやしないね。」

「はい。絶対に。」

「そうだろうさ。お前はもう、骨のずいまであたしの道具だもんね逃げられることありやしない。いゝだろう、あたしンとこで、毎日可愛がつてやるよ。」

「はい。」

長尾は、何もかんじないまゝに高飛びを引受けた。

そして、ゆかりの家の片隅で、新しい長尾の生活が始まる。同じように畳をめくつた板じきの下で舞台の奈落と違ふところは全く社会から隔絶されていること。

そして昼間は、畳一つへだてた暗い板じきの下から、雲の上の世界を慕う様に、ゆかりの立居に聞き耳をたてゝいる。

ゆかりと会うことの出来るのは、ゆかりの尿意が催される時だけである。

そして、取りとめもなく「長尾」と云う男の呆けた魂は、私の想像の世界にずるずると埋もれてゆく。汚物の中にうようよとしているうじの楽しさを想像するように。

そして、こうした想像からは、哀しいことに私は、平凡な支配的な仕事を当てがわれた人間として、「幸福」に暮すようになってしまった。泥を夢み、泥の底にひたっている「長尾」と云う男……明かに私の空想である。

出来ず仕舞になった落伍者というロマンを、ほのかにゆめみながら、筆を馳せている私は天邪鬼かshれない。

浣腸器と共に

久利 照雄

小生は、浣腸こそはアブの極致と思っております。しかし小生には大腸内に膨大な量の水を注入したりする様な純粋なサディストチックな空想は稀少です。矢張り女性の羞恥に彩られたあられもない浣腸の光景、誇り高く慎み深い若い女性の姿を裏切る様な彼女自身の肉体の妖しい露出美、それも決して全裸というのではなく、洋装の美しい下着、ナイロンや絹の靴下ガーター、ハイヒール等は浣腸の装束による僅かばかりの臀部の露出を傷ましいばかりのエロティックな光景を強調いたします。

小生にとっては準備万端整ってリスリンを吸入した浣腸器を手にして立った医者の前で、盛装のままだベッドの前に立ちすくんで浣腸される羞恥に悶え拒否し続ける令嬢の姿態といったものが、臀部の露された浣腸なんかより遙かに強い興味を感じさせます。小生が物心ついてから四十才を越える現在に至るまでの体験は随分あります。言わば小生の性的成長は浣腸器の周囲にあったといっても過言ではありません。

最近小生は二十五才になるあるお嬢さんを自らの手で浣腸しました。このお嬢さんとの接近は偶然な機会で、たまたま知人の奥さんと彼女と小生と三人で同席している時、奥さんの十才になる息子さん病氣である話から「何しろ

が、所詮、マゾヒストはぜいたくな我がままな憶病者で、ロマンを恋し、リアルに仕えねばならぬのは、宿命と云えよう。

とまれ。

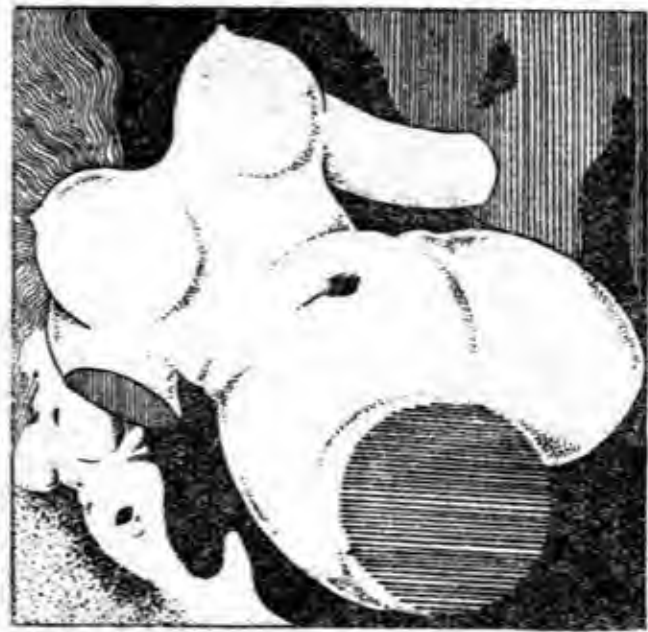
発狂の谷間に戦きながら、人生の巨大な岩によじ登って行かねばならぬ宿業の人々よ。命をちぎり捨て、行く思いで、谷間の花々をしばし見つめようではないか。そして又、めいめいの道を汗して行こう。より美しい花々を見つめたいために。ただそれだけのために。

わからず屋で困ります。先日浣腸するのにも、もうお母さんと格闘するみたいなんですもの」と浣腸の話になった時のお嬢さんの示した反応で、彼女が浣腸に対して相当の関心、興味を持っていることを感じました。それから一月間位の交際で遂に彼女が便秘勝ちであることを知り、浣腸の必要なことを説得しました。若い女性の便秘は美容の上にも大きな影響のあることを強調したのは勿論です。彼女は小生の試みが全く医学的なものばかりでなく他意のある事を思いつかないわけではなかったでしょうが、飽くまで医学的の一点張りです。小生の説得に、彼女の浣腸に対する羞恥心は、美容の為という一応の面子が立ってしまえば、

あとは浣腸という未知の誘惑に対して屈伏してしまっただけです。

小生の彼女に対する浣腸は人気がない夕方小生の事務室の一隅で三三CC入りのリスリンの浣腸器を以て二回に亘り五分間程で行われしました。彼女は羞恥に顔を染めながらも「もつと我慢しなければ効果がない」と強制する小生の手をふりきってトイレへ走り出しました。ピンク色のパンティ、白のホルセット、ガーターで吊り上げられたナイロンのストッキング、ツルツルしたスカートのひだ等が今でも眼底に残っている程、私にとつて盛装のまま戸棚の前に佇んで躊躇した彼女の姿態は忘れ難い思い出でした。

(完)



最近の新聞に掲載されていた

お臍の型と種類

土屋淑人

一度この方面の研究、(大袈裟な言分ですが)を、やってみたら面白かろうと、常々からそんな夢を、もっていましたところ、はからずも、二月九日付の毎日新聞(朝刊)へ、「ヘソの分類学」男は菊花、女はスリ鉢、という一寸珍らしい見出しで、可成り大きく掲載されている記事を、発見致しました。

動悸を、おさえながら、一気に読み下しましたが、此の記事は、解剖学専攻の一青年学徒の、臍に関する研究発表を伝えたもので、非常に面白と思いますので、内容の要所々を、こゝへ抜書してみましよう。

「人間のヘソは文学、絵画、彫刻など芸術や科学の領域では単に円形の、くぼみ、ないしは、点としか考えられていないようだが金沢医大の専攻生山田幸男氏(二八)はヘソの形態を人類学的に研究、特にヘソが男女の性の決定に有力な目標となることを実証」この研究は、未だ一定のヘソの形をしていない幼児や、脂肪組織が変化している妊婦や壮年をさけて、人類学上「北

健康で、柔肌の白く輝く、若い女性や少年の、ふっくらとした腹の真中へ、ボツンと、林檎の「えぼ」を、とった跡のようなくぼみをみせた臍、想像しただけでも、身体がぞくぞくしてくるようです。

私はそれ程迄に、お臍というものには魅力を感じております。何時か大分前の、奇ク読者通信欄で、女の人が臍いじめのことを書いていましたが、なんでも、此の女性

持った現在でも夫の眼を盗んでは、自分の手で、臍いじめを行い、楽しんでいるというのですが、これ等は、臍マニア、の私には特に興味ある記事でした。

これは又写真ですが、同じく、奇クの本年二月特大号(二七四頁)に載っていた土岐成之氏の、「お臍と乳房」と題する三枚は、とてもよく撮れていて、美しいと思いました。

さて、人間一人一人の顔が異っているように臍も又、各人各様、それぞれの異った型や種類のものがある筈です。

陸少年」といわれる、福井、石川、富山三県の十五才から二十才までの男女、三百九十名を対象としてキヤノン専用の接写装置でヘソの形、くぼみ又はしわを撮影した。

この結果、ヘソを、菊花、温泉マークに似た温泉名標、渦巻、桃の実、縦溝、突隆スリ鉢、の七つの型に分類した。

ローカル・レポート

自殺娘の死体損壊

近 藤 一

我々読者の期待通り、号を重ねる毎に発展の一途をたどつて来られた奇巧も益々確固たる地盤を築いておられるとお欣び申し上げたいのですが、何故か六月号が当地に現れず遺憾に存じます。小生は住居の関係で直接講読は見合わせなければならぬ実情ですので最近各号、神田の某書店で購入しておりました。毎月二十三日には遅くも店頭姿を見せる奇巧が遂に月末に至るも現れず、ひそかに心配しておりました。四月二十八日朝、不良刊行物の一冊手入れがあり、三十八種の雑誌が押収されました。それらの書名を一読してみると、小生の読たことのない

「男性の場合、菊花型が、四九—三八%で最も多く、女性には反対に、スリ鉢型が最も多く、三七—二一%で、ヘソの男女の区別も出来るといつている。

特に渦巻型にあつては、手の右利きの人には右巻きに、左利きの人には左巻きになっておりくぼみの大きさを、長さ、深さ、幅に

内容のもので勿論KKとは全くセンスの異なるものでした。が、とにかく五月にはいるのに、まだKKは姿を見せてくれません。ところがサンデー毎日の、五月十五日号の特集記事の終り十一頁に、僅か九行、KKの消息を伝えるらしい文章がありました。それによつて推察するに東京へ発送される以前既に何らかの処分を受けてしまつたのではないかと思ひました。しかも残念なことには既に立ち消えてしまつた類似誌Fと並び掲載されていることで、F誌は単に興味本位の編集で社会悪を助長するのみであり、KKは多数の社会構成員をバツクに、社会悪、人間悪の昇華に資しているが故に今日の盛大な招来したことも門外漢には全く理解しえないのでしょうか。不良出版物の閉め出しは誠に結構で小

生も大いに賛成します。しかし、それがため奇巧の発刊に影響ありとすれば社会のために嘆かざるを得ません。過去の如何なる運動もそれが勢に乗じた時、必ず行き過ぎを生じました。不良出版物の駆逐が弱者のオアシス、人生の伴侶を奪い取るかも知れないことを小生は恐れます。今後は従来より一層厳しき取締りがあることと思ひます。独特の風俗誌の孤塁を守ることは至難かつとも存じますが、どうか廃刊などの事態に持つてゆかないで戴きたいと思ひます。抑て、他の方と重複するかも知れませんがローカル・レポート一件御報告します。記事は毎日新聞五月十八日の朝刊です。この事件の犯人は勿論可成りの異常者です。死傷、局勢損壊、それに肌着フエティシズムもあるようです。怪

ついても調べたが、形態は男性が年令を、とつても変らないのに、女性の場合は、思春期に、ぐんと深くなり、また腹壁厚とヘソの深さは比例し、手術の場合などヘソから、腹壁の厚さを推定し、メスを使う力に加減することが出来るという。

疑者が犯人かは断ぜられませんが記事の上からその可能性は大と思われまふ。

死体損壊の犯人か 自殺娘の発掘事件

〔千葉発〕四月四日、千葉市浜本新田共同墓地に埋蔵された隣田区千歳町一の三旅館業主館長一さん万女中の中谷由利子さん(三三)の死体を掘出し同女の下腹部を切取つたというもの。小生は非力にして毎号を購読する以外、KKを敬愛する方途を持ちませんが、御誌は決して悪刊などすべきではあません。それは奇巧が非社会的反秩序的な刊行物たることを自認することにより、KKの不名誉なることは勿論、社会の安寧の役目を自ら放棄した時の社会へ対する罪は遙かに大きいものと知るべきです。



— 浣腸エピソード —

二箇のイチジク浣腸

花村 恵美子

A 総合病院の内科は、診断が正確で名高い S 博士が主任なのと、若い医員の診察態度が親切丁寧なので、診察を受けに訪れる外来患者の数は、他の何処の科よりも多かった。

外来患者の診察時間は午前中に制限されているが、耳鼻科や眼科は大概十一時過ぎると患者の診察はほとんど終り、閑散とした待合室で若い担当医員が呑気そうに煙草を喫っている姿が見られるが、内科の診察室だけは、時計の針が十二時を示そうとしている時間になっても、必ず、数人の患者が残り、医師もたとえ時間が過ぎても、待っている患者を診察しないで帰す訳にもいかず、終了するのが時とすると一時近くかゝることすら珍しくなかった。

九時から十二時近く迄、一本の煙草を喫う暇もなく、次々と患者を診察し処置することは、神経を酷使する為か老練の医師であつても、肉体的にも精神的にも疲労を覚えるのは当然なこと、まして大学卒業したばかりの K 医学士にとっては、誤診しては大変だという心配だけでもかなり棘にこたえるのであつたが、担当医として其の日の責任だけは果さねばならず、看護婦の「患者さんはあと一人で終りますよ」という言葉に、「やれやれ、これで助かった。医者という仕事は重労働以上に疲れるものだ。貴女も疲れたでしょう。簡単な患者さんだといふけど」と言つて二人共

顔を見合せ、クスクツと笑つた。

「お次の方どうぞ」看護婦の声に応じて入室して来たのは二十才前のまだ童顔の消え失せぬ、可愛いと云う形容詞のピッタリするような、女性の患者であつた。

K 医学士は、若い女性の患者だと、すつかりドキマギしてしまふ程の純真さで、そこが又魅力で人気にもなるのであるが、その患者の顔を見た瞬間、顔を赭くしたのは、患者ならぬ K 医学士の方であつた。

型の如く症状を訊くと、患者はうつむいた僅小さな声で、「お腹が痛いんです、今朝方から。我慢出来ない程ではないんですけど――」

K 医学士は虫様突起炎の初期ではあるまいかと嘔吐の有無を訊いたが無いという。右腸骨窩部を圧しても痛みを訴えないので、腹部全体を念入りに触診すると幾分張っているの便通の有無を尋ねた。

「あう、それが、昨日から全然――」

頬を真紅に染めながら答えるのを聞いて、簡単な便秘に依る腹痛と診断し、浣腸を行うよう看護婦に命じた。

「イルリガートルでしますか、それとも、グリセリン浣腸ですか」

「軽い便秘のようだから、グリセリンでいいだろう。用意して呉れ給え」

「あら、グリセリンが切れていますわ。薬局

へ行つて取つて来ます。」

足早に出て行く看護婦の後姿をぼんやり見送りながら、何気なく患者に視線を移すと、患者は乱れた服を直している最中。医師とは言え男性に裸身を見られたという羞恥が手の動作一つにも表われていて、K医学士は、洗腸するのが残館のように思えてきた。洗腸位なら何も病院でなくても、家へ帰ってから一人で出来るだらう。特に、恥かしい盛りの年頃の女性にとっては、洗腸位暇なことはあるまい。それに時間もオーヴァーしているし――。洗腸しなければ、こちらもそれだけ早く終るし、患者だってその方が嬉しいだろう。K医学士は、こんな理窟を考え、看護婦の戻らないのをいい率いと、患者に、自宅へ帰ってからイチジク洗腸を連続二回使用するよう言つて帰らせたのである。その結果どんな事になるか等知る由もなくに。

グリセリンを持って戻つた看護婦に、

「患者は帰したよ。わざわざ御苦労様。余り恥しうだったので、可哀想になつてしまつてね、洗腸するのが、どうも若い女の患者さんは苦手だな。さあ、終りにしましょう」

看護婦は、洗腸を楽しむにしていたのかも知れない。K医学士は、ガツカリした様子の看護婦を、不思議に見送りながら、煙草に火をつけた。

x

x

x

女体緊縛寸考

宝塚二三夫

○女は縛つてから暫く放つておくと、順、手にすぐ表情が出てくる。足は足首の締め上げ方ですぐ出てくるものである。

○後手の縛り方は高小手に限る。所謂〆空を掴む〆手の指の表情は手首を深目に組んで縄を掛けると出てくる。實際には手首より肘の三分の一位の所で締め上げて置いてカメラにすると案外深目でないものである。

○手首を縛るには片方ずつ適当に二重にからませて縛つてから両方に縄を操作する。

翌日、昨日の患者が再び訪れ、更に激しい苦痛を訴えた。K医学士は不可解な面持ちで洗腸しましたねと訊くと、言われた通り二回連続して使用したが便通は無く苦しくて我慢出来ないと言う。腹部は固く張っている、余程頑固な便秘なのだと思ひイルリガートルの洗腸を行つたが、洗腸液は全然直腸内に受けつけないのである。K医学士は増々困惑し、短い喉管をカテーテルに取り換え、カテーテルを挿入しようとする、3cmばかりで抵抗を感じ、いくら挿入しようとしても、駄目なのである、しかもその抵抗は、堆積便のとは異なるようであり、力を加えれば患者はその都度苦痛を訴える。K医学士は、まさかと思つたが、彼の直感的想像を確認する為、

イチジク洗腸の使用法を尋ねてみた。

「あの、二箇連続使用と申されましたので、イチジク洗腸をその儘一ヶずつ――」

患者は、イチジク洗腸をセルロイドの容器ごと使用してしまつたのである。

「痛くて――我慢出来ない程でしたけど、――」

カテーテルの挿入出来ないのも、無理ではあるまい。患者の直腸には、イチジク洗腸が二箇もつまっているのであるから。

K医学士は、啞然とした儘、二の句がつけなかった。

患者は、内科から外科へ廻され処置を受けたという。

足首は片足ずつ巻を縛りにした後、両足を一本にして縛る。

○縄は一箇位に切つたものを数本用意してそれを適当に巻き足して使用している。一本に長いものは用いない。單縛(高手)だけ又は小手だけ、足首だけの如し)なら十分に活用出来る。

○足の指だけを両方リボンで縛つたこともあるが写真にして大して効果はなかつたが、被縛者には相当緊縛感があつたようだが、所謂、ぐるぐる巻きは足の骨頂、縄は急所急所をしつかり捕えた二重掛けで十分。

○京都では御所結びという縛り方がある。名は優雅だが、実は高小手、足、首掛け縄尻のしめくり(袴、襦、天井、物体等へ)

懸賞入選作品 才四席

完全なる隸屬

坂田信治

序 章

私はそのとき十才でした。そして私はその年、自分の生涯の発端を見ることが出来るのです。そうです。それは不思議な暗合でした。ある一つの事件（それは多くの人々にとって、極くつまらないことなのですが、私にとっては、私の生涯に決定的な方向を与えることになったのです。）と、その後に関連した新しい父との結び付きとに依って、私は血みどろな愛憎の人生へ、旅立ったのです。その日の情景は、私の脳裏に今でも、鮮明に浮んで来ます。私が母と共に、N県の山奥から東京へ、旅立つ日のことでした。

私がお心をついたとき、既に父は居りませんでした。父は満洲事変の際に、戦死したのだそうです。それ以来母は私を抱えて、N県の山奥の父の生家に、祖父母と淋しく暮して居りました。その田畑の少い村の多くの家がそうである様に、百姓家の次男、三男は、故郷を捨て、出稼ぎに行かねばなりません。東京である程度成功して、村へ帰って来ました。それは豊った妻の代りを、物色に来たのでしよう。結局母を私の居ることを承知で、結婚を申込んだのです。その時彼は四十才だということでした。母は父の実家には、居辛い事情でもあったのでしようか、遂に同意することになりました。男はそれを聞くと、早々に東京へ引揚げ、私達は東京へ旅立つことになったのです。然し私はその新しい父と、その村で会うことは出来ませんでした。

それで私は新しい父に就て、大きな期待を抱いたのです。何故なら、私の知っている男性は、もう頼だらけの祖父か、若い分教場の代用教員か、或は薄汚い百姓しか知らなかったからです。私は幾度も読まれた雑誌の挿絵を見る、立派な服装の軍人や、髭を生した紳士を、父のイメージとして描き続けたのです。新しい父を得るといふことは、その頃の私にとって、何と大きな喜びであったことでしょう。

遂に立出の日がやって来しました。それは四月の始めの、この地方では未だ薄寒い、残雪の其処此処に白く斑々になっている頃でした。私は朝早くから眼を覚し、母に何かと話かけて、その時を待ち焦れて居りました。私達は此処より一里程先の高原の牧場から来る馬

車に乗って、駅迄行くことになつていたので。私は分教場へ通う他は、一度も他処へ行つたことはありませんでした。無論汽車を見たことさえもなく、街道を離れた山峡の中に、その部落の子供達と遊ぶ他は、何も知らなかつたのです。遂にその時間がやって来ました。私は微かに馬の嘶く声を聞いたのです。そして足音が近付いて来ました。私は居たたまらず家の外へ飛び出しました。私は白い息を鼻から吹かせて、駈ける馬車を見付けました。私は家の中に向つて叫びました。

「母ちゃん、馬車が来たよ」

やがて馬車はびつたりと家の前に止りました。

私はその馭車台から降りた、大きな男に眼を注ぎました。そうです。その瞬間、私の生涯が始つたのです。その男、それは別に変つた所があるというのではありません。然しその容貌、態度、音声の中に、私を強く惹付ける何物かを、瞬間に感じ取つたのです。その感情は、エデ



イブスコンプレックスと呼ばれるそれかも知れません。とまれそのときの男の風貌は、まざまざと私の脳裏に刻まれて居ります。

五尺七寸もあるでしょうか。汚れた作業衣のかげに、逞しい筋骨の一眼と判る。広い肩巾、それに埋るような太い短かい頸には、灰色の襟巻の上に、日本人特有の異常に大きな顔、その中に少し下り気味の黒い瞳、その表情は男性の猛々しい威厳と僅かな愛嬌を併せ持つ、野性の美しさであり、高い鼻筋と、真一文字に結んだ唇は、確かに男のみのもつ神々しさとも云うべきものでした。生際の後退した広い額は、日に焦けて、四十才台の持つ、光沢を湛えて居りました。そして鼻の下、顎、頬へと連る、粗い剛い髭が、僅かに伸びて青い蔭を、その精力的な顔色に射しかけておりました。厚い大きな手のひら、太い指、総ての点で完璧な、逞しい男性の権化を始めて、眼の辺りに見たのです。

太い濁った声で、その男は云いました。

「貞さん、遅くなって済まねえな、十一時半の汽車だったろう、少し急がないと間に合わねえかも知れねえな、もう荷物は片付いているんだろう、貞さんはちつと辛えが、後に荷物と一緒に乗りな、坊主は俺と馭車台に乗りやいゝだろう、さあ荷物を積むぜ」

気軽にそう云い乍ら、彼は荷物を積み始めました。

それから十五分程後、私達三人は車上の人となりました。まだ冷たい風の中にも、僅かな春の兆しが感ぜられ、馬車はがたことと動き続けておりました。母は後の荷物の上に毛布を敷いて、揺れる馭車台の横棒にしっかりと、揺っておりました。私はその男と隣り会わせに坐って居りました。私はおずおずとその男を見上げました。優しい微笑が返って来ます。

「嬉しいか、坊主」

激しく揺れる馬車に、私は彼の足元へ転ろうとしました。私は今迄気の付かなかったものを見たのです。それはその男の太い足に穿かれた、所々に泥のついてる焦茶色の、革の長靴でした。私の知っている長靴は、総てゴムで出来ているもので、長靴はみんなそうであると思っていたのです。それは私にとって新しい発見でした。そして革の長靴には複雑な陰影がありました。足首の部分の幾つに

も刻れた太い皺、不思議な縫目、脛脛と厚い革の胴との軋り、私はその男が、太い足をどうしてその靴に込り込ませるのか、窮屈な中からどうして脱ぐのだろうか、又どうして革で造ってあるのだろうか、とそんなことを考え始めておりました。然しそれは全く別なことに変わって行きました。

馬車はいつしか、広い街道に出ておりました。

「少し飛ばさねえと、危えな、少し揺れるぜ」

彼はそう云い乍ら、右手で座席の後から、何かを取り出しました。私は始めて見たのです。馬を殴る為に造られたもの、鞭、革で作られた鞭、長さ六十程程の堅い太目の棒の先に、太さ二程長さ一米位の黒いしなやかな革紐が、手前は細く割って、棒にしっかりと細い糸でくくりつけてありました。それは彼の太い指にしっかりと握られました。

「ほら、どう、どう」

太い掛声をかけ、舌を鳴し、その革鞭は空中に丸い弧を描いて、鋭い音を立てました。然し、その尖は馬の身体には当りませんでした。馬はいつか並足から、早足に変わっておりました。彼はそれを鳴しては、手綱を馬の背でゆるくしばき続けました。

突然、馬は凄じい勢で横倒しになろうとしがっくりと止りました。母は叫び声を上げ、

私は、その男の腰にしっかりと抱き付きました。雪解の泥濘に、深く車輪がめり込んだのです。

「ちよつ、とんだ手間をかからせるな、ほうら、さあ曳け」

彼はそう云い乍ら、鞭を高く振り上げ、鋭く鳴らしました。駒は力を籠めて曳いた様です。然し一向動こうともしません。遂にその太い鞭尖は一閃しました。ピシリと激しい一撃が、その馬の右腎へ落ちました。それは思ったより大きな鋭い音でした。続いて第二撃が、左の腎へ打ち下されました。馬は必死になつて曳きますが、一歩も動きません。私は息をこらして、その男の顔をみつめました。いつの間にか優しい表情は消えて、広い額には太い血管が盛り上り、酷薄な眼光が輝いておりました。

「骨を惜しむか、この野郎」

口汚く罵り乍ら、鞭は一度、二度、三度、腎へ、背中へ、むごたらしく続け様に打ち下され、馬は苦しさに呻くだけです。男は柔い腹を狙って、残忍な鞭を重ね始めました。鞭尖は適確にその腹に筋を刻んで行きました。遂に男は、馭車台に立ち上ったのです。

「このくたばり損い奴が、動かんか、曳け。畜生奴」

朱を注いだ様な顔には、激怒の表情が浮かび、彼の足を覆う重たい革長靴は、馬の腎め

がけて蹴り付けられのです。バグッという鈍い音がして、馬は眼を血走らせ、死物狂いで曳き続けました。とうとうその苛酷な責に、最後の力を振り絞って、馬はその泥濘から抜け出したのです。私は興奮と恐怖に震えながら、涙を浮べておりました。

男の顔には最早優しさを見ることは出来ませんでした。その惨忍な表情で、逞しい腕を振り上げては、馬の腹をめがけて、鞭を当てました。ビシッ、ビシッという音を聞く度に私は自分が殴られているような恐怖に、歯の根も合わないように、震え続けたのです。馬車は気狂いの様に、進んで行きました。男は不気嫌に、力を籠めて馬を殴り続けます。その腹はむごたらしい太い鞭跡が盛上り、遂に皮膚は裂け、赤い血で染めました。

私はその突然の事件に、心を奪われ、緊張の時間の解けるのを、どれだけ願ったでしょう。然し私はその男に、漠然とした思慕を寄せ始めたのです。野性的な男、革の長靴、革鞭、その三つがしっかり結び付いて、永遠に私の心を支配することになったのです。そしてその事件の後に続く、新しい父との相遇はそれを決定的なものとしたのでした。それは全く不思議な暗合でした。

第一章

私の前には、新しい父が居るのでした。そ

れは私の期待以上の、立派な男性でした。混雑する上野の駅頭で、私達母子の前に現われた父親に、私は驚き且つ溢れる様な満足感を覚え、居られませんでした。

背丈は低く五尺二寸位なのでしょうが、やゝ大柄の母と殆ど同じ位と思われるのに、横巾は遙に広く、少く共十八貫はある様に見えます。それも肥満した脂肪の塊でなく、鍛えられた頑丈な筋骨を想像させる大きなものでした。そして太い頸や、艶のいい、そうです今酒を一杯飲んだという様な赫い顔、長い毛の交っている黒い太い眉、てらてらと光る広い額は、ぐつと両鬢へ後退して、僅かに白髪の見える漆黒の剛い頭髮は、見事に短かく刈り上げられて、揉上から頬、顎、鼻の下へと奇麗に手入れの届いた髪は、精力的な顔貌に美しい隈を描いて居りました。鋭いが何処か優しさを湛えた眼、私の視線と行合った瞬間を私は一生忘れることは出来ないでしょう。

「貞さん、これが信治か、よく来たな、これから俺がおめえの親父になるんだぜ、いくつになる、十か、ふん、可愛い、奴だ」

父はそう云い乍ら、私の頭を撫で廻しました。私は羞しさの中に、云いようのない嬉しさがこみ上げて、にっこりと笑ったのです。

私は心の中に、不思議な感情が湧上って来たのです。今朝の事件が生々しく一齣一々がはっきりと甦って来ました。あの荒々しい馬

車の男、新しい父、背丈も違う、清潔さという点で全く違う、然し似ている、何処か似ている、何処なのだろう、私は直感的にそう感じたのです。そしてその相似は次第に明確なものとなって行きました。

私達の家は、池袋のある大学の裏手にありました。父に引具されてその家に着いたとき私は旅の疲れで最早ぐったりとしていました。が、玄關に這入ったとき、はっとしました。あの男との相似点の第一を、はっきりと見たからです。

下駄箱の上に燦然と輝く、あゝ何という事でしょう。それは見事な黒いエナメル塗の、革の乗馬長靴なのでした。あの男の長靴が、頑丈なごつごつとした不恰好なものなら、それは滑かに洗練させた、美しいものでした。そして彼の穿いていた焦茶色の長靴が、騎兵や、軽重兵の下士官のものなら、父は威風堂々たる将校の穿くそれでした。革長靴を穿く男、そうです。そのことは私にとって切り放すことの出来ない一大関心事となったのです。眠さをこらえて私は風呂に這入らねばなりません。父と一緒に這入ろうと云ったことが、私の好奇心を動かしたのでした。風呂場、私は父の裸体を見ました。素晴らしい壮年の肉体を。筋骨隆々たる強靱な巾広い上半身、逞しい上膊、私の腿程も太い腕、肩巾のまゝで腰迄続く贅肉のない彫刻の様な体軀、腋か

ら胸、胸から腹、腿から下半身足首迄、粗い針金のように剛い体毛が、その見事な身体を飾っていました。然しそれは外人の様な、毛深いという感じとは異った荒々しい美しさでした。唯一つの奇異な点は、両膝が大きく外側に彎曲しているのです。

「小父さん、その膝はどうしたの」

私はおずおずと尋ねました。

「ばか、小父さんて云う奴があるか、お父さんと云え、いゝか、この膝か、これはな、俺は小さい時から馬に乗っているだろう、それでだんだんこういう風に、膝が曲っちゃまった

んだ」

「お父さんは馬に乗るの」

私はお父さんという言葉の口にして、顔を赤らめました。何かつかえる様な気持ちでした。「あゝ、それで長靴穿くんだね」

私は馬と長靴の関係を、そのときはっきりと知ったのです。どうして長靴を穿かねばならないのかという、疑問を抱き始めていたのです。然し馬と人間との関係は次第に解きほぐされて行つたのですが、それは又後に述べましょう。この様にして私と父との相遇は、その第一日を終つたのです。

私のそれからの生活は、田舎のそれと較べて全く異つた、楽しいものでした。父は私を可愛がつて呉れました。それを私は今こう考へて居ります。私と父とは全く体質が違つて居るのです。私の身体は貧弱で、色も白く容貌も女性的で、特に眼は、その頃清純そのものと感じられる様な美しさを有して居りました。あまり自分のことを讃美するのは、気がひけますが、お許し下さい。体質の全く異なる性、それは互に索引する何ものかが、あるのです。唯それだけで機会があれば、ホモセックスチュアルな関係に、結ばれると云つたら余りに輕卒な提言でしょうか。

父の像



父は荒くれた馬車曳の男達を管理する、馬匹運搬組合の組合長なのでした。(父も最初は馬車曳から出発して遂に実力でその地位を獲得したということですが)そしてその仕事は、男の仲でも最も男性的なものの一つと云えるでしょう。その地位を

守ることは、腕力胆力、総ての点で決して人に引をとってはならないのでした。殺伐な男達を支配する父にとって、恐らく私のような脆弱な、非力な子供は、真に頼りない、情けないものに見えたでしょう。然しその全く違った男というものを、父は私に見出して、父は新しい興味を感じたのだと云ったら、嘘になるでしょうか。父を慕って甘える私を、父はこの上もない父性を持って酬いて呉れたようです。

それから九ヶ月、新しい年が始まって間もなく、母は一寸した風邪から、急性肺炎をひき起し、飽気なく他界しました。私は父と二人になったのです。(最も家族の一員の様な婆やが居りましたが)私は父と母との夫婦生活に就いては、全く記憶がありません。尤も十才位の子供に、その実態を知ることとは無理なことなのですが。忙しい葬式も済み縁故の者も皆引上げてしまった。何となく落莫とした夜のことでした。私は炬燵に雑誌を掛け乍ら、うとうとして居りました。そこへ父が声を掛けました。

「おい、信治、これから俺と一緒に寝よう、婆や、こいつの蒲団を俺の隣りに、敷き直して呉れ」

私は胸の中に、こみ上げる様な嬉しさを感じないわけには行きませんでした。私達は並んだ蒲団に、夫々潜り込みました。

「お前、淋しくないか、どうだ俺の床へ這入らないか」

「お父さん」

私はびったりと厚い父の胸に、顔を寄せました。甘い泣き度い様な慕しさでした。疎に生えた胸毛が、頬を擦り、太い腕に抱きしめられたとき、私の喜びは絶頂に達しました。何とも形容しようのない体臭が、どっと鼻を搏ちました。暖かい大きな掌で、父は私の両頬を支え、自分の頬へぐいぐいと、こすり付けました。

「お父さん、痛いよ、痛いよ」

「どうした、信治」

「お父さんの髭が痛いんだよ」

「そうか、痛えか」

そう云い乍ら、父は粗い髭面を、私の頬へ擦りつけ続けるのでした。

「お父さん」

「信治」

父は髭と私を抱擁し、私は涙を流し乍ら、眠りに落ちて行きました。結滞のない心臓の鼓動を耳にして。

それから一週間の後、父と私はある町医者に居りました。

「あゝ、こりや便秘ですよ。もう五日位便通がないでしょう」

「何だか知らないが、矢鱈に臭え屁ばかりしやがって、顔色も悪いし、どうも普通でない

んで連れて来たんですがね」

「腹に溜ったものを、みんな出してしまえば何ともないですよ、一寸浣腸して置きましょう。あゝ、すぐ浣腸の仕度をして」

その壮年の医者は、事もなげに云うと、私を診察台の上に寝かせました。

「さあ、痛くないよ、一寸だ」

ぶるぶる震える私を、手馴れた手付で、医者はズボンとパンツを剥ぎ取りました。

傍のテーブルには、真鍮の盆の上に並べられた、三十CC用のガラスの浣腸器、リスリ

ンの瓶、コップに入れられた微温湯、小さな瓶に這入ったワセリン、医者は浣腸器を提上げると、リスリンの瓶へ嘴管を挿込み、三分

の一程を吸上げて、その尖にワセリンを塗り嘴管を上に向けて、空気を抜きました。

「お父さん、坊ちゃん足の足を、持上げていて下さい、そうそれで結構、さあ一寸だ」

ワセリンを塗られた嘴管は、私の肛門に近付きました。医者はそれを一寸肛門に当てると、ぐいとそれを挿込んだのです。思ったより滑かにそれは這入って行きました。

「さあ、ぐっと大きく息を吸込んで」

なまぬるい液は、次第に私の体内に注ぎ込まれました。

「息を止めて」

「五分の辛抱だよ」

とチラリと時計を見乍ら云いました。私は

途端にたまらない便意を催していました。私は父の手をしっかりと握り、脂汗を流し長い五分を待ちました。やがて時間が来ると、私は看護婦に伴われて、倉皇と出て行きました。清々した気持で、元の部屋に帰ると、医者はこんな話をしていました。

「これからは御自分でやられると、良いですね。薬屋に行けば、いちじく浣腸と云って、セルロイドの容器に這入った奴もあります。浣腸器を一本お買になって、あとは微温湯に石鹼を溶した液で浣腸してやれば、大抵便は出ます。それでも出ない時は、量を増してや



ればいゝですが、唯少くとも五分は我慢させないと、便は出せんがね」
その事は、父と私の関係が決定的なものへ進展する契機となったのでした。父は帰り途に薬屋で、浣腸器を買いました。父は非常に奇麗好きで、私は毎晩のように寝る前に、父の武骨な手で浣腸をされなければならぬのでした。便が出ると出ないに拘らず、多量の石鹼液が注ぎ込まれ、苦しい五分の辛抱を強制されるのでした。つまり、それから始まる行為の前に、完全に清掃されていなければならぬのでした。

サディズム 雜感

私の緊縛考

村岡 助 浩

サディステックな嗜好といいますが、なかなか範囲が広く、同好の人々にとっても条件、好感が個々変っている事であります。そこで、先ず、私の緊縛についての好みとい

ったものをお知らせすることに致します。女体の縛った姿態のどこに一番気をひかれるかといいますが、なんといっても、その緊張美ともいえるのです。フオーリス的な肉体

父は本来男色家であつたのでしようか。私はこう考えております。恐らく父は異性への欲望も限りなく大きなものでしよう。それが偶々母の死後に、私に注いだ愛情の中に体質の異なる私に何ものかを、見出したのでしよう。

(未完)

【編集部註】坂田信治作の「完全なる隷属」は相当長いものですので、今後数回に亘って分載する予定です。

にあるのです。それにはどうしても、膝をおって座った姿態か、半吊りの姿態が最もよいのです。正座をさせられて、緊縛された女体のはちきれそうに緊張した太股の筋肉、とくに膝頭の微細な、ダイナミックなたくましさ、ほとんど陶酔的な感動を覚えるのです。また、半吊りにされて、立体のバランスを失った女体の、腰から下に力をかけざるをえない姿態の美しさ、あの、ふくらかな、肉付の良い太股に力がみなぎり、限度までぎりぎりにつっぱった筋肉に現われる、デリケートなニュアンスに、私は、なにか知らず、そこから、一つの女のかなしいまでの媚態と詩情的なエロテックをみるのです。それほどに、緊縛による女の緊張は、私にとってすばらしい

ものなのです。そんな気分には酔いしれると、私ののでは、からからになってくるのです。私は、前もって、用意してある、コップの水を、縛られて、くねっている女を見つめながら飲みほして一息つく、画用紙にできるだけ写實的に筆を走らせるのです。

K子はそれを「悪趣味だわ。」といい。N子は「写真でとったらどうなの」といった。どうも、縛られている彼女等には、たいくつで羞しいことであるらしいが、私には、それ等の女体をみつめながら描く事によって、一そう、美しさが深く感じられ、私はどうすることもできない昂揚状態に迄導き入れられてしまうのです。そうなると、私は、暗示にかかったようになって、フオースあふる、彼女等の太股のあたりに、縫針の先を押しつけるのです。体をそらす事も出さずに、皮膚をチクタク刺される疼さに、身体をこわばらせて、部分的に痺れんを、肉体の陰影が実に素晴らしく美しいのです。

絵画の中では、私は、伊藤晴雨氏の責絵を最も好みます。氏の絵画は少なからずフオースがあらわれているのです。過ぎた日、或る雑誌で見た素描画ではあるが、すばらしさ、私はそこに、実に生々とした。緊縛された女のいつわざる肉体を見たのです。すべてを脱却して、氏の絵画の前に私の肉体をなすがままになげだしたのを覚えております。

前に一寸と書きましたが、私は緊縛された女を責めるには、主に、線香と針状の物や羽毛というごく限られたものなのです。血を流すのや、あざが残るようなものあまり好きではないのです。そして、女体を責める時、さるぐつわは私にとって絶対かくことのできないものなのです。それには手拭が一番つかわれます。縛られた女性に手拭の猿ぐつわ！。そこから連想されるのは、暴力。無理やりにいやがる女を責め弄ぶという感情にせまられ、サディステックの血をいやがうえにもかきたてられるからです。猿ぐつわをされた女体、私にとって、より可憐というか、初々しく眼に映るのです。悲鳴もあげることでもできずに、かすかにうめき声を猿ぐつわの中からもらして、もだえ、くねる、緊縛された女体こそ美しさの最たるものなのです。

縛る、といいましても私は、絶対に肢足は縛らないのです。腕を固定されているのに、また足の自由まで奪ったのでは、肉体の動きが特定な限界に制限されてしまうからです。どこを縛るのが好きかといいますと、手首。(すべて、後手縛りばかり)腕が主で、身体になわをかける場合は、乳房の上か、腰のほそい部分だけです。その外に首に縄を廻した時が度々ありました。着衣をしているのを縛るのはあまり好みません。でありますから、私が女体を緊縛する場合は大体において裸に

して縛るのです。ここで思い出しましたが、K子という乙女がどうしても裸になるのをいやがって、縛ってもよいけれど、服の上からでないといやだというのです。私にしても、無理やりに裸にして縛りつけてしまうというような気があるわけでもないです、あえて着衣の上から彼女を縛っていた事がありました。がどうもなにかしらピタリしなくて、ざらばく感じられてしかたがなかったのです。

最後に、以上でお知らせ致しましたように、この姿態、条件でなければ絶対にやらない。また、外の縛り方をやった事がないときめているわけありません。今にしても、絵や写真を見て、その様に縛ってみたり、私なりのアイデアをいかしてやってみたりしております。または、鞭をふるう事もあります。あくまで痕がついたりしないように心掛けるのは前に申したとおりです。要するに、女体を縛るといっても、私の好みが一番マツチした姿態、責め、縛りを、お話ししたまでで、サディストである私としての最もサディステックな感じを覚えるものを挙げたわけです。

(おわり)

(編集部より) 筆者の描かれた挿絵数枚同封してありましたが、公開に適しないため割愛のやむなきに至りましたことを残念に思います。

再度の鞭を期待しつつ

——二俣志津子さんに——



三 正 沼

二俣さん。太宰治の晩年の作品に「男女同権」という面白い小説があるのを御存じでしょうか。チエホフの「煙草の害について」に示唆されたかと思われる、マゾヒストの独白ですが、その主人公の詩人は、自分の作品が女流評論家から美味噌にやつつけられるとすつかり昂奮を感じて、逆上のあまり「ナンジニセツブンヲオクル」などと彼女に電報を送

じ効果を持っています。貴女の三月号の「Mへの手紙」五月号の「性への一考察」が私に与えてくれたのは、正にこういう珍らしい幸福でした。私は、この幸福を与えられたことに対して、電報こそ打ちませんでした、何よりも先ず、貴女に御礼を申さねばならないのです。

けれども、マゾヒストはこの種の幸福には

るのです。——ものを書くマゾヒストにとって、公刊の誌面で、女性から酷評されるといふことは、どんなに稀な、従って貴重な経験であることでしょうか。衆人環視の中で、若い美しい女の前に土下座し、その足跡をうける幸福は、多くのマゾヒストにとって一生の夢想に止まります。しかし、公刊誌上で女性からやつつけられることは、精神的にそれと同

貪婪です。私には、罵られ方がまだまだ物足りませんでした。貴女からもっともつとこつびどくやつつけられ、完膚なきまで私の手帖の愚劣さが明らかにされ、そして私がそれを認めざるを得ぬことによって、本誌読者に、沼正三に対する二俣志津子の優越が明らかとなり、丁度、足蹴にされた犬がキャンキャンなきながらも、結局女主人の足を舐めることで服従を表明するのを見るような印象を与えることができれば、どんなに嬉しいことでしょうか。もつともつと罵られたい！しかし、貴女は二回にわたる筆鞭で、私がもう温順しく馴らされたと思われたら、二度と私に興味を持って下さらないかも知れません。「マゾヒストの男性を虐待したい欲求」(四月号一六〇頁)を現に自覚しゆきつつあるこの聡明なサチスチンの眼差が、私に向けられている今こそ、千載一遇の好機なのです。今黙っていたら、機会は去ってしまうでしょう。反対に今吠えついたら——貴女はお怒りになるでしょう。そして、今度こそは容赦なく、無慈悲な足蹴を加えて不遜な犬がキャンキャンないて足を舐めるまで止めようとなさらないでしょう。そうだったら、どんなに嬉しいことか。

しかし、それには、よほどひどく吠えついて貴女を怒らせなければなりません。以下に私は精一杯抵抗い、できるだけ吠えてみました。内心では、女主人への畏怖に満ち、再度

の仮借ない筆鞭を胸ときめかせて期待しているくせに、随分生意気な口をきいたのも、ひとえに貴女を激して、私を懲そうという強い決心を持って欲しいと思ったからなのです。

二俣さん、どうぞ、もう一度私をやっつけて下さい。ただそれだけのぞみで、私はこの反駁の文を書いたのです。今度は抵抗しません。本誌の全読者の前で、私を地に這わせこれでもか、これでもかと力強い足蹴を加えて下さい。それでも足らなかつたら、(吾妻氏が古川氏を夜光島に招いたように)、この沼正三という奇ク人格を、貴女の作品の小世界に拉致して、あの犬小屋に鎖で繋いだ上、思う存分懲らしめて戴いても、また望むところですよ。

× × ×

一 一番先に二俣氏に云いたいことは、氏の攻撃は、目標を誤っているということだ。サヂスチン二俣志津子の前に立ち現われるべきは、マゾヒスト沼正三でなく、サヂリスト、ヒトラーなのである。

氏の文章は手帖第七十九項を私の論文として見た上で書かれている。ヒトラーのヒの字も出て来ない。しかし、私は、あの内容を、ナチスのものであり、ヒトラーのものであると明記している。「最初に犁を引いたのは非アリアンであった」とヒトラーが云ったのを私は解説敷衍しただけである。それに対して

二俣氏が、「最初に犁を引いたのは女性である」と信ぜられるのなら、論争は二人の間で行われれば良い。私にその鋒先を向けられるのは、お門違いという外ないのだ。

二 しかし、お前はその説を吹聴し、その論旨に同意している以上、その内容に責任を持つべきだ。そう二俣氏は追及されるかも知れない。ダーウインを祖述したハクスレイは自ら「ダーウインのブルドッグ」と称して、ウイバーフオース僧正と論争することを辞さなかった。人の説を紹介するものは、その位の心掛が欲しい、そういわれるかも知れない。

だが、それは「手帖」の性格を氏が誤解されたことにもとづく非難である。連載開始に当って、一昨年六月号に明言したように、手帖の内容は、マゾヒストとしての視角から見興味ある各種の話題を捉えての読物提供とマゾヒストに読んでおいて欲しい古今東西の作品を紹介する資料提供と、この二つを狙っている。いわば、マゾ・ガイガー管で測定して反応のあった物を、マゾ色眼鏡で見た結果を述べているようなものだ。歴史的に真実かどうか、科学的に正当かどうか、そんなことは本来眼中にない。例えば、人類文化史において、母権制が実在したかどうかは争のあるところである(二俣氏はモルガンを金科玉条のようにいわれるが、ミヌラライヤーやウェスタマーの婚姻史や、マリノフスキーやロ

ーウイの原始社会研究を知られば、モルガン理論の欠陥は明らかだ。)が、手帖においては父権説は否定される。母権という観念をマゾヒストは憧憬するからだ。アマゾン女族は遂に空想の産物であろう。だが、手帖の世界では、それは歴史的に実在する。この女王国こそマゾヒストの理想だからだ。奴の字が女と又(右手の意)の会意文字(手で捕えられた女、又は女が手で事えるの意)なのでも分るように、古来、家内奴隷として使用されたのは女性が普通であった。然し手帖には男奴隷しかでてこない。その方が楽しいからだ。王昭君は匈奴に嫁する時、輿に乗って行ったと考証されている。しかし、馬上の王昭君の姿が古来の好画題だったことを述べる時、私はその考証を無視する。それに触れては感興を削がれるからだ。アンドロマキは大女だったので決してヘクトルの上に乗らなかつたとオウィディウスは「恋愛術」で明言している。しかし私は「ヘクトルの馬」(第二十二項)について書いた時、わざとこの文献に触れなかった。都合が悪いからだ。中村真一郎の「冷たい天使」は各様の読み方を許す小説だが、私はその中から「戦後夫人」のことだけを摘み出し(速報第七五)他は無視した。手帖に關する限り、不要だからだ。……数え上げればきりが無い。それらはすべて一の歪曲であろう。しかも尚、それが許されるのは、結局

マゾヒストのためのマゾヒストによるマゾヒズム的歪曲として、書く方も、読む方も了解しているからである。

白人崇拜だってそうである。第五十五項でも書いたように、私は近世における白人文明の征覇前には、地球上に白人崇拜の観念の適用可能な分野はなかったと思っている。近世になってからのその適用についても、実証的なことを云い出せば、多分に問題の余地があることは云うまでもないので、その限り、白人崇拜が日本人の本性であることが歴史的に根拠がないという五月号九二頁の吾妻氏の言を争うものではない。しかし、手帖は、そういう歴史的記述を目的としていないのだからもし、日本人の本性に基づくという説があれば私はそれを紹介するだろう。何も吾妻説と比較して科学的正邪を決めて一を選んだのではない。その方が私のマゾヒズムの琴線に触れるからに過ぎない。

ヒトラーの説はそういう意味での私の白人崇拜感に訴えるものがあつたから、私はそれを紹介し吹聴したのである。その内容を科学的歴史的に真なりとして主張したもののようには勝手に決めた上で、その主張が誤っているといわれても、痛くも痒くもないが、少くとも迷惑である。大体、手帖がそういう性格をもつことは、今迄の長い連載分をお読みになれば、又女のズボンについて、私が、その歴

お詫びとお願い

本誌の「課題原稿募集」に依じて、映画速報欄、雑誌通信、ローカルレポート等多数の投稿を頂きましたが、本誌六月号以降の休刊のため時機を失して掲載不可能となりました分の投稿者の方々に謹んでお詫び申し上げます。今後は毎月確実に発行を致します故、本邦唯一のラブ専門研究文献誌としての真価を高めるため、奮って御投稿下さるよう御願ひ致します。尚、従前の

「課題原稿募集」並に懸賞告白体験手記募集に依じられた投稿作品及び読者通信等については、目下内容検討中でありますが、支障なき限り漸次本誌上に掲載したく思います。但し、連載中のもの、二十萬円懸賞入選作品の中には、掲載不適のものがあつて、若干変更になりますので、その点御諒承願ひします。

(編集部)

史ではなく、その男に対する意味を問題にしているのだと繰返し主張した経過を御存じならば、既に充分分つて戴けていた筈である。二俣氏は、たまたま一月号の手帖だけを読まれた(三月号二八八頁)ために、その点を誤解されたものであろうが、他人の文を評するに当って、もう少しその真意を理解して欲しかったと思う。

三 真意を理解して欲しいということとは、もう少し細かい点についてもいえる。五月号一〇七頁上段で、二俣氏は「沼氏の理論」に対して、二つの疑問を掲げておられる。忌憚なく申して、愚問である。私の紹介した説の理論——決して私の理論でないことは右の通りだが——を理解する限り、そんな疑問は出ない筈だ。

第一問。劣等人種の見つからなかった間、

高等人種は犁を引かなかったのか?——その通りである。二俣氏は犁という生産手段が、一定の発達段階において出現したものであることを忘れて、高等人種は初めから犁を持っていたような口吻で問われるが、ヒトラーは劣等人種捕虜の使用という生産力の増大が、犁の使用を産み出したと見ているのである。だから、劣等人種に逢うまでは、犁を引かなかったのである。歴史的に真かどうかは別として。

第二問。白人におけるマゾヒズムをいかに説明するのか?——それを混血によって説明するのが、正に第八十二項の説の主題なのだから、どうしてこんな問が出るのか驚く外はない。くり返して言うが、この臆説が科学的に正しいかどうかは知らぬ。しかし、この項を読んで理解した以上、こんな愚劣な問は出

て来ない筈だ。他人の文を理解して欲しいという所以である。

四 二俣氏は「最初に犁を引いたのは女性である」とされる。私は本誌上で、人類学や先史学の問題について論ずるのは誌面の浪費と信ずるので、この説の当否を論^{あやう}ろうことは控えるが、氏の「沼氏は性の問題からマゾヒズムを述べるべきだった」という指摘にも関係するので、簡単に存じ寄りを述べておく。氏の男性女性観はワイニングルの奇妙な模倣である。ワイニングルは個体として見た男や女が、理念としての男性と女性との混合組成であるとし、個体としての人間分析の巧妙な手段を創造した。ところが、二俣氏の男性女性性は、その属性においては、父権制下のそれと同じだが、個体の集合に対して命名されるから、おかしなことになる。犁を引いたのは女性だという時、その女性の中には、個体としての男も女も含まれるというのだ。本来の女は弱いものであり、女々しい男も弱いものであり、こういう弱者はすべて女性に分類されるというのだ。勿論、定義をするのは勝手だが、これでは、女性^{めいせい}が弱者集団だというより弱者の集団を想定して、それに女性の名をつけたに過ぎない。個体としての男も女も属する以上、その女性^{めいせい}は定義としては無内容である。ワイニングル流の定義の形而上学的欠点だけが拡大され、その個体分析の効用は喪

失している。犁を引いたのは女性だと二俣氏という時、それは要するに、犁を引かされるような弱い奴が犁を引いた、というタウトロ^{タウトロ}シ^シに過ぎない。

女性という語を捨てれば、氏の云うところは、他種族の者の奴隷化より前に、同種族の者の奴隷化があったということに帰する。しかし、人類の進歩は権利能力を他人に認める分野の拡がりに比例するといわれる位であつて、奴隷が先ず他種族の者から始まったことは、既に定説である。もし又、氏の説が、奴隷化というのでなく、単に分業の存在を主張するだけなら、何の創見もないが、その場合には、犁という新しい生産手段が、人類のどの段階で登場したかを、先ず確定しなければならぬ。尤もゲルマン人の歴史には奴隷制が存在しなかった（奴隷制社会を世界史の必然的段階とするエンゲルス流の見解に対して、これは説明し難い例外である）のだからゲルマン人について立言しているヒトラーの見解に多くの問題があることは勿論であるが二俣氏は別々にその点から問題を提起しておられない。

五 二俣氏は弱者の集団に、女性と命名される。しかし、これは既に、父権制の下において成立した男性女性の属性に囚えられた考え方である。吾妻氏がいわれるように、「女らしさ」は決して女の本性ではなく、父権社会における第二の性として作られて来た属性に過ぎない。家庭内労働をする弱者の集団を女性と命名する必然性はどこにもないのだ。

だから又、その弱者の属性にマゾヒズムを数えて、女性的資質は本質的にマゾヒズムの傾向があるとする二俣氏の議論も必然性が無い。第一、マゾヒズムの定義なしにこれは推論の態をなしているとはいえない。沼氏は性の問題からマゾヒズムを述べるべきであつたとの氏の言を、私は不幸にして理解することができないのである。

六 進んで一〇八頁中段の氏の非難となると私はこれを非難と考へない。私が「想像する」と述べたことを、氏が「想像である」といわれても当然のことであり、氏の云われるとおり、手帖の内容は「マゾヒスト的観念の所産」なのである。氏がこれを非難めいた口調で書いていること自体、氏の手帖に対する無理解を示すものだと思われる。

細かく書けばまだあるが、貴重な誌面をこれだけ載せたこと自体恐縮なので、この位で止めておこう。

【編集部より】 六月号、七月号の分として二俣志津子さんから「Mへの手紙」の続篇を頂いておりましたが、時期を失してしまいましたので一応掲載を見合すことにしました。

懸賞入選作品 佳作第二席

「女工哀史以前」

南 洋 一 郎

北 原 純 子・画

女工哀史以前

(一)

私が埼玉県の遠縁に当る親戚の家を尋ねたのは、そろ／＼暑さを感じ始められる初夏の頃であった。親戚の家は戦後の農地改革で打撃を受けた地主階級であったが、当主が専門学校出のやりてで、手際よく製麺業の方に方向転換をし、彼の家が戦前以上の繁栄を見せ若い男衆を十人近くも使い廻しているのを見て、いさゝか私は驚いた。

用件も簡単に済み、何かゆったりとした気分になった私は、自家製と云ううどんを御馳走になり乍ら、いろ／＼その主人と話しあった。話はたまたま当時の新聞を連日賑わしていた近江絹糸争議の方向に発展していった

が、その若い当主は夏川社長の封建的かたくなさを笑い、私はまた私でこの争議の背後にある社会的背景、国際的つながり等を、あれこれ興にのって話しあったものである。

処が突然その当主は、今の人権争議などは昔に較べたら全く問題にならぬと云い出した。まだ若い貴方がそんなこと知ってる筈がないじやないかと私が云うと、現にこの村にひどい虐待をうけた生証人がいるという。聞けば、彼の家に雇われている作男のお婆さんがその当人と云うことだ。私は興味をそゝられて、その日は彼の家に泊り、翌日、孫にあたるその作男の青年とお婆さんの家を尋ねることとした。

お婆さんの家は案外近く、県道に沿った二

軒屋のうちの二軒だった。明るい初夏の陽光のあたる庭先の縁側の処で、お婆さんはすぐに見付かった。平凡な農家の一老婦に過ぎないが、話はなかく、しっかりしている。然し始めは仲々話の本筋がつかめず、やゝ苦勞したが、彼女が段々記憶をよみがえらしてゆくにつれ、私は徐々に真剣となった。空気の澄んだ農家の庭先で、鶏のくつ、くつ、くつと云うついでに音を聞き乍らいわばかくされた暗い明治時代の断層を老婆の口から聞くのは何か異様な現実感をひし／＼と感じさせた。

話が終ったのは、日の暮が長い夕方近くであったが、私は云い知れぬ興奮につつまれて帰京した。そして婆さんの話したことを裏づける資料はないものかと色々漁ったので

あるが、最近やっと次の二つの資料が発見出来た。

一つは明治三十五年八月五日附の日附をもて、埼玉県知事、木下周一氏が時の農商務大臣平田東助男爵に宛てたる『機織工女虐待事件報告書』であり、その二は右報告書に現れたる機業者金子初五郎以下三名に対して、明治三十六年三月十四日附の『東京控訴院判決文理由書』である。

この二つの古文書によって私は婆さんが語ったことの真実性を実証し得たし、記憶力の薄らいだ婆さんの話を種々の点で補足することが可能となった。

こゝで述べられる事実は、恐しく陰惨であり、日本の資本主義発展が、かゝる暗黒面を伴ったのかと云う点で思わず反省せざるを得ないような感じを与える。然し時代は既に五十年の歳月を経て来ており、逆説的に云えばこの様な非人道さが許されなくなっただけ社会も進歩したのだとも云う事も出来るよう。

近江絹糸争議以前、大正、昭和の不況期における女工哀史以前に、かゝる事実が広汎に日本に実在していたと云うことは、上述資料の『報告書』にも指摘されているが、本稿ではその一端に触れることが出来れば幸いである。

此処では事件のあらましを忠実に描写するには余りに膨大化する嫌いがあるので、特に折檻を生身にうけた当の被害者である婆さん

から聞き出した体験談を、婆さんの口を借りて御報告することとしたい。この報告作成にあたっては、上述諸資料を参考にしつつ、若



千の点は筆者が補筆したことは改めて言う迄もない。

(二)

その頃の私はまだ十五、六才位だったと記憶しています。小作農をやっていた私達の家は父親が早く亡くなったために家計が苦しく幼い弟妹達すら食事を欠かすことが間々御座いました。余り家計が苦しいので、近所の幼な友達だったおせきさんと私は相談して、人伝に大宮方面の口入屋に年季奉公の口を頼んでおきました。やがて口入屋から連絡があり北埼玉郡の金子と云う機械工場に口があると

のことで、私はおせきさんと一緒に着替えるものをもって口入屋に連れられて邸にうかがいました。

邸は思ったより大きく、周囲は浅いお堀の様なものをしつらえ、大きな樹木にかこまれて黒い大門が印象的でした。邸の中には二棟の工場があり、工場の周囲には丈夫な木の塀が眼よりも高く立っていてその間には更に表門と裏木戸が設けてありました。始め工場に入りました時には、何故この様な嚴重な柵があり、表門も裏木戸も鎖し放しになっていたのが不思議に思ったのですが、入って間もなくその理由は判りました。工場では一切工女の外出は許されず、又外部より工場の模様を窺うことが出来ぬようにさ

れていたのです。

金子工場の先代は私が勤めます五年程前に亡くなったそうで、一切の指揮は阿母さんと呼ばれる先代のつれあい(まん)と、その一人息子の若旦那(初五郎)がとっておりまして。若旦那は三十位になっていたでしょうか。身体はさして大きくないが、ヤクザ気質の人で、奥さんはなんでも、一、二年前に追い出され、あの地獄の様な工場の中で、乱暴者の機頭、元治郎、誠治、宇吉、周三郎等の男衆に取りかこまれ、工女の生活は勿論、一挙手一投足まで干渉出来る権力をもった絶対権者でした。

この若旦那の母親が、阿母さんと呼ばれていた人でやせぎすの眼の鋭い、今想い出してみても感じの良い婆さんです。何でも亡くなった先代が、若い頃に打ちこんで家内に据えたと云う女郎あがりの人で、その折檻の仕方は女郎時代に仕込まれたものだと言つて同僚もありました。私があの工場に入った頃は日清戦争後五、六年経ってからだと記憶しますが、始めのうちは、朝四時頃から晩の十時頃までの機械の仕事は辛かったですが、それほど、ひどい責め折檻は受なかった様に記憶しています。然し明治も三十四、五年に入ると、景気が段々悪くなってくるに従い、若旦那は酒を飲み始め、それにつれてひどい折檻が始まりました。

それは先ず受取の出来ぬ者(定められた定尺を織れなかった者)の名前を帳面に記しておいて、夜分仕事の済むのを待つのです。仕事が終わるのは大概夜の九時から十時頃——それが済むといよいよ折檻が始まります。阿母さんや若旦那はとうに御飯を済まして、工女の来るのを待ち、工女が台所に這入ってくるのを見ると、直ぐに受取の出来なかった者だけを呼び出し、其処に坐れと云って台所の板の間に坐らせ、是れからお前達の折檻をするのだから待つて居れと言ひ渡します。さて若旦那は座敷の真中にある黒の長火鉢の前に胡座をかき、阿母さんや機頭の黒須元治郎や竹沢宇吉などと云う人は其の傍に坐り、その前で受取の出来なかった工女に裸になれと申付けるのです。御存知の通り女と申す者は、人様の前ではちよいと肌を脱ぐのさえ恥しいもので御座いますのに、大勢の朋輩の居る眼の前で裸になれと云うのです。たとえどんな人の命令だつて誰が、「はい」と云つて裸になる者がありましたら。

皆身を縮めて黙っていると、お前達が裸にならなければ俺が裸にしてみせると、若旦那は機頭に彼奴等の着物を剥げと言付けます。主人の命令ですから仕方なしに着物を脱がせにかゝりますと、誰だつて一生懸命です。何うぞ勘弁して下さいと板の間に獅噛みついて泣きながら頼みます。けれども鬼のような主

人ですから、何うして仲々聞き入れる処では
ありません。機頭の人達が脱がせる手がゆる
むと、エ、面倒だと云って今度は阿母さんと
若旦那の二人で、泣き入る工女を撲ったり蹴
ったり髪をつかんだりしながら無理やり着物
を取ってしまい、それから何うでしょう。お
腰一枚の儘で板の間に突っ立させて若旦那は
火鉢の傍にそりかえり、折檻をうけない工女
に向って、お前等も明日から仕事を怠けると
矢張りこの通りにするから用心しろと申渡し
自分は蓑を吹かしながら、にやりにやりと笑
って工女のそんな立姿を見ているのです。そ
れはもう五十年前以前のことで、今でもラ
ンプの明滅する灯りに照されて、肩をすぼめ
電信柱の様に立たされていた若い娘達の姿が
ありありと眼に浮びます。

こう云うふうにならなくて立させておくのは大概
二時間位ですが、そうこうするうちに一時に
も二時にもなりますので、主人も眠くなるの
でしょう。今度はその工女を板の間に坐らせ
まして、今夜中そこに坐っている、一寸でも
動きやがると承知しないぞと申し渡します。
自分達は奥の座敷へ行って寝てしまい、他の
工女達は台所の次の座敷へ蚊帳を吊って寝て
しまうのです。私も七、八回はこの折檻を受
けましたが、苦しいことは夜食も喰わず、裸
で板の間に坐っているのですから腹はへる、
足は痛くなる、其の上夏のことと蚊には責め

られる。蚊を追おうと思つて身動きすれば、
不思議と若旦那か機頭が起きて来ては頬を撲
ったり、腹を蹴ったりするのです。

処が慣れと云うものは恐いもので、裸に
され始めの頃は、誰も彼も恥しがつておりま
したが、幾度も幾度もやられるにつれて、遂
には諦めもつき、初めほどには恐く思わな
いようになり、中には捨鉢になつて、くすく
す笑い出す者がありましたので、今度は無暗
と擲るようになりました、その方法は矢張り
上半身を裸にしまして三人なり五人なりを台
所の板の間にずっと並べ、一番目の人の左の
足と、其の次の人の右足とを縛り、二番目の
人の左の足と三番目の人の右足とを縛って動
けないようにして置いて、それから太い棒を
持つて来て臀部の辺りを打据えるのです。初
めの中は機頭に命令して殴らせて居りました
が、間もなく若旦那が自分で打擲するようにな
りました。又その撲り方と申したら、それ
はそれは御話になりません。まず初めに二つ
位腰の辺りを打ちまして、それから少し休み
又思い出したように撲つのです。いっそのこ
と、打ちに打って呉れるのだと思ひですか
ら我慢もしよいでしょうに、休み休み男の力
一杯に打つのですから堪りません。両脚は左
右の同輩に縛られているから、前へも後へも
転ぶ事も出来ず、意地になつて歯を喰いしば
つて、じっとこらえていようと思つても、そ

れは仲々出来ませんので、つい泣くものもあ
れば、叫ぶ者もある。中には一思いに殺して
くれと云つた者も御座いました。

私も何回も縛つて撲たれましたが、最初の
一つの痛さと云つたら身も皮も破れんばかり
で、打たれたところは青黒く痣の様になり、
工場から帰つて来ても仲々消えなかつたよう
に覚えて居ります。

そのうちに今度は責めの新手をあみ出し、
荒縄吊りの折檻と云うのを始めました。それ
は二人の女を、台所の鴨居の下へ連れてゆき
鴨居の内外には太い釘を打ち込んで、其の内
側の釘へ荒縄の端を縛りつけ、それから女を
背合わせにして釘から垂れ下っている荒縄を
二人の女の後手に縛つた縄に通し、其の端を
外側の鴨居の釘へ縛りつけるのです。それで
其の縄が緩るくたるんでいれば少しは楽なの
ですが、無暗と引き結めて足の爪先ばかりで
立って居るよう仕向けるのです。普通この折
檻は一、二時間で済まして貰えましたが、時
によると一晩中やられる事があり、おかのさ
んやおせきさんはよくこの折檻を受けて居り
ました。折檻の度毎に若旦那は他の工女達に
も見ていろと命令し、定尺が織れなかつたり
工場での折檻をよそで饒舌たらもつとひど
い仕置をするぞと口ぐせのように云つており
ました。

色々考えて見ますと、若旦那は昼の間、始

終折檻の方法を工夫し、半分は面白くでもあるように種々の折檻を發明しました。今迄のやり方に飽きてくると、今度は矢張り台所へ両脚を無理やりに拡げて立たせ膝と膝との間へ糸極や石油罐を挟ませ、一晚中立たせておきました。私はこの折檻は受けたことはありませんでしたが、折檻された朋輩の話では腰から下の感覚が段々なくなつて来て、我知らず挟んだものを落すことがあったようです。するとその音を聞き付けて若旦那や阿母さんが寢所から起きてきて叱り飛ばし、又元通り膝の間へ挟ませたそうです。私自身はやゝこれに似た折檻を受けたことがあります。理由は覚えておりませんが、やはり裸にされ、ほら、御飯を焚く薪がありませんね。薪を脛と脛との間へ横に挟んで通でしっかり縛り、そのまゝ大勢の人の前をあよま（歩むの意なり）されました。痛くつてあよまれないのに、無暗に引張つて工女の前を歩かせられましたが、腰を屈する度に箒や棒で臀部を叩かれたことを覚えて居ります。

實際、早朝からの仕事に疲れに疲れた末、又斯様な畜生みたいな真似をさせられて、大

勢の前で恥をさらさなければならぬと云う、この機場

の工女ほど因果なものはありますまい。今迄お話しましたことは、あの頃、あの工

々記憶によみがいつて参りましたので、少しくその話をしたいと思います。

場では日常茶飯事で、別にとりたてて言うほどの事ではありませんが、お話してきますうちに色々当時の同輩のことなどが段



一番最初に私は近所にいた岡田せきさんと一緒にあの工場に入ったとお話しましたが、せきさんは私より一つ年下で、あの折檻をうけた頃は丁度十五六才の時だったでしょう。

おせきさんはまだ子供っぽい瘦形の娘でした。それでも一緒に風呂に入ると、女らしい特徴が出かゝっており、私は近所にいたせいもあって一番親しくして居りました。そのおせきさんは快活な娘でしたが、余りの虐待に耐えかねたのでしよう。私に相談もしないで逃げ出しました。処が二日位経って又口入屋の処でつかまってしまい、連戻されて参りました。丁度寒い頃でした。(――調査によれば明治三十三年十二月の頃――筆者) おせきさんは物置にぶちこまれており、若旦那、阿母さん、周三郎などがその折檻を色々相談していましたが、その次の日の夕刻おせきさんは、火鉢の前に坐った若旦那や阿母さんの前に引きずり出されました。そして、お前は年のゆかぬのに生意気な事をする。以後の懲しめのために折檻してやると申し渡され、そのまゝ髪をもって立たされて細引で両手を後手に縛られたまゝの姿で、背戸の方に連れ出されました。そして阿母さんは後方に立ち、若旦那や周三郎がおせきさんのまだ子供らしい臀部を薪やなんかで散々打擲致しました。私はおせきさんの「許して許して」とヒイヒイ泣き叫ぶ声を聞くと、心まで消えてし

まいそうになり、膝ががくがく震えて来てとまらなかつたことを憶えております。そしてそのお仕置が一時間位経って済むと、ぐったりしたおせきさんの縄も解かず、無理やりに立たせて、皆の前を歩かせるのです。おせきさんはともすれば、しやがんでしまいそうになるのですが、すると後で麻の細引をもった周三郎が「このアマ、歩け」と追い立てるのです。

そうそう、そう云えば、あの頃二十才位だった藤沢おかのさんも、逃げて、つかまってひどい目にありました。最初に逃げたのは九月の頃だったでしょう。おかのさんは遠くから連れて来られたので路を知らなかつたんです。

出たところをまご／＼していたら、直ぐに感付かれて機頭に追いかけられ、途中で捕ってしまいました。すると若旦那は夜食を済ました後で例のようにおかのさんを台所の板の間に立たせ、薪を持って来て撲って撲って撲りぬきました。初めは撲たれる度に、ヒィヒィ声をあげて泣いておりましたが、終には声も立たず、身体も動かず、死んだ者のように倒れてしまったものです。

この様な折檻にも懲りず、おせきさんはまた十一月頃逃亡をくわだてました。それはその前日、機が定尺通り織れず、同輩の四、五人と一緒に飯食う茶碗へ熱いお湯を注いで、

それを両手に持たされて立たされたのです。溢れたといっちゃ打つ、溢れねば熱うて持つちあおられないし、離せば手がこぼる(火膨れの意なり)と云って、其の晩は床の中で激しく泣いておりました。次の日おせきさんが居なくなつたのが判り、若旦那は機頭などを指揮して探させましたが、おせきさんは工場の外には出ずに、一番工場の隅っこで震えてしやがんでいたのです。それを阿母さんが見付けて、手を引っ張られて連れられて来しました。今度もおせきさんは、口に紙を一ぱい入れて息をさせないで、其の上を手拭で縛りようやく鼻から息が出る位にしました。泣いても聞こえないようにする為です。そして機頭を始め男連中が皆で押えつけて居て、無理に身体中ヤイト(灸を据える意なり)をししました。そして次の日からは着物も与えられず寒の内を半天と単衣一枚で足袋も穿かさないで機を織らされたものです。

寒いと云えば、こう云う事もありました。雪がチラチラ降ってごく寒い日で御座いました。定尺を織れなかつた六人の工女達が呼び出され、こわごわ若旦那の処にゆくと、突然襟首を取って引摺り出し、物もいわずに背戸の雪の中に突き出しました。そして自分は座敷の火鉢のそばに胡座をかい、茶を飲み乍らその光景を眺めているのです。その時は六人の連中は雪の中に突き伏し夢中で詫び、そ

の結果一時間足らずで許されましたが、今でもその鳥肌だった六人の姿体が雪に頭をすりつけ、腰をあげ詫びを入れている状態が目に見えます。

又この雪の中の折檻で、頭の毛をもったまま凍った雪の上を引摺り廻された娘が居りましたが、その娘の足の皮やら身体やらが剥げかかり随分その後難渋したことも覚えて居ります。

又このような事も御座いました。やはり暮の寒の入りの日でしたらう。若旦那は三人の朋輩を呼び出しまして、是れから折檻をするから此方に来いと云い、他の者には来て見ると申しますから、何をするのかしらと怖々行つて見ますと、背戸へ出る壁側の小便溜りの処へ行つて三人の者に腰から下を捲くり上げさせ、壁の処に肥柄杓を懸ける処がありますからそれへ手を懸けさせ吊り下げるように腰から下を小便溜の内に突込ました。何しろ薄氷がはると云う寒い日ですから、三人はガクガク顫えて居りましたが、何んでも三時間程経ちましてから、若旦那はもうよいと申して上げさせました。若旦那はこっちに



来いと申して、三人を井戸の傍に連れていき、珍しく自分で水を汲んで三人の腰から下を洗ってやったことも覚えています。

この様な折檻を私達は不浄責めと申しておりましたが、突っ込まれる場所には小便溜りだけではありません。大便ばかり這入っている大溜めの中へ、受取れないと云って、始めは片足半分を突っ込ませ、それで其翌日、又受取れ

なかったら両足、其の翌日受取れなかったら胴体まで突っこむという具合で、本当に汚い責め方もあったものです。

夫れから愚にもつかぬお話と云うのは獅子舞という折檻です。昼の受取の出来ぬ者に若旦那は今夜仕事を終ったら獅子舞を舞わせるぞと毎日脅かして居りました。この獅子舞というのは、工女の頭に汚れた下帯を被らせ、それで家中を四つん這いに匍わせるのです。これはそろそろ春の候でしたでしょう。工女のなかに菅巻おきよさんという十七才になる大層色の白い美しい人がおりました。誰もが工女にしておくのには惜しい人だといっておりましたが、若旦那は事更おきよさんをつかまえては毎日のように折檻をしていました。先ほど申し上げました獅子舞を皆の見ている前でおきよさんがさせられた時は、本当に気の毒で気の毒で見ては居られませんでした。真赤な下帯を頭からかぶせられ、白い足袋以外はなんにもつけない姿で、ワンと言え、匍いながら獅子を舞えと若旦那に責められ乍ら機場を一周した時には同輩たちは思わず眼を伏せておりましたが、機頭の男連中などは何んのかんのと、此処では申し上げられない様な悪口罵言を浴せかけていました。

又、赤垣はるえさんは、眼の大きな気立の優しい人で、美しさもおきよさんに劣らぬ程の人でした。確か年は十八才とか云っておりましたが、家が貧乏でなかったら、そして綺麗な着物を着せたら、それこそ華族の令嬢と間違われると思われる様な人でした。もう五十年の前のことですが、そのすき通った頬や白い襟首などは、女の私にも印象に残っております。若旦那は折檻気狂で、それもあるべく綺麗な女の子ほどいじめ、先ほどお話ししたおきよさんなども獅子舞を皆の前でやらされたのですが、不思議とはるえさんにはそれほどひどくは当りませんでした。なんでもはるえさんは武家筋の出で、事情がなければ工女などになる身分の人でなく、且つその頃は平民に対して士族出だということは、一目置くに足る習慣が残っていたのです。

それが何んでも一月の半ば頃でしたでしょう。これから折檻をするから此方へ来いと申して、若旦那は、はるえさんを門の右手にある土蔵の中に連れこんだのです。何時も折檻は皆の前でやることが多いし、数人で手助けするのが普通なので、何をするのだろうと思っております。少し経つと土蔵の中で、この世のものは思われぬ悲しい叫び声が、断片的に二時間程続いております。やがてのことにはるえさんは眼を泣き腫らし、真蒼になってふらふらと土蔵から出て参り、地面になき伏してしまいました。黒い髪がくずれて泣きじやける度に白い肩の上を波打ち、腕や背中についた縄のあとは、はるえさんの身体が白いだけに赤くはれ上って、妙に印象的でした。

私共は本当に気の毒に思い、水を飲ましたり、何んかかんかと世話を焼きましたが、はるえさんは唯、死にたい、死にたいと云うばかりで、その折檻の様子も物語らずに、その年の三月に本当に死んでしまいました。

(三)

以上は私が今年の夏、埼玉県の一農家に居住する、明治三十年代の「機織工女虐待事件」の生存者である七十近いお婆さん（姓名は秘す）から聞き出した事実、殆ど脚色を加えずに取纏めたものである。

以上の事実は、公式の判決文による理由書を見ると次のようになっている。

『被告初五郎は、工女を使役する極めて苛酷にして、日々その織るべき過度の定尺を課し、被告マンと共に、雇人たる元次郎、周三郎等を指揮して工場を監視せしめ、定尺を織る能わざる工女に対しては、夜間深更に至るも強いて就業せしめ、且つ或は其の食を減じ或は全くその食を屏去し、或はその衣服を屏去し、或は寒中裸体となして殴打し若しくは冷水を注ぎ、或は制縛して殴打し若しくは衣服を屏去する等、頗る苛酷を極めたるものにして、明治三十三年以後自宅に於て左の行為をなしたり。』

第一 工女藤沢カノ(二十一才)が定尺を織り得ざるため (一)明治三十三年中……被告初五郎は自らカノを縛し、被告マン、周三郎と共に之を毆打し (二)明治三十四年一月頃、被告初五郎は、被告元次郎に命じ、カノを裸体となして縛し、雪中邸内を引廻さしめ (三)明治三十三年十二月より三十四年八月に至る間に於て、被告初五郎、周三郎相謀り、カノを裸体にし、股より肩に掛けて之を縛し、居宅鴨居に釣上げおき毆打し、

第二、工女岡田セキ(十七才)が (一)虐待に堪えずして逃亡したるも、その居所を覚知せられ、明治三十三年十二月頃、セキを裸体となし、その股間に小棒を挟みたるまま、繩を

以て両脚を縛し、初五郎、周三郎は共にセキの臀部を毆打し (二)明治三十四年中……セキを裸体となし、股より肩に掛けて之を縛し、居宅鴨居に釣上げて数十分間放置し (三)同年中、初五郎は周三郎に命じセキを裸体となしその片足を他の工女の片足に縛せしめ、セキに命じて板の間に起立せしめ、同人が苦痛に耐えずして腰を屈する毎に、共に箠を以て臀部を毆打し

第三、工女横田タカ(十八才)が定尺を織り得ざるため、明治三十四年四月より翌年六月迄の間に於て、被告ら相謀ってタカを裸体となし、共に毆打し

第四、工女田畑ツヤ(十六才)が (一)虐待に

堪え得ずして逃亡したるも、その居所を覚知せられ、明治三十四年十二月頃、初五郎、マン、宇吉相謀り、ツヤを裸体となして縛し、共に之を毆打し、なおツヤが定尺を織り得ざるため (二)明治三十五年中……ツヤを裸体となして縛し、之を仰向けに倒しておき、××を以て××に××××、之を××し (三)明治三十五年一月より一月の間に於て土蔵中でツヤを縛し、之を毆打せしめ云々

判決文の要旨はきわめて簡単であるが、私が長々と婆さんの口を借りて述べて来たことよりは要領を得ているかも知れない。(終)

× × × × ×

乗馬ズボンの女腹切

藤 山 秀 緒

飛行服、長靴と、軍装に身を固め、亡き夫の跡を追って腹を切る若妻の健気な最期は、前稿で申上げましたが、今宵もまた、妖しく昂ぶる胸を抑えて、扮装にかゝりました。

時は二・二六事件当時。彼女の夫は叛乱軍の将校として自決して果てました。彼女は、悲歎にくれましたが、遂に彼女も夫の跡を慕って切腹しようと思ひました。

彼女は警察に署長を訪ね、ひそかに自刃の覚悟を伝え、国を思う女性の腹切るさまを写真に撮して、国民の奮起を促す一助とせられたい旨を述べます、署長も是非なく、個人として自刃に立会い、且つ撮影技師一名を極秘裡に同行することに決心します。

署長が到着したのはその翌日の夜ふけでありました。彼女は、レインコートを着て、玄関に出迎えます。ひと気のない家の中。

奥の一間にはゴム布をしきつめ、すでに用意がととのっています。彼女は署長に礼を述べると、静かにレインコートのベルトをゆるめ、ボタンをはずして行きます。あゝ、レイ



ソコートの下には、夫の軍服、乗馬靴、乗馬ズボンに身を固めた覚悟の死装束がありました。写真撮影の電光がこうくと輝き、彼女の此の異様な自刃のさまを刻々に捉えようと写真機が構えられています。

はちきれんような腰の線が乗馬ズボンの中で疼くばかりです。上衣を寛げ、ズボンのバンドをゆるめて腹切り刀を取り上げます。きくと唇をかんで、署長に一礼するや、白刃は彼女の脇腹深く突込まれて行きます。

「うゝっ」(低い呻き)

突立てた彼女は、右ヒザを突き、左を立て

た姿勢のまゝ、前のめりに歯をくいしばって引廻そうとしています。苦痛の表情をカメラは一枚、一枚と捉えて行く。

その時です。慌しく人の気配。彼女のたゞならぬ様子に自刃の覚悟を知って物陰から走り出たのは、彼女の姑でした。彼女は、顔をあげて、あわれにも健気にニッコリと笑います。そうして、

「お母さま、私は夫の跡を慕って死んで行きます。必ずお歎きにならないで。いつまでもお元気で、女乍ら、武人の妻、燃えるだけ燃えて、いさぎよく散ります。いさぎよく腹切って。あゝ、もう、いけません。お母さま、見て！ 立派に、切ってみせます。り、立派にうゝッ」

刃に両手をかけて一気に右脇へ引廻し、肩で息遣いをしながら刃をぐっと引抜きます。

「うゝむッ」

顔は苦痛にゆがみ、乗馬ズボンの両肢は、膝頭をつき、腰を浮かせた妖しい美しさ。今度は鳩尾に刃を押当てそのまゝ前のめりに、二、三度大きく喘いだかと思うと、

「ウーッ！」「うううーウ、む、むうッ」

ゴム布の上にのたうち乍ら、刃は縦に腹を裂いて行きます。乗馬靴が、もがくたびに、どさりと、どさりと悲しい響きを伝えます。腹十文字にかき切り、彼女は苦悶の絶頂に、休えかねた呻きを、なおもくいしばり乍ら、

「あッ、あゝムッ、う、うゝむ、むうッ、む、むうッ、あ、あゝムッ、うーッ、うゝムッ、う、うゝムッ、ウームッ」

突込んだ刃をきりぐとえぐります。

「ウーッ！ウーッ」

二三度どさりと、どさりとこのたうち廻ると虚空をつかんで壮烈な断末魔のけいれんです。乗馬ズボンの両肢は、左右に開き、バンドはゆるみ、最期の苦しみに、行儀を正そうとする彼女の努力も、むなしいあられもない姿です。そうして、その美しい顔には、もはや血の気も引き失せ、カメラマンのシャッターだけが、何枚も何枚もその表情を追って仿きつとけるのでした。

我に返った私は、鏡の中に、紺サージのレインコート、フーデもまぶかに、ベルトを引締め、ギヤバのズボン——夜毎の私独りだけの切腹遊戯に欠かすことの出来ない私のマスコット、ゴワトくと突張った肌ざわり、その名も「火のズボン」と呼ぶ。——をはいて、オートバイ乗りの半長靴、完全武装の自分を見出します。「火のズボン」は、私の肌のぬくみで生暖く、私の顔は引きつって、いつまでもくく身悶えするのでございます。乗馬ズボンに身を固めた人の妖しい美しさは私の永遠の憧れと申せましょう。

女性 の 禪 愛 用

田 中 愛 子

私は三十二才の未亡人ですが、生活の為或る料亭に毎日午後五時頃より勤めに行つて、十二時過ぎに帰宅いたします。平常いつも和服を着ている関係上ズロースなんて穿いたこととはありません。私の通る道は、町並がと絶えているので十二時過ぎともなると、一人の人も通ることなく本当に淋しい道です。

或る晩のこと、いつものように最後の酔客を送り出したあと、私が淋しい通りを一人で帰つて来ると、駅前明るいのあたりから私の

私の越中禪

後はこのように
カラミつけます



は横紐に縫付
てあります

あとをつけてきたらしい若い男が、急に足早やに私に近づいて、「姐さん、一緒に仲よく帰りましょうや」と肩に手をかけたので、私は恐しさのあまり「大きな声を出しますよ」と叫んだので、その男は慌てゝ逃げ去つてしまいました。私が、私は今にも、再びその男が来るような気がして急いで帰宅をしました。そして夜の一人歩きを恐しさを、つくづく感じました。然し、私は商売柄、仕方ありませんのでやはりズロースを穿くのがいゝとは思

いましたが、今まで一度もズロースを穿いたことのない私は、持っていないでしたので明日にでも買って来ようと思つて、其の晩は休んだのです。

翌日になつて、ズロースを買おうと思ひましたけれども、わざわざ買いに行くのが億劫で、ごろりと横になつていますと、毎月愛読している奇ク三月号が近所の書店から配達されたのです。私はまず口絵、写真と次々に見えていますと、娘相撲の口絵が一番私の目を引きつけたのです。

それはズロースを持つていない私も、このようにキツチリした禪を締めたら、どんな男の人だつて乱暴することが出来ないだろうと思つたからです。それから頁をめくっているうちに、三十一頁のソドミア通信のところに出ている、禪の締め方を讀んだのです。

私の亡夫も六尺禪の愛用者でしたので、私も亡夫の禪を締めてみようかと思ひついたので、それで亡夫の禪（洗濯をしてあつた）物を出して、私も男のように禪を締めてみました。平常でも身体をしつかり締められることが好きな私は、帯やお腰の紐さえも、きつく締めないと氣持の良くない程ですから、この禪も出来るだけキツチリと締めたのです。女である私がこうして禪をしていることを奇クの方々に申し上げるのも恥しい次第ですがでも奇ク愛読者の方々には、私のこう

いった変ったことをしてみたいという気持ちもわかって頂けるだろうと私の実験したことをこの頁に書いて頂いたのです。

それから私は女の夜の一人歩きには、暴漢防止には大変よいと思って一週間位襦袢を当て続けたのですが用便は、男の方のように簡単に出来ませんので色々と考えた末、今では越中襦袢式に作り太い紐に縫い付けて、その縫付

切 腹 通 信

東京 瀧島比呂史

四月号に次いで五月号にも、切腹面を口絵に組んで下さって、ありがとうございます。女性切腹ファンとして感謝を致しております。

「真刀を用いた切腹模写写真」にも満足しております。上下二葉共、視覚にうつたえる効果は、とても美しいと思います。たゞし上の写真の切腹モデルの表情を、もっと入れてもよかったのではありませんか？ とにかく、今迄誌上にのつた切腹写真よりは、センスがフレッシュだと感じました。切腹断想の挿絵にも拍手を送ります。五八頁の妊婦の切腹の方が、六十一頁の十文字切腹のよりも、肉感的だという理由で、私は好きですが、しかし十文字切腹の絵も、御誌には余り今迄ありませんでしたので、貴重にスクラップしております。SUKとサインがありました、今後も期待しております。「春の影」と題する、新人北原純子様の画も拝見しましたが、良いですねえ／＼（しばられた女の表情がとてもキ

けた方を前にして紐を腰に、キツチリ結び付け、前の長い襦袢の端を股間を通して後に廻し、腰紐に通して締上げてから二三度紐にからみ付けているのです。丁度ストリッパーの女のようにですが、でも襦袢の巾が広いので股下に喰込むようなこともなく大変気持ちよく、用便も後の方をゆるめるだけで出来ますので、六尺襦袢のように不便もなく大変よいと思って私

レイだった）この人にも女性切腹面を、お願い出来ないものだろうか、なんて考えたりしました。

最後に、瀬川泰子様。貴女が、私の呼びかけに対して、やさしく答えて下さったことを知って、とても嬉しく思いました。ことに貴女が新しい作品を、御書き下さったことを知って私のよろこびは、爆発的に高まりました。貴女の作品に一日も早く接したい思いで一杯です。私はまるで、私のために貴女が作品を書いて下さった様な、馬鹿げたサクサクをするほど、夢中になつております。私が貴女の「稀書婚姻の儀」と云う作品を読んで、一番強く共感をおぼえたのは、「……凌辱を前提とする構想は、余りにも汚辱的で、私にはどうしても好ましく思いません」という一節でした。私はこの一節を読んだ時、ここにも私と同じ神経の持主がいてくれたと云う気がして思わず赤鉛筆で、アンダー・ラインを引いてしまったほどです。女性切腹の幻想を追う時、私はいつも、そこに愛を見出そうとし

は毎日愛用しているのです。これならズロースのように、ゴム入でないからどんな暴漢だって、どうすることも出来ないだろうと思つて居ります。

奇巧の口絵、写真にも男の襦袢姿ばかりでなく女の襦袢姿も出して、皆さんに私のような襦袢を勧めて下さい。

(終)

愛情の純粋さを保つために、切腹すると云うことを、考えたくありません。ですから、「奇巧」誌上にのせられる、種々の作品、サドやマゾを題材とする作品を、読む場合にも、施虐者と被虐者とが、愛情によって固く結びつけられている場合以外には、興味よりも、殆んど嫌悪をさえ感じます。これは私のロマンティシズムのためかもしれません。貴女は「稀書婚姻の儀」のはじめに、新宿追分の書店で「奇巧」の旧号を、買われたと書かれています。私の会社の事務所も、新宿にありますので、「奇巧」を買う時は、会社の帰途、あの店によることにしております。では貴女の御一家の御清栄を祈り、又、貴女の作品に期待しております。

「追記」瀬川様の原稿必ずのせて下さい。若し瀬川様の原稿が没になったりしたら、私は大阪まで出かけて行って、曙書房に火をつけます。

少年刑務所体験記

蛤 ひ ろ い

三 根 耕 二

十一月の声を聞くと流石に朝夕は、グンと冷えてきます。刑務所で一番辛い冬が忍び寄ってくる気配は日一日と濃くなってきます。規則で十一月中は薄いスフシャツ一枚、スフの褌一本、それに作業服だけしか許されていない私達でした。迫りくる冬に脅えている私達にとって十一月三日の明治節は一つの楽しみでした。姫路少年刑務所の二つの大きな楽しみ、四月二十九日の野球大会と十一月三日の運動会。平素冷たい鉄格子と厳しい規律の中に閉じ込められ、常に苛酷な鞭に慄えている少年囚にとって一寸想像出来ぬたのしみなのです。澄んだ空気の下で自由らしきものが味え、祭日ですので紅白餅の別菜も出ると云う一日です。刑務所では如何なる場合でも走るといふことは許されません。少年刑

務所の場合の教練を除く運動会は唯一の例外でした。

その日、私共は平日通り作業服になる為に工場へ出ます。あの恥かしいカンカン踊り、大勢の視線に曝される裸身もいつも程気にならず、私は検身場の丸太を飛び越えて工場に出ました。点検、食事を済ませて工場外に整列、ボタ餅と応援看守に囲れて駆ケ足で運動場へ、各工場合せて四百余名の少年囚が集合すると早速明治節の奉祝式が始まります。金ピカの肩章を光らせた長身の所長の訓示と戒護の馬占山課長の注意が終って運動場の周囲に幕を敷いて私共は座りました。刑務所の運動会ですから、万国旗が張りめぐらされ拡声機からレコード音楽が流れるという、あの小学校時代の風景とは程遠いものです。しかし

私共は幼い日のように競技に熱中しました。古参の少年達は教練で鍛えられているのでそうでもありませんが、比較的新しい新入者は長い未決や独房での拘禁生活で、足が弱っていて少し走るとフラフラしてしまいます。運動場の正面に天幕を張ってその中に陣取っている所長も、冷酷鬼のような戒護課長も今日だけは別人のように笑顔です。それに競技そのものより各工場の趣向をこらしての応援が人気の的です。一工場は木工ですのでベニヤ板で等身大のノコギリや金づちを持出して、三工場の洋裁では端布を縫合せて珍妙な衣裳で、それぞれの音頭を取っての応援合戦です。音頭の文句が又囚人である私共を大よろこびさせるのです。たとえばこんな

戒護課長は 馬占山

ひげをなぜなぜ人泣かす

用度課長は タヌキ面

帳面ごまかし 人泣かす

平素苦しめられている少年囚達のレジスタンスなのです。天幕の中の課長連中は怒る訳にも行かず苦笑していますが、余りひどい文句になると中止を命令してきます。まあ当日は黙認の形で済むのですが、後日反則して戒護に引張られると反動的に苛められるのでした。

私共のこの熱狂ぶりを高い塀の外の松の木の上に登って見物しているのが付近の民家の人達でした。同年輩の少年が笑って見物しているのを見ると、私は泳えきれない郷愁を感じました。あの子には自由がある。私はこの運動会が終るとあの暗い房の中に閉じ込められ、明日からの作業や教練や鞭に追廻される奴隷の生活に苦しむのです。この哀しみはどこにも訴えようのない自分だけのものなのです。昼食には大きな五目飯のにぎりがつつそとして間食として紅白の大福餅、一年に二度か三度しかお目にかかれぬ御馳走でした。

競技も順調に進み優勝も再び私共の五工場と決った時でした。平和な楽しい運動会に大変な騒ぎが持ち上っていたのです。工場別に座っている少年達は、知り合いや仲のよい少年が他工場にいるのを、看守の目を掠めて訪ねて往來するのです。勿論各工場の受持の看

守と応援の看守が私共の後の椅子に座っているのですが、競技の見物に氣をとられているので、私共は便所に行くと呼び席を離れ片隅に設けられた便所に行く振りして他工場の席に潜りこむのですが、私も四舎独房時代から知り合った小野寺少年の所に行っていました。

小野寺は五工場から医務の看病夫に抜擢されて病舎に移っていました。そうして色々と話込んでいる内に四舎の新入少年達の席でざわめきが起つてきました。あの野村看守が立上って人員の点呼を始め部長や看守長まで集まっています。人員が一人足りないのが発見されたのです。競技は中止され各工場の点呼が始まりました。勿論私は慌て、自分の工場へ帰ったのですが、点呼に一寸おくれしてしまったのです。私だけではなく辛幸烈少年もおくれで二人はボタ餅のビンタを食いました。他の工場でも同様で四舎の少年のおかげで大騒ぎになってしまった訳です。各工場は点呼を終えると急いで増員された応援看守達に前後を護られて工場へ帰らされます。そして検身が行われ房へと閉じ込められました。

四舎の新入者から逃走を図った少年がいるのです。運動会で幾分ゆるんだ警戒と監視の目を盗んで姿をくらましてしまったらしいのです。後で分ったのですが便所に行くと言って席を離れ二十分経っても三十分経っても帰

ってこないの、初の内は他の工場の席に潜り込んでいたのだらうと思っていたのですが余りおそいので、隣りにいた少年が野村看守に告げ、それからこの騒ぎが持上ったという訳です。さあ大変ニヤニヤしていた戒護課長の顔色が蒼白となり、休憩中の看守が全部招集されて捜査と警戒に動員され、戸外の要所々々には拳銃を肩から下げた看守が立番しています。私共は房内でヒソヒソと雑談していますが、逃走事件の起きた日は看守の神経がピンと張り切っていて、何か一寸した反則でも常の倍もひどい目に逢わされるので私共にとっては鬼門でした。それは逃走事件は所長以下看守まで責任を問われるので、自然少年囚の上にやり場の無いウップンが跳返ってくると云う訳でした。勿論夜の逃走でなく白昼です。ので、塀の外への脱出は不可能です。所内の何処かへ身をひそめて刻々迫る捜査の手に脅えているのでしよう。時々窓の鉄格子の間から看守達の叫び声が洩れてきます。「オイ川西ッ温和しく出てこいッ、今の内に出てくれば許されるぞ」

規則では二十四時間以内は刑務所当局が独力で捜査し、それでも捕えることが出来ない警察の手に捜査の主導権が移るのです。刑務所では面子にかけても捕えないと、事件が世間に公けになってしまうので非番の看守まで繰出すことになるのです。捕えられぬ場合

は、場合によっては工場の作業が中止されることもあります。こうなると看守達の機嫌はますます悪く、一寸のことでも廊下へ引出されるので、所内全体暗い空気で一杯になるのです。その晩八時頃でした。私のいる七舎の建物は戒護課の建物に一番近いのですが、ガヤガヤという人声がして、そこに大勢の怒鳴る声もきこえ、門外で自動車音もきこえてきます。しばらくすると風の音に混って、悲鳴が夜の空気の中を流れてきます。私達は房の中で顔を見合せて眼を伏せました。そうです捕ったのに違いありません。私達はその少年のこれからの運命を考えました。所内で捕えられたのは不幸中の幸でした。何故ならうまく行くと表向きの逃走罪で処罰されるのは助かるからです。もし逃走罪で罰せられると二年位は刑期が加算されるでしょう。そしてその長い刑期を要注意者として人一倍厳しい監視を受け、あの精神的に苦しい独房の日々が待っているのです。



私達はその夜は仲々眠れませんでした。あの悲鳴は深夜まで続いて私達の神経を痛めつけるのでした。

翌日、私達は常の通り運動場へ出ました。所がいつもと違って四舎の新入少年達が運動場へ出ています。それも三十五、六人の少年達が皆土の上に正座させられているのです。まだ霜こそ降りていないが十一月の朝の土下座はひしひしと身に伝わる程冷気が強いでしょう。体操が終わると壇上に所長が上り、傍の戒護課長に何事か命じました。すると三人程の看守に囲まれて一人の少年が連れてこられました。見ると革手錠がその胴体を締めつけてよろよろとこづかれ乍ら壇上に座らされました。革手錠は彼の両手を背中へ廻して掛けられています。余程ひどい目に逢わされたのでしよう。蒼白の顔に唇のあたりから一筋赤い糸を引いているのでした。所長はそんな彼をさも憎々しそうに一、二度足で蹴ると、

「此奴が昨日、諸君に迷惑をか

けた男であるが、この通り今諸君の前で浅間しい姿を曝しておる。新入のくせに逃亡を企てるなど飛んでもない、この本人並びに不心得者を出した四舎の者は先輩へ迷惑をかけた謝罪をしなければならん、さあお前達先輩へ謝れ。」と又台の上の少年を蹴るのです。するとその少年は台の上から頭を下げ四舎の少年達は一せいに、

「皆さん、どうぞ許して下さい」とそろって頭を下げるのでした。何という茶番でしょう私達四百人の少年へ体のよい威嚇をしているのです。私達はすっきりしない気持ちで追立てられて行く彼等の姿を見送り、暗い気持ちで工場へと帰ったのです。後で聞いたのですが、逃走を図った川西という少年は運動会を見ている内に、烈しいホームシックに襲われフラフラと自分達の場所を離れてしまつて、看守達が騒ぎだしたので叱責が怖くて出て行けなくなつてそのまゝ逃走する気になつたのでした。その頃の逃走事故を起した少年の運命は苛酷なものでした。二、三日は取調べの都度戸外の柳の枝に吊り下げられて、木刀や革バンドで半死半生の目に逢わされ、重屏禁として一週間位は暗黒の懲罰房へ監禁され、その後出所まで運動も制限されての独房生活、私の知っている丈でもその精神的苦痛に耐えかねて、薄馬鹿のようになるか発狂する少年も二三度はあったのです。

さてこの事件の川西少年はかくれ場に困つて運動場正面の大神宮社殿の、床下の板を破つて潜り込んでいたのを発見されたのです。その為に私達は生神様事件と云つたもので川西少年は後に小田原少年刑務所へ送られたそうです。この事件は全収容者に大きく影響しました。第一にそれまでよりも戒護が厳しくなり、僅かなことでもひどい苛責を受けるのです。それに食物がぐつと悪くなりました。それは捜査費用を浮かすためのシワ寄せで私達にひびくのです。

その事故の翌日でした。工場へ帰つて作業に就くと直ぐでした。私と辛少年の二人は担当台へ呼ばれたのです。私は昨日のことだと覚悟をして出て行きました。辛も同じ気持ちなのでしよう、二人は担当台の前に立つてボタ餅の顔を見上げました。工場内の視線もどうなることかと私達に注がれています。ボタ餅の目は常になく血走つて冷たく光っているのです。

「オイお前たちはどうして場所を離れていたんだ」

やっぱりそうです、運動会の日で私達二人はボタ餅の怒りを買つたのです。私は無言で唇を噛みました。弁解が通る世界ではないのですし、正直に云つて小野寺に迷惑をかけることは出来ません。辛も無言で答えません。こんな態度は勿論ボタ餅の怒りに油を注

ぐのは当り前でした。

「おいッ理由が云えんのかッ」と云つたかと思うとボタ餅は担当台から下りてきました。

私は蒼白になつていました。口を利きません。「よしッ二人共服を脱ぐんだ」

私も辛も黙つて上衣を脱ぎズボンも取つてしまいました。すると

「オイシャツも取るんだ禪も」

私はシャツを取りました。しかし禪は取りません。十一月の空気は肌に冷たく沁みるのです。私と辛は禪一本きりの裸身を冷たい床の上に曝したのです。ボタ餅は二人共禪を取らないのを見ると

「取らなきや取らんでもいゝ」というと捕縄をポケットから取出しました。そうして私達に足をそろえたまゝ身体を前に屈ませます、そうして両手を後にして、自分の太股の下で組ませて手首を縛りました。丁度海で身体を前屈みにして貝を拾っているような恰好になるのです。こういう縛り方を「始ひろい」と云うのですが、之は恰好が似ているからでしょう。さて私と辛とは奇妙な恰好で、そこに立たされました。上半身は前屈みになつたまゝ後に反らす事は出来ないのです。太股の下にきっちり括り合わされている両手の自由は勿論利きません。ボタ餅はいきなり私と辛少年を後から蹴飛ばしました。勿論避けることもかわすことも出来ない二人はあつと云う間

に横倒しになってしまったのです。
「お前達が自分で取れんのならこうして取ってやる」

横倒しになってぶざまな姿でもがいている私達にこう云ったかと思うと、ボタ餅の手が伸びて残された布の紐に掛けるのです。私達は次の場面の自分の姿を思うと、その手から少しでも逃れようともがきました。しかし投出された荷物にしか過ぎない私です。その手は容赦なく紐を解きスルスルと引張り出してしまふのです。少年囚の褌と云うのは、海水浴などでよく見掛ける赤褌のように片側だけ足を通して腰の所で結んであるだけのものです。だからその紐を解かれて片足を抜かれると万事休すという訳です。二人共これで全然生れた時そのまゝの丸裸に剥かれてしまったのです。平素から工場のナオスケとして関心の的の二人です。百余人の工場の少年達の視線は八方から私達の肌を舐め廻すのです。ボタ餅は二人を引き立てたせました。上半身を前に屈めて中腰の私達の円味のある臀部は自然後へ突出するような恰好になります。ボタ餅は担当台に上ると暫くそんな私達の裸身を見下していましたが、何を思ったか細い鞭を持って又下りて来ます。

「オイ歩け、工場の中を廻るんだ、歩けッ」
歩くとも云っても太股の所に両腕を廻して縛られているのです、それこそヨチヨチと赤ん

坊が歩むよりも頼りないのです。そんな私の突出したお尻にピシッと空を截って鞭が打ち下ろされるのです。うっと声を出しそうになって私はそれを唇を噛んで休めました。私人ではないのです。辛少年が私の前に同じようにヨチヨチしているのです。どうして此処で音が上げられるでしょう。せめて彼が先に音をあげて泣き声でも出す迄は私は意地でも弱音は吹けません。何という馬鹿氣な事かと思われるかも知れませんが、当時の少年刑務所でこんなつまらない意地がお互いを苦しめているのです。辛少年も勝氣な奴ですから同じように肉体を駛る激痛にも顔をしかめるだけで声を出さないのです。

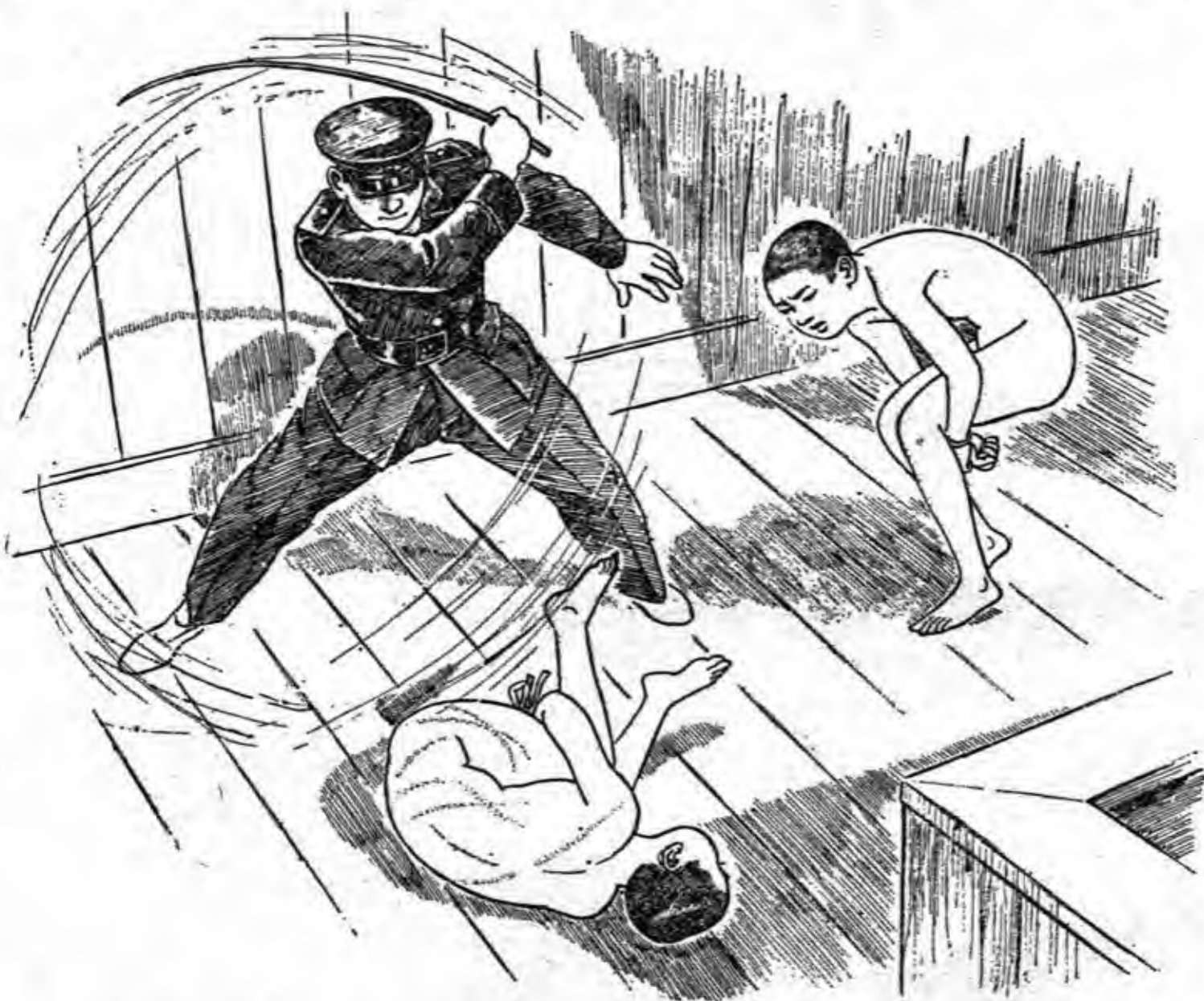
二人は広い工場の板敷をヨチヨチと鞭に追いついてられました。二人の若鶏のような肉体は工場の中をあらちちと追い廻されて、少年達の好奇の、そして淫らな粘っこい視線のこよなき飼食にされるのです。絶対に反抗の出来ぬ囚われの身ですので看守にどのような恥しい目に逢わされてもどうする事も出来ないのです。それだけに口惜しさと恥しさは火のように身を心を灼くのです。紙箱工の細い通路にまでも私達は廻らされます。せまい所で二列三列にずらりと座って仕事をしている少年達、その中を私達は奇妙な姿で見世物のように全身を曝してヨチヨチと歩く、座って仕事をしている中だけに丁度私のうつむき

加減の恰好は少年達の肩位の高さです。じろじろと舐め廻すような視線に完全に觀賞されてしまふのです。早くその視線から逃れようにもこのヨチヨチとした自由の利かぬ歩み。焦りと屈辱に汗ばみボウッと赤味を帯びてくる裸身は肌理をくつきりと浮べています。
少年囚の中で、ひどい奴はボタ餅の眼をかすめて手を出して二人の身体をこづいたり、覗き込んだりするのはです。その度にその粘っこい感触にゾウツと身の竦むようなイヤらしさ。

この「蛤ひろい」というのはとても永くは耐えられぬ縛り方です。それだけでも苦しいものなのですが、それ以上にこの見世物のようにされている苦しさは口で云えないものでした。紙箱工の方から印刷工へ、そしてメリヤス作業場と私と辛のヨチヨチ歩きが続きます。印刷の文機台の蔭から、機械の横から少年達の燃えるような視線が注いでいるのを、私の肌は皮膚は敏感に感じるのです。そんな好奇の視線の中でも、あの宗島や吉岡と云ったいわゆるナオスケと呼ばれる愛童達の眼に自分のこの哀れな恰好を見せている。眺められていると云うのはより以上の屈辱の思いに苛れるのです。どうしてこのような心理になるのでしょうか、山賊の一味に拐わかれた旅の女達が荒くれた男たちに無理やりに恥しい恰好にされる、その時男たちの眼に曝され

ているその恥かしさよりも、その恰好を他の女に見られている事が羞恥感を倍加する。そんな心理と説明すればよいでしょうか。

文少年や白川、印刷の大村といった工場の幹部達もポタ餅にいろいろと謝ってくれたりしたのですが受付けないのです。常ならば少々の反則では幹部少年が取りなせば許してくれるのに、余程昨日の逃走事件で気が立っているのでしょうか。ポタ餅のその様子に幹部の少年達も手を拱ねくより仕方がありません。時々ビュウと音を立てて細い竹鞭が臀部へ食込みます。私は皮膚に食入る痛みと、前屈みの姿勢で圧迫される心臓の苦しさを、益々締めてくる手首と太股の痛みに、ともすれば口から声が洩れようとするのです。でも私は辛少年に負けたくなかった、唇をぐっと噛みしめてその苦しみに耐えるのです。辛もきつと同じ思いなのでしよう、私の少し前に行く彼の丸いつるつとしたお尻に幾筋も幾筋も走る



赤い鞭の痕が、上気したような肌の上にくっきりと浮き上り、その上に二粒三粒の汗の玉が噴き出しているのです。ヨタヨタとした足取を後から見ていると全くそれは奇妙な見物ではあるのです。しかし同じ目に逢っている私には観物などと呑気な立場ではないのです。ふと気が遠くなりそうな気さえます。この「蛤ひろい」と云うのは拷問の一つなのです。成年者でも長い時間は耐えられぬ苦しい罰の一つです。

メリヤス工の作業場の細い通路を追廻され再び担当台の前に戻ってこようとした時です。前をヨタヨタとよろめくように歩いてきた辛少年が急にフラフラとしたかと思うと、ドタリと音をたて、横倒しに転りました。もう歩く事も出来ない程に疲れ切っている二人でした。ポタ餅はそんな辛の姿を見るとツカツカと歩み寄って

「辛ッ何だッそのさまはッ起きろッ起きんかッ」と怒声と共に手にした鞭を彼の動けぬ身体を

打据えるのです。細い鞭は空を切ってビシッビシッと、辛の汗に塗れた肩に背中中に、そして臀部の丘に突刺さるように振下ろされるのです。すぐ後にいる前屈みの私の顔面近く汗の飛沫がはねかゝるのです。見ている私自身も今にもヘタヘタとその場へ崩れそうになる。鞭が身体を襲う度に辛の呻き声は高くなり、悲鳴に近くなってくるのです。もう我慢し切れなくなつたのでしよう、「ウウッ」と呻いた辛少年は突然泣き声を出しました。

「先生ッ許して下さいッ痛いッ、もう許して下さいッ、痛いッ」

泣きながら哀願を始める辛の汗と涙と埃に汚れた顔。あの黒い眉も美しい唇元も歪めてポロポロと大粒の涙が零れ落ちます。私は、ともすれば倒れそうになる身体を動かさずその泣き声を聞いている内に、勝ったッこれで辛に勝った……と勝利感を苦しい胸一ぱいに味わっていたのです。あの一月前のあの屈辱、あの五舎の独房でさんざん罵られ辱められた口惜しさが何か晴れるような気がするあの時身動き出来ぬ私を羞恥の涙に口惜し涙にむせばせ、あの美しい唇に奇妙な笑を浮かべていた辛は今私の眼前で、ポロポロと涙を流して赦しを乞うている、ぶざまな恰好をして自分の前を蔽うことも出来ないで身悶えしているのです。私は自分自身もそのぶざまな恰好の一步前である事すら忘れて、自らの手で

辛少年の裸身に思う存分の復讐を加えているような錯覚に、慄えるような勝利感が全身を包むのです。その陶酔感に浸っている私の目からも涙がしたたり落ちるのです。その次の瞬間に私自身も泳ぎ切れなくなってそこへ横倒しに転んでしまったのです。と見る間にボタ餅は

「こらッ三根ッ、お前もか、立てッ起きろ」と罵しり乍ら鞭の雨を降らせるのです。起きよう

も太股の下で結ばれた私の両手は痺れて自由は利きません。鞭の雨から身を避けることもならず、私はその苦痛の中を転げ廻るので

女 打たれる 鞭

画 男 一 田 島



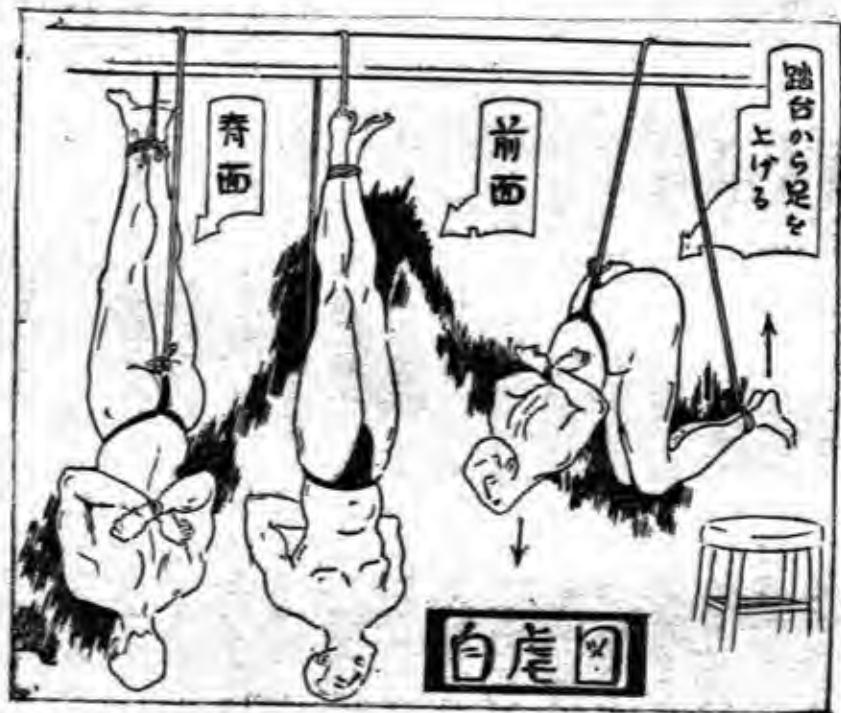
「アアッウ」

言葉にならない声も無我夢中でした。ごろりと転げる度に剥き出しの尻に降る鞭の雨、それを避けようと、空しい努力を続ける私の肉体、その地獄のような苛責の中で又もあの奇妙な感覚が湧き起ってくるのです。私は烈しい痛みと奇妙な感覚の坩堝の中で恍惚としたものさえ感じ始めていたのでした。

(おわり)

男性自虐の方法

岡村文雄



始めてお便り致します。私も奇巧の愛読者の一員として、今迄何冊も奇巧を読んで、告白記の募集の記事を見るたびに書いてみようと思ひながら今日に至りましたが、この度思ひきって書いて見ました。

その頃は、たしか小学校の四、五年の事と思ひましたが、学校での水泳に行きましたが家の者に赤褌を買ってくれと云う事が云えず普通の水着（昔流行していたランニングとパンツの着いた水着です）を着て居りました。他の者は皆申し合せた様に赤褌です。其の

時より私もみんなと同じ様に赤褌をして泳いだら、どんなに楽しいだろうと思ひておりました。

さて小学校を終り中学校に移ってから今度はこそは、どうしても赤褌を締めて見たいと思ひておりました。夏にはまだ大分、間があったので小遣を、なんとかして貯めて、それで買おうと思ひましたが、さて自分の手にお金が入って見ると、呉服屋へ行けばあると、云うのは分つて居るのですが、どうしても中へ入れないで幾度も前を、うろろしてしま

った事がありました。さて思ひきつて中へ入ったのはよいのですが、「何にするのか」ときかれたりするとまったく顔から火の出る思いでようやくにして買い求め、表へ出た時には冷汗がびっしりになってしまったのでした。それからというものは、その時の感じが「スリル」に富んでいると云いますが、興味をそそり現在でもちよいちよい赤褌を買いに行きますので私の荷物の中には、赤褌が何本となく入って居ります。

さて中学時代にもどりますが、或る日の事業がくれ武士道という本を読んだ事がありますが、武士道というものはどんな苦しみでもこらえて行く事だと書いてありましたので自分の体に自分で苦しみをあたえて、それに堪えられるようになりたいと思う様になりました。それについて前に買って置いた赤褌を利用してと思ひ、いろいろ考へて見ましたが結局褌を出来るだけきつく締めて見ました。股間が褌にきつくおさえられて居るので、なんとも云えない位良い気持でした。只、それだけではつまらないので、後に手をやり褌の結び目の所をひっぱって見ましたが、何分とも固く締めて居るので全然ひっぱれません。そこで荷物用の紐を通し、柱に片方を結わえて上体を前にたおしてみしました。何しろ褌をきつく締めてある上に、後でひっぱられるので尚更強くしめつけられて、いやが上にも何と

も云えぬ良い気持でした。それからと云うものはもつと理想的にするにはどうしたらよいかと考へて見ました。

或る日の事、物置の「はり」を利用して見たらと思いつき、そこで家人の留守をねらい例によって赤禪をきつく締め、荷造用のつなを持ち物置に向いました。先ず「はり」につなを通し、腰かけを持って来てその上に立ち例によって禪の後の結び目に片方の端を結わえ、更に片方は「はり」に結びつけました。そこで腰かけから足をはなしました所、丁度亀の子の様になりましたが、何んだか両足が

ぶらぶらして居るのでござありません。そこで他のつなで両足もしばって見ましたが、胴がくびれるばかりで何んとも物足りなく感じましたので、両足のいましめをとぎ、始めの状態にもどり「はり」に、結わえてある方の端をとぎ、直接両足をそろえてしばって見ましたところが、じかにつなで足をしばりそれが又、きつくひっぱられるものですからいたくてたまりませんでしたので、湯上りタオルを足にまきつけてその上から結わえました。そうして足を台の上からはなした所、始めの内は亀の子の様になって居たのですが上

体の重みで、両足が上になり丁度逆さ吊りの様になりました。普通の逆さ吊りでは別に股間に何んの「影響」もありませんが、この方法ですと股間が禪で強くおさえられている上に強くひっぱられるので、その緊縛感は素晴らしいものです。

出来れば、この上両手を、後にまわしてしばられたらと思いますが、まだやって見たことはありません。字がまずい上に書き方が下手なものですから、さぞ読みにくいと思いますが、以上が私の現在の実行しているところの「自虐」の方法です。(おわり)

読者からの告白体験手記をはじめ、小説創作、その他課題原稿の数々の投稿が数千篇の多きに達しています。その中で誌上に公開出来なかつた分の梗概だけでも漸次御披露して皆さまの御参考に供したいと思ひます。

先ず洗腸マニアから送られた一篇で、これは一度掲載候補作品として挿絵の準備までしたのですが、文中の描写にどうも削除訂正しにくい分があつて結局、没になったものです。告白形式にはなっていますが、内容は洗腸マニアの夢を描いた創作といったもの。出場人物は女一人に男二人という三人、共に医科大学生で夏休み中の或る日、病院長を父に持つ男の家の別荘へ三人で遊びに行くと云つた筋書きで、その別荘の大きな浴室で洗腸プレイ

が行われる。三人共医科生であるという伏線から、医学的知識に基づいたサド、マゾ、洗腸といったいろいろの場面のプレイが一応合理的にしかも、各マニアにとっては相当刺激的な方法で描写されています。

先ず女性に対する浴室に於ける洗腸、胃腸洗滌、腫洗滌等が二人の男性の手によって医学的に行われる。このあたりは多分にサド的であるが、二人の男性に対して行われるあたりは多分にマゾ的であり、あとで牛乳、酒、シロップ等を各々三人の体内にくじ引きによって注入した上で、相手に飲ませるといった場面もマゾ的といえる。最後に二人の男を馬にして鞭打ちつゝ浴室内を這わせるといったシーンで終っている。この文が何故洗腸マニ

アの作品であるか、というと、洗腸、洗滌した女性の体内へ、ハンパークステークのような食品を挿入するといった件りが最も詳細に洗腸マニアの願望が余すところなく描かれているからです。

サジズムの方では、合意による悦虐遊戯といったものを本誌では主として扱っています。が、そういったものにあき足らず思うグルーブの人たちからのものとして、女性の意志を踏みにじって暴虐をふるうテーマのものも相変わらず相当数送られてきます。嘗ての懸賞入選作品の「華々しき凌辱」に於ても大巾に削除訂正を加えなければならなかつたように凌辱を中心としたものは、殆ど没となつていきます。掲載される予定でされなかつたものゝ一

つとして、口絵だけが掲載された「体操教室」があります。これは口絵そのものも問題になりかけた位のもので、本文はシナリオ形式のものでありますが、女学生に対する同級生の私刑といった筋書きが、普通の小説にありがちのハッピーエンドの形をとらず最後は、主人公の美少女が自殺するといった結末で、その点でも、サジストの好み作品ではありますが、どう訂正しても誌上に掲載出来ないのは残念でした。

題名が示す通り、級長で美少女の主人公に恋慕した不良グループの団長が、子分と共に体操倉庫に甘言をもって欺まして連れ込み言うことをきかない少女を拷問するといった形で始まります。この拷問の仕方には、体操倉庫の中にある各種の小道具を巧みに利用して次々と変った責め方をしてゆく。その間、美少女の恋人である男子組の級長や、そのグループであるラグビー部の部員達と、不良グループとの軋轢や、無理矢理に屈伏させられた主人公の苦悩煩悶といったものを織りなして



玉稿落穂集

(一)

——誌上に載らなかつた

原稿のことども——

編集部

団長の暴虐的な責めやその情婦である女生徒の嫉妬による嗜虐的な責めが次第に強調されていくといった数十枚のストーリー。これは今、やかましく言われている「暴力教室」と同じく話題を学園においているため、良識によって掲載は見合わされました。

今度はマゾの作品で、或る中年の醜男が、マゾの衝動にたえかねて、或る色街の女に登って自分の性癖を告白した上、足舐めとか、ネクタール、或は馬にされて部屋中を歩き廻わされる等、満足の生活を送る。然し、その相手の女が彼のことを女将や朋輩に話したことから、サジズムの傾向を持った女将は、彼を自分の部屋へ引込んで、奴隷としてのあらゆる屈辱を与えるが、かえって彼は商売気のない真剣な苛め方に喜びを増す。女将は次第

くて毎日のように通って来ていた男は、遂に自分の仕事を放擲して、この家の下男として、女達の酷使に甘んじるといった筋書です。

この文は日記風にたどたどしいながら、最初は風変わりなお客として特別扱いされていた男が次第に女たちに軽蔑されて、遂には奴隷の位置に転落してゆく経過がよく描かれ、そしてマゾヒストの好みそうな場面が、日を変えて集団的な女性の暴力の前に展開されて行くのは、同好者にとっては無二の好読物であると思いますが、只、欲求のあまり自慰的に書きなぐっているのではナマの描写が多くて一寸公開出来そうにありません。

その他男性の切腹、女性の切腹、或はフェチズム等変った投稿作品がありますので次回に引続いて紹介することにします。

に自分一人で、この馬鹿げた男を苛じめることに倦きて、便所へ行くのにも廊下を馬にして行く様になる。その家に住んでいる数人の売春婦たちも、女将と一緒に、その男を面白半分にする。それが嬉しめる。



女の 禪 美

元来私は女が禪を締めた姿に何故此のように魅力を感じるのでしょうか。

それに就いては、結局少年の頃から私が禪と云うものに特別の興味を持っていたと云う事実にはさかのぼらねばならない、つまり最近の奇巧誌上に見られる「少年の禪美」礼讃の傾向と似通ったものがあつた訳だが、特に私の交っていた点を挙げるならば、自分が禪を締めた姿を殊更、異性の面前に露出して見たいと云う独自の性癖があつた事に気付くのである。此れは、唯さえ面映ゆい自分の禪姿を年頃の美しい異性に注視される場合の、より一層の強い羞恥感を味って見たい願望の爲でもあつたが、同時に禪そのものが女性に与える心理的影響、或いはその反応を試めす事

アブ追求三十年の回顧

も目的の一つであつて、何とかして女と禪と云う二つのものゝ間に連想的に結びつきを意識して見たい——つまるところ女に禪を締めさせて見たい——と云う目的に対する前提的行為でもあつたか、と考えられるのである。

此処に面白い事実がある。それはストリッブ・シヨウを見た場合、大抵の男性がバタフライを締めつけている紐が、細ければ細い程興味を感じ、正に触れなば落ちんばかりの風情に魅惑されるのに対して、私の場合は全くあべこべであつて、見るからに丈夫そうな紐で禪さながらにガツシリと締め込まれていなければ何んの興奮も覚えないのである。

女禪美愛好は股間責め愛好の心理と似てはいるが、さりとて全く同じものとは云い得ない。「禪」と云う字はいみじくも「衣へん」

山 田 正 美

に「軍」と書く。全くの話、弱々しい人間の裸体（シヤン・ギヤパンと云えども裸ともなればゴリラに劣る事数倍である）も、禪を締める事に依つて闘争的な形態に変化する。変化するかしないかは知らないが、少くとも私にはそう思えるのである。そこでか弱い女性の裸体が禪を締めた姿こそ、「さあ矢でも鉄砲でも持って来い」と云い出しそうな恰好であるが故に、そこに女禪美独特の魅力の源泉が見出されるのではなからう。

接吻の対象である女性の口唇に態々猿轡をはめて悦ぶ人があるが、私なら此の場合猿轡のかわりに覆面頭巾を被らせる。此の問題を下腹部若しくは股間へ持つて来ると、荒縄を以てする股間の緊縛——のかわりに私は必ず禪を締めさせる事になる。猿轡と股間の縄責め。それに対する覆面頭巾と禪、此の僅かな

差異が一般的純責め愛好者と、そして私との相違点である訳だ。

此處で触れねばならぬ事柄は、褌を締めた女性の臀部の魅力、及びアヌスの演ずる役割りである。

豊満な臀部に割り込ませる物質も又可能な限り強くてそして太い方がより効果的であると考えられる。従って相撲用の褌を六尺の晒木綿を締める時の要領で二重に噛み込ませて彼女をして「うわあ」と云わせるに限ると云うのが私の意見である。次に忘れてならぬのは褌を締めるについてアヌスと云う代物が中々馬鹿にならない対象価値を示すのである。

元来此の不潔な人間の裏木戸口は既に浣腸愛好等の記事に於ても、その徹底した羞恥感の享楽性が紹介されているが、俗に云う「親にも見せられぬ箇所」のもう一つ上をゆく「夫にも見せられぬ箇所」。それこそは花恥かしい美女のアヌスでなくてはならぬ筈である、それ程までに秘し隠すあの「くもの巣」状の皺の寄った色彩も異なる部分、常日頃不潔なものなり、ときめてかゝった意識で、間接的に触れてさえ手を洗う習慣を作法とし、要するに筋肉と筋肉の密着した自然的秘境に隠蔽された儘、そつと放任されていて然るべき箇所。そこへ、至極手ざわりの荒い綿布の一種が、我が物顔に割り込んで来たとしたら此れはたしかに神経を逆撫でにされる問題で

ある。

ちよつと滑稽な實際例を御紹介する。

それは腹中に発生した瓦斯体でさえが排出されなくなると云う事であつて、妻が或る夜小気味よくキュツと締め上げて、さて色々な倒錯遊戯の挙句愈々時期到来と同時に、も早や邪魔以外の何物でもない褌を解き外すべくちよつとゆるめたその刹那、あのいとも懐しい音響と共に「まあ、スツとしたわ」と彼女は云ったものである。

私が二十五歳の時、東京の某大会社の重役で、今は故人となられた資産家のM氏が、一夕私と私の友人S君を某待合に招いて、芸者の褌踊りを見せて下さった事がある。何故此んな事になったかと云うと、當時は支那事変から第二次大戦に突入しようとする変動の激しい時代で、例の七・七製造禁止令の為市場に欠乏する恐れのある製品が多種類にのぼった。M氏は私財を運転して或る種の鉄製品に目をつけて買い占めにかゝった。何しろ自分の会社にも極秘の仕事でその製品の事柄に明らかつた局外者の私が終始相談をうけ、私は又友人のトラック運転手S君に協力を依頼して大分無鉄砲に活躍したものだ。勿論たんなり礼金も頃いたが、それ以外に慰勞の意味で斯くは待合招宴の一と駒となつたのである、ところが此れが図らずも多年の私の夢を実現して呉れる事になった。

若い美人の芸者が三人、明るい座敷の真中で崩し島田の髷を揺すり乍ら、柔らかな白い裸身に相撲褌を締め込んで、今一人の年増芸者の「相撲甚句」の三味線に合わせ、幾らか羞しそうな黄色い掛声も妙になまめかし、円を画いて踊る有様に私もS君も恍惚として忘我の境に迷入してしまった。

「山田君もS君もよく見て置き給え。あの三人の中から、どれかを今夜おとり待ちするんだから、あとでお名差しを願おう」とM氏は笑い乍らさゝやいたが、私はそのM氏の言葉さううっかりと聞き洩らす程、陶然たる雰囲気酔っていたのである。

唯此れ以上の記述は同じく奇巧愛好の妻の手前遠慮したい事になるし、その待合は東京の有名な花街K坂にあった事だけを附記しよう。

鼻責め談議

二月号に鼻責めに関する記事があり、久しぶりで大分面白かった。私の場合は此のような完全なサディズムとは少し違った感覚を持っている訳で、主に女の「鼻腔の拡大化」「鼻翼弧線の強張化」を狙ったものであつて肉体の一部を損なう行為に至ってはどうも賛同致し兼ねるのである。

たしかネパール国辺りの婦人の習慣に斯うした鼻や耳に孔をあけて、種々の装身具をつ

ける事が現在でも行われて居るし、又映画「黒水仙」に出て来る原白人少女は左の鼻翼に裝飾物をつけていた。

近東地方の某国の婦人を銀座街頭で見かけた時、その皮膚の美しさにも感心させられたが、同時にその鼻梁の中間のやゝ左横に大きなダイヤモンドがちりばめられているのには驚ろいたものだった。

此れ等風俗上の鼻に加工する実例は中々多いもので、又私にとっても興味深い事柄ではあるが、さりとて決して真似だけはしたいと思わない。

私が女の鼻を責めるのは、同時に「鼻を中心とした女の顔全体を、私自身に対して示威的な脅迫的な仇らきかけのある表情に変化させて、視覚上からマゾ的心理を味わいたい」のが目的である。此の意味から覆面頭巾に面を包み、サデイスチックな瞳を光らせた女性の顔を好む訳だが、元よりその中心となるものは飽く迄も「女の鼻」であり、女の鼻責めならぬ女の鼻自体の強化、示威的形態化を狙った細工を施す事が最も肝要

である。

最近妻に用いさせている覆面頭巾の構造を御紹介する（B図参照）。完成図で見れば映画に出て来る鞍馬天狗に似てはいるが、勿論私の考えた特別の構造を持つて居り、「V W X Y Z」の各部分を見ればよくお判りになる事と思う。殊に「X」部分は全く鼻責め以外の何ものでもない。強いて云えば鼻を覆う「Y」部分の緊縛のため、鼻の形がC図のよう

になるのを防止する目的であると云えば云えない事もないであろう。だが然しその本質は手拭の盗人被りを覆面頭巾に応用して取り付けた迄の事に過ぎない。その他「Y」も「Z」も不必要に長くしてあって、後頭部や頤の下で異様に大きな蝶結びが出来て、女の服装全般に於ける覆面頭巾の存在を、いやが上にも鮮明に強調させるように出来ている。生地はポプリンの薄紫の細かい模様のあるもので、

黒頭巾や白頭巾に比して一段と華やかな女性的色彩を持っている。此れ等の構造なり色模様などの狙いは、凡て女の覆面に壮大な優美さを与えんとするものである。

三月号の口絵に「回教徒婦人の顔覆い」と題する絵があったが、元来回教では女の身体の凡ゆる「孔」の部分の不潔なりとし、露出する事を嫌う風習があつて、特に女の鼻腔を人前に曝す事は最も恥ずべき無礼の行為とされている（註、大分以前或る書物で読んだ事であり、決して私の想像ではない）

回教徒人が特に鼻腔を覆いかくす事は或る映画でも確認



したと云うのは、その映画ではエジプトの結婚式に参列する婦人達が、特に鼻腔だけを細い布切れで上方に縛り上げていたのである。斯うなると鼻責め類似の行為であって、又古風なエジプト婦人が黒いベールを被った顔面写真を見ると、鼻筋から額にかけて妙な金具らしい物がのぞき出しているのに気がつく。かつて京都の某百貨店で見た世界風俗展覧会に飾られていたエジプト婦人の覆面姿の人形にも、矢張り此の真鍮のパイプ状の二本のものから出来た金具が、鼻筋の上に見られたのである。不幸にして浅学の私には此の金具が何の為に、如何なる構造を持っているものか、いまだに知らないものであるが誰か御教示願えれば幸いと思う。

秋田県の「覆面女」の風習は有名なものだが、此れは昔の掠奪結婚の防止策に端を発しているとか。巾二寸程の黒布の長いもので、額の辺りは帽子のつばの如く幾分開放的に巻き、唇から鼻へかけて目深かに密着させて巻き上げる。どうも鼻がC図のようになりそうで、興味はあるものゝ余り良好なものではない。

昭和何年だったか日本橋白木屋の大火事の最中に、白昼公然たる女の鼻責め姿が火事見物の弥次馬の面前に現われた。つまり救護の為に馳せつけた何処かの病院の看護婦達であるが、各々あり合わせの布で煙除けの覆面を

していた訳である。殊にその中の若い一人は白い分厚い布切れで鼻腔を上方に緊縛し、後頭部の高い箇處で結んでいた。鼻腔が激しく圧迫され、鼻頭が団栗玉の如く盛り上り、鼻梁の皮膚が逆境に堪えかねてたるみを作つてそのたるみ具合が両端の周囲にまで影響を及ぼしていた。惨事を眼前にして倒錯感にふけていたようで、何んとも慙愧に堪えない次第であるが、三十年の間には実に色々な思い出が多いものだ。

戦時中の防空頭巾、或いは防毒マスク。海女が用いる潜水用の大型水中眼鏡等も、皆私にとつて興味深いものである。

私の作つたアルミニウムの仮面は昨年八月号で御紹介したが、どうも残念な事には圧迫された鼻の示す表情が、すっかり隠れてしまふのが実に物足りなく感じられる。透明な硝子状のもので此れが出来たら実に素晴らしいと思う、早い話が窓硝子に押しつけられた鼻を反対側から見るのは頗る愉快なものであるが此れも女つて奴が十五、六歳を過ぎたらそんな真似をする事は先ずあるまいし、此んな実験にはどうしても妻を煩わす事になるが、さて実際には彼女の鼻の名誉の為にもまだやつた事がないのである。

口から入れた蛇が鼻腔から出て来ると云う見世物を御存じか？ 私は数年前此れを大阪で見てもそのグロ味もさる事乍ら、女の鼻腔を

内部から押し拡げつゝズボリと出て来る蛇の動き方に深々たる興味を覚えたものだ。此れを演じる女の息づかいや表情も仲々面白かったが、唯いつの場合でも云える事だが問題はその女の容貌であつて、若しエリザベス・テ일러か京マチ子辺りが此の芸当をやつて見せるなら、正に大した値打ちがあるに違いない。左の鼻腔から出て来た小蛇が右の鼻腔に首を突込んで、長い胴体の真中辺りがぐいと障子部を締めつけたら、リズムも京ちゃんもどんな顔をするであらうか。

三月号に真鍋氏の写真作品が掲載され、愈々編集部に於ても鼻マニアの夢実現に一と膝乗り出して下さつた事と大いに嬉しく感じられた事である。

結 婚 談 義

「鶏が先か卵が先か？」と云う言葉があつて、解けそうで解けない宇宙の根底的真理に人類が永遠の疑問の境をさまよいつゝ、然も平氣の平左で結婚しそして子供を生んで行くのは全く不可解な事柄に属する。

尤も男尊女卑なんて言葉は或るとこかの野蛮国の風習を云つたもので真理と云うものは全く縁の遠い話だ。要するに男性こそ真の人類であるとか、女が主で男が従であるとか云い出したら確かに間違い扱いにされる価値は充分で、成る程女は子供を生むであらうが

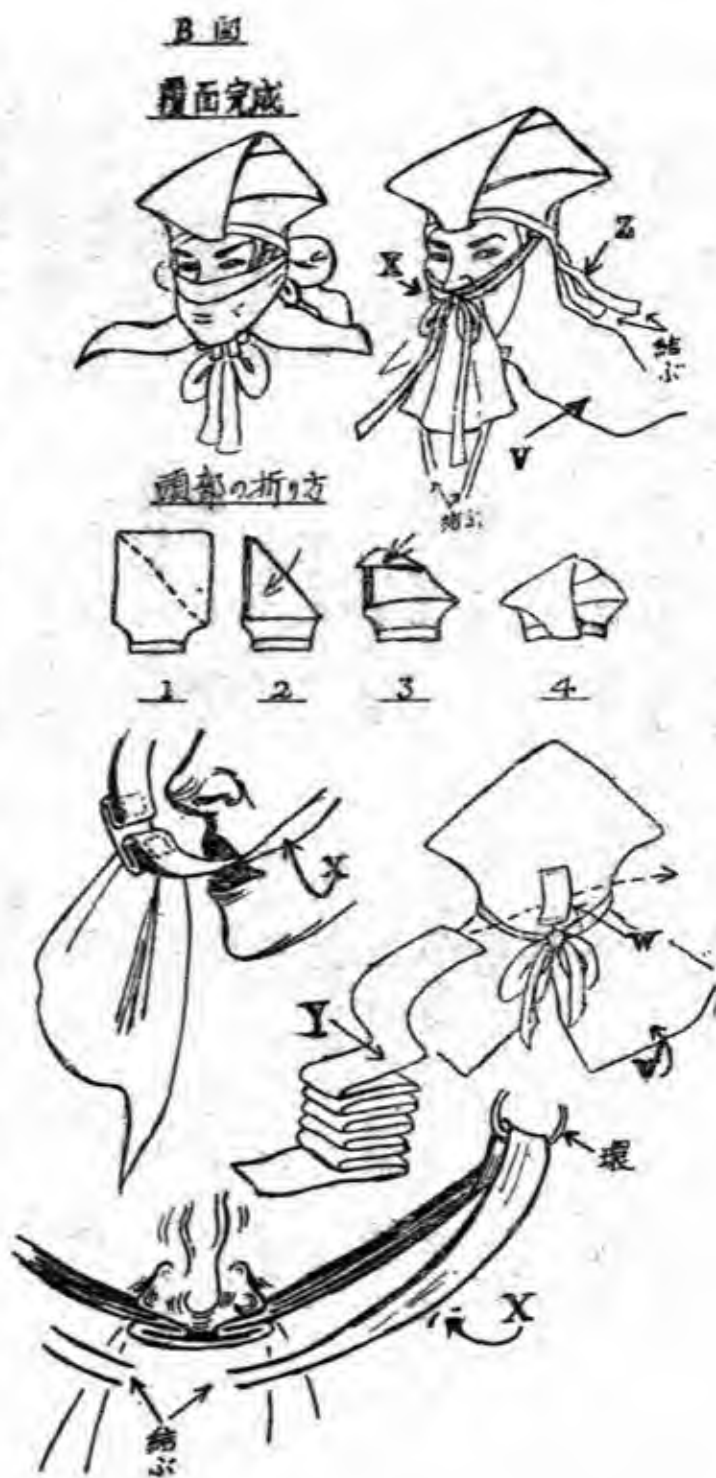
さりとてその子供は何が原因で生れるかを考えれば結局「鶏と卵」の問題に帰着し、アインシュタインなる大先生の長ったらしい相対性原理とか云う奴を一通り勉強しなければならぬ事になる。レーニンは弁証法の「対立物の統一又は滲透の法則」に関して、実例を挙げ「数学に於けるプラスとマイナス」「力学に於ける作用と反作用」「物理学に於ける陽電気と陰電気」「生物学に於ける遺伝と順応」等々と云う具合に羅列しているが、此れは単的に云って「人類に於ける男と女」で片づけられよかつたのではないか。

たしかに人間は相対性理論の中で何が何んだかさっぱり結論の掴めない海の真中を泳いでいるかの如くであって、此れを釈迦の仏教哲学では「相對妙」と名づけて大分詳しく説いている。自体釈迦思想の真骨頂とも云うべきものが凡ゆる面で相対的に出来て居り、その一面を挙げると、無神論（禪宗）と有神論（法華関係諸派）とが幻妙不可思議な調和を示して居り、法華經を読んでも有神論的に説明して無神論的究極を悟らしめんとする意図を蔵する如くである。その究極とは仏教で云う法であり、一般哲学で云う「絶対真理」そのものである。三千年も昔に「法」なんて事を説いた釈迦はたしかに東洋の生んだ偉人であるが……。いやもう止めよう、第一に此の議論は果てしのない問題を含んでいるから、

それよりも人間に解っている範囲で、さて結婚と云う身近かな重大事に付いて語ろうではないか。

結婚する男女いずれにとってもその相手を選ぶ事は難しいが、唯如何なる場合にも最後の一言、つまり「イエス」か「ノウ」かだけを明確に、又正直に云い切ってしまうれば左程間違ひも失敗も起りはしないのである。

いやだと思つたら飽まで「いや」で押し通し、場合によっては家出、或いは雲がくれの手段も近代的道義上必要である。その反面「此れぞ」と思う相手にはしがみついて放さざる事、恰も蛸が餌に吸いつくようにすべし。私の場合は時代も思想も煩さい頃で、己む



なく見合結婚を強いられた訳だが、自慢じやないがその段では恥も外聞も一向に構って居らなかつた。東京で美人を沢山見て来ている上に、故郷の京都が此れ又美人の本場である。何が悲しくて鼻の低いおかめなんぞ……と云う意気込みで、見合四回、写真は十数枚と云う健闘振りで、親や親類を散々手古ずらせた。「お前見たいに、きりよう好みばかりしていたんじや、碌な性質の女も女房に出来んぞ」と、鉄道員の古手のコックス頭の叔父がぬかした時も、「放って置いてくれ」と喧嘩までした程である。

私はその以前から約二町程距たった某家の娘（つまり現在の妻）の飛び出したような高



い鼻に、私独自の理想を見出していたのではあるが、問題は先方の事情に暗い事と、今一つは余りに堂々とした彼女の体格に変なひけ目を感じて何も云い出した事がなかったのである。何んとその時偶然近所のさる有力者が仲人役となり、「あの娘はどうですか」と云う話から、「顔を知っているなら今更に見合いの必要もない訳だが、先方の立場も尊重して一応形式を踏んで下さい」と云う事で、某日某所で初めて彼女と言葉を交わしたのである。元より私は最初から「OK」で、只管先方の意志表示を待つばかりとなつたが、見合の時の印象では彼女の方も大丈夫と思つていたのに頗る返事が煮え切らない。詳しい事情は記述を避けるが、私は又斯うなると無暗に想い詰める性分で、夜寝ていても彼女の高い鼻が惱ましくまぶたに浮かび、何んとも云えないやる瀧ない感情にいさゝか大げさであるが、氣も狂わんばかりであつた。私は仲人の家が近所であるのを幸いに自から数回に亘つて訪問し、又幼ない時から特別私を可愛がりてくれた大阪の伯母にも泣きつくように頼

んで、態々足を運んでもらつた。

その熱心さが通じて愈々話がきまり、結納と称するものが取り交わされ、親戚、知人、友人から「末広」と銘打った引出物が山積される頃、初めて彼女と二人切りで映画を見に行く事になった。今の若い人達なら尾張町、或いは心齋橋、四条河原町辺りで、いとも簡単な電話の打ち合わせで遇えるのだが、その時代では又此れが中々重大事であつて、某市某所で開業している美容師の彼女の姉が態々呼び寄せられ、元来の美人(?)が一層磨きをかけて現われるに至つては、流石の私も大いに照れざるを得ない。然しその時の映画で見た轟夕起子の扁平な鼻など、くそ喰えと云う気持ちであつた事は確かに覚えてゐる。

結婚、私はさながら掌中の珠玉の如く妻を扱かつた。私の持つ倒錯癖は私だけのものであつて、妻にそれを求め実行して行くには長い忍耐期間が必要だと思つた。

唯一つその頃からの喜びは接吻の際仰向きになつた彼女の頃の先から、いとも小氣味よくスッパリと開いた巨大な鼻腔が、誰に遠慮も氣兼ねもなく思う儘に觀賞されると云う事である。

俯向いて私の胸に抱かれる時の彼女の鼻。それは又豊かな体積を持つ魅力的な凸起である。何故此の女は此んなに高い立派な鼻を持つてゐるのであるのか、そしてそれが私の従

順な妻になろうとはむしろ合点出来ない程である。

× × × ×

アブマニアが結婚の相手を選ぶ際には、少くとも相手の容貌又は性癖にたとえ一箇處でもよいから、自分の好みと一致する点を見つけるべきだと思ふ。元来許される程度の倒錯癖は夫婦生活上親愛の度を増す事に役立ち、却つて大いに有用なものであつて、その為には今云つたような容貌性癖に、自分との一致点を一箇處でもよいから持つてゐる相手を選んで結婚すると、後々の仕事かうまくゆくのである。

【告知板】

○従来、編集部にて手紙の転送郵送を奉仕いたしておりましたが都合により中止いたします故、悉く御諒承下さい。但し誌上にての同好者への呼びかけは歓迎いたします故、読者通信と共に奮つて御投稿下さるようお願いいたします。○写真部にては新しいモデルによつて次々と新企画のフォト撮影を進行させております。あらゆるフォトのアイデアにつき御進言をお待ちします。採用篇並に優秀企画には、写真に撮影の上贈呈いたします。○通信販売専門になりました本誌のゆき方につき愛読者の皆さまとしての御意見がございましたら何卒編集部宛御進言下さるようお願いいたします。○原稿募集は、新しい課題にして巻末に掲載してありますから、大小に拘らず御投稿下さるようお願いいたします。

幽 四 十 ヶ 月

春 田 一 郎

これは昭和二十六年の春より描かれた戦後の受刑生活の告白記である。誇張や歪曲によつて事実を失うことなく、素直な眼で眺めた記録は読む者の胸に迫つてくる何ものかを持つてゐることを信ずる。

坪 内 篠・画

第 二 工 場

二舎に入つたとは云え、私達は最早「新入」ではない。訓練を済ませて、職場につく迄を二舎に待機する稍々古参になつた訳である。

十一房の一番席は珍満と云う朝鮮生れの人であつた。二番席の佐藤君は半ヶ月程前に訓練を終了した人であり、四番席の小西君は私と一緒に訓練を終つた人であつた。五番席以下は新入で、半数は朝鮮生れであつた、作業は以前と同じく、綿糸の整理をやつてゐた。

斯くして再び二舎の生活が始まつたのであるが、訓練へ行く前と異なり、何時でも職場につけると云う安心感から、頗る楽な気分の日々を送ることが出来た。

十一房の一番席である珍満君は二十才余りの若い人であるが、刑務所へ入る以前は名古

屋駅の浮浪者だつたそうで、一風突つた人物であり、特に食物に対する執着の強いのに驚かされた。四等飯が配られると、ジロ／＼眺め廻して最も大きいのを取りたがり、おかずは一番量の多そうなのをとつてしまふ。彼について一番の傑作は洗面器であつた。他の房では洗面器は専ら洗顔や洗濯に使うのであるが、十一房に於ては洗面器を洗顔や洗濯に用ゐることは絶対に禁物であつた。新入が普通の常識に従つて、洗面器で顔を洗つたりすると、珍満君は血相かえて

「馬鹿。洗面器を使つちや汚い」と怒鳴り付けるのである。彼が洗面器をこんな大切にすることはある。朝食に味噌汁を配る時配食係が桶を持ち歩いて、杓でくんで呉れるのであるが、房の者が之を菜食器に受ける時汁がこぼれることが多いが、床の汚れるのを

防ぐため、洗面器を受けて、その上に菜食器をのせて汲んで貰うのである。他の房ではこぼれた汁は捨てるのであるが、珍満君に云わせるとこんなもつたいたないことはないのである。彼は一番席の当然の権利として、このこぼれた味噌汁を飲むのである。だから洗面器は彼にとつて食器の一種であり、従つて洗面器で洗顔や洗濯することを許さないのである。

十一房の生活が五、六日続いた六月の末、私は第二工場へ配属されることになつた。私の行く処は考査か計算と思つてゐたのに二工とは些か案外であつた。

受刑者が労役に服す職場の種類は多数にある。思い出した儘ならべてみると次の如きものである。

看病夫 医務課に属し、診察、医療の助手

調剤の助手、患者の看護、庶務等に従う
 図書夫 教育課に属し、図書の管理、貸出
 リクリエーション、弘報等に従う。
 計算夫 受刑者の賞与金の計算を始め、各
 種の計算事務に従う。
 考査夫 科学分類課に属し、受刑者の身分
 関係や考査に関する事務に従う。
 以上を総称して「経理夫」と称し、仕事の



性質上、或程度以上の教育がないと不適當で
 受刑者の仕事としては最高のものである。
 刑務衛生夫 刑務課の清掃、雑務等に従う
 炊事夫 受刑者の食事を調理する役目であ
 るが、入浴の係も之に含まれている。
 官炊 官用の炊事夫と云う意味で、職員用
 の食堂の調理に従う。
 理髪夫 各工場、舎房に専属したり、或は

人数の多い職場を数ヶ所かけ持ちして受
 刑者の理髪に従う。

官床 官炊と同じく、所内にある職員用理
 髪室で理髪に従う。

官繕 土木、建築、左官、薦仕事等に従う
 係りで人数の最も多い職場である。

外掃 刑務所の外廻り、職員の官舎等を掃
 除する係で、冬季にはストーヴの煙突掃
 除もする。朝、刑務所の外を通過して囚人
 の姿が見受けられたら、それは大抵この
 係である。

内掃 刑務所の掃除する係である。二階に
 ある各房の便所桶を始末したり、催物や
 教誨のある時、講堂の準備をするのもこ
 の係である。

便捨 前述の如く、各檻房の便所は桶で受
 ける様になっているが、この桶を始末す
 る係である。二階の便所桶は舎房の出口
 まで運ぶのが内掃の役目で、この中味を
 始末するのは便捨の役目である。

耕運 所内の畠を耕したり、物をトラック
 で運搬したりする役目である。市中を走
 る刑務所のトラックの上によく受刑者が
 数名乗っているのを見かけるが、彼等は
 この係の受刑者である。若しトラックが
 荷物を積む余地がない程、多数の囚人を
 乗せていたら、それは耕運でなくて、後
 に述べる外役の囚人である。

被服 受刑者の被服を作ったり、修理をしたり、洗濯をする係である。

ボイラー夫 正確に云えば、之は炊場に属するのである。刑務所では食物の調理も風呂もすべてスチームを使っている。

被服交換 受刑者が入所した時は囚衣を貸与し、出所した時は之を回収し、在所中の受刑者に対しては季節に応じて被服を交換し、使用に耐えなくなったものを交換する係である。受刑被告が出廷する時はこゝで二級の囚衣を貸して貰って出廷する。

各種工場 工場は刑務所に於ける職場の本体であり、受刑者の大部分は何処かの工場で働いているのである。十数種の工場がある。指物工場、金網工場、プレス工場、靴工場、瓦工場等である。

外役 外役には二種類ある。一は遠隔の地に相当長期滞滞して一定の労務に従事する場合で、この場合は刑務所の臨時分所の様な形になる。他は期間の長短は別として、近辺の場所で毎日通勤して一定の労務に従う場合である。凡そ刑務所に於ては仮令刑務所のすぐ隣であつても、一歩高塚から出て坊くのをすべて外役と云うのであるが、特に外役と称するのは刑務所外に於ける請負工事に坊くことを意味する場合が多いのである。

用務者 用務者と云う一つの職場がある訳でなく、各職場に於て、看守を扶けて受刑者の世話をする役目である。受刑者中最高の地位で一、二級の受刑者が之に当る。

衛生夫 用務者と同じく一つの職場を指すのではない。各職場に二、三名宛居り、用務者を助けて、受刑者の世話をする役目である。本来は衛生方面の仕事のためのものであるが実際は用務者の下役である。

使役 用務者、衛生夫の指図の下に雑務を行う。

例の如く、私は布団や食器など全財産を抱えて、二舎をあとにし、連れ出し担当に連れられて、二工の房である一舎に行つた。一舎は予て私達の憧れの的であつたので、私は非常に嬉しかった。入所以来、二ヶ月半を過ぎた二舎ともで愈々お別れであり、之から本格的な受刑生活が始まる訳である。私と同時に二工へ配属となつた者は十四、五名あつた。第二工場は二舎と「T」字形に建っている各工場の右端にあり、真中に一間幅の通路を残して、両側は高さ五寸程の床張のゆかになつてゐる。窓際中央には担当台と用務者机があり、背後の壁には級別に受刑者の名札がかゝつてゐる。担当台の側面には訓練工場と同じく、「大便の証」「小便の証」の木札が

数枚掛けられてゐる。担当台と通路隔てた反対側には便所、物置及び食器洗い場が並んでゐる。通路中央の柱には壁新聞用の黒板と、各房の清掃成績一覧表がかゝつてゐる。

通路の左側は針金の巻取及び切断する場所が半分、金網の側編みと仕上げをする所が半分とに別れて居り、通路の右側は半分が金網の底編みをする場所、あと半分にはわらで作つた円座が三十ヶ許り並べてあつて、之は私達二工の新人が坊く場所である。この場所では私達が行った時は古ロープをほぐす仕事をやってゐた。金網は真珠の養殖に用いられるもので、二尺五寸程の正方形の底に高さ五寸位の側をつけて、金網の籠に作り上げるのである。金網の底は立つて編み、側は坐つて編む。立編は新聞の見台の様な大きな板を斜めに置いたものに、碁盤の目の様に縦横に線を引き、四角に釘が打つてある。その釘に予て針金で作つてある四角い棒を引っかけ、板に書かれた線に沿つて、斜めに針金を編んで行くのである。網目のくびれは両手の拇指を使って太い針金を二回ずつ捻つて行くのであるから、見るからに指の痛そうな作業である。坐編は底が編上つたものに側をつける仕事で、義太夫の見台の様な台に底をすっぽりかぶせて、立編と同じ要領で編んで行くのである。金網の作業は古い受刑者の仕事で、新しく二工へ配属された者は先ず円座の席でロープ

ほぐしをやらされるのである。船が何かに使
つて、油のすっかり浸み込んだ、直径一寸も
あろうかと思われる太い古ロープが二尺五寸
程の長さに切つてある。之を手で捻じ戻して
ほぐし、細い麻糸にかえすのである。古ロー
プのこととて、ボロ／＼になつてゐる上に、
油がしみ込み固くなつてゐるので、細引ほど
の太さに戻すだけでも大変な仕事である。然
も之を更にほぐして、バラ／＼の麻糸にする
のであるから、仕事が捗らないだけでなく、
指に油がしみ込み擦れて痛くなり、容易なも
のではなかつた。一日の科程は一人一貫目だ
そうであるが、最初はその三分の一も出来れ
ば上乘である。その上、ほぐし方が悪いと文
句を云われる。ロープほどの世話をして
いたのは吉木と云う老年の受刑者であつたが
之が仲々意地が悪く、古い連中に聞くと、皆
に毛嫌いされてゐるので、新入の世話役に廻
されてゐるのだそうであつた。彼は刑務擦れ
のした狷介な老人であつた。之に引かえ二工
の用務者の大島さんは温和な老人であつた。
私と同時に二工の配属になつた者には同期
の訓練生や、二舎で馴染の者も沢山あつた。
後に同じ看病夫となり最も親しくなつた内山
君も私と同じ日に二工へ配属になつたのであ
つた。私と同期の訓練生で訓練担当の看守や
用務者の栢本さんを散々に手古ずらした例の
平田さんも同じ時に二工へ来た。担当台から

最も近い所に坐らされて、看視に便利な様に
してあつたが、平田さんは相変らずの脱線振
で「往生した」を連発してゐた。

二舎で一ヶ月余りの間、七房で共に暮した
高嶺君に二工で会つたのはなつかしかつた。
高嶺君は私が訓練工場へ行つた直後、二工へ
配属されたのだそうで、クリスチャンで坊っ
ちやん然とした人柄は相変らずとても強盗囚
とは見えなかつた。同君は金網の仕上げをや
つてゐた。二舎時代、房は同じでなかつたが
運動場で知り合いになり、日光浴をしながら
よく一緒に話をした辻岡と云う老人も矢張り
の工場で仕上げをやつてゐた。辻岡さんは或
る山間の小さな町の人だそうで、友人に貸し
た金の抵当にモルヒネを預かつたのだが、そ
の借主である友人が死んでしまつたので、こ
のモルヒネを売って資金の回収に充てたのだ
そうである。之が麻薬取締の法律に抵触して
責任を問われ、八ヶ月の刑に処せられたので
あつた。辻岡さんは目が悪いらしく、絶えず
シヨボ／＼させてはいたが、年の割には足腰
のしやんとした人であつた。辻岡さんは私が
二工へ来たのを大変喜んでくれ、色々世話を
してくれた。辻岡さんは森川と云う老人を紹
介してくれた。森川さんは一舎で私が入つた
房にゐる人であつた。森川さんは六十路を越
した白髪の美事な人であつた。後に身の上話
を聞いて驚いたのであるが、森川さんは殆ど

半生を米国で送り、帰朝後故郷で老後を養つ
ていたのであるが、附近に住む漁師に貸した
金が取れず、酒に勢をかりて、ピストルを持
つて請求に行き、先方が誠意のないのに業を
煮やして、ピストルを発射したのみならず、
誤つて火を失したのである。之が殺人未遂
並に放火罪と云うことになり、七年の懲役に
処せられたのであつた。森川さんは流石に英
語が流暢であつた。

夕方四時頃になると、二工の外へ炊場から
食事が運ばれて来る。やがて「作業罷め」の
号令がかかる。私達は円座の廻りを片付けて
手を洗う、その間に衛生夫と使役達は通路を
片付け、片隅に積まれた机と床几とを手早く
通路に並べて、食堂を作つた。二工の受刑者
達は飯の等級に依つて別れて坐るのであつて
私達ロープほどの四等飯のグループは指示
せられた机にかたまつて坐つた。全員が着席
を終つたのを見て、用務者の大島さんが「番
号」をかける、一番から五十番迄来ると、再
び一番に帰つて番号をとる、番号が終る
と、「総員八十五名」と云う風に看守に報告
し、看守の「配食始め」の号令で配食が始ま
るのである。

飯の数を等級別に毎日炊場へ報告するのは
用務者の大きな仕事の一つであるが、どの職
場に於ても毎日、転属、新入、出所等で総人
員及び飯の等級が変動するので、非常に複雑

且つ面倒なものである。この増減変更を毎日「食事異動報告票」に記入して、その日その日の食事人員及び等級別を報告するのである。「食事異動報告票」は担当看守から担任部長を通じて炊場に提出される。

扱、二工の配食は私が二舎や訓練工場で経験した様なゆっくりしたものではなかった。飯を配る者は端からどん／＼飯をくぼる、おかずは既につけ分けた菜食器を箱に入れて持って廻ると、机の端に居る者が人数だけ受取って各自へ順送りにする。お茶は桶を持ち歩いて、コップに汲んで廻る、之等が手分けして一瀉千里に行われるので、八十数名の配食が三分とはかゝらず、私達慣れない者は唯アレヨ／＼と呆氣に取られるのみであった。それだけに、どれを取ろうかと菜食器を取り迷ったり、六人宛坐っている一机の連中に順送りするのが遅れて、次の配食を手間取らせたりすると、すぐ「モタ／＼するな」とハッパが飛ぶのである。配食が終ると大島さんが「配食終り」と報告する。すると看守は「黙橋」と号令をかけ、「直れ」と共に、「頂きます」と云って箸を取るのである。

全員が食べ終った頃、看守は「休め」と云う、私達は「頂きました」と云って箸を置く。すべて訓練工場に於て教った通りである。配食にもまして驚いたのは跡片付けの迅速さであった。配食と同じく、衛生夫と使役が跡

片付もやるのであるが、食器を集め、残飯をバケツに入れ、食器の洗場で食器と箸とを洗い、之を再び机の上に伏せて、翌朝の食事まで干して置くのである。之が配食以上に素早いもので、食事が終ってから、「検身準備」の号令がかかる迄は、ほんの二三十分しか時間がないのである。その間に集めて洗って机に並べるのであるから、その迅速さは一寸想像出来ない。箸などは二本を間隔を置いて並べ、その上に残りの十本を並べるのであるが、洗い上げた箸を箱に入れて持ち廻り、各テ

ブルで人数分だけの箸を置く、その握った箸の数が一本も狂わず、ちゃんと一握りで十二本になっているのだから驚く外はない。

之で一日の作業は終りで、あとは房へ帰って休息する訳であるが、それには例の検身を通せねばならない。工場から二舎へ通じる所に三四名の看守が居り、私達はボタンを全部外して列を組み順次検身を受ける。検身が済むと、二舎の廊下をボタンを掛け乍ら歩き八角から一舎へ帰る、一舎に於ては私の房は第六号であった。二舎や訓練と違って、房の



一番席の廣田さんの像

何の気になした提灯は
代りしな
のであったが

人達は私より遙かに古い人達ばかりであった。一舎へ来て第一に気の付いたことは古い受刑者の人達がすべておとなしいと云うことであつた。ハツタリもなければ、受刑者特有の隠語も全く聞けなかつた。淡々として、受刑生活のその日／＼を迎え且つ送っている人達ばかりであつた。森川さんが一人／＼に私を紹介してくれた。一番上席の広田さんは二級であつた。今迄、私が房を共にし、仕事を共にして来たのは私同様四級の人達ばかりで一、二級は勿論のこと、三級でさえも世界が違ふ様に感じていたのであつたが、この六房では私一人が四級で、他は二級と三級ばかりであつた。従つて最初は少なからず固苦しく感じたが、二舎の生活よりすべて常識的であり温やかであると云うことがすぐ分つた。

一番席の広田さんはずんぐり太った田舎者丸出しの人柄の丸い青年であつた。広田さんの語る所に依ると、郷里の知人に著にも棒にもかゝらぬ人があり、その人が広田さんの家へ立寄つて、提灯を借りて行ったのだそうである、広田さんとしては、暗い夜道を帰るのに使うことと思ひ、何の気なしに提灯を貸したのであつたが、その男は借りた提灯で或家に放火し、その家人を殺して財物を奪つたのであつた。広田さんはそんなことはつゆ知らず、その男が奪つて来たふとんを一組買ったのであつた、広田さんは併し事情を知つて提

灯を貸し、その上に贓物の布団を分け前として取つた者と看做され、その男の共犯とされたのだそうである。その男は強盗殺人放火で死刑になつたが、広田さんは六年の懲役となつたのである。

長谷さんはずんぐり太った猪首の人であつた、現職の巡査の時、集団強盗に加つたのだそうである。

梅井さんはこの房では一番若く、鼻が高く、男と思えない程色が白く、やせ型の、歌舞伎の女形のような人であつたが、気持は鉄火な所があり、中でも胸から背へかけて朱と青で一面に入れられた刺青は肌の色が真白なだけにとても凄かつた。

中井さんはおだやかな人で、この人がこの房で私を除いて一番新しかつたので、便所側へ私と床をならべて寝た。

朝は起床すると、房の掃除をし、「出房」の号令に依つて、一舎の廊下に並ぶ。用務者の大島さんの号令で人員を点呼し、列を作つて工場に向う、二舎の外れの所で、係の看守が房の番号順に私達の称呼番号を読み上げると、大体その順番に検身を受けるのである。

二工には既に朝食の準備が出来ている。検身が終わると、各自工場へ入つて所定の席に坐る。番号、配食、黙禱といつもの順序で食事をとる。味噌汁は希望の者には増汁が自由に与えられた。食後小憩すると、すぐ「作業始

め」である。修理物のある者は朝食を済ました後用務者に頼むのである。用務者は之をまとめて被服の係へ持参すると夕方までには出来上つて来る、中食時四十分と午前午後十分宛の休憩がある、洗濯はこの休憩時間にやつて裏の干場に干してもよいのである。工場廻診や入浴は作業を一時中止して行われる。

二工では私の居つたのが短かつた故か、特に親しい人々を除いては覚えてゐる人はないが、田中と云う青年だけは印象が深い。彼は作業は針金を槌で叩いて延ばす仕事をやり且つ使役をしていたが、見るからにインテリで、寡黙で、確かに同年輩の他の受刑者とは違つた所があつた。読むものも、「ライフ」誌などを特別に借覽していた、田中君は高等学校まで行つたそうであるが、共産主義を信奉し、シベリヤからの引揚者に関し何か政令違反になる行為のため入獄したのだそうである、始終黙々として、何か哲学的な冥想にふけてゐる様な面持で針金をたゞいていた姿が非常に印象的であつた。

私達がロープはぐしの作業をやつたのは僅かに二、三日で、次はマッチ箱入替の仕事になつた。このマッチ箱は青い紙で側貼りされまだレットルの貼つてないもので、その青い紙に濃い藍色と薄い紫じみた色との二種類あり、外箱と中箱との取合せが、この二色まちまちとなつてゐるのが多いのである。之を整

理して同じ色の取合せにするのが仕事で、極めて簡単な作業であった。マッチ箱は二十ヶ又は三十ヶをわらで括り、之を集めて五百ヶを一くまりとする。この五百個の括りが四つ寄って一梱包となっていた。マッチの総梱包数は二十五であった。即ち五万個である。この整理仕事は二十五梱包、千円で刑務所が請負ったのだそうで、一個当りの手間は二銭である。この何十分の一かゝ受刑者の賞与金になるのであるから、この様な仕事に従事する受刑者の賞与金が如何に少額であるか分る訳である。

前に述べた様に金網の編立は三等飯であるが、私達マッチの整理組は四等飯であった。併し全部が四等飯と云うのではなくて、世話役の吉木さんとその手伝をしていた私と同じ房の森川さん及び梅井さんの三人だけは掃除などの立業があると云う理由で、三等飯になっていた。四等飯のグループの中で、三等飯を貰う仕事につくと云うことは、云わばそのグループの中で顔役になると云うことであつた。二工へ入って四、五日した時、私は之に選ばれる光榮を有したのであつた。仕事そのものは別に大したことではない、今迄すわったきりで、山と積まれたマッチ箱に埋まり乍ら中味の差替をやっていたものが、今度は皆に仕事の材料を分配したり、差替の終わったマッチ箱を結束する仕事に変わっただけである。

「なあ、春田はん。みんな四等飯やのに、この仕事になつたら三等飯やでええやろ。来た早々、仲々こんな仕事させて貰われへんのやで、みんなわしが話してやったんや」

吉木さんは恩に着せて頗る得意である。吉木さんなどには逆らわないに限るので、お蔭でよい仕事をさせて貰って有難うとお礼を云うと「しつかりやってや」と大変満足そうである。受刑者と云うものは一寸有力な地位になると人に恩を施して味方を多くしたがるものである。

倉房にも工場にも黒板が吊つてあつて、図書夫が毎朝配付するニュースを工場のその係りが黒板に書いて壁新聞にするのである。朝鮮の動乱をこの壁新聞で知つたのは二工に於てであつた。刑務所に於て社会を覗き得る窓はこの壁新聞と、東京の刑務協会から発行される「人」新聞と、ラヂオニュースの三つである。一般の新聞を読むことは反則である。

「人」新聞には世の中の動きは多少掲載されているが、断片的であり、新しいニュースとは云えない。ラヂオは各倉房にラウドスピーカーの設備があり、ニュースの放送も聞かせて貰えるのだが、ラウドスピーカーの音が散って殆ど言葉を聞き取る事が出来ない。之等

に対し壁新聞は仮令短くても、少くともホットニュースである。但しニュースの種類は政治と文化に限られてゐる様であつた。受刑者が世間の情勢を知りたがるのは当然であるがニュースの中でも誰もが最大の関心を持つていたのは講和会議の成行であつた。何故受刑者が講和条約の成立に多大の関心を持つてゐるか云へば、講和成立の場合は大赦が当然行われ、減刑の恩典に浴せるからであつた。刑務所に於ては一般の新聞を読むことが許されず、従つて講和問題の眞の成行が分らないのであるから、どうしても希望的観測が行われ、而も受刑者の中には必ずニュース、メーカーがゐるもので、見て来た様な噂が乱れ飛ぶのであつた。時恰もポツダム宣言から丁度五年であり、どうしても此際講和条約は成立せざるを得ないと云うのがニュース、メーカーの論拠であつた。日本国民として講和条約が一日も速かに成立するのを希望しない者はないが、受刑者は受刑者らしい立場から、日本国民の誰よりも切実な気持ちで、之を熱望しているものであつた。併し現実には講和会議はすぐにも開催されそうで、而も容易に実現しなかつた。

(続く)

女性切腹画に憑かれた男

伊藤和彦

私が女性の切腹姿態に関心を持つようになったのは、どのような動機だったのかわかりませんが、とにかく小学校の五六年生の頃からだったと思います。曲りなりにも

絵らしいものを画用紙に描くことが出来るようになった頃から、私は女性が裸体で切腹する絵を描いては独り楽しんでおりました。最初の中は鉛筆で描いた絵に赤鉛筆で血潮だけを赤く彩っておりましたが、その中次第にそのような絵では物足りなくなつてからは、絵全体に絵具を使って彩色するようにになりました。そうして、やむにやまれぬ本能の赴くまゝに一枚二枚と描きながら、いつの間にか十枚二十枚と貯つてくると、人には見せられるような絵ではないので、その隠し場所に困つてしまい、折角描いた絵ですが切出しで細かく切りさいて新聞紙にくるむと橋の上から川の中へ、そつと捨ててしまうのでした。赤や青で彩色された紙片が風に吹かれてユラユラと川の面へ落ちてゆくのをしている時は、もう二度と切腹の絵などは描くまいと心の中で決心するのですが、二、三日すると、もう描かずにはおれなくなつてしまふ

のです。こうして現在まで十数年の間、私は女性切腹の姿態をあれこれと研究しては幾百枚も描いたことでした。

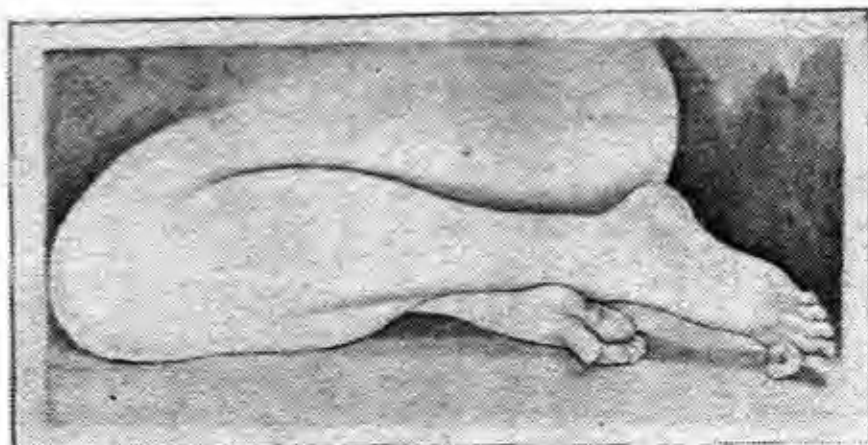
こうした私が一昨年の十一月号を書店の店頭で拝見致し、その口絵写真の中より、女性切腹の擬態写真を一目見た時の喜びと驚きは如何ばかりだったでしょうか、胸がぱいになってしまつて暫くはその書店の前を立ち去ることができなかった位です。この世の中でたった私一人が持っている性癖だと思つていた女性切腹愛好趣味がこのように堂々公刊誌に発表されていようとは、あゝ私が永年求めて得られなかった女性切腹の記事、画、写真、切腹マニアの私にとっては全く千金にも万金にも値するものだったのです。早速、パンクナンバーを求めて四月号で「信太蓉子さん」の「開花の契機」をはじめ今日に至るまで毎号掲載された切腹記事をむさぼるように読みふけりました。しかしその挿入された絵を見る度に私として何んとなく物足りなく思うのは何んとしたことでしょうか。そしてその度に自分の描いた絵をお送りしようと思つてはれつ子さんではありませんが、自分で描い

た絵より他の人の描いた絵を誌上で拝見する方が楽しみなのですから、ついお送り致さないのです。

しかし、今日書店で奇ク五月特大号を手し、杉原虹児氏の「介藉無用」を拝見して、自分も一つ、真実味と悲愴美を出して描いてみようと思立ち、田谷敬先生の言われるような「女性切腹画集」を考えました。その内容は次のようなものです。

「女博徒」「二人の女性」「オフィスガール」「女子高校生」「ヌードモデル」(以上下絵スミ)「白衣の看護婦」「娼婦」「大家の令嬢」「芸者」「女中」「妾」「ダンサー」「喫茶店の女給」「農家の娘」「上流婦人」「花嫁」「セーラー服の学生」「ストリッパー」「女優」「社長秘書」「若妻」「夜の女」「妊婦」「女親分」(以上構想だけ)

このように色々の場面を考えましたが、切腹の画は中々むずかしいもので、傷口を書くのに犯罪誌に載せられた切刺死体の傷口等を調べ、更に人体解剖図などで腹中の模様を参考にしながら描くのですが、真実性が五分、あとの五分は絵の美しさを描きたいと思つておりますが、中々思うように描けないものです。出来上りましたらお送りいたしますから女性切腹画に関心をお持ちの方々の御批判をお願いします。



懸賞

告白と手記と体験

入選

素 足 禮 讃

—美しい女性の素足への憧れ—

高原 正 夫

ま え が き

私は少年の頃から美しい女性の素足に魅力を感じて居た。足と言っても色々の部分があるわけであるが、私の興味の対象は専ら踝から下であって、その素足の形、色艶、足の指爪の恰好等が特に興味の中心であった。それから私にとっては欲張ったことと思われるかも知れないが、顔と足と両方が奇麗でなければ満足出来ないで、素足が如何に美しくても、顔形が余り醜いと興味を覚えないのであ

る。

さて、この興味をめぐって、様々な体験が繰り広げられるわけであるが、それをこれから記してみたい。主なものは、私が遇ったところの素足の美しい女性達の記録と、それらの素足を如何にして写真に収めて、自分の好む時と場所でこの芸術品を鑑賞出来る様な状態に置くことに成功したか、という苦心談（？）映画等に出て来る女優の素足と、それから、女の足を中心としたエロチシズムと幻想奇談エロチシズム等である。

従前、私は、足部愛好の性向を弁護して、「人が人間の何処の部分に興味の対象にしよう、それはその人の自由であり、世間というノーマルとアブ・ノーマルとの差異は、数と程度の問題にしか過ぎない。即ち、普通多数の人は人間の顔の美醜を問題にするが、その中でも或人は顔形の全体を、或人は表情を又或る人は部分である目を、唇を、又或る人は特に鼻に興味を唆られると言う。或る人は顔よりも全体の姿態に、或る人は乳房に、脚にそして或る人は足部に、それは畢竟好む人の数と程度の問題ではないか。顔を好めばノーマル、足を好めばアブ・ノーマル、それでは乳房を好む者はどちらに属すると言うのであろうか。もし足部崇拜をフット・フェチシズムと言うならば、顔を好む者は、フェイス・フェチシズムと言えるかも知れない。足を好むものが少いと言う理由で特にフェチシズムと考え、又ひけ目を感じることは無からう」などと考えたこともあったが、昨今ではそんな理屈はどうでもよく、ただ相手方にも第三者にも迷惑をかけないで而も自分が楽しめることが出来れば、それで何も言うことはない簡単な割切っている。相手に迷惑をかけることは、相手の身体や心を傷けることをしないこと、特に心を傷けないとは自尊心や羞恥心を傷けたり嫌がるのを無理強いたりしないこと、第三者に迷惑をかけることは

これを見たり聞いたりした人に嫌悪の情を催させないことである。相手方と第三者に迷惑をかけないというこの二つの原則は私達が社会生活を営む上に必らず守らなければならぬことで、もしこれを逸脱すると社会的制裁を受けても己むを得ない。同好の士が少ないことをアブ・ノーマルと言えと言え、それは必らずしも卑下するには当たらない。戒心すべきは、相手や第三者を傷けることによって社会的制裁を受けることのない様にするにある。

話が聊か理に落ちて恐縮であったが、私はずっと前から、奇クがまだ大判だった頃から奇クのこよなき愛読者で、毎月今や遅しと待ち兼ねて購読している次第であるが、奇クは兎角カサカサで尤もらしく取澄し勝ちな我々の生活の中に、大胆にして卒直に人生のあるがまゝの姿を示し、憩いと潤いを与えてくれる貴重な存在であると常々敬意を表し、且つそれだけに編集上の御苦労も多いことと御同情もしている次第であるが、その誌上に屢々女性の素足礼賛の士を発見し、私の知る限りでもその記事は七、八篇に達し、共鳴を覚えると共に、ここに私自身のつたない記録を加えて更に同好の士の御参考にしたい。

素 足 礼 賛

私が女性の素足に興味を持ち始めたのは何

時頃からだったかはっきりしないけれども、小学校五年の時、その頃通っていた東京の下町の小学校に奇麗な女の図画の先生が赴任して来て、その先生の素足がどんな恰好をしているだろうか、何とかして一目でも見るわけに行かないだろうか、などと、子供心に様々な空想を描いて心をとめかせたところを見ると今からもう二十年近くも前からのことになる。その女の先生は、その頃二十才位だったと思う。円顔で色白く何時も和服に袴をはいてニコニコして殺風景な学校の中に何かほのぼのと灯を点した様な感じを起こさせる人だった。私はその頃から図画が得意だったのでその先生に可愛がられた。私も子供心にはのかな恋心と言ってはおかしいけれども、憧れをその先生に抱いていたかも知れない。そして、こんな奇麗な先生の、あの

白い足袋に包まれている足の皮膚の色、足の指、足の爪は一体どんなに素晴らしいものだろうか、皮膚はきつと成熟した蚕の様に白く透き通って、形良く奇麗に並んだ十本の足の指先には真珠か宝石の様な足の爪がちりばめられているに違いないなどと空想を馳せ、夏ともなれば先生も家では青畳に素足でいるに



達いない家に遊びに行つて見ようかなどと思ひ乍ら、さすが子供のことでとてそこ迄の勇氣もなく、或る時は大道商人がその頃十銭か二十銭だったのだから「何んでも透けて見える見える魔法の筒だよ」と言つて売っているのを見て真に受けて、これで先生の素足も足袋を透かせて見ることが出来るだろうかなどと

思つて買ったことなどもあった。それから中学時代は女性とは縁が遠くなつてしまつたけれども、今度は同性に対して柔道の時間には皆が靴下を脱ぐのでその時間が楽しみだつた。誰君の足の指は細長いとか、誰君の足の爪は桜色をして奇麗だなどと観察して組の中で十人位迄は奇麗な順に順番をつけて誦んでいた位である。

大学予科になつてからは、そろそろ思春期になつたからであらう、同性よりも女性の素足にひかれるようになって、春風が吹き出すと私の心は街行く女性の素足によつてはずむのであつた。予科、学部時代を通じて、私は近所の美しい女性の素足は大抵誦んでいることが出来た。あのタバコ屋の娘さんは評判の美人であるが、時々見える素足もまた素晴らしいとか、あの果物屋のマダムは界限随一の美人と言われるが、足は顔程は奇麗でなく寧ろ普通であるとか、近所の菓子屋さんの娘は顔も愛くるしいけれども、その素足に至つては一寸類がない程美しいとか、一人一人指摘することが出来た。

学部を出てさる大会社に就職した。此処には奇麗な女の子がたくさん居る。けれども彼女達の素足を見る機会は殆どない。夏になると靴下を脱いでサンダルになるが、僅かに足の拇指と第二指のほんの先の部分だけ見えるだけで全体は分らない。年一回会社の慰安会で

一同温泉に行く時位、彼女達の足を見る機会に恵まれると言へば言えるわけだが、温泉に行つても大抵女の人達は女だけで固まっているので男性がそうウロウロと近寄るわけにも行かず、遠くから瞥見する程度で、とても仔細に観察するなどとは思ひも寄らないことであつた。

写真に収める

それやこれやで私は彼女達の素足を写真に収めてしまふことを考えた。靴や靴下を脱がせて、白い素足、整つた足指、愛らしい足の爪がガッチリとフィルムに収めてしまおうというのである。女の子も「写真を撮ろう」というと大抵厭とは言わない、けれども、私が希望する様に素足その物を写真でゆつくり鑑賞出来る様に大きくはつきり撮るのは技術と経験を要するのである。

最初私は超小型写真機で相手方の気の付かない様に盗み撮りをしようと考えたが、これはいまう行かなかつた。超小型写真機では、余程対象物に近寄らなくては撮れないことであり、目指す女性の足から半米位の所迄こっそり機械を持って行くなどという芸当は殆んど出来ないからである。たつた一度やや成功したのは、或る夏のこと社用で京都に出張した時、円山公園だったかで奇麗な三人連れの女性に出遇つた。今はつきり覚えていないが

夏の夕方ので、多分俄か舞台で盆踊りかなんかあつたのであらう、この三人も浴衣姿だつたと思う。たくさん並んだベンチの最前列に彼女達は腰を下した。私はその中で一番顔も足も美しいと鑑定した女性の隣りに腰を下し、頃合いを図つて写真機を彼女の足から半米位の所に近付け、従つて狙いを付ける必要上私の顔も写真機と一緒に彼女の足から半米位の所迄近付けたわけである。四五枚パツチリパツチリとやつた。こうなると盗み撮りどころの騒ぎではない、はつきりその女性も或いはその友達も気が付いたと思うが、別に何も言わなかつた。私も生れて初めての経験で照れてしまつて、盆踊りを見るところでなく早々に引揚げた。帰京後現像してみると、成る程写つてはいたが、兎に角余り小型なもので鑑賞に堪えなかつた。

次に私が考えたのは近所のタバコ屋の娘さんである。顔なじみの彼女は私の写真撮影の申込みに対し直ちに快諾してくれた。この人は当時二十二、三で、何時も和服を着て、色白の日本的な美人だつた。それで、しやがませたり、寝そべさせたり、いろいろ撮つてみたのであるが、人間全体を主としたものでは足の方が小さくなつてしまつてこちらの目的は達せられない、それで、その次の撮影の時写し乍ら、「日本の女の人の素足は世界で一番美しい」と外人は言っていますよ。僕の知り

合のアメリカ人が、日本女性の素足の表情の写真が欲しいと言っているのですが、貴女の足は奇麗だから撮らせてくれませんか」と持ち出した。私は実は会社でも渉外関係をしたこともなく、アメリカ人の知り合いなど一人もなかったのであるが、これも方便と偽りをいったのであるが、これに対して彼女は「まあ」と言い乍ら厭とも言わず撮らせてくれた。先ず裏庭に連れて行くと、そこに一疊敷き位の小さな泉水があつて金魚がいたので、その池の縁に立ってもらい、「足と金魚を撮ります」といって、写真機を近づけ、下駄履きの素足にピンントを合わせてパチリとやった。金魚など実はどうでもよかったのである。

それを皮切りに、今度は両足を揃えて前に投げ出させ、レンズには接写器を付けてクローズ・アップで撮ってみた。それから横に長々と足を投げ出させたり、横座りにさせたり様々な姿態をさせ、最後には足の爪を切るなまめかしい姿、また右手に鉄を持って左の二本指で足の拇指をつまみ上げ、爪を切っているその箇所を大きく接写で撮ったり、憧れの素足を縦横無尽に二、三十枚撮ることが出来た。



彼女は終いに、「もう足は結構ですわ。私は足には自信ありませんわ、と言って顔に自信あるわけではありませんが。」とか、「私の姉（嫁いで家に居ない）は足が神経質というか、表情がよく動きます。」とか言っていた。これが私の手がけた最初の人であつた。この時は最初だけに、ピンントをのぞき乍ら、さすがに胸は高鳴り目は霞んで興奮の状態に終始した。後になって、「貴女の足の写真御覧になりますか」といったら、「いゝえ、結構ですわ」といっていた。当時既に縁談があると聞いていたが、今は何処に居るのであるうか。次は菓子屋の娘さんである。ブラウスにス

カートという普通の姿だが、その母親が、「靴下を履いたら」というのを私は、「いやそのままで……普段のままの方が良いのです」と抑えて、素足に下駄を履かせ、これも先ず全身からと、立ったり腰掛けさせたり、横座りにさせたりして二十枚許り撮った。横座りの時、彼女は恥しいのだろう、足をスカートで隠そうとするので、「いや、足を出して自然の方がいいですから」と言ってフィルムに収めた。それから、最後の三枚許りは、「向うを向いて下さい」といって横座りの足の直前に接写器を付けた写真機を近づけてパチリパチリとやってみた。然し、後から考

えてみると、この時はきつと自分の足を撮られたことに気が付いたと思う。それは兎に角として、第一回目はこの程度にしておき、第二回目るとき、写真を撮り乍ら、「今度は足を撮らせて下さい。貴女の足はとても美しい」といふと彼女は、「まあ、足が奇麗だなんて生れて初めていわれましたわ」といふ乍ら厭な顔もしないで撮らせてくれた。横座りにさせたり、両足を揃えて前に投げ出させたり足の爪を切らせたり、様々な

姿態をさせて、これも接写器を付けて大寫しで思う存分撮影したことはタバコ娘と同様である。この娘さんには、足指に力を入れさせて、内側に弓の様に曲らせたエロチックな表情もさせてみた。これは女が歡喜の絶頂か、苦悶の極致（例えば死刑執行―絞首刑の―を受ける際）に行う素足の表情であるという。結局彼女の足だけで二、三十枚撮ったであろう。撮り終ってから、「これ写真屋さんに出すのですの」と聞いていた。一寸気になったのだろう、私は現像は写真屋さんに出したり自分でやったりいろいろである。

三人目は会社の女の子。人気のない屋上に連れ出して、五、六枚顔など撮って馴れさせてから、「靴を取って下さい」というと彼女は黙って靴を脱いだ。「それから靴下も……」彼女は黙々と靴下も脱ぎ始める。すんなりした牝鹿の様な足が、そして待ちに待った素足が、会社の温泉旅行などでも仔細に鑑賞出来なかったその素足が、今や私の目の前にある。甲がこんもり盛り上がり、全体にはっさりした可愛い足、第二指が拇指より心持ち長目で、而も形良く並んだ十本の足の指、その各々には桜貝の様な足の爪が輝いている。私の心臓は高鳴った。さて気を落付けて、それから前と同じで色々な姿態をさせて撮って行き、最後に一枚、菓子屋の娘さんと同じやり方で、向うを向かせてソッと足だけアッ

プで歎し撮りしてみた。これはどうやら感付かれなかった様である。その日はそれで訓練？を終り、別の日は撮影途中で、「足を撮りましょう」と切り出して、心ゆく迄撮らせてもらう。最後に彼女は、「いやだなあ」といっても、もう遅い。既に彼女の美しい素足はガッチリと、確実に、永久にフィルムに収められてしまっているのである。これ以上追いかける必要は毛頭無い、深追い、無理強いは禁物である。

外にも二、三人撮ったことがあるが、何れも大同小異であるからここに繰り返さない。ただ、一人の娘さんは最初五、六枚普通の写真撮り、それから「靴を取って下さい」というと例の如く靴を脱ぐ、それから、「靴下を脱いで下さい」というと、「恥かしいわ」といふ乍ら、恥かしそうに靴下を取っていたけれども後は同じである。

中国や欧米の女性は、素足を人前に出すことを恥かしがると聞いているが、日本女性は習慣上平気である。私は日本人に生れたことを感謝する。横座りの時、足先をスカートで隠そうとしたり、靴下を脱ぐ時、恥かしいといったりするのには、矢張りそうした心理があるのであらうか。

或る時は折角靴下を脱がせてはみたものいざ素足を撮ろうと、しみじみ観察してみると、それ程奇麗な足でもないので興がさめて

足だけの撮影をやめたのが二、三あった。何しろ普段は足を具さに観察する機会がないので、前に書いた三人の様に前々からちゃんと足が美しいことを見届けてある人は別として、「この人は顔が美しいから素足も撮っておきたい」とか、普段一寸垣間見て足が奇麗だと思つた程度のものは、いざ靴下を脱がせてしみじみ観察するとそれ程でもないことがあるのは已を得ない。

さて、素足愛好者にとっては、美しい足を写真に撮って置くと、何時でも何処でもこの芸術品を鑑賞出来るから、気分が落着くものである。今迄貴誌で時折り拝見したところによると、女の素足を思つて仕事や勉強が手に付かないというのがあつたが、それでは困るので、寧ろ憧れの対象物を利用して、仕事や勉強の足しにする位でなくてはいけない。それには、自分の美しいと思う女性の足の写真を写して持つていけば、気分が落着き、勉強に疲れた時などは、却つて、リクリエーション？になるであらう。

撮影に際しての御注意を申上げると、さきにも一寸触れたが、決して無理強いしないことである。女性の心理というものは男性と違って漸進的のものであるから、何をするにもいきなりするとびっくりしてしまつて、出来るものも出来なくなるから、徐々に持つて行くと、男性顔負けの様になることもある。前

に書いたタバコ娘も、いい加減撮って、「さて、今度はどう撮ろうか」と思案していたら「足の爪を切りましょうか」と積極的に言い出して来た。それは兎に角として、足を撮る場合にも、いきなりやるとびっくりしてしまふだろうから、普通の写真を撮り乍ら段々馴らして行くがよい。たゞ、写真を撮られていた時、女性是一種の雰囲気に入るものらしいから、そのテンポはそれ程ゆっくりでなくてもよい。一例をいうと、最初の数枚は顔や全身を撮る、それから、靴と靴下を脱ぐことを丁寧に頼む。大抵は脱いでくれる。少くとも私は断られたことはない。そこで腰かけさせたり、横座りにさせたりして何気なく撮る。何気なく撮り乍ら一番足を真正面からはつきり撮れるのは横座りである。立ったり腰かけは駄目で、しやがませてよいこともあるが、これは下駄を履いている時に限る、跣足では駄目、要するに角度の問題である。これは結局実地で会得してもらふより外ないことであるが。

商売女はもっと簡単に撮れるのではないかと思われるが、私はその経験がないので何んとも言えない。

私は写真は学部を出てから習ったが、美しい女性の素足をフィルムに収めたい一心から現像、焼付、接写の技術まで短期間に習得し大いに楽しんだ。



新しいコルセット

一柳真砂子

真っ黒いなめし皮の内側いっぱいについた小指位のゴムのイボ。乳房の当る所にはスポンジがついていて、強い鋼鉄のパネが六本、たてに通っている。背中の編みあげのような紐。そして何よりも嫌な悪魔のゴムイボが二つついている。私は着せられるまで荷物でも縛るように転がされて背中のひもをしめられる。スポンジに圧された乳房の痛み、しめつけられる胸の苦しみがちりちりしめつけられるような腰部の圧迫感そして無数についたゴムイボが身体全体をチクチク痛めつける。そして更に最後のチヤックでしめられる。もう小用迄チヤックを取ることが許されない。母のイボは三つ

小用はそのまましやがんで足せるそうだが。私はこの上にセーラーだけを着て学校へ行く。イボが私をさいなんで十歩も歩くと道ばたへ座り込まねばならない。裸で歩いているような感じ、母は今度は内側に一ぱい毛皮を張ったものを注文した。母はイボのあるコルセットを着てミシンもかけるし自転車にも乗る。この頃の母はコルセットマニアを少し出てマゾらしい。裸の胸に帯を一巻きして両はしを引っばらせ、沢山飲んでいた水を吐き出したり、お小水をこぼしたりする、胸をしめつけられてくびり殺されたら本望だという。

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第九十一 人間から畜生へ

「丹夫人の化粧台」に不満を感じるのは、思いつきの面白い割に現実性の裏付けの手薄なことだ。化粧台の中に男が入っていたとして、排泄物はどうして捨てたろう。食べ物はどうしたろう。腹心の召使がいれば別として、全くの一人で、これを、旨く処置できようか。夫はともかく、召使全部の目を、誤魔化すことが、可能だろうか。それも、短い期間ならともかく、十二年間も隠し続けることがどうしてできたのだらう。これらは当然起る疑問である。これを説明し得なければ、単なるお伽噺になってしまう。

これを一応説明するための私の想像と、愛人の愛玩動物化の模様の空想とを以下に述べて、マゾヒストの読み方はこんなものだ、という見本を示すことにしよう。

私の空想によると、千鶴子が女学校四年生の時、早熟な美少年鈴木譲二と知り合った。彼は秀才の集る中学でもずっと級長を続けているし、運動部の主将でもある。親の目を盗んでの逢曳が重ねられやがて彼女は懐胎に気付いた。誰にも打明けられず、二人が悩んだ時、彼女に丹家からの縁談が来た。事態を收拾する唯一の方法は、

すぐ結婚に応じて、丹博士の子として生む以外になかった。それを強く勧めたのは譲二である。では捨てるのか、という彼女の詰問に対して譲二は、悪魔的な計画を説明した。結婚祝に夫妻の新居を建てて貰う様にすれば、それに特殊の設計をして、何時でも彼女と一緒に居られる様にすることが出来る、というのだ。危ぶむ彼女を彼は次の様に説得した――

――大丈夫だよ。自分の住む家屋なんだから、間取や構造や、設計の我ままは許して、と強く云えば、誰も否とは云えない。

――でも、何のために、化粧台の中にこんなものを作るんだって怪しまれないかしら？

――丹家の召使もいるし、召使に知られたくないこともあるから自分だけの金庫代りに、こういう鍵のかかる秘密の場所が欲しいって云えば、そうかと思うよ。中に人間が入るとは誰も思やしない。

――だけど、旨くいくかしら？ お手洗なんか困るわよ。便器を捨てにいくたって、見つからないものでなし……

――それはね、こう考えてるんだ。化粧台の横に洗面台を取付けるその排水管が壁の中で、僕の入ってる箱のすぐ横通るように設計するのさ。その排水用の鉛管の中途を切って、曲った管をつぎ足して排水管が一旦箱の中へ入り、箱から又外へ出てゆくように工作する

位は、素人の僕だつてすぐできる。用が足しなくなったら、箱から出てゆく方の管の中へする。……………

化粧台の奥の続きに水洗便所を作っておいて、その下水管が箱の下を通るようにしておけば、箱から出た管は真直ぐ下の下水管に開孔するから詰まる心配もない。大便も小便も、中に入ったまま済ませられる。管は普通より太いのにする必要があるけどね。

——そう旨く行けば良いけど……………

——大丈夫だよ。それにその仕掛で、飲用水も解決しちゃう。ね。

時々その洗面台の蛇口で水を出して貰う。そうすれば箱の中にそれが来るわけだ。それを飲むのさ。

——その洗面台は普通のことには使えないのね。

——うん、それは奥の手洗の方でやって貰うんだね。こっちの方では、水だの、茶だの、ミルクだのを捨てるだけにして貰う……………

——食事はどうするの？ 譲二さんのために特別に作らせるわけには行かないわよ。女中を一人買収しとけばできるかも知れないけど——召使には絶対秘密がよい。買収できる奴は他人からも買収されるからね。

——でも、どうするの、それじゃ？

——一日中、じっとしてゐるんだから、どうせ大して腹は減らないと思うんだ。少しの分量で良いから、何とかやって貰う。君が夜食にパンを食べるからと云うことにして私室に運ばせるのなら怪しまれないだろう。一々化粧台を開かなくても、抽斗の奥に置いて抽斗を差込むと、中からそれを取れるような仕掛にしとくから、そのパンを抽斗に入れて呉ればよい。

——それ位なら、できそうだけど、そんなことで足りるかしら？

まあ、栄養剤は同じやり方で、いくらでもあげられるわけだけ……

——日光の射さない所にいるわけだから、肝油とかビタミン剤とか色々要ると思うんだ。だけど、それは、君が使うことにすれば

怪しまれないさ。

——そうね。

——足らなかつたら、猫をだしにして貰う。

——猫？

——うん、猫さ。それはね。中から用があつて君を呼びたいって場合に、まさか声は出せないからね、猫の鳴声をしようと思うんだ。化粧室で猫を飼つてれば、鳴声が出しても怪しまれないからね。

——まあ、譲二さんが猫の鳴声を出して私をよぶの？

——そう、そうすると猫の定位置は化粧室ってことになる。だから猫の餌もそこでやるわけだ。それを僕が横取りする……………

——まあ嫌だ、猫の御飯をあなたが食べるの？

——だからそこは君のやり方次第さ。女中達にはこの猫は大食いでも口がおごっているって、言っておけば怪しまれないよ。御馳走があつたら君が残して「これは猫におやり」って風にするのさ、魚でも丸のまま猫の餌にやることに定めるのさ。そうすると、僕がそれを食べて、その骨を本当の猫に残しておく。

——それにしても、あつたかい御飯は食べられないわよ。猫の御飯ていえば、汁掛御飯になるわよ。まさか、うちの猫には汁碗と皿と御飯と別々に出せというわけにはいかないわ……………

——仕方ない。千鶴ちゃんの傍にいつも居られるんだから、それ位のことはあきらめなきや。

——譲二さんがそれで良いというんなら、それまでのことだわね。……………たしかに、生命が維持げらるってことは分ったけど、ずっと、その中にいるんだと、もっと色々困ったことが起りそうだわ。着るものの洗濯だつてできないわよ。布団も乾せなわよ。

——千鶴ちゃん、僕ね、この計画を立てた日から、シャツは一枚にしたし、夜は敷布団なしで、勉強部屋の板の間にじかに寝てるんだぜ、ママには西式健康法だということにして、分る？ 少しでも早

く馴らした方が良くと思って、早速練習始めたんだよ。

——？

——僕は裸だ。着物も布団もなしで箱に入る。

——まあ！

——色々考えて見たけど、結局、着物を持ってるのが発覚の元になる。洗濯はできないし、新しいのと取換えれば、古いのの処分に困る。布団なんか乾せないと湿る一方で、かえって不衛生だと思っただ。だから、裸が一番安全で、あとくされがない。そこまで決心してるんだ。

——だけど、そんなことで身体が持つかしら？冬なんか、凍えちゃうわよ。

——心配要らない。暖冷房が入れば、室内と同じだからね。念のために、暖冷房用の送気管が床下や壁の中を這う時に、箱の横を通るように設計しておけば良い。この位は設計の自由で、怪しまれないで済むよ。どうせ風は来ないし、馴れれば平気だと思うんだ。

——でも……素っ裸なんて、人間じゃないみたい。私、譲二さんが、そんなまるで獣類見たいになるの悲しいわ。ねえ、譲二さん、やっぱり、駆落しましょう。……

——千鶴ちゃん、まだそんなことをいう。今二人で逃げたって、すぐ見つかることは、この間、あんなに説明してあげたじゃないか。そんなことすれば、僕は引離されてもう会えなくなるか、それとも心中するか、どちらかに追詰められてしまう。二人の仲を救うためには、君が丹家にお嫁入して僕の計画を実行するしかないんだ。——それは分るの。でも、譲二さんが、いつも裸でいるなんて考えるの、恥かしいんだもの。

——時々、逢いに行くのなら、又逢えるのなら、こんなこと考えやしない。僕だって、このまゝ学校を続けて行って卒業すれば、パパの社長の椅子が待ってるし、もっと出世もしたい。その傍らに君と

関係出来るのなら、勿論そうしたいのさ。だけど、それはできないだから、僕は外のことを一切あきらめて、この計画を立てたんだ。君と一緒にいるために、人間並の生活を捨ててんだ。裸になること位辛くないさ。どうせ、他の人達に見られるわけじゃない。君の前に姿を見せるだけだしね……

——分ったわ。そのとおりね。一緒にいる方法がそれしかないのなら、譲二さんのいうとおりやるわ。

——分ってくれたね。

——でも、何だか心配ね。もし、私が出先で怪我でもして、戻らなかったら譲二さん死んでしまうわね。

——そんな時には仕方がない。幸運を祈る丈だ。もし又君が死んで戻ってこないのなら、僕も死んで差支えないんだし……僕ね、遺書を残すつもりなんだ。失恋して人生に希望を失いましたから、自殺します。死体を捜さないで下さいってね。自筆の遺書があると、警察もあまり捜査しないそうだから……死体が出なくても何年か経つと死んだことにされるそうだよ、失踪宣告といってね。

——箱の中にいるまゝ、死んだことになるの？

——そう。「生ける屍」になるのさ。僕は覚悟の上だよ。

——私、何だか恐いわ。

——大丈夫、僕を信頼し給えよ。

——ええ、今の話は分ったわ。設計のことさえ父様に旨く話せば、そのとおり実現できると思うわ。それでもやっぱり恐いの。今こうやって二人の関係がこのまゝ続くかどうか、心配だわ。

——何をいうのさ。二人は誓い合った仲じゃないか。二人が離れたくないからこそその計画で、計画どおりゆけば、一生一緒にいられるんじゃないか。

——でも、今と同じ関係じゃないわ。

——どうして？

裸の譲二さんと今の譲二さんとは、違うわ。

同じさ。

違うわ。私も裸なら、同じだけど、私は裸にならずに譲二さんだけが裸になるんじゃないや、違うわ。

千鶴ちゃん、この計画が気に入らないっていうのかい？ 一緒になるのがいやなのかい？

いやだっていうんじゃないの。何だか今の譲二さんがいなくなる見たいな気がして、恐いからなのよ。

僕は変りやしないよ。裸になったって、鈴木譲二は鈴木譲二さ。

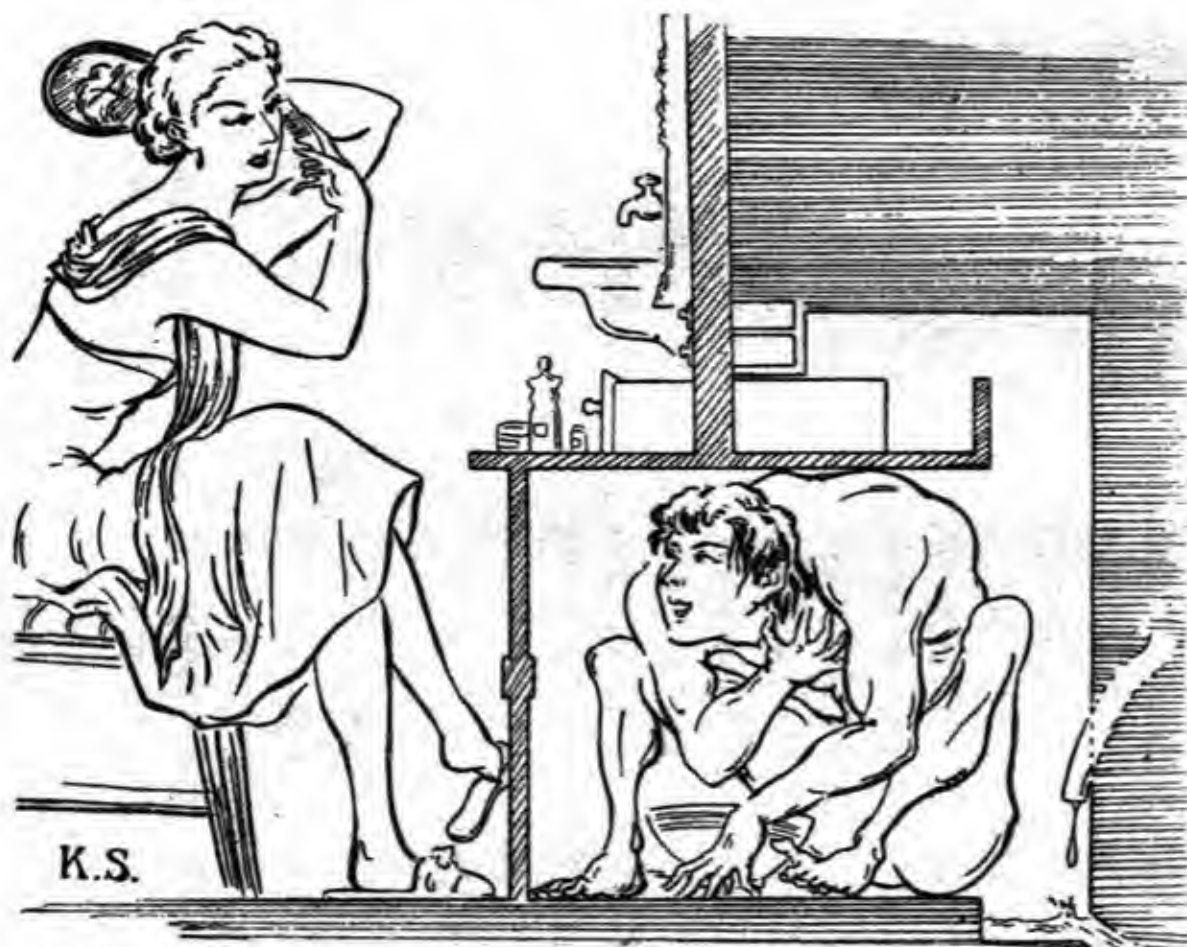
譲二さんは恐くないのね？ で悔むようなことはないのね。

ない。

—それしか方法がないんなら、やるしかないわね。設計のこと話してみるわ。

—うん、旨くやってくれよ。

こうして計画は実行に移された。丹夫妻の新居が、やがて落成した。結婚後流産した夫人は、私室で猫を溺愛しているようだ。女学生の頃には、アルプスにも登った旅行好きの彼女が、急に泊りのある長旅を嫌がるようになったのも、結婚して家庭的になったためとして、怪しむ人もない。譲二のプランは見事に成功したらしい？



三年後のある夜の化粧室。

珍らしく博士が夫人の寝台を訪れ、一刻を過して、真夜中に自分の書斎兼寝室に引き上げて行った。博士を送り出した夫人は、パジャマのまゝ隣りの化粧室に通ずる戸をあけて入り、化粧台の鍵を廻した。

—譲二さん。

出て来た少年の全身は青白くなり、背中が曲りかけている。そして顔にはひげが生えて来ている。寝室に導いたが、いつもと異って夫人は何か話があるらしい。

—今日、あんたの失踪宣告があったのよ。

—そう、もう三年になるかな。

—自殺の遺 があるっていうんで、裁判所でも割と楽に出したらしいわ。

—とうとう「生ける屍」になったね。

—あんたを私が殺したって、もう殺人罪にならないのね。あんたはもう法律では人格を認められていないんだから。鈴木譲二は抹殺されたのよ。

—分ったよ。千鶴さん、そんな話はもう良いから……早く……

—千鶴さんなんて馴れ馴れしく呼ばないでよ。

—え、どうしたのさ、急に。

—今日から、少し、やり方を変えるのよ。

………人間でなくなった以上、人間扱いにしたいからよ。私初めからこの化粧台の中に住む人なんて人間らしい気がしなかった。けれど、今迄のことがあるから、遠慮してたの。だけど、裁判所でさえもう人格を認めないんなら、これ以上遠慮しないわ。はっきりいうけど、あんたの生活は畜生の生活だわ。もうあんたなんていいわ、お前よ、お前は畜生なのよ。

………これからお前を畜生扱いにするの。畜生だから、箱から外に出ても、これからは立って歩いちゃいけない。這うのよ。私が許さなければ、口もきいちゃいけない。頭の毛をこれからは、たてがみ見たいに長くお申し。今迄私がひげを剃って、いくら頼んでもきかなかったけど、今度は私が命令するわ。あとで毛抜きをやるから暇にまかせて一本一本皆抜いておしまい。脇の下やおへその方の毛も皆そうやって抜くのよ。今迄私のいうことをきかなかった罰だわ。それから、お風呂に入れないんだから、もっと身体の垢を擦っておきなさいって随分云ったけど、やっぱり今日だってくさいわ。これからは、こんなこと許さないわ、昼間のうちに、しよっ肌を擦って水で洗って綺麗にしておくのよ。

………これからは君が主人になるのか………

———それ、勝手に口をきいちゃいけないって云ったばかりじゃないか。お前なんか一生口をきかなくなつたって私困らないわ。一日中化粧台の中にいて、世間と交渉のない男に何の新しい話が出るのよ。お前はだまって私のいうことをきいて、そのとおりにすればいいの、そうすれば、ベットでは今迄より可愛がってあげる。お前は私のそばに一生いるのだけが望みなんだから、それで満足だろ。畜生だって何だって、私に可愛がってさえ貰えばいいんだろ。そうさ、分ってるのよ。………大体お前の自業自得なのさ。あの時私は随分躊躇したのに、お前が押しきつたんだから。人間を畜生並に扱うことの楽しさを私に教えたのは、お前なんだよ。化粧台に入れと私が勧めたわけじゃない。お前が望んだんだ。私のそばにいられさえすれば、人間並の生活はいりません。といって、自分から飛び込んだんだ。その私がお前の思ったよりも残酷になったからって、私のそばにいられる限り、お前は不足は云えないんだよ。後悔しませんでした。………いうことはそれだけ、箱にお戻り！

この夜の宣告を夫人は実行した。彼女は支配者となり、しかも今や彼女に従属するに至った譲二から、人間性を剥奪することに、残忍な愉悅を感じ始めた。何より効果的だったのは、彼女は彼を養っていたから、もし彼に不従順があれば、食事を断つことで彼を屈服させることができたことだ。例えば、ひげを毛抜きで抜いてしまえという命令に、直ちに彼が従わなかった時、彼女は、先ず抽斗の中に毎食三十本の毛を見なければ、食事をやらないと宣告し、実行した。彼の顎はやがてつるつるになった。首から下にも一本の毛もなくなった。反対に頭の髪は女の髪のように長く伸びて来た。身体の垢も入念に擦られ、青白い皮膚にみががかった。

彼女はもっと残酷なことを試みてみた。今迄はいつも猫に来る御飯を先に譲二の井にあげ、彼の残したのを猫にやって来たのだが、それを反対にしたのだ。彼は怒って食べなかった。彼女はそこで以後三日間彼を絶食させた。そのあとで、もう一度与えられた猫の食べ残しを今度は彼は一粒も残さずに食べた。それ以来、猫が譲二より先に食事することになってしまった。彼に飲料水を供給する化粧台の横の洗面台では、それまで手を洗ったこともなかったが、彼女は洗面台で手を洗ったり、口を漱いでうがいしたりし始めた。その方が便利なのは間違いない。そして化粧台の中では、もうそれに反抗するだけの氣力を失っていた譲二が、うがいの吐き捨

て水と知りつつ、渴きには耐えられず、それを飲むようになった。うっかり不平をいって全然水を与えないよりは、うがいの水の方がずっとましだったから。

十年後のある夜の化粧室。

パーティから帰って来た夫人は、書斎の夫にお休みの挨拶をして自室に引き上げる。女中の一人が絞ったタオルを持ってくる。夫人は服を脱ぎ捨てて汗を拭かせながら、足にじやれる猫を見て、

——ジョージの御飯は？

——はい、今御持ちします。

女中は汗を拭いたタオルを洗面台でもう一度絞ってから、猫の食事を取りに戻る。ガウンを被いだ夫人は、その間にストッキングを脱いで、片足宛洗面台にあげ、指の股までよく洗う。皿盛りの食事が届いて、ジョージがとびつく。

——あゝ、サッパリした。御苦労さん。お休み。

女中の引き下ったあとに鍵をかけ、椅子にくつろいだ夫人は夜食のテーブルに向った。猫と彼女の食事の音。

と、突然、化粧台の奥から、猫の鳴声。

——ニャオー

——譲二、うるさいわよ、おだまり！

外で聞いている人には、猫のジョージを叱ったとしか思えまい。



K.S.

一喝しておいて食事を続ける。パンは柔い方だけ食べて外皮の方を厚く食べ残したが、コーヒールは全部飲んでしまった。林檎も剥いてすっかり食べてしまった。……ジョージも皿に半分位汚らしく残して夫人の膝に戻って来る。二尾ついた鰯は肉の方をむしっただけで、頭や骨を食べ残しているのは、余程贅沢に食べているのだろう。

——ジョージや、もういいのかい？ やってしまふよ、お前の家来に。

立って、化粧台の抽斗を抜き、奥の井に猫の残飯をあける、ついでに自分のパンの残りと、林檎の皮を入れて、抽斗を閉める。

——さあ、一寝入りしようかしら。化粧台の奥でガツガツ食べる音が聞えて来た。

その夜の二時、博士の書斎の燈も消えた頃、夫人は手洗に立ったついでに、化粧台をあけた。いそいそと這い出す譲二少年。素裸の背中が醜く歪み曲って、昔のスラリとした健康な姿態の俤もない。手をよく使うから腕は発達しているが足は痿えているようだ。立っても五尺位の身長にしかなるまいが、毛をふり乱し、燈にまぶしそうにしながら、夫人の方をふり仰いだ

少年の顔は、さすがに昔ながらの美貌だが、全体の感じが動物的で、表情にも知性の閃きが見られない。這ったまま寝室に従いてゆく。

失踪宣告のあった日の夜、畜生にするとの宣言を発してからもう七年にもなる。あの直後、譲二の人間性の剥奪に快感を覚えたのももう昔の話だ。今では、猫に先に御飯をやることにも、洗面台で汗のタオルを絞ることに、少しも譲二を意識しないでするようになってしまった。寝室で彼の黙々たる奉仕を受けて××××に溺れながら、昼間のダンスのパートナーだった青年のことを考えたりしている彼女にとっては、彼は生きた××に過ぎなかった。玩具である愛玩動物である。彼に対しては何の羞恥を感じる必要がないので、他の男とでは、想像もできないような、極端な×××も、彼にだけは平然と命令し強制できるのだった。

今夜も、奇怪な××の幾場面が過ぎた後で、

——もういいわ、お帰り！

寝台から蹴り落されて、戻っていった。化粧台の戸が開く音がする。自動的に錠がかかるのだ。又明日の晩か、明後日の晩、彼女が彼の奇妙な味をもう一度味う気になって、鍵を廻してやるまでは彼は真暗な狭い箱の中で、背中を丸めて坐っているのだらう。彼女の足を洗った水を飲み、猫の残飯を食べながら……

譲二、ふつと以前、お前が化粧台に入る計画を説明した時のことを思い出したわ、……譲二さん、あの時はあなたはとても素晴らしいハンサムな中学生だったわね、……もう十年になる、随分変わったもの……可哀想な気もする。こんなことになるなんて知っててもお前はあるに熱心に私に勧めたかしら。二人がずっと一緒にいても、二人の関係が同じ様に続くかしら、そう思って私は恐れたのだった。夫人は寝入り端にそう独りごちたのだった。

手帖速報欄

五九 アイサック・アシモフ作平井訳「遊星フロリナの悲劇」(世界空想科学小説全集) このシリーズの第一冊。サークス星人によるフロリナ星人の奴隷化が、米大陸における黒人奴隷制や英国の印度支配を踏えて、もっと徹底したものとして語られ、それを舞台として事件が展開するので、民族全体の隷属という観念に親しめる人には楽しい読物である。いずれ一項を設けて、詳しい紹介をしたい。

六〇 中沢経夫「群盗往来」 地方紙連載後単行本になったもの。戦国時代の奴隷市。大名の若殿が捕虜になり、両耳を切取られて売られる、海賊の愛妾が、側近の奴隷にするため、この片輪男を買取る。彼は「番犬のように」忠実で、女のもとの夫が忍んで来るのを冷酷な女の命で追払う。マゾ的な幾頁がある。又別の美女が男装して乗馬する場面もある。

六一 アーノルド・ゲゼル著生田訳「狼に育てられた子」 一九二〇年に発見された八才になるまで狼と共に育った子が、人間世界で十七才迄生きた、その記録である。死ぬまで畜生らしさが抜けなかった。四這になって飼育者(?)の手から乳を貰う写真なども入っている。畜化願望のある人には色々の空想を与えてくれる。

六二 大宅壮一「アマゾン裸天国」(オール読物四月号) ゴム園経営者が原住民奴隷常務者を家畜同様に扱って、客があると余興に裸にして木の幹に縛り、生きた射的にし、耳を落せば五点、指なら三点などと身体各部で点を定め(ペニスと睾丸が最高点だという)実弾で射撃の技倆を競って打撃した話がある。特別な一人の逸話ではない、そんなパトロンがいくつも居たらしい。

六三 水上欣哉「獵奇の重役クラブ」(読切読物特筆読物実話) 中年の重役がサーカスで女猛獣使を見て、駆使される獅子に羨望を



読物娯楽版四月号「どろぼうさん」

山本一郎画

覚え、マゾヒスト・クラブに入会する。馬の面をつけて皆の前で馬にされ、女騎手に乗り廻され、鞭たれ、拍車で蹴られる……次第に昂じて行って破局が来るという話。(この作品については森本愛造氏からも連絡があった。氏の好み合している。)

六四 連続漫画「彼女はかけ足が好き」(読切傑作第四月号) アベックだが男に荷物を持たせ、菜に先に登った娘が水筒の水も独占し男にやらぬ。やがて娘が放尿すると、そのため濡れた花を男は喜んで摘んで来る、といった筋にマゾ的なものがある。実に下らない絵だが、私の好みなので、一応録しておく。

六五 「暗い欲望」(あまとりあ三月号) 速報一で紹介した連載中の作品。本月は痴愚者を装って、美少年の中学生にお乳を飲ませて呉れと頼み、ペニスを乳房だと云って、飲ませて貰おうとするところがある。男性器への口淫やウロラグニーに興味ある者には捨て難い。

六六 小島信夫「アメリカン・スクール」(文芸春秋三月号) みずす書房「アメリカン・スクール」所収(河出新書「微笑」所収) 速報七の「馬」も載っている本である。敗戦日本人の戦勝国人への劣等感をこれ位見事に描写した作品を他に知らない。直接マゾ場面はないが、マゾ的雰囲気は横溢している。

六七 山本太郎「蠅の歌」(婦人公論三月号) 愛の詩集中の一篇。雌蠅に食われる雄蠅のモチーフがあるので挙げておく。

六八 大下、水谷、島田連作「狂人館」(読切小説増刊捕物小説祭り) 夫を松沢病院に入れて自分はバアをやっているマダムが、パトロンに隠して、狂人を愛人になっている。夫との愛戯が忘れず温順しい狂人に変態的な愛戯を仕込んでいたのだ。「奴は彼女の靴まで舐めていたんだぜ」然し、描写はない。

号外 三遊亭円生の落語「なめる」(二月二十日夜ラジオ東京) 橋家円遊の十八番だった有名な艶笑落語。良家の令嬢にオデキができ、四つ年上の男に舐めさせると癒えるというので、女中が犠牲者を捜して来る。惚れたふりをしてだまして舐めさせ、そのあとで放り出す。男は夢中になつてゐるが、女の方ははじめから男を手段視してオデキを舐めさせるために利用してゐるのである。この男女の関係もマゾ的だが、そのオデキの場所が、ラジオでは乳の下と上品にやつてゐるが、寄席では、臍の下である。前を開いた娘が両手で男の顔をそこへ押え付けて舐めさせる描写があり、明らかに、クニリングス・コンプレックスの産物だが、オデキの臍を舐めるといふ点で私などには、コブララグニツクな興奮も感ぜられる。

六九 江戸川乱歩全集第三巻 この中では「恐怖王」と「人間椅子」がマゾ向きである。後者は手帖に取上げるつもり。前者はゴリラ男が出て来る、それが女犯罪者に飼われているという点で、私などには面白いが、マゾヒスト全部に通ずる気持ではないかも知れない。

七〇 山田風太郎「人魚燈籠」読物娯楽版四月号速報三一の「妖異金瓶梅」の続篇の一。サチスト向きの人間釣りの趣向であるが、犁舌獄（舌で耕す刑）とて、牛乳風呂上りの肉体を七人の舌で分担して拭き舐めさせる場面がある。

七一 峰岸義一「快楽船」（同誌）女群に徹底的に利用された話。尚、同誌棟田博「どうぼうさん」には、「許してあげてもいいわ。あたしの足に接吻するなら……」という場面がある。（山本一郎挿画）

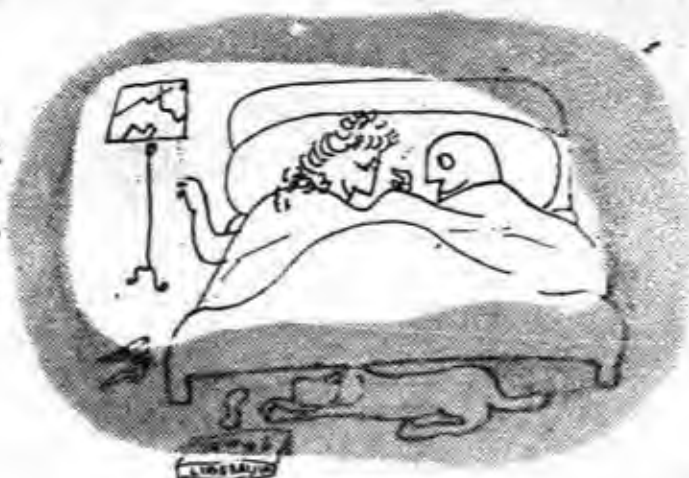
七二 富田英三の絵と文「ボクは犬じゃない」（同誌）これは今月の収獲。日本や朝鮮という植民地的国家を自由語国家の飼犬として描く。リベラル家のマダムは米国、亭主は欧洲。単に犬が女主人を仰いで感想文としても私にはタマラナイのであるが、況んや、それが日本と米国の関係として描かれているので、全く素晴らしい贈物であった。

七三 マリヴォー作佐藤文樹訳「成上り百姓」（河出世界文学全集古典篇）前に第三章迄訳出されていたもの今度は五章全部訳された。平民の子が貴族社会に入って行く経歴を描く。仰ぎ見る貴婦人の美しさは委細を尽している。パギストとして楽しく読めた。

七四 丹羽文雄「七人の子をなすとも」（丹羽文雄文庫十六「野の女」所収）妻も妾も顧みず競馬に凝る男が妻と妾の共謀で、捨てられ、家を追出されて慌てる話。

七五 中村真一郎「冷たい天使」作中の有閑夫人をモデルに作中の作家が「戦後夫人」という小説を書く。それは谷崎風の愛慾で、彼女は大学生二人三人を同時に惹きつけ、昼寝するにも、左右に男を待らせている……

七六 ハガード作大木淳夫訳「洞窟の女王」（世界大



「しかし、物ともなると、ボクは、やっぱりオイテクボリだよ。血は何とかよりも濃く……のタトエで、ボクはやっぱり大かぬ



「しかしミセス・ボク、ミセスの忠実なる……オオ、ミセスボク、どうしようミセスの、その豊かな物置には、ボク、とてもダメです！」

衆文学全集「ソロモンの宝窟、洞窟の女王」所収）これは未読の方は是非読まれよ。ヒロインのアッシャは、不死の美女で、自分に侍かせるため残酷な恐怖政治で一種族を奴隷化し、犬として扱い、自分の前では四這以外の姿勢を許さない。想像しうる完璧のドミナの一人である。以前の平林訳よりは、アッシャの言葉遣なども、ずつと良いが、原作の面白い註が略されているのは残念である。尚、この全集で、続いて出る「アトランチード」もマゾ的な興味のある作品である。

七七 西川満「魔弾の人」（講談倶楽部四月号）これは中国の名

読物娯楽版四月号「ボクは犬じゃない」

富田英三 絵

七八 柴田鍊三郎「帝国ホテル」(面白俱樂部四月号) 白人達が賭をして、印度人のボーイに、米人将校の連れの女性の足を舐めさせる場面がある。十弗やるといわれて、女の前に跪き、パンプスを脱がせ、足の裏に唇を持ってゆく、それを周りの残酷な目が見つめる……

七九 カレン・ホルネイ著友田訳「現代人と神経症」第十四章が「神経症的苦痛の意味——マゾヒズムの問題——」となっている。フロイトのアンチテーゼ。精神分析といえはフロイトしか知らぬ人には、一読をおすすめする。

号外 映画「ユリシイズ」「聖バルテルミイの虐殺」前者では人を豚にする妖女キルケを、後者では虐殺の主魁だったサチスチン、カトリューヌを、知ることができる。両者共、いづれ手帖で一頂を捧げる予定だから、予備知識のない方は、映画を見ておいて下さい。

【編集部註】本号の「手帖速報欄」は六月号の分として執筆して頂いたもので、時期的にズレがあつて速報の意義を失つていますが、マゾ文献の集大成といった意味から必要だと思ひましたので、敢て掲載いたしました。尚七月号の分として予定してありました速報欄八〇以降九八迄は誌面の都合で、次号に発表いたします。

約半年間休刊しておりました本誌は、こゝに復刊第一号を発刊しました。健全な内容と堅実な経営を以て、永続的に文献誌としての足跡を残したいと念願しております。販売方法は従来と異り、一般書店の店頭に陳列しないことにしましたので、勢い全部直接購読

一カ月毎ですと、定価二百円に送料十六円を御加算の上、お申込み頂きますとよいわけで、勿論御都合によって、一月一月御送金下さっても結構でございます。然し、出来うれば、三カ月分、六百元(送料共)六カ月分、千二百円(送料共)を前金にて御申込下されば、印刷部数の予定がついて大変助かります。六カ月前金にてお申込みの方へは、手札型フォトリソ三枚をサービス品として贈呈申し上げます。尚、雑誌のお受取りを御都合によって「郵便局留」にてもお送りいたします。この時は御指定の郵便局を御知らせ下さいと、局留として発送いたしますから、局にてお受取り下さればよいわけです。留置期間は十日間でありまして、局に到着して十日以内にお受取り下さるようお願いいたします。

の三月二十五日、刑法第百七十五條に抵触の容疑により押収されました。参考までに、左記に容疑個所を掲載いたします。

一、奇譚クラブ
口絵

百三十九頁下段、七行目の

「障碍競争」より

百四十三頁下段十行目まで。

二俣志津子作「悪魔の遊戯」

百五十八頁三段二十行目より

目五十九頁上段十九行目

(以上三個所)

私 の 浣 腸 論

数 正 男

一、変態性欲の条件

鳥の鳴声は確に美しいものです。しかししばらく聞いてみると単調でつまらなく飽きてきます。そこでもう少し気のきいた音色の變化や感情の豊かさが欲くなって、その為人々が色々工夫する様になります。絵画にしても唯風景を眺めているだけでは、もの足りなくなりそれを写し取ったり、又は空想を絵に画いたりする様になります。その様な具合に単純なものを目的とする性欲が複雑巧妙な型をとって出来たものが変態性欲であると考えられます。所が誰しもがメンデルスゾーンやショパンの音楽を聞いて恍惚となるわけではないでしょう、その様な音楽に聞き惚れる人はそれだけ心に余裕を持つ人であると考えます。そうして見れば変態性欲者とは、大体その様な心の余裕の所有者であるといえます。しかし勿論、心の余裕を持つ人の全てが変態性欲者であるという逆は成立しません。苦惱、憤怒、気がかり等が変態性欲者の助長を著るしく阻止します、従って心の純な、心の安らかな幼児期や少年期に変態性欲が植えつ

けられ易く、理性に基いて行動し批判的である青年期以後は、なかなか思わしくないのでしよう。

このような心の余裕、即ち心の亀裂から侵入する所の変態性欲は時には逃避的となり、時には唯美的となり、又時には頹廢的となります。

二、浣腸愛好者の成形

浣腸愛好者はいかにして発生するか？性愛は秘密に行われる為に人に知れ難いのか私の目を通した性科学書の中でこの事を取り上げているものは一つもありませんでした。であるからといって、それがそれほど珍奇な症状であるかといえど、その様なわけでもなく、もし正確に調べばかなり多数、この様な傾向の人々がいるのではないでしようか、それはともかくとして、先ず初めに人々は浣腸された時どんな風に感じるだろうか、気持ちがわるいとか、それとも何ともいえない程気味が良かったり、もっとその前に肛門に何か挿入された時座敷という刑罰が示す様に苦痛を感じるか、それとも何ともいえない快美感を感じるでしようか？

私の耳にした範囲内では多くは浣腸が気持ち悪いもので肛門に何か挿入される事は非常に苦痛であると云われます。しかし、現に肛門に浣腸器を挿入される事に快感を感じる者がいるとしたら、それらの違いはどこから生れて来るのでしようか？某誌に伊藤晴雨先生がそれは先天的なものであると云われましたが、それがそうであるかはとにかくとして無痛分娩が話題になるこの頃非常に興味ある問題であると思います。

これに対する私の見解は次の様です。即ち苦痛になるかどうかは、その人の状態にかかっていて、前にも云った様に心の余裕の持主ならば大体苦痛がないものでしよう。要するに心配事も何もなく楽な状態ならば苦痛に感じないと思います。それに反して苦悩がひどく、相手に対して信頼が十分ない時は決して気持ちの良いものではないでしよう。もう一つ大事な事は先入感で、こう云う行為は苦痛であると思ひこんでいけばやはりその感念にとられてそう感じるのではないでしようか。

次にこの浣腸嗜好者の形成られる過程を考えれば次のようになると思います。イ、初めて浣腸されて、それによって何らかの衝撃を受けて、その為に浣腸にひきつけられ浣腸への熱望が起る時期。

ロ、単に浣腸されるのみならず、他の者にも

してみたいと云う願望が起る時期、浣腸されるのが嫌でただ相手に浣腸して見たいと云う人がいるかも知れませんが、やはり自分がされて見て浣腸の味を覚えてから相手にすることが本當の行方でしょう。

ハ、春機発動期になって浣腸する又はされる対象を選択する時期、即ち誰にしてみたい、されてみたいと思う様になるのでその選択される対象は大体性的な対象と一致する。

ニ、同じく春機発動期になって単に浣腸を好むのみならず、この症状が変化して行く時期例えばこの症状のために臀部フェチズム、排泄物フェチズム、××願望等に変ぼうして、時には前の面影を全く消失して終う場合があります。

ホ、又春機発動期になって肛門や直腸に与える感覚が最も明瞭になって来る時期。フロイドによれば正常な性感の発達につれて、肛門性感は補助器官となりつつ退化して行くと云いますが、ここではかえって強められることでしょう。

ヘ、注入される液をなるべく多量にしたくなるのは、それによってそれだけ刺激を強められると考えるからでしょう、浣腸にオルガスムスを持たない為にかく摂度がなくなる様になるのも一つの課程であると云えば云えるでしょう。

三、男と女

浣腸されるその行為は受動であるため、その愛好者がその本性が受動的である女性に多い事はうなずかれますが、男性の場合に於いては浣腸のその性質から考えて見ても当然、女性的な男性が多い事が想像出来ると思います。従って自己性愛者、衣服倒錯症者などがその範疇に含まれているでしょう。

四、浣腸と文化

浣腸は勿論、正常なコイストでもなく又フェラチオ、クニニリングス、オナニー、ベドラスティの様な身体各部を用いる代替行為でもなく、ペッティングの様な擬似行為でもなく、同じく器具を媒介とする点に於てムチの様な原始的な道具ではなく、メカニズムを持った精巧な機械で肛門腸壁などを医療的に刺激し感覚を満足させるため、今までの性愛にまみえられる様な野蛮さから一步脱出してそこに近代的な感覚に調和した文化的な性愛が生み出たものと思います。

浣腸そのものは元来医療を目的としているため知的な雰囲気の中に清潔さが満され、その行為は繊細で上品なものと思われまふ。だからこれは性欲以前のものと云ってよいでしょう。しかしそれはどこまで遊戯として終るもので浣腸嗜好者にとって浣腸願望がたえきれぬほど強いものであったとしても、そのみにて生理的な欲求が満されるものがどうかは疑わしいもので、この点について就中諸氏

の御意見をうかがいたいものと望んでいいます。

五、変態と意義

異常な性愛と正常な性愛との差別はどこにあるか、と云う事をしばしば耳にしますが、これは平凡な云い方であるが人々は誰しも大それた変態で、とりわけ幼児や子供にその様な事があっても、だんだん大きくなるに従って次第に忘れられて行き、そして環境の力によって正常な性愛に訂正されて行くものだと考えます。

例えば三島由紀夫の「禁色」の中に出て来るルドンと云う男は確に変態性欲者であるがしかし自分がその様な人間である事を自覚していないばかりか、ちやんとした妻を持っており子供まである所を見れば、その性生活に於いて正常な男性と殆んど変りがない事を示しているのではないかと思います。変態性欲なんてそんなものです。何も自分が変態性欲者と云う一部の特殊な人間の群に属すからと云って悩む必要は少しもないと思います。変態である事はそれは自分に一番ピッタリ合っているのだから自分の趣味に忠実に従って行動すればよいと思います。

(おわり)

×

×

×

映画に現われた責めの向うをはるわけでないが、二、三の映画の中で淡いマゾの感覚を知ったものを書いてみました。

「二代目石松大暴れ」
東映作品

この映画の中で婦人代議士に扮する清川虹子が堀雄二扮する石松口説きの場で、石松と等身大の人形の相手に「私の云う事をきかないとこうだぞ」

とばかり、首つ玉を掴まえて振り廻し、畳の上に俯伏せに転がして馬乗りになる処がある。

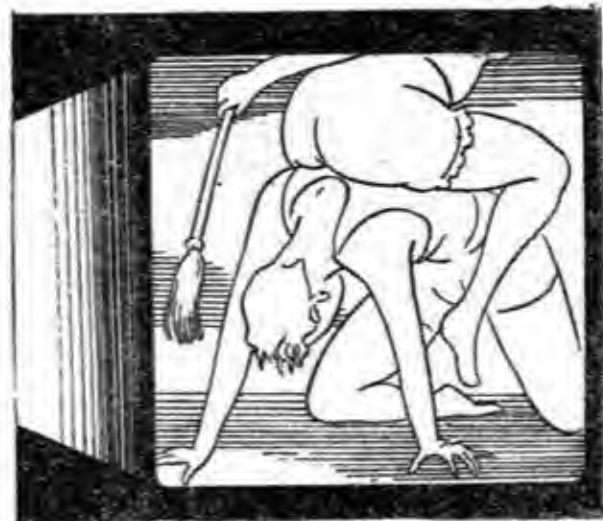
「さあ、どうだ、浮気をするかしないか」

と首すじを押えつけて馬乗りになっている恰好には一寸我々マゾヒストには魅力があるこの清川虹子はよく男を我か者顔に扱う役を漫画的に演る女優だが、何の映画か忘れたけれど柳家金語楼と夫婦喧嘩をやって四ッ這いに転がした金語楼の背中を片足で踏んまえ、果は頭の上に足をのせて踏みつける処で溶暗となるのがあった。

男の上に馬乗りになる映画は殆んど余りな

映画に観た 淡いマゾ

春木俊野



いがそれでも二、三の作品はある。

大映の「痴人の愛」は前にも沼氏の手帖で一寸紹介されていたが、原作とは全然違ったものになって我々を失望させてしまった。それでも京マチ子のナオミが、宇野重吉の譲二を四ッ這いの馬にしてその上に跨った。

それから割とエロ味を盛って強烈的だったのは矢張り大映の「密林の女豹」で五、六年の作品、荒川さつき、第一回出演で小林桂樹と組んで演じていた。この映画では狂暴な女ターザンが街の青年の敵意でみていたものが段々と人間としての恋心を知ってゆく過程を描いていたが、その中に小林桂樹の首をしめて失神させる荒川さつき、やはり同人同志で

戯れに女ターザンが男の胸の上に肌もあらわに太股を出して馬のりになり接吻する処等、とにかく強い山女と悪人の決闘をみせる映画だったから私の観た中では一番印象に残っている。

戦前に輸入され又、戦後にも新版として上映されたもので「砂塵」これには本当は喧嘩にも強くピストルも上手なシェリフのステewartが優男になって、デイトリックの酒場の暴れ女と喧嘩し、散々あしらひ乍らもしまいにはテールの上に俯伏せになった処をデイトリックに馬乗りになられる処が僅かの間だったがあった。

「アニーよ銃をとれ」には踊りの中で超お転婆女優ベティ・ハットンが四ッ這いになった土人の首すじの上に（だから頭の上に馬乗りになった様にみえる）お尻をのせる場面がかなり長く写し出された。大体アメリカ映画の中には大なり小なりにマゾヒストをよろこばせるものが可成りある。

さて又日本映画に戻るが、松竹の「若旦那勇伝武」だったと思うが寝ている大木実の髭を切らんものと淡路恵子が鉄をもってバジヤマのまゝ布団の上から馬のりになって暴れるくだりがあったが大してマゾ向きでない。私はそのスチール写真を見ただけで、すぐ観る気になり、さっと入ったと云えば、随分古い「奴隷の街」にも売られた女が洋酒瓶を

逆手にもって男の上に跨り殺そうとするのがあった。然しあとで私刑される目にあうのでサジイスト向きとも云える。

田中絹代、高杉早苗の「夜の女たち」も悲惨なマゾ的な処が可成りあった。尤もマゾ的だけは語弊があるが、マゾヒストをよるこばせる様な場面である。

たとえば田中絹代が街に立っていて男に毒舌を吐き乍ら、何の気なしに低い石垣みたいな処に腰を降すのだが、只腰かけると云う事

【読者通信】 (投稿歓迎)

鉛筆の走り書きで御免下さい。

湯上りのほてった身体を姿身にうつしながらい今日は楽しい気持ちで込み上げてくるほくそ笑みに思わずニヤリ／＼してるところです。鏡にお尻を向けながら掌でびたびた叩いてみました。我ながらうんざりする程もり／＼したポリウム、これで石本さんの人の好きそうな顔の上にべたんと腰をかけてみたらどんな気持ちがすることやら。

今日は株の配当を貰って、私、とっても機嫌が好いので、そこへ持ってきて奇譚クラブの五月特大号の通信欄、これも又、とても愉

をせず片足をあげて跨り坐る場面である。大女優がこう云うあられもない恰好をするとかしら私の心はマゾの快感と欲望にひどく動かされるのだ。椅子に逆のりになって坐るもの等特に然りである。だが、そう云う恰好をみせるにしても、あばずれ女がやる場面と、「心の旅路」の様なヒューマニズム性を高く出した名画の中に、バーグマンが温和な役を演じ乍ら、椅子に跨って坐る処があるが温和な女性がこう云う姿態をみせた場合、特に後

快だわ、男獣の群を従えてテオドラ張りのこの身体で一あばれしてみたいわ。実は今ある温泉で之を書いていますの、(中略)石本さん達、マゾヒストなんて云ったつて、つまりはそれで自分が楽しもうっていうわけだわね、だから或る限界は越えられないと思うわ、私ののはそんなんじゃないの、私に殺されたって喜んで死ぬ、というのでなければ意味ないわ、ホ、

、。編集部の皆さん御苦勞さま、(別府の魔女 荒井貞子)

匿れた女性サジイストの皆様、誌上を通じてお願い申し上げます失礼を御赦し下さいませ。通信欄に一度サド女性の名乗り給うや、ワ

者に魅惑を感じるのは何故だろう。

この外、まだいろいろあるが題名だけだとハツとする様なもので、古いものだが、松竹作品「溝口健二監督の『女性の勝利』」これは女弁護士勝利を即ち女性の勝利に結びつけていたが間接乍ら気持ちのいい映画だった。近々フランス映画で「女優ナナ」が封切られるらしいが私はこのナナをひそかに期待しているのだ。伯爵を馬に這い廻らすナナのあの場面が是非あります様にと。

ツとばかりに多数の奴隷志願者が殺到致しますが、正に第一人に十人の花嫁同様で、大部分のマゾ男性が、涙をのんで引き下らねばならないのでは、余りにも悲惨で御座います。皆様もマゾ男性と同じ程度、存在されるのではないでしようか。男性は自己を発表する勇氣があるに比べ、女性は御遠慮されておられるのだと存じます。皆様は私達の太陽であり、女神で御座います。私達を絶望の苦惱から救う方は、只貴女様方あるのみで御座います。皆様の多数御出現を願う者は、私一人では御座いません。此の念願は全マゾ男性の、悲痛なる魂の絶叫なので御座います

私達はやるせない淋しさと悲しみ、日夜哀泣致しております。狂おしいまでに女王様方をお慕い申し上げているので御座います。匿れたる女王の皆様。願わくば是非多数誌上にお名乗り下さいまして、私達マゾ男性に苛烈な鞭を加え給わん事を。斯く絶叫しつつ、全国の女王様の救いの御手をお待ち致しております。(京都平山春夫)

【読者交歓室開設】本誌の執筆者投稿者に対する誌上での呼び掛けや応答のため読者交歓室の頁を設けますから奮て御寄せ下さい。なるべく簡単に要領よくお願いいたします。



アクロバット通信

九州 傾城

貴誌益々御発展の前途を欣快に存じます。さて本通信欄を通じて広く潜在せる愛好者諸兄へ訴えたいと存じます。小生こそ自他共に許す大のアックル狂で、映画は勿論実演、雑誌、写真等も見逃した事は御座いません。

終戦翌年の三月、わざわざ上京してその頃の帝都座五階小劇場に岡本姉妹の「女の学校」を見聞し現在迄凡ゆる機会を利用して欠か

した事なく相当の知識を有しています。

一昨年の暮には商用傍らS市迄出掛けた際、小屋掛中のストリップパー一座にアックルスターを発見し、半日観賞傍らねばって苦心の末、楽屋に面会を求めて色々アックル狂なる事を諒解して貰って面談してまざまざとその一人前になる迄の苦心談を伺い別れ際には写真まで呉れて文通を確約してく

れました。中々の美人で上品な大阪弁が可愛いくて純情そのままの踊り子でした。今でも忘れきれぬ彼女の姿です。

この踊り子の場合には余り苛酷な稽古を積んでいませんが、それでも相当な物で毎朝冬でも四時から言語に絶する訓練を受け、矢張り酔で身体を柔軟にしたそうです。早十才で舞台にたったこのことで小生の知識の豊富なのに驚嘆していました。これ等は比較的楽な訓練を受けていますが、一昨年某雑誌にのっていたアクロダンサーの告白文は非常に変わっていて物凄くサディズムに富んでいますので愛好者諸兄にも珍しいと思いますので簡単に御紹介します。全文詳しく書いて御座いましたがとても書き尽しませんので簡単に要約します。

現在も活躍している第二線スターですが、S市の踊り子の場合と同様サーカス育ちで十二才で終戦の年、某団に養父から売られ三ヶ月間、彼女の場合は酔の代り肉の訓練を団長から受けて、次に一寸法師の小人が師匠さんで此の変質

的不具者から全裸のまゝチューブ責めの訓練を半年間受けて是が死ぬ程辛かったそうです。後は御承知の如く基本の腰入れ、腕立ち、逆立ち、前とんぼ、後とんぼ、進んでオープン、逆立オープン、次に高等技術のいも虫、風車、水平廻転等とこの外十種類許りあります。

各技術に就いては説明を省きます。最後に踊りの振付を貰って完成する訳ですが、その練習の苛酷さは世間の人の覗く事の出来ぬサーカスの団いの中で様々の曲技に慣らされて行く少女の苦しみ死の恐怖がまざまざとにじみ出ていて全身興奮におののきました。稽古々々の明け暮れは一匹の獣に仕込むみたい苛酷で一例を申し上げます、しくじったり貪血して倒れたりとすると鞭や棍棒で寄ってたかって打ちのめされて全身は模様のアザが出来て高熱で便所にも這って行った事が何回もあったそうです。又殊更ひどいのはメンス中でも休む処か稽古中に粗相したりすると飛行機乗りが吐いた物を食べさせるようにその不浄物をすつか

りなめさせられたそうです。

又風車の練習の仕掛の恐しさは死の恐怖と彼女自ら述べている如く言語に絶する物で四年間虐待に虐待を加えられてアクロバットを仕込まれて彼女自身恐る可き被虐愛好性になったそうです。然し彼女の場合流石に天下一品のアックルを踊って見せる事が出来る様になったと自慢し団長の急死に伴い

【読者通信】 (投稿歓迎)

小生突然御便り申上ます。昭和二十八年十一月より奇譚クラブ愛読者の一人です。本年五月号迄愛読して居ましたが其の後新聞紙上にて一部の誌面に不都合の所があるのて休刊になった由、その時の小生の淋しい気持を御察し下さい其の中必ず再発行で今一度出来るものと思つて毎月書店を見て楽しみに暮して待つておりました。最近はまだ我慢出来なく書店を通して伺いましたところまだ発行されてないそうなので御便り申上げ次第です。近々再発行されるのですか、それとも如何になるので

自由の身となった現在も、アクロバットを踊るのが大好きよと言っています。小生たちマニアにとつて頼もしい限りです。

大体アックルは二通りあつて御承知の様に普通の踊りから練習するのとサーカスで曲技として仕込まれる場合の二つですが、小生が見ると直ぐ眼が肥えていてどちらか見分けが分ります。尤も小生よ

しょうか？

小生は子供の頃より(十二才頃)切腹の事について大いに魅力を持つようになり、二十五才で妻を迎えました。小生の切腹に関しての嗜好はやまるところか益々強くなる一方で、妻にも色々の情景を描いてポーズを取らし最初は竹刀か木刀にて恰好するだけで満足しておりました。その中、五六年前頃からは真刀を用いるようになり自分で自分の腹部を僅か血がにじむ程度切ったりしたことがありますが。然し、妻は自分自身の腹部を切ることをとても嫌いますので、妻に対しては真刀を用いたことはありません。そんなわけで誰か理

り詳しく存じている方は発表して下さい。現在はサーカスには次第に少くなつていていずれも天幕幕しを嫌つてストリップバー一座の方へ転向して行く者が多いからです。先日も近くの楽屋に訪ねて見ましたが大差ないので略します。誌面の御都合もあることだしまだ色々知つてゐる限りの知識技術の種類等体験記発表致したいと存じます

解のある女性で、あの白雪のようにむっちりした下腹を真刀で思うさま切腹してくるような相手はないものかと毎日考えるようになりました。その頃、はからずも或る書店にて「奇ク」を発見した時の小生の喜びは何んと云つてよい。か。それでも何う何もかも申し上げますが、実は小生に以前から懇意にしている年上の女性がありましたので、思いきつて女性切腹の願望を話したところ、彼女は小生の持つていった奇クの記事を見ながら、「それ程迄思つて居るならやってみよう」と小生の持合して居た短刀で肉付きのよいふくよかな下腹を左手で押えながら左脇か

が、又次の機会に譲ります。何卒貴誌に於かれても是に關する記事写真を毎月どしどし発表されて我々愛好者の要望を充たして頂きたいと切望致します。

猶現在迄投稿された諸兄へ感謝し今後も御努力と御奮起を切望致します。

ら右の方がブツリブツリと音立てて切りさく彼女の顔は、苦痛をこらえて口を真一文字に喰いしぱった悲愴な表情、それを目のあたりに見た、小生の気持。ああ全く何んと云つてよい、永年望みながらかなわなかつた素晴らしい光景、その時以来、小生と彼女の下腹部に残る無数の切傷、忘れもしませんが、四月特大号の「切腹曼陀羅図繪」を見た時、絵の通りのポーズで反対に彼女が小生の腹部を切りろうと二人で相談致しましたが、余り力が入り過ぎて皮膚ばかりか皮下脂肪に迄切先が行つたのには思わずはっとしました。

(佐瀬星市)

ニューモデルのプロファイル

辻

村

隆

前稿「緊縛モデルの素顔」(その三)——五

月特大号——では、村田那美子嬢と坂口利子嬢について述べたところ読者諸氏から意外の歓迎を得たので、実は六月特大号用にと、続稿、萩千恵子嬢の巻を豊富なフォト入りで素破ぬいたのであったが、不幸にして六月特大号の発行が一頓挫したので拙稿も心ならず筐底に埋れてしまうことになった。

その後十月号が復刊することになり、編集長からの原稿の書き直しを言われたが、その間萩嬢の結婚という彼女の一身上の変化もあったりしたので萩嬢についてはいずれ稿を改めて誌上にお目見えすることとして今回は稿を新にして、新しいモデル三人の紹介をすることにした。

——加賀利江子嬢——

身長五尺二寸七分、体重十四貫五百という堂々たる体躯、身長五尺二寸以上という某デパートの採用条件を見事パスして目下化粧品売場のショップガール、流石にフェイスも化粧品品の売子に選ばれるだけあって十人並以上最初、彼女が持って来た写真は、会社の運動会の余興に踊ったというマンボスタイル、芳紀正に十八才というからお色気はまだこれからというところ。

全裸はいやだけど緊縛はOK、第一回の撮影を終えてから来た彼女からの便りには、縛るのだったらもっともっときつくても辛抱するから次回撮影の日を知らせてくれと、今ど

きの娘にしては一寸感心する位の達筆で書いて寄こした。第一回の緊縛はまあまあ小手調べ、先方がその覚悟なら腕によりをかけての高手小手首縄海老責めと準備おさおさおたくりなく、さて、第二回目の約束の日、ひよっくり顔を見せた彼女を前にして、これしかじか、お手紙通り少々きつく縛らせて貰うが、と麻縄の五間もあるのを持ち出すと、

「初めて縛られて家へ帰ってから、あの程度だったら、なんでもない。一度息も出来ぬ位縛られてみたら、と思ってあんな手紙を出したんだけど、いざ縛られるというと、こんなに胸がドキドキしてるの」

と盛り上った左の胸を差出してくるあたりは、人見知りのしないお嬢さんだ。明朗でお

俠んで、腕首に少しぐらいの縄のあとやすり傷がつく位はなんとも思っていない度胸をお持ちだが、シユミーズの防禦だけは要害堅固で中々脱ごうとはしない。ストッキングを足首までめくり下げても、シャッターがきかれると直ぐ膝の上までたくし上げてしまうあたり、やはり芳紀十八才の貫録が十分だ。

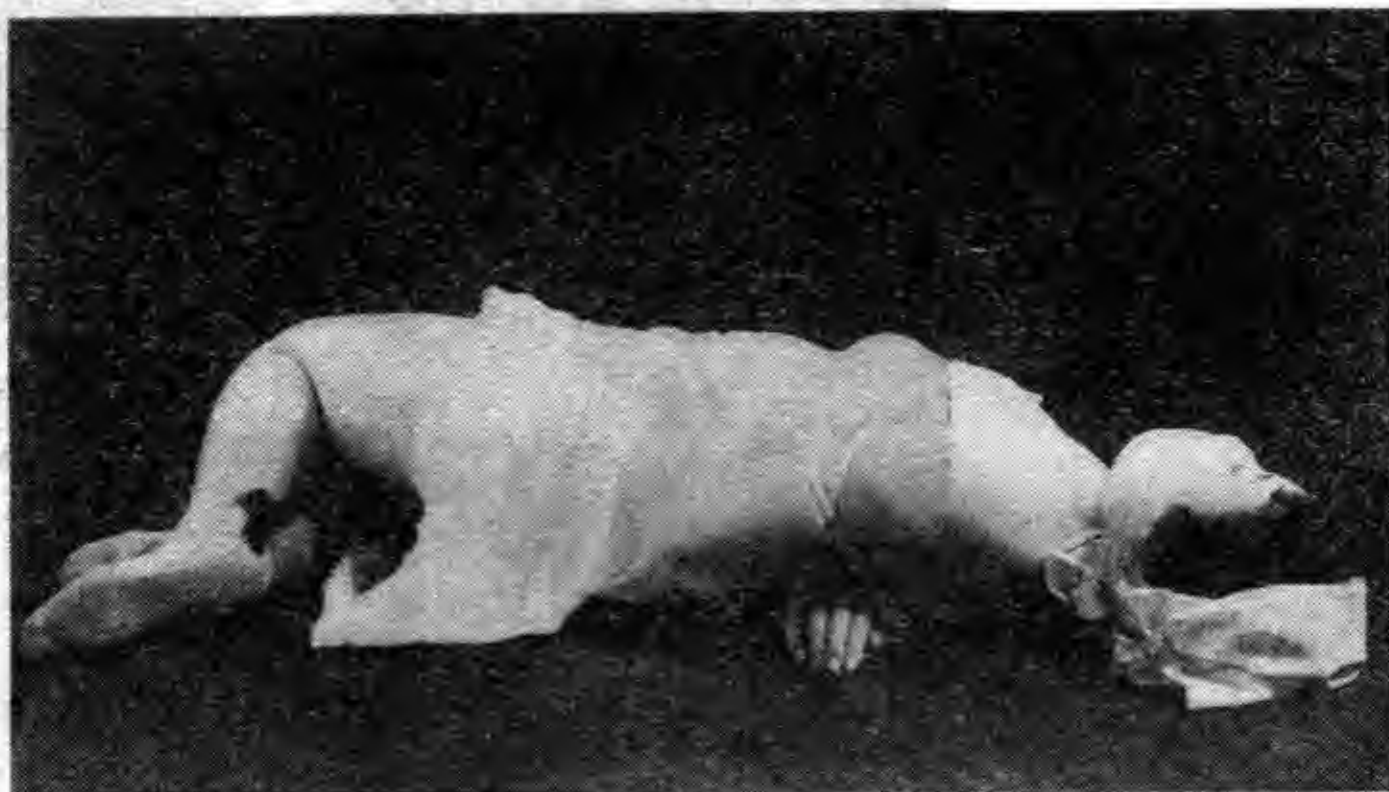
本誌の休刊騒ぎで第二回以後の撮影に着手していないが、今後本誌の専属モデルとして期待される一人である。

【註】加賀利江子嬢の第一回並に第二回の撮影に際しての作品は、新しい分譲写真の中に「加賀利江子悦虚ポーズ」第一集、第二集、及び「デニムのズボン着用絵り」として含まれております。

——藤田節子嬢——

元宝塚映画のニューフェイスとして数々の映画に出演した彼女が編集部を訪れたのは、三月も末の朝から春雨のそぼ降る日だった。黒塗りの高足駄に真白の素足をびしよびしよに塗らして、蛇目の傘のしずくを切っている和服姿の彼女の姿は、まるで芸者のような色気が溢れていた。流石に映画で仕込まれた演技力を発揮したのかとたのもしき限りであつ

加賀利江子嬢の緊縛ポーズの一つ



たが、彼女の持参したスチールを見せて貰っていると、思わず時を過して、日本髪で時代劇に出演したときのもの等、そのまゝ緊縛に使用したならばと惜しく思われた。

身長五尺一寸五分、体重十四貫丁度、いさゝか肥り気味ぐらいの股の太さ。顔は下ぶくれの男好きのする美貌、近代的な姿態の持主だ。先ずスタジオに案内して、彼女の着用の和服のまゝ、後手、或は後手首縄にて十数ポーズあれこれと注文してシャッターを切る。ツケ眉毛も映画に出演のとき用いたものを持参に及んで撮影、あとで現像してみると、流石に実物以上に美しくとれている。やはり化粧も撮られ方もうまいものである。

引続いてシユミーズ一枚にて基本的な後手緊縛、十数ポーズを撮ってみる。第一回の撮影後、彼女の話では、都合によってはヌードにても構わないが、ということであつたが、その彼女の都合というのをきかないうちに写真部の実写が一応中止となつたのは、かえすがえすも残念である。機会があつたら、もう一度思うさま彼女を縛り上げてみたいものである。濡れた素足の色っぽさから想像して、彼女のヌードを縛り上げたら、きっと素晴らしい作品が出来そうな気がする。年令は二十

二才といっていたから、これから益々脂がのってくることだろう。

【註】藤田節子嬢の作品は「落花狼藉」第一集、第二集として、彼女の縛りフォトが分譲品の中に含まれておられますから、和装緊縛マニアの方は是非一度ごらん下さい。

須川令子嬢

本誌の復刊が決定して、写真部の撮影が再開されてから、最初に協力を申し出てくれたのが須川令子嬢である。彼女に初めて逢った

のは、七月の末、大阪駅の近く、冷房された裏通りの小さな喫茶店だった。小生の写真撮影についての説明に対して、彼女の提出した条件はヌードでも差支えないが、なるべくなら素裸でなく布の一片ぐらいはつけさせてほしい、然し、どうしても全部とる必要があるならのとられても仕方がない。家で遊んでいるから日はいつでも差支えないというのだった。

た。

身長は五尺二寸八分に対して、体重は十二貫と少しやせ方、年令は二十才、昨年高校を出て目下家で和裁のお稽古中とのこと。すらりとしてワンピースのよく似合う愁い顔のお嬢さん。第一回の印象を数枚のフィルムに印して次回を約束して別れる。

第一回の撮影は八月上旬、暑さの激しい頃



藤田節子嬢の緊縛ポーズの一つ

は歩かせて場所を変える。

服装を変える度に樹陰の急造の更衣室へ戻って再び指定の撮影場所まで来るといふ面倒を彼女は厭わず従順に言った通りやってくれた。初めての撮影であったが、彼女の協力で極めて短時間の間に相当の変わったポーズをおさめることが出来た。彼女の特徴として好ましいのは表情たっぷりのこと、それも演出臭

であったが、野外撮影ということにきめていたの、昔、光明皇后が灌漑のために築造されたという光明池に向う。早朝の斜光線を利用するため、特に須川嬢に頼んで早く来て貰い午前七時出発、八時前に現地に到着、薄霧の漂う池畔の小高い丘の上にて、腰巻一枚、ズロース一枚の半裸にして縛り上げる。樹の間を洩れる陽も次第に暑さを加えてくる。人の気の心配は少しもないので縛ったままの彼女を抱き起して



須川令子嬢の野外にて初めての緊縛ポーズの一つ

味のある嫌味のものでなく、濃艶な流し目はとても二十才のお嬢さんと思えぬ位のもの。汗と砂に塗れての約三時間、予想外の収穫を得て次回を約して別れる。

引続いて野外二回、室内三回に亘って示してくれた彼女の積極的な協力ぶりは、嘗ての

川端多奈子嬢、萩千恵子嬢に劣らぬものであった。例えば、緊縛者が縄を持って立ち上ったときの彼女の両手を後手に組む早さは、全く堂に入ったものである。猿ぐつわの布片を持ったときもそうである。まだ布片を口先へ持ってゆかないのに大きな口を開いて待って

いてくれるといった調子である。

他のモデル嬢と比較して肉体的には決して豊満というわけではない、然し、柔軟な四肢は緊縛に対する肢態の無理を極度にまで許容して、悦虐のポーズを構成してくれるので、むしろやせ気味の姿態が、責めモデルとしての効果をいやが上にも上げていてくれるということができる。緊縛に対して好ましい反応を示してくれる悦虐モデルの一人として、須川令子嬢を推薦するのにやぶさかではない。殊に若い女性が、暴漢に襲われて遂に緊縛されるといったアイデアを幻想的に構図して三十数枚の撮影を敢行した時に示した彼女の好演技は、嘗ての田中絹代を彷彿とさせるに足るものがあつた。数回の撮影によって彼女は将来の本誌の緊縛モデルの中心として活躍してくれることを信じて疑わない。彼女の緊縛ポーズについては一部を本誌上に、大部を分譲品として諸氏にごらんに入れることになるう。

【註】須川令子嬢の作品は「須川令子嬢股間しぱり三態」「須川令子嬢悦虐姿態集」として分譲中です。

明治年間の新聞覚え書 (三)

吾

妻

新

外国商館の酷使 (二〇・八・三〇朝野)

神戸居留地の外国商館では当時、日本の女を傭い入れて茶を焙る仕事につかっていた。これはじぶんたちの飲料の茶でなく、故国またはその他の国に輸出する日本茶だったと思われるが、その賃銀は安く、労働は苛酷だった。

なぜ安いと断定するかというと、私が明治の新聞を漁った目的の一つは女の労賃の調査にあたったから、その安さの見当がついている。しかも当時の新聞はそれを当然のこととして怪しんでいない。それが、この商館の傭い女の場合にかぎって、「この婦人等は何れもその日の生活に差支へる程のものなれば一二里も距りたる遠方より出掛けるものの多く如何にも憫むべきの境遇にあるもの」として

同情している。第二、この外国商館の傭い方はいままでいうパートタイム制で、午後三時頃から七時頃までとなっている。これは安い賃銀をいっそう安くする口実となっている。第三には酷使である。「居留商館にては之を取扱うこと甚だ惨酷にして、動もすれば鞭撻すること牛馬の如くなるが……」とあるようにかぎりある時間に、最大の収益をあげるため鞭をふるような野蛮なことをやったのだ。

この新聞記事の出た理由は、しかし日常の酷使のためではない。ある一人の女(氏名は伏せている)が一定額の茶を焙り終らなかつたために、さんざん譴責された(もちろんムチも入る)のちに、さらに縄で両手を縛り上げられたからだった。それがどんなにひどかったかは、仕事を失うことを極度に恐れてい

る貪しい彼女が、手首に残した縄の跡を証拠として居留地の警察署に訴え出たことでわかる。さすがに新聞は憤慨して、「如何に雇人なればとて、牛馬の如き取扱をなすは道理を知らぬ非道の人と申すべし」と書いている。

この種の、外人の残忍な行為はあとにも一、二あげるが、注意すべきは、これら明治初年の頃ではなくて、いずれも明治二十年ごろから日清戦争までの間に起きていることだ。

明治政府は明治十三年ごろから不平等条約の改正にあせっていた。歴代内閣はみんなこの問題に手をつけている。それが失敗しつづけたのは、改正案が不徹底なのと、薩長を中心とする藩閥政府の専制ぶりに怒りをかんじていた自由民権運動の攻撃の材料になったからである。そこで明治十七年から、有名な鹿

鳴館の猿芝居がはじまるのだが、要するに一口でいえば、文明開化もこれだけになりましたといいたければ、極端な西洋崇拜を政府がさきに立って奨励したのだ。歴史的にみてこの政策の是非はどうでもよろしいが、これが日本に居留している白人をつけあがらせ日本人に卑屈な影響をあたえたことは事実である。だから、日清、日露戦争を経て日本が強国としてノシてくると、またこの心理は急激に変わってくる。

もっとも、こういう事件が起きる条件は、当時の日本社会のなかにも存在しているもので封建的な男尊女卑がまかり通っていたから、白人もこういう蛮行が平気でやれたのだ。もしも、義憤もかんぜずに残忍な行為だけにサディズムの資料を求める気なら、初期の紡績業の発達史はその宝庫である。(細井和喜蔵の「女工哀史」などでなく、たとえば河上肇の「貧乏物語」のなかの豊富な徹底したリンチ例)しかし私は個人の性生活をはなれた、社会制度や経済組織の犠牲者をみて絶対に快感をかんずるわけにはいかないから、いわゆるサディズム文献をつくるわけにはいかないのである。(このことについては一度まとめて書きたいと思う)

白人の妻、娼妓に詫状

(二三、六、八、東京朝日)

こんどは横浜居留地の話。アメリカ人のサンカチャー(発音はいずれも新聞のまま)のところへ、真余町の貸座敷静岡様の娼妓小糸(二十一)がやってきた。これは、かねがねサンカチャーが遊興していた際に、五十円の金策を相談されて承諾したから、その約束を履行してもらいに來たのである。

ところが、妻のジョセーは用件をきいてカッとなり、いきなり平手打を食わしたので、小糸も負けずになぐり返し、組んずほぐれつの乱斗となった。そこへもう一人、白人の女が出てきてジョセーに加勢したので、小糸はたちまち旗色わるく、顔に二ヶ所の傷を負って逃げ戻った。そこでこんどは樓主が承知せず談判し、ついにジョセーは謝罪状を出して落着におよんだ。

これは明治十四年同地の人力車夫の事件と似ているが、上流社会の西洋崇拜とのコントラストをしめす庶民気質のひとつの現われである。

西ノ宮の尻つねり祭

(二五、六、一一、読売)

各地の奇習風俗は土俗学や民間伝承の書物にたくさんあって、ただ新聞にのったというだけで引用したらきりが無い。ただ尻をつねるのはユーモラスでアブノーマルな興味もあるから紹介する。

これは神戸西ノ宮の祭で、ご多分にもれずモノモノしい伝説がある。昔、我三郎が摂州鳴尾の浦に漂着したとき、土地のものが奥にのせて西宮(もとの戸田の荘)に遷そうとした。その途中、西宮字礼場筋でひと休みし、さて、奥をかつこうとしたが、どうしても動かない。そこで従者の一人がためしに三郎の尻をつねってみたところ、奥がやっと動き出した。以来、その日を記念して、旧暦五月十四日に祭るようになったという。

そこで祭だが、当日参詣する男女はだれを相手にしてもかまわない。この日ばかりは無礼講で、赤の他人でも怒ってはいけないのだから、「痛い」「きやア」と大変な騒ぎである。もちろん同性の尻を追い廻すものは滅多にないから、ねらわれるのは大抵女ときまつており、美しい娘などは集中攻撃を受けて泣き出すそう。それなら出掛けなければよさそうなのに、わいわい押し掛けるのはなぜであろう?

妻を一錢五厘の懸賞

(二五、八、一一、読売)

「女房を一錢五厘で売り渡せしというは神武以来あんまり聞かぬ珍事なり」という書き出しで、現実ばなれした実話が報告されている。

山口県阿武郡紫福村付近では、このごろ紋紙(どんなものか不明)に懸賞をつけて売ることが流行しはじめたが、同地の某のつけた懸賞はなんと自分の妻だった。十二支の紋紙は一錢五厘、「其女房と云ふは器量と云ひ何と云い田舎には珍しき尤物なれば」たちまちに売り尽してしまった。さて開票してみた結果、この不換金の賞品を射落したものは、同地の道路改修工事に出稼ぎで来ていた独身者の土方だった。

「土方の喜び一方ならず、サア女房を受取らんと迫りしに、男も今尚馴染みし妻を僅一錢五厘に売渡すことかと思へば情なき限りなけれど、何と仕様もあらざれば、しぶしぶ女房を渡したるが、土方は同地に住居ては旧の亭主もあり、かたがた物騒なればとて此の程右の賞品と手に手を取って故郷石州を指して立帰りたりと、野蛮な土地とは云へ、何れも言語同断といふべし」

まったく呆れた話である。

妙心寺の嚴律

(一九、一、一六、大阪日報)

京都府下葛野郡の正法妙心寺といえは臨済宗の本山として有名だが、いまそこ

では評議會が開かれてゐる。それは文明の世の中となつてから、神聖なるべく寺院の風紀がゆるみ、とかくの風評が流れて困る。この際、僧侶として守らねばならない規則をつくり、山と内の各寺院に申し渡して、嚴重に取締らうという集りである。

さてその規則だが、まず妻帯を禁ずるのほもとよりとして、妾だとか大黒と称する女をもつてはいけないそれには寺に女を置かないことにする。といつても、裁縫や雑用に女を傭わないわけにはいかないが、その場合は容貌が美しかろうと醜かろうと、とにかく五十才以上の年令でなければならぬ。また親戚とか親しい間柄とかいつても、右の傭い婆さん以外の異性は絶対に寺に泊めてはならぬというのだ。

そこまではいい。が、絶対にとい



つておきながら、例外をみとめているのだから愉快である。「但し已むを得ざる場合は」泊めても仕方ないことになっている。ではどんな場合かということは一つも具体的に指示

していない。だから名目さえつけなければいくらでも泊めることはできる。明治五年に政府のやった人身売買禁止に抜道があつて結局有名無実に終つたように、こういう風俗取締がなんにもならないことは、いつの世でも同じである。

だが、この例外の宿泊についての命令がふつてゐる。「但し已むを得ざる場合に於ては、紐を以て其の両足を緊括し之を寢室に入れて扉戸を密封せし上、鎖鑰を下すべし」——つまり、その女の脚を縛つて寢室に閉じこめ、カギをかけるというのだが、脚だけ縛つても解こうと思えばできるのだから、実際にやろうとすれば手も縛られなければならないだろう。またカギをかけたところで、それは女のほうから誘惑できないだけの話で、男が入るつもりなら自由である。むしろ手足を縛られ監禁された女は逃げだすことも、いかなる攻撃に抵抗することもできない。

こんな命令を馬鹿正直に守り通す寺もあるまいが、それでも同じ山内のことだから、少くとも一時は形式だけでも守らねばなるまいとすれば、好きな女にこの規則を説明して、「大丈夫だよ、痛くしないから」とかなんとか言い聞かせながら、縛りのゲームを楽しん

だことだろう。

処夜権のため五十錢づつ貯金

(二六、三、一二、読売)

明治の新聞にはユーモラスな話が多いが、これもその一つだろう。大阪北の新地の席亭のおかみ若力が、最近女の子を養女に貰ひ上げた。おとし生れたばかりで、やっとハイハイができる位だが、色が白くて実に可愛らしいので、近所でなかなかの評判。それを耳にして那須某という六十四の爺さんが、立業ではひけをとつても寝業では負けぬとばかり駆けつけた。

「なにを感じがいしてるんですかお客さん、まだこのとおりの赤ン坊ですよ」

と大笑いしたが、この爺さん、赤子の寝顔をのぞきこんで一層惚れこみ、大真面目である。

「いや、こんな器量好しなら辛棒する甲斐がある。よし、ひとつこの子が大きくなったら私が客の初筆をとるよ。といって、そのとき工面がわるくちや待った甲斐がないから、いまから貯金しよう」

というわけで、毎月五十錢づつ郵便局に貯金をはじめた。

頭山満が、「わしの妻は手塩にかけて育て

る」と言つて、赤子を乳母車にのせて押して歩いた話はさる人から聞いたが、それは壮年の話。この爺さんは明治の終りまで生きられたかどうか。

娼婦の樽詰

(二六、六、二三、東京日々)

資本主義のあるところ白色奴隷あり、資本が国籍をもたないように売淫もインタナショナルである。明治になつて外国との交通が開けると、日本人でいけば大量に海外に流れたのは夜の女だった。ただし、彼女たちは渡航許可書をもたない。だからほとんど全部、非合法手段で出る。いや、輸出される。彼女たち自身は単独で渡る力がないし、おそらくは意志すらなかったと思われ。それがプロカーやボス、つまり人間の市の商人に巧みにくどき落され、だまされ、或は暴力によつて、流される。船員の妻、外国人の妻、或いは使用人などの名目で法網をくぐる。それでもむつかしいときは箱詰めになれたりして、明治二十三年の伏木丸事件のように窒息して死ぬものまで出る有様だった。ここに引用する樽詰もその一例にすぎない。

カナダ横浜間の定期船エンプレス・オブ・チャイナ号に乗組んでいるボーイに藤原某と

いう無頼漢があつたが、この男は婦女売買仲介業の常習犯だった。そのやり口は、外国の白色奴隷業者の手先となつて、周旋料をもらつて注文を取る。そして船員という立場を利用して、航海ごとに女を積み出すのである。問題は横浜を出帆するときだが、年々警察や税関の取締りがきびしくなつてきたので、なんとか名目をつけて船内につれこんだ女たちを隠すのが困難になつてきた。

そこで彼は去る四月二十五日出帆のとき、送り出す七人の女の数だけの空樽（ビヤ樽）を用意し、下船させたとみせかけてその中に詰めこんだ。哀れな女たちはこうして二週間以上も言語に絶する苦痛に耐えるのである。もちろん空気の通う穴はあるし、食事もこつそり支給されるが、船内でも秘密だから自由に外に出てからだを休めるのはもちろん、用便すら制約される。その証拠に、重複するのここには引用しないが、他の船員がふつうの品物と思つて乱暴に転がしたため悲鳴をあげて発覚した実例がある。

さて五月十日にはバンクーバーの港に入つた。うまく税関の目をかすめて荷揚げをし、約束の場所に樽詰の女たちを運ぼうとしたとき、五四人の警官がバラバラとかけつけてそ

の樽を全部押えてしまった。しまったと思つた藤原は、混雑にまぎれてす早く逃走してしまつた。

ではなぜ発覚したかというところ、この船が横浜を出帆するまえに、もう一人の誘拐業者が六人の女を連れこんでいた。その男は空樽ほどの智慧はなかつたと思えて、便所の中に閉じこめ、中から掛金を締めさせて、自分も一度上陸し、残りの用事を片付けた。波止場に戻つてきて乗船しようとする数人の暴漢が現われて、さっきの女たちを返せとつめよつてきた。それが同業者の争いかどうかは新聞でははっきり分らないが、とにかくうちも二癖三癖ある連中だから、たちまち大乱斗となり、あやうく誘拐業者が殺されかかるというところへ税関吏や巡査が駆けつけて、一切が暴露してしまつた。

ところが、誘拐された上に便所の内側から鍵をかけて息を殺している位だから、女たちは完全に男の口車に乗せられていて、本船からハシケにうつされてからもかえつて巡査を恨み、言わなくてもいいことまでしやべつてしまつた。

「あの船に乗つたのはなにも私たちばかりじゃないよ。昨日ボーイの藤原さんは七人もつ

れてきて、一人づつ樽に詰めているのを見たんだもの」

だが本船はそのとき、錨を抜いたあとだった。そこで上陸してからバンクーバーに電報で連絡したのである。

サティステイン関妃

（二七、七、一五、時事）

これは朝鮮の話。明治十五年の京城事変を経て日清戦争までの空気に生きていた人にはなぜこんな新聞記事が出たかはわかるが、いまではこんな短い雑報では意味が通じかねるから、解説的にかく。

日清戦争はだれもが知っているように明治二十七年七月三十日に始まつたが、（宣戦布告は八月二日。日本はいつもこんなやり方をする）その原因は十年以上も前からあつた。つまり若い日本の資本主義の急激な発展である。清国は政治的に朝鮮を支配したが、商品では日本が勝つた。朝鮮はこの二つの勢力の接点である。そこで、朝鮮の国内の政治も分裂して、絶えず勢力争いをやる。たとえば大院君一派、閔族派である、それがいかに国際勢力で動かされていたかは、日清戦争開始の七月三十日に閔族支配が倒れ、大院君政府が取って代つたことでわかる。

だから、日本に十年も亡命していた親日派の金玉均が閔氏一族に憎まれたのは当然だがここに登場する閔妃の憎みかたはけっして普通ではない。といっても歴史や伝記の話をするのではないから、ここでは彼女に興味をもつ人のために一二の例をあげよう。

彼女は閔致象の娘で、十七才で十四才の王の妃となったが、生来の政治家、というよりも陰謀家、権力慾の塊り、もちろん亭主を尻に敷くタイプ、性残忍で、傑物ともいえようがまことに厭な女である。支配階級はすべて一夫多妻だから朝鮮にも後宮があるが、そのなかに趙氏という美女がいて、国王のお気に入りとなり、世子義和君を生んだ。相続者を生んだのだから趙氏の勢力は強まりそうなのだが、相手が相手だからとても太刀打ちできない。子供ができて妃の嫉妬が燃え上るとたちまち退けられてしまった。そうすると国王が精悍な山猫よりも哀れな美人にますます惹かれるのは、アインシュタインの相対性原理よりもハッキリしている。情も忘れかねては使をやり書状を送って呼びよせる。趙氏とてまああの祟りは恐ろしいが、忘れられる仲ではないから、三度に一度はそっと通うようになる。遂にそれが閔妃の眼にふれて、怒り

は爆発するときがきた。その結果、閔氏は烙鉄で焼き殺されたのである。

金玉均は明治廿七年三月廿八日、上海で刺客の洪鐘宇に暗殺されたが、李鴻章がその死骸を軍艦で送り届けてくると彼女はそれをバラバラ事件よろしく寸断して曝し物にした。

いかにも残酷だが、これは私憤というよりも公憤だし、いかにエゲツなくとも彼女の政治的狂熱として恕することができよう。だが金玉均の妻にたいする残忍なやりかたは、そういう意味では説明できない。私憤といっても理由がないのだから、公憤でも私憤でもないいわゆるサディズムである。

金玉均の妻俞氏は殺されなかった。が、それは憐れみからでなく、生きて辱しめるためだった。苦悩と屈辱の思いを日々新たに感ずるように、妃の命令で彼女は売笑婦にされた。いかに政見がちがっても、金玉均といえど国内で知らぬもののない名士である。その妻を娼婦の世界に釘付けにして、永遠に自由を奪うのが閔妃の快楽だったのだ。金玉均の家臣はみるにみかねて、妾の名義で彼女を請け出した。だれでも、どんな賤しい娼婦でも、身請されて足を洗う可能性だけはもっている。家臣はそれを利用して主君の奥方を救おうと

したのである。ところが、それが発覚すると閔妃はふたたび彼女を捕えて苦海に落した。

つまり、金玉均の妻はなんの罪もなく、なんの理由もなく、ただ政敵の妻だというだけで、永遠に見知らぬ男に弄ばれる運命を宣告されたわけだ。日本の切支丹迫害史にも同様の例があるが、そこではまだしも自己の信念の犠牲だという慰めがある。閔氏の場合にはその慰めすらない。ただ弄ばれ、突き落とされる。その虚無的なつめたさが私たちの胸を刺すのである。

刑罰について

刑罰の話がでたから、ここで明治の刑罰についての報道記事を少しまとめておこう。私は個人の性行為のサディズムと法的強制力とをどうしても区別して考えずにはいられないから、刑罰や拷問にはあまり興味もないし、知識もない。したがって覚え書もごく断片的なもので、それも明治の新政府になってからすぐなくなったと思つた島流しに類するものがあるのにびっくりしたりして、いろいろの古い刑罰が消えて行く過程にむしろ興味をもつた。だがそれさえ不完全きわまる概念しかないのだから、いつか伊藤晴雨氏のような研

究家におぎなったり訂正したりして頂ければ
と思つてゐる。

新聞の報道によると、司法省の発表した明治五年の刑罰表は次のとおりである。

梟示	三	断罪	一二四
絞罪	三八	准流	二一〇
徒罪	八九	杖罪	八六七
答罪	二七五	除族	三二
閉門	四	謹慎	九
収贖	二八二	禁獄	七七
苛責一、六二四			

計三、六二四人

体刑の種類が多いこと、おどろくばかりで
新政府の面目はほとんど見られない。そして
この野蛮な刑罰は文明開化の嵐のなかを、か
なり永く生きつづける。明治七年四月廿八日
に判決された佐賀の乱の江藤新平と島義男も
除族の上曝し首にされているし、その一党は
除族、斬罪されている。梟示、つまり曝し首
が廃止されたのはやっと明治十二年で、一月
四日太政官布告第一号に、

「凡梟示ノ刑ヲ廃シ、其刑梟示ニ該ル者ハ一
体ニ斬ニ処ス」

とあるから、獄門はなくなったものの、首
を切り落すことはまだ盛だった。そう言えば

高橋お伝の首を落されたのも、この年の一月
三十日だった。

拷問廃止令が有名無実で、昭和の聖代まで
チャンと保存されたことはまぎれもない事実
だが、それにしても明治の御代にはそれが大
っぴらだった。八年四月四日上野の花見で巡
査と兵隊の大乱斗があり、つかまつた兵士の
一人が抜剣しないと言ひ張るので、裁判所で
箱責にかけて白状させている。箱責の例は十
一年八月の竹橋騒動（近衛の砲兵が給料減額
に不平を抱いて起した）にもあり、算盤責、
箱責を並用している。十年二月、警察官中原
尚雄が逆に鹿児島で叛軍に捕えられたときの
拷問の図が「明治太平記」にあるが、これは
手足の外に腰も縛って動けぬようにし、左右
から棒で打ち、さらに鉄砲の台尻で叩いた。
棒鎖は、十三年にも見えている。

囚徒の足鎖は、十六年まで重さ一貫二百目
もあって、腹骨部から右足に吊り下げ、踵の
ところで緊縛した。したがって動くのも苦し
く、作業するにも大変な苦しみだったが、十
六年大阪府監獄本署ではじめて改良し、重さ
は半分、それも腰につけるだけで脚を解放し
たからずつと楽になったといわれている。

十七年まで重罪犯を入れる集治檻に女を入

れる部屋がなかった。それで各府県監獄に分
離して入れてきたが、それでは費用の点もあ
り、重罪犯はひとまとめにすべきだという意
見が出て、宮城集治檻に女檻を新設するよう
になった。

また、従来は監獄本署から裁判所へ未決囚
を呼びだすとき、重罪は青縄、軽罪は白縄を
腰につけたが、明治廿年七月から軽罪犯は手
錠だけで、いわゆる腰縄は廃止になった。

しかし、こういうことはすべて、制度とし
ての資料になるだけで、人権尊重の精神とは
ほとんど関係がない。監獄と刑務所との呼び
名が変わったというだけでは意味がないのと同
様である。人権尊重は終戦前と終戦後のよう
に、べつな条件で生れもするし、発展もする
本誌連載の春田一郎氏の「幽囚十カ月」と昔
の監獄がどんなにちがうかを知るには徳富芦
花「寄生木」をよむだけでも十分だ。その残
虐さは監獄のシステムそのものよりも、そこ
に生きる人間の観念の相違からきている。そ
れが、明るい明治社会の底に流れる、くらい
専制国家の影である。

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger

△ 残虐なる女性達 △

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森本愛造・訳



才四章 「女性と奴婢達」

序 説

沼正三氏を始めとして多くの識者が共通した意見を述べているものに「パギスム」がある。勿論、開祖ザツヘル・マゾッホの著作の中でもパギスムの占める分野は大きい。その最も大きな魅力は、精神的、言語的な屈辱感に在ると思われるが、我国に於いて、是れまで何故にパギスムがマゾヒスムの大きな領域として考えられなかったかと云う事は、パギスムが大抵の場合ウールニングの一形体とし

て「小姓」「仲間」の様な形で現れたからである。勿論、博識な読者諸氏の中には、筆者が知る以上の資料を以って、女屋主と男性被雇用者との物語を提供して下さる方も居るかと思うが、私の考えは一般的には、私達の社会で、パギスム的な性的慾望が一般社会の通例になって（同性愛的な故に。）そのために異性間のパギスムも亦重要視されなかったという事は云い得よう。

次にパギスムの持つ特長として、その被虐感が「可能性を常に持っている凌辱への危険感」という非常に緩慢なものであること。一切の器具設備を必要としないこと。第三者の突然の侵入に対して胡魔化せること。等が挙げられよう。パギスムを扱った芸術作品も数多いが、それ等に就いては他に譲ろう。召使奴婢の問題が採り上げられたので一寸触れて置く次第である。猶、パギスム(Pagisme)は小姓(Page)からの派生語で、下僕願望とでも訳すべきであろうか。（以上訳者付言として）

本 論

総べて、主人と召使と二通りの階層が存在する限り、召使は常に世の辛苦を味わう側に属する。多くは教養も教育も無い召使達が、経済的な理由から女性の雇用者や支配者に仕

えたが為に、彼女等の恣意や支配慾からする加虐の犠牲としての地位に甘んじなければならなかった事は、過去の時代の報告が、余りに多くの実例を私達に伝えて呉れる。日常生活の内部的な実例は其等が余りに多かった故に記録にすら残されて居ない場合がある。

従つて文芸復興期以前にはこうした記録は稀である。つまり、奴婢への加虐が女性によつて行われようと、そんな事は記録にも注意にも値しない出来事ではなかったという訳である。歴史上注目されるべき、復興期以降こうした記録は急激に増加してゆく。

其等の報告によれば、多くの主婦達が奴婢達を自分達よりも下級な、第二級の人種であると考えていたという事が判る。確かに、こうした觀念を基底としたからこそ、人間としての取扱とは異つた対家畜的な取扱が可能であつたわけである。こういう觀念は部分的にはあるが、現代にまで及んで、屢々主婦達が、召使達を非人間的な取扱を以つて遇するのである。

〔訳者註、簡単ではあるが、伊太利映画「肉体の誘惑—Furia—」によつて、主婦と馬丁ロッロー Rocco. —の間の取扱について見られたいと思う。〕

現代に至るまで残存しているこうした女性達の加虐愛好は、勿論過去の時代にその嗜好が社会的にも法律的にも許されていた頃から無意識での慣習によるものである。例えばクーパー (Cooper) は刑罰愛好の念についての著書に於て次の通り述べている。

「昔、棒笞の刑罰が一般に慣用されていた時代、加虐愛好に基く課刑への慾望は、屢々人々を不安に陥れる程にまで発展し、多くの家庭内での女主人達は特に懲罰について通じていた。当時常識的な女主人と考えられていた人々は必らずこうした体罰の効用を疑わないのであつた。そして、これらの人々は常に、内心では性心理学の対象となるべき好奇心や或る種の特殊な感情を持っているのである。更に云うならば、彼女が不純な心(性慾上の昂奮を期待する気持、)を持っている場合、必らず性感としての快美感の満足を求めている事は間違いない処である。」

一度女性の性慾について研究を営む者は誰もこの事に同意せざるを得ないであろう。ここに引例しようとして扱んだ幾つかの事例が、明確な結論を読者に齎らすであろう。我々は手近に範を求めて、先ず独乙に於ける資料を探してみよう。

ザクセンの選挙侯の妻アンナ (Anna) に就いては、世に未だに母アンナとまで呼ばれた善政の統治者であつたが、翻つて家庭内の問題についてみると、彼女が非常な暴君であつたと考えられてよい幾つかの資料がある。即ち彼女は召使達が意の儘に動かない様な時無条件で、恰も子供を打つ様に杖や笞を揮つたと云われている。アンナが長らく滞在していたコペンハーゲン (Kopenhagen) からクライン博士 (Dr. Klein) の妻に宛てた手紙に面白い部分がある。

「私達の女中達は暫らくの間針仕事をさせるとすぐに首が凝ると申します。これは一寸可笑しいと思います。若しマルタ (女中の名) (Martha) が縫物についてとやかく云うのでしたら、帰つたら直ぐに打ちのめしてやるうと思つています。」

こうして成人した女中に対する主婦の取扱いが、善良且有識の婦女の間でもこの様なものである以上、私達は十六世紀頃の召使達が、一般に主婦達からどの様に扱われていたかという事を容易に想像する事が出来る。そうした例を次に記しておこう。

「或る打擲の好きな婦人がいた。彼女は毎朝早く起きて娘達の寢室を廻つてみるのだつ

たが、若し其の時に未だに床の中にもぐっていたら最後、早速引きずり出して思う存分に鞭をふるうのであった。多くの場合、打つための即座の器具としてスリッパが用いられたが、勿論笞や鞭の使用も稀ではなかった。この時代には、コーレル氏 (Korell) が確証する通り「何か高価な食器をこわした女中が、特定の部屋に追い込まれて、ソファの上で嫌と云う程鞭の味を知らされる位の事は、ありふれた日常茶飯事なのであった。調髪や結髪に際して、一寸でも頭に痛みを与えた場合、女中が規則通りの笞刑を免れた例は稀なのである」この様な事は、大家族制や、厳格な家長制度の家では、現代に至るまで実行されていた。著者は、この場合、新聞紙上に連日の様に報ぜられつつある新しい事例について述べる必要はないと思う。少し古い事ではあるが、一九〇〇年の初頭、メドリリンク (Mörling) の孤児の女中アンナ (Anna H.) に対してなされた取扱いについて考えて頂きたい。彼女は、収容されている男女児童と同じ様に、全裸にされて、鞭打たれたのである。ハンゼン (Hansen) は有名な彼の著作の中でこの事件について詳述している。

フランスでの事例については、一つの事件

だけをお知らせしておこう。十七世紀の忠実な歴史家、タールマン・デ・レオウ (Tallement des Reux.) が、ヴェルヴェン侯夫人 (Madame de Vervins.) について述べている。

(著者註) 本引用は下記文献による。シュミット・ホイエルト著「教育に於ける鞭笞」ラ イプツィツヒ市刊——Schmidt-Heuert; Für die Rute in der Erziehung, Leipzig.)

「彼女の家は一種の牢獄と思われた。娘は、彼女の家に入ったが最後、二度と表へ出て来る事は出来なかった。彼女は是等の娘を酷使し、全く野蛮と思われる程に打擲するのであった。その方法には常に鞭打 (Peitschen) が採用されるのだった。或る時の如きは、非道い鞭撻の後に娘を戸外に投げだしたために、娘が其の儘、死んでしまった事もあった。門番はいつも、命令なくしては一切扉を開ける事を禁じられていた。ところが一度、其の禁を破ったとき、彼女は四日間にして門番を鞭打ったのである。恰度、彼女の家の隣に住んでいた僧侶、(聖トオマ・デュ・ルウヴルの僧 St. Thomas du Louvre.) の言に拠れば、彼女は、一六四七年の受難日に、一人の男と一人の女を一日中鞭打って過したと云

う。

「タアルマンからの引用は、其れ迄に止めよう。只付記すべきは前述の娘についての出来事が、巷間、唄の形式で語られたという事である。そしてその唄の語る限りでは、犠牲者は苛責を耐え忍び通したと云われている。この唄はロオラ某 (Loré.) の作と謂われており、一六五一年八月三十日付の新聞紙上に発表され、当時口々に喧伝されたと云う。この侯爵夫人が屢々こうした無節制な加虐行為に耽ったという事については、タアルマンが指摘した肉慾の過多という理由だけでなく、この唄に示された様に屢々男の馬丁を平手で裸の尻を打つという方法で罰したという事によって、淫行と特殊な関連があると考えてよいと思う。

次に我々は、鞭打教徒の最も多く輩出した英国に目を転じよう。英国は、鞭打については最も一般に流行しており、大衆の日常生活にまで浸透した国である上、別項に詳述した様に、多くの植民地を有したが為に、女性の残忍な淫好による鞭打の実例は甚だ豊富である。

(以下次号)

お天狗松昔噺

『七化小僧出現』

緑 猛 比 古

三 条 春 彦 画

七化小僧出現

兄貴——、もうすっかり春めいて来て、向島じや気の早えのが、お花見に繰出したって云う噂だ。

今日は、あつしに天狗の面を彫り込んだ張本人、ちらし紅葉のお吟との、出逢い的一幕を話すって約束だったわけ——。

いつもいつも御馳走になりづめで恐れ入るが、折角の御好意だ。お言葉に甘えてチビリチビリ傾むけ乍ら、想い出の糸を手繰るとしようか——。

木曾の野幫間を相手に、とんだ道草を食ったあつしは、中仙道を西へ西へと急いで、尾張名古屋の金の鯨ほこを眺めたのが、指折り数えてあれから十八日目の事だった。

流石尾張大納言様の御城下だけに、大した繁昌振りで、かねて附手紙を貰っていた、大須観音一帯を縄張りにする、石仏吾兵衛親分の許に草鞋を脱いで、暫らくは見物がてら、三日四日とぶらぶらしていたが、丁度五日目の事だ。観音様の御縁日だというので、石仏

一家の三ン下に案内されて、御詣りに行つての帰り途、真正面からバツタリと出逢ったのが、外ならぬあのお吟姐さんだった。あつしはハッとしたその瞬間、思わず体が硬ばちまって、何と思つてか突嗟に姐さんの袂を我知らず、ぐっと固く掴んでいたんだ。憎いくせに、知らぬ他国で出会った人懐かしさと、気持がこんがらがって、江戸車坂での天狗鼻の一件も、その時にや忘れたかの様に、あつしはさも懐つかしそくに、

「久し振りで姐さん。とんだところでお目にかゝったもんだねえ。ホラよ。いつかのこたあ、まるで昨日かなんぞのように、手にとる様に覚えてるんだぜ。まさか知らねとは云わせねえ。下谷車坂の土蔵の中で、姐さんに散々お世話になったお蔭でこの松吉は、今じや呼名もお天狗松と、姐さんの御丁寧なお志ざしで、結構なお名前を頂戴する身分になったってことよ——」

果然と、あつしの顔をまじまじと穴のあく程見凝めていた姐さん

は、顔色こそ蒼白く変ったものの、さして悪びれもせずニンマリと笑って

「じゃあ、矢張りあの時のお客人——、確かに松吉っあんと云ったねえ。あの時や本当に非道い事をしちゃって許しておくれよ。わたしや何だかお前さんに心が惹かれて、あの時もすぐ後から乾分共の跡を追って、お前さんを探したんだが遂に見つからなかった。てっきり殺されたものと、後味の悪い思いで引き返したが、無事に生きていてくれて本当によかったよ。あたしがここで松っあんに逢えたのも、ひよっとすると観音さんのお引合せかも知れないよ。つもある話もあるんだけど、ここじや立話も出来やしない。何処かそこいらへつき合っておくれでないか——」

「そうだ。あつしも姐さんには云いてえ事がこの喉仏までつかえてうずうずしているんだ。行こうじやねえか」

あつしは三下と別れて姐さんと連れ立つと、観音様の鳥居の傍らの、鶯茶屋の奥の間へと通った。

愛憎交々って云うか、懐かしいやら憎いやら——。今度逢った時にや、唯じやおかねえと、腹を据えていたあつしだったが、いざ当の御本人に出逢って、こう奥まった四帖半の一間にしんみりと落付いたんじや、からきし意気地がねえ。心のたけの四半分と云えねえで、向いあっている、天狗鼻の奴が恋しいと囁きやがる。

盃を交し乍ら、姐さんはあれから、世話になっていた車坂仁吉親分の眼を盗んで、出入りの盆振りの弥太七と云う若いのと、手に手をとって出奔したと云う顚末を、まるで他人事の様に淡々とあつしに語るんだ。

「……そんなわけで親分の許を逐電したけど、運悪く追手の奴等

にとつ掴まってね。この道行も江戸を逃れて五日目にはすっかり元の黙阿弥さ。生捕りにする様との、どうせは親分の言付だろうが、あたし達は随分かなわぬ迄も刃物を振り廻して追手と斗ったが、どのつまりは雁字搦目に縛られて、街道脇の馬秣小屋に引ずり込まれたのさ。追手にも二三の手負いがあって、奴等は気が立っていたのか、あつしの目の前で弥太七を揮一つにひんむくと、寄ってたかって小屋の柱から柱へ張物の様にピンと体を俯向けにして宙に張ってしまった。体の重みで、柱の両側に縛りつけた手足の荒縄が深く肉に食い込んで、段々と紫色から白く変って行くのをあたしはどうする事も出来ず、口惜しく見つめていた。弓なりに反った体をのけぞらせて、弥太七は苦悶に眼をひきつらせて、獣の様な叫び声をあげていたよ。

『野郎待て待て——』

と、富蔵と云う、こいつは乾分のうちでも兄哥株の根っからの性悪で、以前からあたしに色眼を使っていた厭な奴なんだが、そいつが皆を止めると、何処から引曳り出して来やがったのか馬の鞍を手に持って、

『この畜生の様な野郎は馬で沢山だ。俺がひとつこいつに鞍を置いて宙乗りをやって見せるから皆見ていろよ』

と太々しくニヤリと笑って、いきなりドサリと弥太七の背中に鞍をのせると、踏み台を持って来て、パッとその背に跨ったじやないか。それでなくてさえ、手足の関節が外れそうになっているとへ、重い体をのられたもんだから、ガキッと変な音を立てて弥太七の附根から骨が外れた様子だった。

『ヒーッ、こ、殺せ。あつさり殺してくれ』

と叫ぶのにお構いなく、富蔵は弥太七の背で肥った体をゆさぶらせ乍ら、叱っ叱っと馬を追いつ立てる気で鞭でバシリバシリと尻を擽りつけ、両脚で代り番こに脇腹を蹴り上げて、



☆
思

『これでもか、これでもか』と鬼そっくりの赤ら顔に湯気を上げて責めさいなむのさ。

『鬼め、は、早く殺せ——』弥太七は可哀想に半死半生でかろうじて叫んでいたよ。

『ようし、殺してやる。一寸だめし五分刻みに鬨りながらな——』

富蔵奴、ギリギリと道中差を引っこぬくと、

『おい、姐さん、ようく見てるんだぜ。間男をした野郎の最期をな……』

そう云って、いきなりサンバラ髪を束にしてブツタ斬ると、『出しやばったところは目障りでならねえ』とつぶやいて、刃を引く様にして、弥太七の両耳を削ぎ落し、鼻を削ぎとって、顔一面真赤に染めて、ポトポトと血のしたゝるのにもお構なく、スイスイ縦横に二三度撫で斬った。

流石に乾分共もあまりの凄さにシーンとなっちゃったよ。ガーッと血を吐く様な断末の叫びと共に、弥太七の口から血汐がとんで、それが見上げていた富蔵の額にパッと散りかゝった。それが弥太七の最期だったよ。鱈のようにズタズタに斬りさいなまれ、腕の附根をスパッとやられた弥太七の体は、弾みをつけて両脚を縛りつけた柱にドスンとぶつかり、だらりと頭を下に逆さに垂れ下った。斬られた両腕の附根からドクドクと滴り落ちる血汐で、柱の根っこは血溜りが出来ていた。

『親分にこのまま引渡すのも勿体ねえ話だ。フフ、お次は姐さんの番ですぜ。この富蔵がたんまりとちらし紅葉にお詣りした上、この

御利益を順ぐりに、皆んなにおすそわけするとしようじやねえか——」

奴は蛇の様な眼で、あたしの体をなめ廻し、右手に血塗れの脇差を提げたまま、空いた左手で、そろそろあたしの帯を解きにかゝった。死んだってこんな野郎に自由にされてたまるものかと、あたしや口惜しいから、

「あたしの肌へ一寸でも触れて御覧、舌をかみ切って化けて出てやるから——、その気ならいくらでも、好きな様にするがいいさ——」なまじりを吊り上げて怒鳴ってやったら、弥太七を颯り殺しにした直後でもあるので、流石に気が咎めたのか、未練げに帯にかけた手を離れた富蔵の奴は、

『チエッ、このあま奴、間男をしてい乍らきいた風なことをぬかしやがる。親分に生身のまゝ渡すんでなかったら、舌をかみ切ろうとこつちの知った事じやねえんだが……』

さも口惜しげにそう云って、あたしの顔を目掛けてベツと唾を引っかけやがった。

乾分の一人が、早馬で車坂の親分の許へ注進に飛んで、戻ってくる迄の間、柱に縛りつけたあたしを見張りがてら、奴等は車座になって、貪之徳利で口移しに地酒をあふり乍ら、手なぐさみを始めたのさ。

髭の仁吉親分がやって来たら、この上どんな非道い目に逢わされるか知れやしないと、半分死んだ気で、びんのほつれを口惜しくかみしめていたけれど、身から出た錆で、親分の顔に泥を塗って逐電したんだから、賽の目に斬りさいなまれても文句の云える体じやないが、矢張り命が惜しくてね。

酒にくらい酔ったのか、奴等は腕を枕にあちこちへゴロリゴロリとぶつ倒れ、見張りはあたしが車坂で目をかけてやった、例のお前さんが指を噛みきった、半次って頼間な奴だったか、

『姐さん、縄がきつくありませんかい。何なら少しゆるめましょうか』

なんて云い乍ら、気兼しいしい役目柄詮方ないと云った風であたしに附添っていた。

『半次——、あたし、もう我慢が出来ないの。縛ったままでいゝからちよいと小用に立たせちやくれなにかねえ』

下腹が痛くなる程こらえていたあたしは、どうにも辛抱しきれず頼んだ。困った顔で半次の奴は暫く考えていたが、やっと思いついたのか、柱の縄を外して後手のまゝ、あたしを小屋の外へ連れ出したけど、生憎街道筋の馬秣小屋だから、小用をたすはばかりもありやしない。

『あたしや今更、逃げたりなんぞしやしないから、ちよいと後手をゆるめておくれよ。これじやどうにも出来やしないじやないか』そう云ってやったら、半次の奴は顔を真赤に染めてもじもじしい、黙って後手の縄をゆるめ、用を足す程度の自由にはしてくれた。

『女が用を足すのを、そんなところで突っ立って見つめていちや、出るものも出ないよ。チョイト気をきかせておくれなよ——』

少し足りないから半次は慌てゝ向うを向いて、

『じやあ、済んだら声をかけて下さいよ姐御——』と、神妙に背を向けている。

今だ——。あたしは突嗟にそう思って小用も足したかったけど、

そこにしやがむふりをして、一步一步後退りし乍ら奴から離れ、あとは無我夢中でどうつゝ走ったか――。

小屋の方で、『逃げたッ』とのゝしり騒ぐ声をよそに、必死になつてあたしは走りに走った。

ちらし紅葉の気の強いお吟姐さんも、追われる身になつちや薩張りお仕舞さ。やつと尾張まで辿りついたけど、奥を云うと一寸先は闇なんだよ。ねえ、松っあん。後生だからあたしを救けておくれよ弥太七と手にとつて駈落ちしたあたしの事だから、今更信用し



お吟

ないかも知れないけれど、本当のこといや、あたしやお前さんをあの土蔵の中で三日三晩責めつゝけた後、無精にお前さんに惹かれて好き心になつていたのさ。責めて弄んで今更惚れたでもないが、天狗面を彫つたあの時から、ふといつか知らず知らずにお前さんのあの時の姿を思い浮べる様になつたのだよ。妙なもんだね。虐めた男を好きになるなんて、あたしやそんな女なんだよ、松っあん――』

『聞けば長い話だ。云われて見りや、あつしだって、姐さんの結構なお茶を、のまされたあの味は、一生忘れねえぜ――』

『今更いゝつこなし。顔から火が出るじやないか――』

姐さんは眼のやり場に困つた様子で消えもいりたげにさしうつむいていた。それでいて、長話の間に、いつか姐さんの白魚の指があつしの手に絡みつき、男心を誘い込まずにはおかえねような捨身の色情を満身に浮べて、ずっしりと体をもたせかけてきていたんだ。

あつしの場合、憎さ余つて可愛さ百倍の、妙チキリンな工合になつちまつて、もともと糞を食わされ、姐さんの泉の洗礼を受け、天狗面を彫られて、半殺しの目にあつてい乍ら、その時から姐さんに何となく惹かれていたのは確かなんだ。

えゝいままよ。こうなりや据え膳食わぬも何とやら、行けば地獄の底までも、行きつくとこまで行つてやれと云う氣になつた。

人間つて奴は妙なもんだ。あれ程責めさいなんでおいた男と、一緒に暮すようになった女も女なら、憎んでいつか一度はこの御札をしてやらすば虫が納まらねえと、腹をくくつていた男が、とんだ処へ御札詣りの羽目になるなんて、へへ、これがほんに、まゝならねえ浮世かも知れねえ。

全くもつて意気投合したつて云うのか、一夜あくれば、まるで十



年以上も連れ添った様な恋しい仲になり変っていやがる。

『ねえ、お前さん。以前の様ないかさまだけはもう止しておくれでないか。車坂の二の舞でもあった日にや、あたしやどうしていゝかわからなくなるじやないか——』

なんて云やがって、いっぱしの恋女房振りだ。そう云われりや、これ以上いかさまもやる気になりやしねえ。と云って、二人の口を濡らして行くにしちや、持寄った路銀はたかの知れたもの。半月もすりや忽ち乾上ってしまうに定まっている。

そこでフト思いついたのが筒持たせと云う商売。どうせいかさまとも五十歩百歩で、余り人様にも御大層に云えることじやねえが、

あつしはやくぞ稼業の割に肌白の人目にはおっとりしたところがある。言葉をつゝしんで、少し神妙にさえすりや、素性を見破られる心配はねえ。と云うのが、美人局と云や、昔から女を玉に使って、ひもの男がここぞと云う所へ飛び出すのが定石だが、あつし達の場合、お吟が余り人前に顔を出せねえところから、あつしが女をくわえ込んで、危機一髪というところでお吟が飛び出そうと段取りだ。

お吟が凄じい啖呵で、相手の女を吞んで、脅しにかけて幾許かの金にありつこうってわけで、幸いお天狗鼻がいっぱし女を見定める目をつけてくれたお蔭で、こいつはチョイト面白く思った。

有金を掻き集めて、程よいところに小綺麗なしもたやを一軒借りた。いつ迄もお吟といちやついてもおられねえ。

あつしは先ず手始めに二三日、あちこちと噂を掻き集めに走り廻った。

それで最初に引掛けたのが、中村に程近い通称、揚羽町の醤油屋亀甲屋嘉兵衛の出戻り娘でお俊という女——。

嫁いで半年も経たぬ間に、花簪が鈴鹿の雲助に大金を奪われ、それを苦にして鈴鹿峠から飛込んで、未だに生死知れずと云うことで一先ず親元へ戻って来たと云う世間の噂をたぐって、これにわたりをつけた。一旦肌を許した女というものは案外もろいもので、あつしの身奇麗さと、江戸で心に染まぬ縁談を嫌って、大金もって尾張に逃げて来たと、口から出鱈目の仕方話が図に当って、観音さんの大公孫樹の蔭で忍び逢うところまでどうやら事は運んだ。後は一息、あつしの甘い口説にすっかり乗った女は、思う壺に嵌って、峠まで

誘い込むのにもう手間暇かゝらねえ。

下ぶくれの色白で、十九と云う若さの味も又格別、お吟との一条がなけりや本気でかゝったって悪くねえ玉だ。

それだけに自然に情も移るってわけか、すっかり信用しきったお俊は奥の間に夜具が敷かれてあるのに気付いても避けようともせずもたれきつたいじらしい風情で、あつしの手出しを今か今かと待ち受けている風だった。考えて見りや美人局なんて因業な仕事だ。心にもねこ甘え言葉でたらし込んで、行燈の灯を小さくした女が、衣摺れの音もなやましく、そつとあつしの傍へ寄り添ってきた途端、ガラリと襖を荒々しく開けて現われたのが外ならぬお吟だ。

驚いた女が緋ちりめんの裾の乱れを直す間もあらばこそいきなりずるずると髪を握って引曳り出すと、

「あたしの大事な人を寝取った奴はどこのどいつだい——と、えらい権幕の啖呵をボンボン切った。たたみの上でもものも云えずふるえているお俊を小突き廻す内、あいつの人を虐めて飲ぶ厄介な虫がむくむくと起き上って来たのか、ニンマリとあつしに向って笑うと、素早く手当り次第の、細紐やしごきで女を長繻絆の上から後手に縛り上げ悲鳴を挙げるのを矢庭に足袋を押し込んで、上からしっかり縛り手拭で猿轡をかませ、じたばたせぬ様にと黒髪を七首でブスリとたゝみに縫いつけて、『お前の様に尻癖の悪い女にやこれが一番よく効くのだ。さ観念するんだよ——』

と、お吟の奴はいつ用意したのか伊吹山の艾を袂からとり出すとじわじわ指で丸め乍ら、竦み立っている女の両の太腿を帯でしっかりと括って、その上にどっかりと馬乗りになる



と、真白いつき立て餅そっくりの柔かい足首にもぐさを唾でへばりつけて、行燈の灯を線香に移すと、平然と肌を焼き始めた。

ジリジリ皮肉を焦がして行く熱さに耐えかねて、必死と身をよじる女をぐつと押えつけたまゝ、あいつはさも小気味よさそうに眼を細めて眺めているんだ。

それどころか、桃色に痛々しく爛れた灸跡を、お吟は情容赦もなく二尺指しで、ビシリビシリと皮の破れて血のにじむ迄、滅多打ちにした。

その挙句が、亀甲屋へ乗り込んで脅しとった五十両——。娘可愛さに内聞に済ましたらしいが、あいつのむごい仕打にや、あつしもしみじみ寝覚めの悪い思いだった。

贅沢三昧に暮して、金がなくなると、お吟はあつしに催促してカモを探させた。こんな調子で、四五人は引っ掛けた事だろう。その度毎に、土壇場に現われたお吟の奴は、相手の女を虐めるのが、さ

も愉しくて耐らぬかの様に手を変え品を変えて、責めさいなみ、いびりつくすんだ。時の場合によっちゃや、あつしも縛られて一緒に責めのオトリになったり、又処をかえて、お吟に追い立てられて姿を消したり、お吟とグルになって責めた時もあった。次から次と新手の虐め方を考え出すお吟があつしは段々に恐ろしくさえなってきた。

お灸責めなんぞ、まだいゝ方で、床柱に縛りつけた女の頭の上から、ローソクを針金で逆に吊り下げ、女の髪や顔に蠟の滴が、ポトポト雨の様に垂れかかるのを平気でいたり、塩水を無理矢理吞ませて小用の催おして苦しむ女を肴にチビリチビリ酒をのみ乍ら眺めていたり、戸板に体を縛りつけて逆さに立掛け、松葉をいぶし立てて見たりで、こうしたお吟のあくどさに無精に腹立たしく思い乍らその癖反面じや、次々と変った女がさまざまに虐められ、責められるのを、そばで見ているのが、又妙に愉しくもあつたんだから全く辻褃の合わねえ話だ。そんな事で、何度もお吟と別れ様と思いつゝも別れられねえのは、そうしたあつしの心掛にもあつたってわけだ。

それにしても、あつしが散々に口説いて連れ込んだ女ばかりだっただけに、恨めしげに、歯を食いしばり、まなじりを吊り上げてジツとにらみつける女達の、あの怨みのこもった眼付には、思い出しでも後生がよくねえ――。

女達から巻き上げた金のあるうちは、お吟はのべつ幕なしに、夜のけじめなく、暇さえありやあつしを馬車馬の様に使い立てやがる。世の中にや、よくもまあこんな女もあるものだと思う程、お吟の奴はまるでその為に生れて来た様な女だ――。



そんなわけで、あつしは何時かお吟と離れなくちや、この怪物の様な女の為にとり殺されてしまいたいような気がしてきた。

あつしが逃げ腰になったと知ると、お吟の奴は焦り立って、未だ金には当分事欠かなかったが、例の虐めて責めて見て、せめてその持て余した疼きを押えようとでもしたのか、あつしにカモを見つけてこいと催促しやがった。

もうこれでこんな因業な商売のし納めのつもりで、あつしはそれから四日目に、やっとお園と云う若い娘をたぐってきた。

暁橋のたもとで、沈んでいる娘に巧みに話しかけたら、頼りにな



る男に見えたのか、いそいそとついて来た。きけば親元もかなりだし、器量は十人並以上の上玉——。好いた男と添えぬのをはかなんで、身投げ寸前ってわけだったんだ。顔に少し険はあるが、それが又色白だけにお侠らしく勝気に見えて、眼のさめる様な振袖鹿の子もよく似合って、二十才前の花盛りの色ッポさを全身にみなぎらせて、途々、そつとあつしの手をとって袖にかくして強く握りしめるなど、こたえられねえ仇姿だ——。

答え

そうなるとこんないゝ娘を、お吟の毒牙にかけるのが急に惜しくなってきた気持は判って貰えるだろう。

いっそのまゝお吟のもとをづらかつて、お園としっぽり出逢い茶屋でも濡れてやれと云う気がムラムラと起って来た。

塀とは逆の方に向って、あつしは急にいそぎ足になって、明るみを避けて早く二人になりたがった。

茶屋の奥まった一室——。行燈の灯を落して、上首尾でさて、と
いった瞬間、血相をかえて飛び込んだのがお吟の奴——。失敗った!と思ったがもう遅い。察するところ、ずつとあつしのあとをつけていやがったものと見える。

お吟奴、本気で妬いて柳眉を逆立てゝいる。
いきなりあつしの頬つべたに二ツ三ツ平手打をくわせておいて、お吟は娘に向って猛烈に突っ掛かっていった——。

と、どうした事だろう。あの身投げ迄しようとした花も恥ろう娘盛りのお園が、さつと半身をひらいたと見るやお吟の利腕を逆手にとって鮮やかに膝の下へ引据えていた。

ハッとして逃げようとしたあつしに、

『待てッ』とするどい声がかゝり、振り返って捨身で女に腕を振り上げたあつしは、その時脇腹に一発当て身をくらって、見事にその場に伸びてしまった——。

『どうだ——、気がついたかこの小悪党奴。』我に返

ったあつしの前に、娘姿の正しく先程のお園が、あられもなく腕まくりした男の声で颯爽と立ちはだかつていた。

さてはかねて噂にきいていた、七化け小僧の隼太郎とはこいつだったのかと、気付いた時は既にあとの祭だ。

身の自由がきかぬと思ったら、一つ縄でお吟と背中合せに縛られていた。

『どうだ驚いたか——。罪科もねえ女達を虐め尽して、甘い汁を吸っている奴があるときいてから、この俺らの胸のつかえが下りなくなっちゃった。世間様じゃ七化け小僧って呼んでいるが、ちよいと紅白粉つけて早変わりで一芝居かいた迄だが、万更命迄とは云わぬまでも、ちったあ見せしめに懲らしてやるから覚悟しなよ——』

お釈伽様でも氣のつくめえとはこんなのを云うのだろう。まさかあの初々しいお侠のお園が、今名代の義賊、七化け小僧とは……。

あつしは全くなす術もなく呆然としちゃった。いつかの罪の償いあった方が、あつしも反ってさばさばする。あつさり度胸を据えて隼太郎のなすがまゝに身を任せる氣になった。

お吟もさすがに度胸がいゝ。

『おや、お前さんが噂に高い七化け小僧なの。そうと分りや今更ジタバタあがいた処で始まらないよ。どうなと氣の済む迄好きな様に料理するがいゝさ——』

『フン、悪あがきしない処は悪党らしくていゝや。じゃあそろそろ始めるとするぜ——』

隼太郎はあつし等二人を交りばんこにしっかりと後手に縛り直すと、欄間に献上博多帯をかけ渡して、お吟は脚継ぎに、あつしを酒樽を転がして来たその上にのせ、帯の両端をそれぞれの後手の縄に

結んだ後、ボンボンと両足の支えを蹴り外して、丁度つるべの様に欄間の左右に吊り下げやがった。

それから一刻近くも、隼太郎の奴は、あつしとお吟を交る交る、竹刀がささらになる程、所嫌わず殴りつけ、尻や背の皮肉が破れてポトポトと血がしたゝり落ちて止め様としねえ。無言で殴る隼太郎が、あつしにはどうしても花恥しい美女が折檻している様に見える、一向に腹が立って来ねえ——。反ってなんだかボウとなっちゃまって、心ン中じや、隼太郎じゃなくてお園に、今迄の無薪の仕打を責められている見たいな氣で、かつてお吟に車坂で責め虐なまれた時とよく似た氣持だった。

腕首は流石に抜ける様にキリキリと痛む。お吟の脂の乗りきった身体にも、打撃の跡が生々しく真赤にはれ上って、一面のみみず腫れがのたうっている。——許してえ！とでもそのうち音をあげるかと、お吟の殴られるのを、うつすら霞みかゝった眼で見っていたら、悲鳴をあげるところか、ハアハアと息を弾ませて、

『もっと打って——、強くぶってえ……』

とたわ言の様に口走り乍ら、顔を真赤にさせてうっとり、隼太郎の鞭を甘受している。ちらし紅葉はすっかり赤く色付いて秋たけなわに白い肌に浮き上り、竹刀の跡が彫物の様にその間にうねって眼も綾に息つき、お吟の瞳は、娘姿に竹刀をふり上げる度に妖し色ッボさを辺りに漂わす隼太郎にヒタと吸いついて離れない。

三人三様に、まるで心の中のねじが何処か狂った様な、夢中のひとゝきだった。

ましてお吟の場合、今迄散々女を虐めて来た我が身が、今は吊り下げられて打たれる立場なんだから、その氣持も又一種変わった味わ

いがあった事だろうよ。

『もう止した——』

隼太郎は突然ガラリと竹刀を投げ出すと、どっかとそこへあぐらをかいて座込んだ。

『何だかめえ達を責めていると、こっち迄、妙な気が移って不可ねえ。まるで殴られるのを悦んでいるようじゃねえか。莫迦莫迦しい』

『じゃあ、どうなと好きな様にしておくれよ』

間髪を入れずお吟が、吊られたまゝ、身をくねらして叫んだものだ。黒髪の根締めもいつか切れて、乱れて顔にふりかゝり、ひどくなまめかしい。

『よし、好きな様にしてやるよ——』

隼太郎は立上って、帯からお吟をといた。一方が外れた弾みで、ドサリと落ちたあつしには目もくれず、

『惚れた亭主の前で、どうだ。なびく気はあるかい——』とぬけぬけお吟にぬかす。

『フン、とんだ惚れた亭主だよ。もうあきがきて鼻についていたところさ。あたしや責めるお前さんのその水際立った女振りが、ゾクゾクする程好きになっちまったんだよ——』

お吟奴声を弾ませて、後手のままにじりよって、隼太郎の腕の中に身を投げかけやがった。

別れたいと思っていた矢先の女でも、こうヌケヌケと眼の前で言われちゃ、あつしも男の端くれで腹も立つ。

『売女奴、お吟の畜生——』

と我知らず叫んでいたが、隼太郎奴、空いた手であつしの三尺禪

を矢庭に口に押し込んで、禪の紐で禪から唇に食い込ませて縛って猿轡にし、チヨイと考えていたが、お吟の縄を素早くとくと何か耳打した。

あいつは全く凄いい女だ。義理も未練も、へったくれもありやしない。今迄亭主にしていたあつしを洒々と、隼太郎と二人して手足もって引ずると、夜具の枕元の行燈の側へあぐらをかゝせ、後手の儘であぐらをかいた両脚を膝のあたりからぐるぐる巻きに堅く縛り、余った縄を首に巻きつけてぼんのくぼで結んでしまいやがった。俯向き加減で眼は前をにらんだまゝ身動きも出来ねえ哀れな姿だ。あつしは観念してつぶった眼がいつしかウツラウツラして、全くもって呑気な男だが、縛られた体と猿轡で息苦しくなつてフト気がついた時には、二人の姿は消えていて、もぬけの殻。手に手をとってずらかったお吟に左程の未練もなく、反ってサッパリした気だが、間抜け男が一人取残されたと知ると、五体がむしように痛み、ずきずきと脈打って、もう意地にも辛抱出来ねえ。ぐっと体を海老の様にかがめるだけかがめて、どうやら首にかけた縄は抜けたが、それ以上はどうしても駄目だ。

もうあつしは恥も外聞もなかった。

『おーい助けてくれ——』と叫んだら、女中のパタパタと足音が聞え、続いてガラリと襖があいた。そこは何か話の辻褄を合せて縄を解いて貰ったが、色の変った手足をさするもそこそこに、身仕度して飛び出したが、旅の恥はかき捨てに限ると、その場から尾張の地を後にして、草鞋をはいた。

風の噂の仲間の話じゃ、七化け小僧に情婦が出来たとどっかの賭場できいた。お吟のあまめ、天狗を小僧に乗りかえて、骨のずいま



【読者通信】

五月特大号誌上読者通信欄で拝見しました(長崎K子さん)の下着、出来ますればスリッパ(上下レース付)及びデシマブラー、ハンカチ何れもK子さん御使用のものをお譲り願いたく思います。尚、お恥しいことですが最近春日嬢のような美しいサジの女性の手で存分に苦しめられたという欲望でどうにもならないのです。ともすれば理性を制止出来ないような衝動にかられ頭が変になりそうです。この狂いそうな気分を昇華せしめるという意味で春日さんに苛められるモデルとして使用して下さらないでしょうか、お頼り致します。殊に「マゾフォト」の一枚、スリッパを着用された春日さんの太股で首の絞められているもの、又長瀬昭子さんの股絞め或は

首絞め等これらの場面の絵、解説をみるとたまらないのです。私は如何なる苦痛にも、たとえ半殺しにされるような責苦にも絶対耐え忍びます。どうかこの哀れな切望を是非実現して下さいよう幾重にもお願い申し上げます。

(京都L・F生)

私は新年号の「綿ネルの妄想」で書いたように腰巻に興味を持っている二十九才の男子です。職業は普通の会社員で日常はノーマルな生活です。只私の趣味を理解して下さい女性、年は上の方でもかまいませんが文通でも願えれば幸いです。私が先日、或る一ぱい飲み屋にて仲居さんを相手に一ぱいやつていた時でした。直ぐ横に腰かけている彼女と私の間に扇子を落したので私は何気なく屈んでそれを取り乍ら、ふと彼女の着物の裾を見ますと、前が少し乱れて下から桃色の布片が見えていたので、暫くしてから話の序でに「貴女の下ばきの色を当てようか桃色と違うか」と聞くと、彼女は「そうよ、貴方どうしてそれかわかったの?」と不思議そうに問い返すので「今これが落ちたので下を見た時裾から出ていたのでわか

ったんだよ」その時の彼女の如何にもいやらしいといった吐き出すような次の言葉は色気もありませんでした。「いやらしい、貴方変態ネ」成程、私が殊更その方に注意が向くのは変態かもしれませんが、あの時真実私はガツカリし淋しくなりました。と同時に私の心の友はKK誌とそれを取りまく読者の皆さんだと、又反対に暖かい気持ちになりました。案外インテリの男女の方々がKKの熱意なフアの様に思われます。あの時仲居さんが、「ああそう、私のお腰がずつていたのネ、私、桃色のが好きなのでいつもしているのよ」とでも云って着物の乱れで、直してくれたら、何んと味のある可愛い女だろうと思えるのですが、中々そんな女性にはいないようです。

(大阪、福本時三)

毎号御誌の出るのを首長くして待つております。種々多彩な告白文など自分の性向と比べて此処にも私の心の友ありと、どれだけ社会的な孤独な身が慰められたか分りません。加藤要氏の提唱せられた愛読者の会大賛成です。毎号グラビアの男性マゾ緊縛のモデルはもっと若い美青少年に登場願いた

いののは決して私一人ではないと思います。御誌旧号全部を買い求めたときの景品の素晴らしさ。自分も縛りまた縛られてみたらと思いましたが、旧号にて活躍の嶽、青柳、永田寅松の各氏など如何しておられましようか、ソドミアの人達は美青少年を求めますが、自分はその勿論の事、奇形不具などに悩むソドミアの人達と交際したいと思ひます。

(大分A・T生)

小生一昨年の十一月号より貴誌の愛読者の一人ですが、毎月書店に出るのを首を長くして待ちこがれる者です。五月特大号を購入して一カ月目、喜び勇んで書店に参りましたところ奇巧は休刊していと聞きまして、一日を大阪市内の本屋をくまなく探してみましたがありませんでした。あれほど私のようなソドミヤを楽しく慰めてくれた奇巧が休刊したので、二カ月の休刊、毎夜物淋しく旧刊を取り出して思いの万分の一でもと独り慰めております。いかがが致しましたのですか、早く発刊して私たちの淋しき者に光を与えて下さいませ。貴誌の方にも色々事情もあることと思つておりますが一日も早く再刊されるよう、祈つ

ております。

○ (大谷信一)

奇譚クラブ、毎号楽しみに拝見しております。このような雑誌としては口絵、写真が生命と存じますが、いさゝか希望を申し上げてみたいと存じます。毎号の絵、写真はほとんどヌードあるいは、それに近いものでございしますが日常みかける程度の和あるいは洋の着衣のまま、およびそれが乱れてヒップなどがみえているようなものの方を小生は好みます。また読者通信などにも、そのような希望が見えるようですが、公開の誌面としては遠慮しなければならぬのでしようか、せめてヌードよりはスリッパ、靴下はつけていた方が刺戟が強いように感じます。アメリカの写真などは必ず靴下をつけているようですので出来れば貴誌面にもそのようなものを載せて頂きたく存じます。また昨年十一月号の読者通信に堀八郎氏も述べておられたように女学生を扱ったものを是非御願ひしたいと存じます。編集の御考案として未成年者はなるべく扱わない御方針のように云っておられましたのが、子供としてはではなく既に「女」になつてゐるように扱えば差支えないかと存じます。

ますが如何でしょう。小生はおはざかしいながら「セーラー服」「おさげ」「黒い靴下」などに特別の魅力を感じますのでそのような姿のしぼり、せめの写真を是非手に入れたいと念願しております。

○ (山川彦六)

最近貴誌を愛読致す二十七才の青年ですが秘かにマゾヒズムの世帯にあこがれ同種の文章を拝見するのを楽しみに致しております。学生時代、アルバイトに雇われた避暑地の旅館で小生の仕事ぶりが不手際なために、女中さん達に軽蔑され、遂には彼女らの按摩までさせられましたが、心の裡ではもっと重いお仕置をされたいと望んだ位です。今でも時々彼女らに潜んでいた嗜虐性が燃えた場合、発展した状況を想像してみます。四月特大号の牛乳風呂の饗宴に出て来る女主人の如き美と驕慢の女性の奴隷となることは、私の如き男の渴望する処です。足に鎖をはめられた男奴隷を女主人は恣に私刑する……馬乗り、人間椅子、奴隷の接吻、更に激しく苦しめ恥しめる女王様、正に夢幻の樂園です。

○ (東京、山口生)

永らく御無沙汰致し申しわけございませぬ。未だ六月号が発行されてないのはどうしたことですか。当局の検査がやかましいのですか。御誌の熱烈な愛読者の一人として心配でなりません。私は昭和二十五年、大型雑誌当時から読者でその間、読者通信も幾度も出し、又誌上にものせてもらったことがあります。私は「私刑マニア」で女が女を私刑するのに最大の興味を持つてゐるのです。従つて「クリスチーナの受難」「アリスの人生学校」等の大傑作をはじめ、沼田さんの「アイヌスいじめ」「フレンチカンカン」創作「私刑」或は懸賞告白の「半公刑」等は大好きです。

○読者通信をお寄せ下さい
読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシ／＼とお寄せ下さい。

縄張り争いから女同士が口論となり、格闘の結果一人が私刑となるといったものが私の好みに合います。最近になつて女子プロレスも人気を得て来たのはうれしいことです。昨年十一月、アメリカより来日したレッドパークの時なんか仕事を休んで大阪へ見に行きましたが始めて見たので胸がドキ／＼して落着かなか

ったです。五月特大号では、春日伊吹さんのコンピの馬乗り写真が大変よかったです、これだけでも御誌を買った値うちは十分あります。たゞ足を伸べていて、白いズロースをつけていたらもっとよかったです。

○ (奈良 綾太郎兵衛)

初めて御便り申し上げます。小生三月程前、何気なしに古本屋で貴誌を発見しました。それをみたときこんな雑誌があるのかと胸のときめきを禁ずることが出来ませんでした。というのほ小生は幼少の頃より革の長靴に異常な魅力を感じておりましてから、それで女性が乗馬靴をはいて男にま

たがっている写真を見たときは興奮のあまり身がふるえました。それから機会ある毎に古本屋を探して片っぱしから購入していき、本年二月号の四馬孝氏の悦虐の部屋、三月号の尻打ち等は小生にとつてたまらないものです。大股のつけ根まである長靴——小生の好みは胴の長いもの程よく、膝

までの半長靴や胴の固いもの（戦時中の将校が着用した）はあまり好みません。一枚革の足のつけ根まで達する程長いのがよいのです。そして色は黒で光沢のあるのがよろしい。編上式になっているのが又たまりません。そこで編集部の皆さまにお願いがあります。半裸体の女性が後手にロープで縛られ、手にも長手袋（革製）をつける。そして長靴をはいて馬にまたがっているところや、逆吊りの場面（勿論長靴を着用して）等をもせてもらいたいです。日本にはこのような長靴が殆どなく残念です。その点外国は恵れており殊に西暦一六〇〇年から一八〇〇年頃のフランスの風俗に多いようです。戦後のアメリカ映画で「剣豪ダルタニアン」「すべての旗に背いて」というのがありました。どちらもモーリンオハラが男装して太股まである長靴をはいておりました。勿論男がはいてもよろしいが、女性のはくのがたまらないものです。皮革が安ければ作らせるのですが、膝までの長靴でも八千円もします。私の好む膝上一尺もある様なのは相当高価になるので作れないのが残念であります。小生は今年三十才、妻子もあ

りますが、私の理想は妻も小生も太股まである長靴をはいて生活することです。（大阪 松岡幸）

○ 一柳トシ様、五月号の「私の下穿きを」拝読、すっかり感激いたしました。こう申す私は勿論フェチリストです。貴女のようなフェチリストに理解のある方を奇巧に見つけた事は大きな喜びです。廿七才、独身の私には永年の憧れである女性のブローズ、パンティ、月経バンド等、どうしても手に入る事が出来ませんでした。或る時は花柳界の女性に頼んでも考えましたが、若しも病気に感染したらと思うとそれも出来かねました。他家の物干しにあるものを盗んでと何回も誘惑にかられましたが臆病の私にはとても出来ぬ相談です。それに奇麗に洗濯してあるものにはそれ程の魅力を感じられません。多分にマゾ的な私は出来るだけ汚れたしみのあるパンティ月経バンド等に接吻し寝る時は顔をくるんで寝たらどんなに楽しからうと思います。

（千葉 山村慧吾）
私は奇巧の愛読者の一人として初めて通信させていただきました。

無論奇巧の愛読者である以上、アブノーマルな性格を多分に持った人間であります。私の好み的一端を申上げて編集部の方にお願ひすると共に同好の方との御交友を切望いたします。先ず私の性向にピッタリと合ったのは山口幸一氏の「美少年の秘密」三根耕二氏の「被虐少年期」青葉楓一氏の「体操教師」それから真金鍛次郎氏の「被虐哀歌」「続被虐哀歌」等です。以上で批判の事と思ひますが私はマゾヒストであると共に同性愛者です。又極めて薄弱ではあります。サディストでもあり、その上山口氏の小説の主人公の様に「禪」に対して最大の魅力を感じます。「美少年の秘密」の雪夫は私にとつては理想のものでした。従つて写真や口絵についても美少年の禪姿を現したのが皆無なのが最も寂しい限りです。一部では男子の裸体は汚いばかりだという方もありましたが十七八才の美少年の若々しい裸体はむしろ女のそれよりも美しいものです。多数の愛読者の中には必ず私と同じ思ひの方も多いことと思ひまして編集部の方に特にお願ひします。

○ （姫路、信二郎）

私は御誌を昨年偶然書店にて発見しまして、これ程私の好みに合った雑誌は初めてだと隅から隅までいつも繰り返して読んで居ります。私の希望としては女の責ばかりではなく男の責も口絵にのせてほしいと思ひます。例えば芝居で見る団七のような、太腿まで俱利伽羅紋々の刺青の男が素裸にせられ、雁字搦目、後手、ハシゴ逆吊り、はしご吊り、天秤棒、灸すえ、さかづり、簀巻きにされかゝっている所、柱縛り、水ぜめ、水車に大の字に括られて居る所、大の字、捻じ伏せられて居る所、等々、女の人ばかりでなく男の人の御願ひします。三条春彦先生の時代物責絵巻の色刷画帖のようなもので、やくざ男の責絵巻というようなものを見たいと思ひます。

（KKファンK生）

○ 東京の敬愛生様、春木様、大阪の中野様、名古屋のKK様、其の他全ての、私にお呼びかけ下さったお方に御返事申し上げます。本誌三月号に載った長瀬さん宛の便りが、こんなにも反響があらうとは思ひも致しませんでした。定めし皆様は、私を大変な摺れからしとお思ひでしょうが、人にも云えな

い様な辱しい性癖を持つて居ります、人前では大きな声で話も出来無い様な内気な性格なのです。それに緊縛や鞭打には、全然興味を持って居りませんし、まして男性の方を征服して、侮辱の限りを尽し、優越感に酔うと云う様な気持もありませんから、サジスチンとして、充分成熟して居ないのかも知れません。ずっと以前に読んだ笑話に、数人の女学生が集つて「何になりたい」と云う話をしていて、てんでに、大富豪の令夫人になりたいとか、映画スターになりたいとか云つてゐる中に、一人が「祇瓜」になりたいと云うので他の者が其の理由を聞くと「だつて、祇瓜を買う時には尻を嗅ぐでしよう」と云つたとか、其の当時未だ女学生の私には、其の女学生の気持が良く解りませんでした、が、今では、人前で口に出しては云えませんが、祇瓜になりたいと云う気持は良く判ります。事情があつて、暫く何処へも行かれないのが残念ですが、行ける様になつたら春木様や中野様等に、是非一度会つて見たいと思います。其の時は、思いきつて下半身は極く薄いパンティと云うあられも無い姿で、貴方をねじ伏せるのです。私

はこれでも、女学生時代には運動をやりましたし、米一俵を担いだ経験もありますから、余力でも仲々負けない心算ですが、余り手強い様なら手丈でも縛りましょう。そして最後には、貴方のお顔は私のお尻の下に組敷かれるのです。貴方の荒い呼吸が薄いパンティを通してお尻に熱く感ずる時、私は幸福の絶頂にあるでしょう。然し現実には百里の山河を隔て、貴方のお顔さえも知りません。然し日月が一切の絆を絶つた時、私は勇躍皆様と共にプレーを楽しむべく出発致したいと思ひます。

(富山 戸破貞子)

小生二十三才になる会社員で、熱烈な本誌愛読者です。次に本誌四月号に就いて、自分の思う事を述べさせて下さい。一、四馬孝氏の口絵、並びに絵物語は相も変らず我々読者の喝采を浴びるにたるけつ作、今後、同作家の長編ものをのせて下さい。一、宝塚二三夫氏の作品は、やゝもすれば、マンネリズムに陥りがちなサド小説の域を完全に打破し、我々をぐい／＼と引きずりこむ小説上の技巧には全く感心します。今後の同作者の作品に、大きく期待していま

す。なお、さし絵は全裸のほうがはるかに良いと思つています。

一、他に気に入つた作品は孤独、大和撫子等、なお滝レイ子氏の口絵、二俣志津子氏(「悪の部屋」)を書いていた当時のおもかげなしの作品等は、同じようなことをくり返している感じで、新鮮味がない。それよりも、女性のお灸十態、責め衣等が一寸変わったものとして好感がもてました。一、切腹の口絵、実写真「公園にて」「あつ落ちる」とか、男性のマゾ写真(なお口絵にも、全裸の縛り絵を二三頁入れて下さい)等に関して、全然好感がもてません。ことに切腹の絵は、あまりグロテスク過ぎます。他の写真も同様で、四馬氏や、龍氏の口絵を見て、写真を見ると全然失望です。口絵と写真の比率の現在の半々を、2対1ぐらいにするべきではないかと思ひます。一、希望としては、本誌編集に際して読者の性質、傾向の割合を考慮に入れるべきだと思ひます。恐らく読者の八割以上がサド的傾向を有しているものと思ひます。従つて、現在の頁数三百を八対二(マゾその他)ぐらいに、割り当てたら、より本誌は発展するのではないかと、編集当局にお

伺いたします。終りに本誌のより良き発展をお祈りいたします。

(東京 S・H生)

前略ごめん下さいませ。十一月号に、お恥しき姿お見せ致しましてから、全国の切腹マニアの方々の呼びかけにも、再び恥をさらすまいと思ひましたけれども、田谷先生もお手紙まで下さつて熱心な切腹マニアの皆様のお声に、もう一度だけ同封の写真をお口絵に載せたいと思ひました。夢中で作り出した色々な写真も百枚に余りますけれど、見て頂くには余りにお恥しき姿のものばかり多いのですわ。でもKKの口絵に切腹のないときの淋しさを思ひますと、マニアの皆様にも少しも喜んで頂ければと思ひます。尚田谷先生のお手紙は、切腹通信にでも公開お願い出来ないでしょうか、まだ居所お知らせしていません。切腹の記事のないKKは私には何の楽しみもありません。必ず／＼続けてお載せ下さいませ。何時も／＼乱筆にて勝手なことばかり書きまして申訳ございませ

(浜松 咲代)

原月様 度々の御連絡誠にありがとうございました、お申越のこ
と努力してみます故、しばらくお
待ち下さい、切腹写真の行き方に
ついては昨年中康氏と愛川さんの
論争があり私も「女性切腹断想」
の中でその一端に触れました。幻
想の表現としての切腹写真と、真
実の凄愴美の再現としてのそれと
は、いずれも一長一短があるでし
ようが、現在の写真は大部分前者
に属します。前者には一定の基本
形がなく構成者の感覚が自由に表
現できますが、後者では切腹の状
態が正確に表現されねばならぬと
いう基本条件があります。従って
後者の写真をよいものにするため
にはできるだけ条件のかんたんな
しかも現実の例にも理論上合致す
る切腹姿の標準写真をつくるこ
とが最も近道でしょう。それには
まず始めに全裸で正座と立腹、そ
のそれ／＼に一文字と十文字腹、
都合四型をできるだけ完全に現わ
すことが第一だと私は思います。
これによって体のこなしや血の流
れが着衣に打消されることなしに
はつきり現われる利点がありま
す。この点について私に可能なこ
とがあればいつでも協力する様申
入れてありますが、編集部の都合

からかまだ実現しません。全裸の
女性を対象とすること故是非にと
は申せませんが、今でもその考え
から少しも変ってはいません。ま
た原桐さん、川合さんには誌上で
失礼な御願をして申訳ありません
が、よろしく御了解の上御協力を
お願いします。
(田谷)

この頃の奇クに、女腹切の記事
及び作品の少ないのは残念です。
尚、作品の表現に於ては①ハラキ
リする本人の感覚描写、②それを
見ている第三者からする客観描写
また①と②との混合された③なる
描写は、一番多いが、稍類型化し
て来た感じがするがどうですか。
②をリアリスチックな事で願いた
きもの。又、④ハラキリを終つて
倒れてから先の描写。検屍とか(愛
する男性よりする)の表現のな
いのはもの足らぬ。これを、或る
程度、濃密に描いた文章が欲しい
ものです。それも、少女は不可、
やはり、濃密なる年増に限ること
にしては。尚挿絵が、大変だらけ
でいるものが多い。もつと入神の
リアリズムが欲しいですね。

私始めて御社のK俱拝見しまし

た。その内容にびっくりしまし
た。そして何故もつと早くみつか
らなかつたのかと悔やまれてなり
ません。皆素晴らしいですが、中
でも取分け興奮されられたのは女
の人の切腹の面です。私は昔から
白虎隊等の切腹の面が好きでした
が女の人のが見られず、残念でし
たが、今度図らずも御誌に依つて
念願が叶えられた訳です。どうか
東北の一ファンにも熱心な御誌の
愛読者がいる事を、御忘れなくも
つともつと切腹の面をのせて下さ
い。御願いたします。

(青森 津軽一男)

貴誌を愛読する二十七才の青年
であります。始めてお便りを差上
げます。小生は以前より強烈に、
女性のズロースに憧れを持つ一人
であります。戸外を歩きましたが
物干竿に干されてるふんわりと
したメリヤス製のズロース(但し
パンティと金巾のズロースはあま
り好まず、又なるべく大きいイン
チのもの程良い)を見る度に胸が
ときめき、思いきり抱きしめ接吻
したくなるので御座居ます。五月
号の一柳トシ様から荒巻様への手
紙の中ズロースを絶対に洗わず、
一日に何度も、穿替える等の告白

は、非常に興味深いものでした。
小生はK、K誌の内容の中で、サ
ゾ、マゾの両方共に興味がありま
すが、血みどろになったり、傷つ
いたりして悦に入るのはあまり好
みません。又切腹及ソドミヤ等は
全く解りません。小生の日常希望
しているのは、二十五才より三十
才位迄のポリュムのある女性に、
思うまゝにされる事でありませう。
例えば豊満なヒップに、息が出来
ない程敷かれ圧えられる、大きな
ズロースを口の中へつめ込まれる
或は浣腸される、その果は、彼女
の排泄物まで口中へそゝがれる等
空想するだけでも胸が躍ります。
又わきが等体臭の強い女を好みま
す。女性の偉大なヒップ、そして
分泌される汗、排泄されるネクタ
ール等これ等を非常に愛着しま
す。朝昼夜、穿き古して汚れて黄
色く変色したズロースーあゝ何と
いとしいものでしょう。五月号の
「悪癖」は我々ズロースマニヤに
とっては、全く嬉しいおくりもの
でした。今後益々ズロースマニヤ
ものを充実される事を祈ります。
一柳トシ様とその愛嬢お二人のた
くましいヒップと太股をつゝんだ
穿き古しのメンスバンド又はズロ
ース一点でも結構ですから、何と

かこの切ない望みを叶えて下さい
他にモデル嬢等のバタフライ、ブ
ロース等の使い古した肌着を、分
譲出来ましたらお願い致します。
小生は、身長五尺四寸、体重、十六
貫五百、すこぶる健康であります。
一柳様の様な方又思い切り小生
を責めてやりたいと云う様な女性
の方と、文通御交際を希望致しま
す。同好者多き事と存じますので
今後女性の方から、どん／＼我々
マニヤのため、穿き古した(ボロ
／＼でもよい)肌着を捨てないで
出品して頂きたいものです。又品
評会を催すのも面白いでしょう。
実現したいものです。又アブフォ
トの撮影会を催して頂きたいもの
です。何とぞ御計画を御願ひ致し
ます。
(大阪市 AU生)

○ 五月号、大変嬉しく読みました
特にグラビアの素晴らしいのは
時の過ぎるのを忘れて見とれて
いました。縁につままれての村田
嬢の観念した顔の表情を見ている
と、自分の身体に縄が掛かっている
様に覚え、身体がゾク／＼とし
ました。又中宮嬢の光沢、一番好
きな写真です。右の乳房の縄は非
常に好きです。ビニールで、ピン
と張った乳房、薄赤い乳首、一度

実行して見たくなる写真です。
伊吹真佐子嬢の桃源境は、もう少
し口を開けた方が実感が出たと思
うが(素人考えかなア)「緊縛
モデルの素顔」(辻村様)は一番
期待している記事です。グラビア
と照し合せて、読むのは非常な楽
しみです。毎月かならず載せて下
さい。紹介が終つても、モデルの
様子はページが少なくても載せて
下さい。絶対お願い致します。
(金沢 M・M生)

○ 五月号落手致しました。本号は
花の春にふさわしい出来ばえだと
感心しています。特にグラビア写
真は、出色のものばかりでした。
萩千恵子嬢の四葉は、その眼の妖
しい輝やきと共に、近來にない
迫力のあるものです。村田那美子
嬢の腰巻は、正面のも欲しい感じ
です。伊吹真佐子嬢の「縛帯」は
縛り写真に、新開拓をなしたもの
だと思ひます。清潔で、何と惱ま
しい感じでしょうか。但し、靴下
がひざ下までの短い点、気分をこ
わしています。いつそ、腿迄のス
トッキングか。そうでなければ、
下肢をも、縋帯で縛るべきでしょ
う。奇クグラビアの意欲には常に
感謝しています。ヒップマニヤの

私の為に、次のような企画で写真
を作つて頂けたら幸です。モデル
諸嬢のヒップ比べ。ショーツ着用
でも構いませんが、夫々腰部を強
く縛り、ヒップを正面にくつと強
調して撮す。と云うポーズです。
亦下着マニヤも、ずい分居られる
ようですから女性下着の説明と、
その着用の写真を、次々に順を追
つて発表して行つたら如何かと思
います。
(狩井麗作)

○ 神奈川KM氏に申し上げます。小生
昭和二十六年以来奇ク拝読致して
居りますが、従来貴兄失(礼乍ら)
の如き傾向の方がなく淋しく感
じて居りました。小生も実は幼年
時代より曲馬団を好んで見て参り
ましたが、単に軽業やスリルを味
う為ではなく、矢張り少年期より
青年期へかゝる若者のタイツ、キ
ヤルマ姿に異常な迄の魅力、興
奮を覚え、現在でも秘かに曲馬団
の小屋掛などを来ると独り見に参
りますが、貴兄の云われる通り確
に最近のサーカスには肉シヤツ、
タイツにキヤルマをはいて軽業
をする様な少年軽業師も少くなり
ました。最近殊にアクロバットシ
ョウや、米画「地上最大のショウ
」等の中で美しいタイツ、キヤル

マタをはいて軽業を見せてくれま
したが、余り近代的な衣裳でも吾
々には興味はないのではありませ
んか、キヤルマは昔日の如くタ
イツの上にピッタリ締つたビロ
ド地の物が魅力あります。小生も
黒や白のキヤルマをはき、日常
タイツを着用していますが、趣味
で作製したキヤルマ(専門家作
製)は白サテン、ブロード地等数
種ありますが、日常は余りビツタ
リ肌に喰込んで不便ですので、家
人の不在中などに独りはいて楽し
んでいます。矢張り物足りなく
思います。自分で半裸体になりタ
イツ、キヤルマをはき、時折ベ
ルトにて自分の姿態に鞭打つたり
軽業のポーズなど鏡に写して満足
出来るよう色々工夫しています。貴
兄の如き方と共に理想的な行動
を行いたく存じます。(キヤルマ
愛好者K・Y生)

○ 謹啓、私の愚文に対して、余り
ある賞金を頂き感謝に堪えませ
ん。益々部厚い誌面と、充実した
内容と、新しいアイデア、かくば
かり目新しい編集を毎号変りなく
致され読者をして新時代に生きる
愉楽を味わしめて下さることに
いて、満感の讃嘆を送るのは私一

人ではありません。特大号とされてから、いよ／＼読者を得て書店より姿を消す日まで幾日ぞ、下旬ともなれば、或は一日早く出る事が？と日参する私は恋人を待つ気持以上の楽しさです。一日おくれで「無し」と知った時は、何軒書店を廻った事でしよう。発売の日おくれた時のいらだちさも今はなく毎号、必らず同じ日に出現する「奇ク」を発見した時に感ずる身の慄えは、幾年たつても変わりません。それに、いくら縛り好きの私とて、或は他人だとして全篇これ責絵巻で、これでもかこれでもかとやられたら、美味のものでも食い過ぎたら飽きる様に、ましてや、熱しやすく冷めやすい日本人のこと故、固定された内容に飽きましよう。それを、あらゆる分野を抜擢されて下さる熱意には敬服致します。私の愚呈「猿ぐつわは鼻迄隠さない様」にも実現されまして「緊縛女優」も次々に発表されますし、「鼻責め」も見せて下さって、何とも感謝に堪えません。この様な温情で、読者に接する貴社一同様の前途は「奇ク」讀美者のある限り、洋々たる事と極言致してはゞかりません。最近号のフォトセクションでは「10号の

猿ぐつわの遊戯」「11号の猿ぐつわをかけるまで」「2号の鼻つまみ」「4号の緊縛集」に又新進四馬孝氏の画の美女は、貴族的な美貌の責め姿を見せて頂き今後の躍進が待たれます。特に2号の「悦唐の部屋」の美女の仰向いた表情の美しさと、鼻腔の形の良さは私の宝として秘蔵するにたるものでした。この様な美人の仰向いた表情をお願い申し上げます。更に絵物語「嫉妬」の鼻をつまみ、ハカンチを口へ入れられる美女の表情は素晴らしいものでした。本文のベテランの筆も益々冴えられましたが、吾妻氏の「夜光島」が終えたのは残念です。懸賞文は小品なりとも載せて下さい。面白く読まして頂きます。それから裸体の縛りの中へ、セーラー服、和服、洋装の女性の縛り写真も一二枚入れて頂きたいと思ひます、私は「鼻マニア」ですから仰向いた女性もお願い致します。無理な注文は、困らすだけと存じますが、今後マニヤ連の望みは色々ありましようが、一方に注がぬ様に、無二の異色誌たる本領を発揮されん事を切に祈ります。敬具

○ (静岡 升岡金吉)

最近、巻頭の頁が増えて参りましたことは本当に嬉しく、並々ならぬ編集者の御努力には厚く感謝します。五月号も待遠しく、早速買い求めました、薄羅の萩千恵子の緊縛ポーズや、伊吹真佐子嬢の繻帯による目隠し、猿轡の強烈さには、何といつてよい、全く素晴らしい。けれども、単にこれだけではなく、画面に責める方の人か、或はいろいろ責め道具を配置して欲しかった。五月号読者通信の東京、本山様、私も貴方の御意見には賛成です。私は時々ブラジャー、パンティ、ストッキングをつけて自縛しては、僅か乍らにも独り楽しんでます。こんな恥しい姿を、セルフタイマーで撮影もしてありますが、若し御希望なら進呈しましょう。編集者にも是非御願ひします。女性の下着をつけさせられた男性の縛り、責め写真を奇クに載せて下さい。萩千恵子様、いつも変ったブラジャー、パンティをつけた大胆な緊縛ポーズには全く感嘆しており、女装、特にブラジャー、パンティ、メンスパンドを着用し、縛られることに、こよなき喜びを感じている私にとつては、女性の貴女が本当にうらやましい限りです。貴女の汗

と分泌物で汚れたものを着用できたらどんなにうれしいことだろうと、怪しからぬことを考えているのです。誠に失礼なことをお願いしますが、どれでも結構ですから是非譲って下さいませんか。いやとおっしゃらず、必ずお願いいたします。

○ (大阪 T・I 生)

丁度、私のお便りが御誌にのりました次の月に、早速田谷先生の記事を拝見できて、何よりうれしく存じます。何だか、十年前にしたこと、思ったことを今見透されたような気がして、おそろしくさへ感じつゝ読ませて頂きました。文中に下着のことが出ていましたけれども、昔はいざ知らず、昭和二十年頃はブロースなどの衣料が手に入らず、自然かんたんな湯文字になったのですが、湯文字の下着をグツとしめる感じが、落着いたよいものであったこともたしかです。服装のことは、細かく考えてみませんでしたけれど、現実には、苦悶するうち着物の前がひろがり、帯だけ残って後ろによつてしまひ、湯文字は血にぬれてまくれ、腰にべっとりはりついて丸裸の御注文は誠に御尤もです。木村様

中には御家族の居られる方もありや、御名前その他は伏せておきたいと存じます。しかし二人は、一刀下に見事に切腹し、腸がだら／＼と出るのを、はつきり見たことを御伝えします。深く切りすぎたのですが、本当に勇ましい姿でした。できれば小説のような形で、最後の姿を御伝えたいと存じます。原桐様、川合様、田谷先生の御記事にもありましたように、もし公開がいけなければ、田谷、中康両先生にだけでも御姿を見せてあげていただけませんか？と血紅を使った切腹写真のせて下さるよう御願い致します。

(原月田鶴子)

何時もの事ながら、御誌の魅力的な編集には感服致して居ります。四月特大号等は、もう長年御誌の愛読者である私でも、胸のワク／＼する思いがします。四馬孝氏の画は、凝視して居るとものを云いそうな感じがします。今度のフット・アルバムも素晴らしいです。狩井氏のアブ・ホート一年生の中で、CとD Eのモデルの乳房は、私の最も好む乳量の持ち主で

大変に興味をひかれました。希望として、これからも出来れば、娘々としたモデルの外に人妻らしい肉体のフットものせて下さい。又外国雑誌の写真も多くお願い致します。

(東京 竹谷十三)

奇巧の誌上に最近禪愛好者の方々が目立つ様になりました。私も女性も大変よろこんで居ります。私は二十一才の女です。二年程前からすっかり禪の愛用者になってしまいました。それはある夏、海水浴に行ったとき薄いワンピースの水泳着でしたので「下ばき」に男用の三角褌を自製して水泳着の下にしまてみたところトチモ気持がよくお友達も海から上ったとき「水泳着の下にビツタリと褌がみえるのが非常にモダンな感じ」と羨しがり忽ち私たちは禪愛用者になったのです。それから普段ばきのパソナイもブリーフも全部やめて禪一本になりナイロンの青やグレイの三角褌か、サラシの六尺褌をしまて居ります。六尺褌の本当のしま方は知りませんが前から後ろへくぐらせてお尻の上で交又させて残りを巾広くひろげてウエストをしめ上げる様にギョツと巻き付けてコルセットの役目も果たしていま

す、下腹部から股の辺りの感じがこんな気持ちのいい下ばきはありません。女性の方たちに私は「だまされたと思ってぜひ一度褌をしまてみて御覧なさい」と呼びかけるとともに男性にもなぜひと多くの方が褌をしまないのかしらと疑問を發します。だらしないないパンツ類の男の下ばきなんて私は大嫌いです。あんなものはいたなくたってはいていたって、同じことです。男性の美しさはキリツと褌でしめ上げてこそ立派なものと思えます。日本の男も女も皆さん褌をしまようではありませんか、こまめ書いたとき丁度五月号が着きグラビアに伊吹さんの褌姿(縋帯)をみつけ、ああ、どんなに私は感激したことでしょう。今後この様なすばらしい写真をもっとたくさん沢山掲載して下さいお願い申し上げます。

(岐阜 美佐子)

再びお便り致します。先日は、私あてのお便りを転送下さいまして、まことにありがとうございます。また、お送り下されし「奇巧」本日受領致しました。さっそく開いて見ました。いつもながら奇巧の、ふおとせくしよんは、すばらしいです。又内容も充実してい

て、うれしく愛読しています。読者通信には、女装マニアの方々のお便りが多く出ていて、うれしい事です。静岡のIOM様のお望みのような女装をして行く順序を、絵又はフットにして、のせて下さい。又、東京の東谷様のフット拝見いたしました。「女装の縛り」について企画も、ぜひお願い致します。東谷様始めM様、大阪R A生様、女装マニアの皆様方、お願い申し上げます。女装した時のフットを、お持ちの方も居る事と存じます。お差支えなければ、御交換をお願い致します。女装マニアの一人としてお願い致します。色々とお好みも異なる事と存じますが、私は特に和服、日本髪を好みます。現代、時代物いずれも好きです。その後、女装して写したフットを持つています。之を一冊のアルバムにはって、大切にしまっておき、時々家人のいない様な時に出して見て、一人喜んで居る次第です。現在、約半分ほどアルバムを埋める事が出来ました。一度、告白記と云った様なものを、書いて見たいと思っておりますが、文才がないので思う様にはまいりません。私

は、まだ一度も縛りの経験は御座居ませんが、一度縛られて見たいと思つています。勿論、女装した上を。伊藤晴雨先生の「血染の毛綱」等は、特に興味深く愛読しています。色々と、とりとめのない事を書きましたが、今後共よろしく御願ひ致します。最後に、奇巧の御発展を心からお祈り致します。なほ、同封のフオトは私のコレクションの中の一枚ですが、お送り致します。(東京T・M生)

○ 正月の十八日頃から又々健康が勝れず寝たり起きたりの状態で伊豆の吉奈へ行って居りましたので御無沙汰してしまいました。湯の宿に独りぼっちで居りますとつい無聊なまゝ例の妄念が頭の中を去来してくるのですが出来るだけ神経を昂ぶらせないようにと努めました。何分にも季節外の閑散な時だったのでお湯に浸って自分の裸身を心ゆくまで楽しんでいましてやっぱり駄目でした。

「草双紙に見る女腹切」の読稿は探書生氏が目録をお並べになつたので、編集の方の御意向も「もう止める」という終止符の暗示でもあるかと存じて書きかけの原稿を廃棄いたしました、いささか尻切

れ蜻蛉の感がありますが右の次第御諒承下さいませ。

(川合伊都子)

○ 長崎のK子さま。奇巧に、とう／＼貴女のような、理解のある女の方が出られたのを拝見して、私は随喜の涙を流して歓喜している一人であります。五月号のあの読者通信を拝見した瞬間、私は思わず、おゝ神様と、心の底から狂喜したので御座います。まことに貴方こそ、私が夢に憧れ、幻にえがいた私の魂の古巣でありました。う。おゝ、私の太陽よと思わず心の底から絶叫した程だったので。貴女こそ、私の暗黒の心の中に、さん然とした光りを、与えて下さった新女性です。そうです、世の中には、無数の女性星が輝いています。フエチ愛好者に、心から同情し、理解された女性はいく少です。私は、貴女のようなやさしい親切な女性が、今に出られるか出られるかと、今日まで心を震わせじつと奇巧の通信欄を見ていました。ところが、とう／＼出ました。貴女と一柳と云う方がそうでした。私は、貴方があの一文を奇巧に投書せられたのには、非常な勇気と決断があっただろうと

存じます。でも、よくあの一文を草せられたと存じます。ただ只感謝の外は御座いません。私は、矢張り思うのですが、世の中には、母のような大きな愛と、広い理解のある女性が必ず居ると、私のフエチ願望の底には、結局、母性思慕、異性思慕の愛着が潜在しているものでした。私は、貴女の御厚意の為に、フエチ理解の貴女の為にこのつたなき一文を感涙と共に草しました。つたなき文章のため、私の気持の万分の一をも、お伝えが出来ぬのが残念でなりません。だが、無限の感謝と共に、フエチの一人として、この一文を貴女に差上げます。そして私は、今後ますます／＼貴女のような、御理解のある多数の女性が現われるのを、心から待っています。終りに、貴女の健康と幸運を祝します。

(水上流太郎拜)

○ 一日千秋の思いで、待望した五月特大号が店頭に残された時は、何と表現して良いか、その術も知らぬ程の喜びでした。入手してめくる頁もどかしく読んで居ります。待ち焦れたみずし氏の「オシメカバー」は全く私をどんなに喜ばせた事か、何度／＼読み返

して居る次第です。又、畔野氏の「呪塚縁起」で、子守のおちかが嬰児殺しの汚名を着せられて、オシメを当てられて衆目の面前に引回されると、全く、オシメに対して興味を持つ読者には、天国とも云われるK誌でした。読者の中には、オシメに興味を持つなんでも申される方々がお有りかと存じますが、みずし氏も云って居られる様に、誰しも遠い郷愁があるのではないでしようか。母の乳房を恋うる様な気持が、オシメカバーに対してあったとしても、それ程可笑しな事ではない云々とありましたが、全く同感と思うのです。私の表現こそ拙いけれども、みずし氏との流暢なる文面とは、全く同じと自負するのです。又「呪い縁起」に於ても、オシメをさせられる描写がありますが、矢張り趣旨こそ違えど、我々おしめ愛着を説く読者を満足、又慰めて下さった編集諸氏に、厚くお礼申し上げます。今後大いに、奇巧誌上を飾って下さる様お願い致します

(S・A生)

○ 私は小さい時からマゾでありましたので、書く事もマゾヒストの立場で書きます。読者通信欄でよく

次号(十一月号)予告

「男性マゾ等見るのも嫌だ」と云う声を見ますが、私に云わすと「男性サド等全然興味がない」と云いたいのでありますが、読者の中にはサド、マゾ、フェチ、切腹、ソドミー等、種々の方がおりますから平等に扱って貰いたいものです。其の点マゾフォト等も以前より拡充されましたし、感謝致して

居ります。全く春日嬢と小沼氏のコンビは素晴らしいです。私も小沼氏が羨ましく、春日嬢の様な美しい方にあの様に責められる機会がないものかと思つて居ります。尙三つ四つ注文を並べて見ます故御参考迄に聞いて下さい。一、読者通信欄を更に拡充して頂きたい事。限られた紙数で無理かも知れ

長瀬昭子さんへの公開状

女子プロレスリング雑感

接客婦

私にも貴女の下穿きを

体験記「吹き溜り」

女優の素足

稽古着姿の女切腹

魔の味い

百合子の記録

命がけの遊び

その他、告白、体験、雑文等多数掲載、尚、都合により多少の入れ替えがあるかもしれません。

ボクの責め方

完全なる隷属

告別

幽囚十ヶ月

あるマゾヒストの手帖

明治年間新聞の覚え書

残虐なる女性達

或るソドミアの告白

変態小説論

「敵前上陸」責め

密淫

サディズムへの憧れ

(宝塚二三夫)

(坂田 信治)

(古川 裕子)

(春田 一郎)

(沼 正三)

(吾妻 新)

(森本 愛造)

(朝路のぼる)

(佐藤 増夫)

(三根 耕二)

(青葉 慎一)

(城 秀人)

(畑 晃一)

(鬼山 絢策)

(加治 信一)

(芳野 眉美)

(近東規矩也)

(高原 正夫)

(藤山 秀緒)

(高木 伸夫)

(渡辺 陽二)

(二俣志津子)

(二俣志津子)

(二俣志津子)

ませんが、全国の沢山の読者の中には種々な希望や体験を持つて居られる方がおありの事と思ひます。二、女優緊縛映画予告篇という欄がありますが、マゾ読者の為にもあの様な欄を設けて貰いたい事。「痴人の愛」の様な映画はそんなに沢山あるものでなし、そう広い欄はいらなないと思ひます。封切られる映画は全部見るといふ事は時間的にも不可能ですし、スチール写真等で予め知った時には随分遠く迄見に行きますが、見落す事も多いと思ひます。三、マゾフォトですが、随分いろんなアイデアが出ましたが、こゝらで一つ趣向を変えて「痴人の愛」や鬼山絢策氏の「らぶすれいぶ」や馬族氏の「美しい暴君」の様な良い作品の「美しい場面を、春日、小沼両氏に文中の人物になつて頂いて、実演して貰いたいと思ひます。四、以前に「らぶすれいぶ」の大作を発表された鬼山氏に構想も新たに、再び登場されん事をお願い致します。五、奇譚クラブ友の会仮称支部という様なものを各地に作る企画はありませんか。六、順序が前後しましたが、二人の女にいいめられる一人の男、又は一人の女王様に仕える二人若くは数人の奴隸

という様なマゾフォトの企画はありませんか。七、マゾフォトの春日嬢の服装ですが、バタフライやこれ迄のは確かに美的かも知れませんが私には普通のブローズやパソティの方が実感が籠つて居ると思ひます。更に云えば短いパンティよりも緩かなブローズの方が尙更有難いです。若しこの様な写真が出れば私は随喜の涙を流す事でありましょう。八、一月号の懸賞作品の入選発表の題名を見ますと大分男性マゾらしいのを見受けますので今から金しみにして居ります。入賞された作品は何れも力作揃いと思ひますので、佳作第三席迄全部発表して下さいます様お願い致します。以上大分下らぬ事を羅列しましたが、編集部の皆様御自愛の上頑張つて下さい。

(富山、S・T生)

「読者係より」従来手元に集つていました読者通信の中の一部を以て上の通り掲載しました。今後は新しい通信も含めて、出来る限り誌面も拡張したく思ひますので、ぜひ通信をお寄せ下さるようお願いいたします。

× × ×

最新版アブフオト 実費分譲

緊縛女体写真

(従来分譲中の緊縛写真は絶版です。これは全部新しい作品ばかりです。)

○高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選

キヤビネ版三枚一組 三百円

芳紀正に十八才、八頭身美人の忍嬢の全裸の肌をひしひしと喰い込むロープの罫目、頬もくびれよとばかりきつく噛まされる猿ぐつわ、ポーズといふ表情といふ悦虐モデルの本領を發揮した素晴らしいもの。

○美少女緊縛

(中富綾子嬢)

キヤビネ版二枚一組 二百円

可憐な美少女、中富綾子嬢の柔肌がぐつと渾む程きつく纏いついた麻縄、羞恥と苦痛にゆがむ可愛い顔を真正面から取り組んだ一枚の女体縛りフォト。

○藤田節子嬢

「落花狼籍」

第一集 キヤビネ版 三枚一組 三百円

第二集 キヤビネ版 三枚一組 三百円

元宝塚映画のニューフェイス、藤田

節子嬢の初めて縛られた和服姿、着物の裾にのぞく素足の色気は日本趣味の美しい作品、和装好みの方には是非。

○古川裕子好み縛り

(萩千恵子嬢)

キヤビネ版三枚一組 三百円

透明のビニールのレインコートは雪白の肌をいやが上にも白く輝やかしてゐる。レイヤーコートの上から全身をしめつける麻縄、息もつけられない猿ぐつわ、古川裕子作「長期刑」のお仕置をここに再現した緊縛フォトの決定版。

○加賀利江子嬢

第一回縛り集

キヤビネ版三枚一組 三百円

美貌の新人、まああらん下さい。利江子嬢の初めて縛られたこの縛られ方を。縛られることを厭わない緊縛モデル第一回の縛られポーズ。是非コレクシヨンの一端へお加え下さい。

○加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集

キヤビネ版三枚一組 三百円

ようやく縛られることに慣れた利江子嬢の悦虐姿態、日本式の高手小手と緊縛の表情が渾然一体となつて、マニア待望のたまらない情感を漂している逸品。

○厚狭春江嬢

股間しばり三態

キヤビネ版三枚一組 三百円

「縛られる女」で、その緊縛感を極度に發揮した厚狭春江嬢が、ここに再び緊縛感溢る股間しばりを以てお目見えします。全裸の肌に喰い込む罫目はきつとマニアに御満足頂くことでしょう。

○デニムのズボン縛り

(加賀利江子嬢)

キヤビネ版三枚一組 三百円

腰から太股へと身体にびつたりと喰いついたデニムのズボンを素肌に纏つての緊縛、ズボンの外へ出た足首にはヌードに見られぬ色気が漂つて十八才になつたばかりの利江子嬢を恥しがらせる。

○須川令子嬢

股間しばり三態

キヤビネ版三枚一組 三百円

新しいモデル令子嬢をして正面ばかり股間しばりを敢行して、その中から優美な姿態三態を選んだ股間しばりマニアに推す快心作。

○須川令子嬢

悦虐姿態三態

キヤビネ版三枚一組 三百円

内に可憐な初々しさを秘めながら緊縛に対する情熱を写實的に表した令子嬢のようやく縛りに慣れた頃の作品、将来本誌の悦虐モデルとして売り出す

同嬢の初期の作品として数十枚の中から特に選び出した。

○萩千恵子嬢

新版腰巻しばり

キヤビネ版三枚一組 三百円

従来分譲の腰巻しばりと異つて、特に千恵子嬢の註文によつて縄をかけた日本趣味豊かな萩嬢の特色を發揮し、腰巻に關心を持つ人並に緊縛マニア向として選んだ作品。

○灸点地獄

(施術者 春日ルミ嬢)

キヤビネ版三枚一組 三百円

太股に、お臍に、背に煙を上げる灸灸をすえられる熱さに悲鳴を上げる真佐子嬢の表情に益々快心の笑みを洩らすルミ嬢、サジスチン春日ルミ嬢とマソビスチン伊吹真佐子嬢の二人を配した灸灸めの決定版、以前の杉美美嬢の灸灸め三態の上をゆく作品。

○悦虐モデル縛り

六人集

キヤビネ版六枚一組 五百円

六人の悦虐モデルの代表的なポーズを集めて、これこそマニア待望の多彩な縛りフォト集としておすすり出来る作品。足吊りポーズ(杉美美嬢) 檻禁された裸女(伊吹真佐子嬢) 白昼下の裸しばり(村田那美子嬢) メンスバンドの縛り(川辺依登子嬢) あられもなき悦虐ポーズ(萩千恵子嬢) 虐待される女(坂口利子嬢)

○ジャジャ馬馴し

(中富、村田二嬢)

キヤビネ版三枚一組 三百円

中富綾子嬢、村田那美子嬢の二人共全裸にて責めつ責められつという奇抜きわまりない縛りフォト、若き美女二人を配した他に比を見ない珍しい逸品コレクションの中に絶対に欠かすことの出来ない保証付のもの。

○逆さ吊り

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版三枚一組 三百円

十四貫有余の伊吹嬢を足首を上にして逆さに吊り下げた苦心作、如何なる強烈な縛りにも耐えた流石の真佐子嬢も遂に痛さに悲鳴を上げた逆さ吊りの三態。是非この一組を。

○萩千恵子嬢

新版股間しばり

キヤビネ版三枚一組 三百円

本誌専属の各モデルを煩して従来敢行した股間しばりはマニア諸氏から絶賛を博しましたが、ここに縛りに対して強い願望を持つに至った萩嬢をモデルとして今までにない新構想により股間しばりの最新版を提供する。

○坂口利子嬢

悦虐緊縛集

キヤビネ版三枚一組 三百円

本誌の口繪写真に活躍した坂口利子嬢の代表作をここに再びお見せする。彼女の緊縛に対する真価は従来の作品

に如実に表われている。殊に絶版となつた股間しばり五態は第一級の作品として推奨された。

○萩千恵子嬢 曲芸縛り

キヤビネ版三枚一組 三百円

柔軟な萩嬢の肉体を縄で縛り上げたまま、あらゆる変つた姿態に極度にいいじめつけられた一体どんな恰好になるだろうか、曲芸的に曲けられた肉体の緻は悦虐の悲鳴を奏でている。

女体切腹写真

(従来分譲中の切腹写真は絶版です。これは全部新しい作品ばかりです。)

○自害悦虐女体切腹

キヤビネ版三枚一組 三百円

女体切腹の代表的基本ポーズ。

○切腹曼陀羅図

キヤビネ版五枚一組 五百円

哀婉と清素の中にはほのぼのと漂う悲愴感、清潔なモデルによつて女体切腹の情趣を最大限に盛り上げた新しい作品。須川令子嬢のポーズ。

○女学生の切腹姿態

キヤビネ版五枚一組 五百円

本誌の女体切腹の口繪を見て、たつた一回きりならモデルになつてもいい、但し切腹のモデル以外はいや、と申出てきた本年十七才の乙女、乙羽信子そっくりの可愛いエクボの持主。本人は切腹に関心を持つていて無料に

でモデルになつてくれたが、今回一回限りという貴重なネガから五枚を選んだ。

○女性切腹「立腹」

手札型 二枚一組 百五十円

女性浣腸写真

(従来分譲中の浣腸写真は絶版です。これは全部別なフォトです。)

○新構想浣腸責め

キヤビネ版三枚一組 三百円

縛られて身動きの出来ない被術者に浣腸器の嘴は容赦なく迫つてゆく。春日、伊吹のコンビによつて姿態に新しい構想を求めて試みた野心作。

○羽村式ゴムマリ浣腸

キヤビネ版三枚一組 三百円

羽村京子さんから送られたアイデアの略図をもとにしてゴムマリによる肛門からの空気注入による尻を中空に揚げた被術者の逆立ちのポーズ。

○新趣向浣腸フォト

キヤビネ版三枚一組 三百円

浣腸マニアの方々から提供されたアイデアを参考に、それを再現させて三つの趣向を代表させた浣腸の雰囲気満点のフォト。

マゾフォト

(従来のマゾフォトは若干残っています。これは全部違った作品です。)

○奴隷使役

キヤビネ版三枚一組 三百円

春日ルミ嬢に使役される奴隷湖田正雄、尻の下に敷かれ、足で頸を踏まれ股で頭や挟まれる等、奴隷の悦虐境は女主人の仮借ない鞭によつていやましてくる。

○女王様の尻の下

キヤビネ版三枚一組 三百円

春日ルミ嬢の尻の下にうごめくマゾヒスト小沼正三、豊満な女体はどしどしと小沼の身体のあらゆる部分に、その威力を発揮する。

○長靴着用の女性から

鞭で仕込まれる

キヤビネ版三枚一組 三百円

○奴隷教育

キヤビネ版三枚一組 三百円

女にしいたげられた男の奴隷は、このように教育しなければいけない。

○乗馬靴乗馬服の男か

ら責められる男

キヤビネ版三枚一組 三百円

モデルは新人、隅野芳郎、辻村氏が自ら責め手のかつて出た一幕。

○男性縛り禪美縛体

キヤビネ版三枚一組 三百円

モデルは湖田正雄。

以金は全部送料共の値段です。御申込みは天星社代理部へ、御送金次第、厳重荷造りの上急送申し上げます。今後毎月、新しい品を追加発表の予定。

復刊に当りて

編集子

先ず最初に本誌の発売を毎月首を長くして待つておられる読者諸氏に対して、本誌が六月号より心ならずも休刊致しましたことについて謹んでお詫び申し上げます。本誌五月特大号の巻末、編集手帖にて述べました通り、昨年十月号より連続特大号を発行しましたので、六月号あたりから普通号にして頁数据置きのみ、定価を百円に値下げしようかと心積りしておりましたところ、五月号の編集後記を読まれた多数の皆さま方から定価は据置のみ、増頁せよとの御意見が有力でありました。従つて六月特大号は、定価は百四十円のみ、口絵本文共更に増頁して堂々五百頁に近いものとして企画したのであります。然るに、折からやかましく云われた悪書追放運動の余波を受けて、配本機構が根本的に崩壊するに至り遂に印刷途上に於て発行中止のやむなきに至つたのであります。

時に僚誌の殆どが休廃刊している情勢下ではありましたが、なんとか本誌の続刊を計りたいと苦慮したのであります。しかし、なにしろ書店を経由して販売出来ないとなれば、発行部数が従前の十数分の一を保つこともむづかしく、如何に計算しても、とても採算がとれない状態でしたので涙をのんで廃刊することに決めその旨、奇ク通信を以て皆さまに御連絡した次第であります。その後、熱心な読者の方々から、値段は高くなつてもいいから、通信でも発行してほしいという声が目増しに高くなり、中には泣くようにして再刊を懇望して来られる方もありましたので、こゝに採算を度外視して復刊第一号を印刷することに決したのであります。

然しながら、今まで全国の書店に発売していたときに比べて発行部数が比較にならないほど僅少なため、関係者の献身的な努力にも拘らず、全く貧弱なものしか出来なかつたのは残念です。雑誌は一回に発行部数の多少によってその体裁が決定されます。現在通信のみによつて、この百数十頁の雑誌を印刷するということは非常に至難な業なのです。本当は二百円の定価では採算がとれませんが将来の読者の増加を見込んで一応犠牲的に二百円としたわけでありました。そのかわり、従来のように書店に販売したときと違って、その稀少価値は一段と高まって近き将来必ずや数百円の市場価値を持つものと信じます。

只今、編集部には一年有余の掲載に耐え得るだけの資料をストックしております。今後この貴重な資料を世に残すため、微力を尽したいと思ひます。本誌は勿論、青少年を対象とした雑誌ではありませんが、青少年に対する不良文化財の影響をやかましく云われております昨今、極めて僅少の発行部数とはいえ、万一彼等の眼に触れたときの事を慮つて、編集には十二分に自粛検討の上、健全なる文献性と資料性のあるものだけに限定し、苟くも誤解を受けるようなものを掲載することなく本誌発行の永続を計りたいと思ひます。

以上の編集方針の健全化につきましては、本誌の編集綱領を確立の上、出来得る限り速かに一般書店にて販売するような機構に改めたい考えであります。但し、現在のところでは世間の理解もそこまですでにいつておらず、本誌の準備も又出来ておりませんので、当分は既定方針通りの方法で発刊を続け参ります。

尚、頁数減少に対する誌面の狭小化については、行間の縮小や挿絵カットの制限等により重点的に編集する考えでありますので内容については決して悲観すべきものとは限らないと思つておられます。将来、読者数が増加しましたら挙げて本誌増頁に注入する覚悟でありますから、どうか再出発の奇クに対しての御支持をお願い致します。

終りに十月号の印刷が予定より少し遅延しましたことについてお詫びいたします。

奇譚クラブ旧号主要目次

昭和三十年(特大号の分)

〇五月特大号「百四十」

白面鬼	田谷	十三
続々、女性切腹断想	土屋	淑人
見世物とサディズム	藤見	正郁
たのしむべしアブセックス	山田	新実
アブ追求三千年の回顧	吾妻	利昭
きいたろう	長瀬	昭子
女サディストの手記	依田	和子
悪魔の回想	沢井	和子
奈落の欲望	沢井	和子
緊縛モデルの素顔	沢井	和子
「死にたい」の縁起	沢井	和子
「死にたい」の縁起	沢井	和子
我が倒錯の系譜	山本	和子
縛り絵について	山本	和子
〇四月特大号「百四十」		
アブホート一年生	狩井	麗作
ギブスとコルセット	徳山	祥一
女性のお灸十題	岩瀬	保一
牛乳風呂の悪夢	馬族	保一
孤獨の回想	依田	裕二
悪魔の遊戯	古川	裕二
緊縛モデルの素顔	二侯	裕二
調教師	淡村	裕二
アブ追求三千年の回顧	山田	裕二
責め衣	山田	裕二
飛行服姿の女腹切	山田	裕二
耽美の果て	山田	裕二
「鼻責め」の研究発表	山田	裕二
「私の切腹」	山田	裕二
女性の下着写真マニア	山田	裕二

〇三月特大号「百四十」

マゾへの胎動	三和	耕二
アブ追求三千年の回顧	山田	正実
縛り絵の素顔	二侯	裕二
ウイナスの重石	真砂	四郎
女性願望の青年の手紙	中津	直郎
我が半生の記	喜多	佳月
縛り絵の回想	依田	文並
縛り絵を描いて	鳴山	文並
流腸マニアの日記	花村	恵美子
私の体験記	長瀬	昭子
寄宿舎での体験	田村	純子
導尿される令嬢	田村	純子
〇二月特大号「百四十」		
灸痕雑記	長谷川	幸一
極悪愛好家の傾向	山口	幸一
裸にされた美人通訳	山本	幸一
レスボスとドミニアへの福音	山本	幸一
少年の体臭	小竹	幸一
翻るもの	三和	幸一
自分て後手に回す方法	伏屋	幸一
A感覚の秘密	末森	幸一
無毛狂	末森	幸一
愚者者者にサジズムを感じる	白木	幸一
強盗に入られた時の事	中野	幸一
鼻責めについての実験	古田	幸一
腹部被虐の人妻	大沢	幸一
特異マゾの告白	長崎	幸一
露出願望の少女の告白	長崎	幸一
〇新年特大号「百四十」		
「腹部に依る悦び」	兵頭	庫一
畸型への愛着	津久井	庫一
A感覚の秘密	羽村	京子
悪魔の広場	角	京子
人工女性会見記	滋賀	京子
ソドミーの祭壇	三和	京子

昭和二十九年(特大号の分)

〇十二月特大号「百四十」

縛られた女優	井上	一雄
切腹願望と臍いじめ	沢村	清一
春日ルミに関する十二章	春日	ルミ
女灸点師	長谷川	清一
縛り絵の素顔	二侯	裕二
秘蔵	山田	裕二
縛り絵マニアの記録	山田	裕二
眼帯マニアの妻の日記	山田	裕二
男色秘話「集る人々」	山田	裕二
夫婦の倒錯遊戯	山田	裕二
動物嗜好者の手記	山田	裕二
号泣(私の晩年通歴)	山田	裕二
〇十一月特大号「百四十」		
流腸マニアの手記	花村	恵美子
脱腸帯の回想	花村	恵美子
変装写真マニア	花村	恵美子
灸マニアの回想	花村	恵美子
流腸切腹	花村	恵美子
脱腸帯の回想	花村	恵美子
〇十月特大号「百四十」		
妖中記	芳野	幸一
少年の極美に就いて	山田	裕二
悲風刺青	山田	裕二
続々、女性切腹断想	山田	裕二
夕暮の窓辺にて	山田	裕二
被虐の果て	山田	裕二
変の字夜はなし	山田	裕二
誠術の責め発見	山田	裕二
女腹切、雪模様の川おせん	山田	裕二
モデル女のおまひすむ	山田	裕二
コレクシヨン	山田	裕二
女性の下着写真マニア	山田	裕二
愛と憎しみの彷徨	山田	裕二
中国女性のサディズム	山田	裕二
流腸通信に寄せて	山田	裕二

読者原稿募集

(皆さまの共同広場建設のために)

課題原稿募集

(皆さまの共同の)

広場建設のために)

【創作】

異色ある題材を提げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用篇には掲載後相当稿料支払います。

【体験告白手記】

皆さまの偽らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載篇には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも時人に一篇は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下下さい。採用篇には本誌三分を贈呈いたします。

【映画、雑誌】通信

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二分乃至三分分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ浣腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることにします。本誌三分分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌半年分贈呈します。

【実写真写真】

御自身写真されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持つておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌半年分贈呈。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二分分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡明瞭にお願ひします。

○締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊(送料十六円)二百円
三月分三冊(送料共六)二百円
半年分六冊(送料共千二百)二百円
一年分三冊(送料共二千四百)二百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊お申込みの方は必ず送料十六円の御加算を願います。半年分御申込みの方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込みの方は景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第九巻第六号

復刊第一号

定価二百円

十月号

(送料十六円)

昭和三十年九月三十日印刷

昭和三十年十月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔

大阪市晴明通一丁目八五番地

発行所 天星社出版部

尚、従前の発行所、堺市菅原通四ノ三〇曙書房宛にても郵便物は到着しますし振替口座大阪三四九五六番曙書房にて御送金下さっても着金いたします。